

関西学院大学審査博士学位申請論文

(題目) 久布白落実の研究

— 廃娼運動とその周辺 —

指導教授：室田 保夫教授

2013年 2月

関西学院大学大学院 人間福祉研究科

嶺山 敦子

## 博士論文要旨

久布白落実（1882-1972）は廃娼運動や婦人参政権運動、売春防止等に取り組んだ婦人運動家である。彼女は「性の問題は永遠の問題である。男と女、夫婦の諸問題が真の解決をみるのは、いつのことか。売春問題は多少の進歩はあったが、これまた真の解決の日はいつくるのか」（久布白 1973:312）と述べていた。現代社会において売春（買春）の被害の実態は解決するどころか、ますます複雑・多様化している。林（2008:3-4）は「その土壌は歴史的に積み重ねられてきた社会の責任故」、「売春問題についていえば『買春』が問われず、DV問題についていえば『加害者』が問われない男性優位な社会、男女共同参画社会にはほど遠い女性差別の社会が実情」と指摘している。性の問題やその解決のための取り組みは現代的な課題でもあり、それらを歴史的に見ていくことは重要課題の一つである。

久布白は廃娼運動家という枠では捉えきれない様々な活動を行っているが、それらに取り組む出発点には廃娼という課題が存在していた。本研究では久布白が取り組んだ中心的課題を廃娼と捉え、彼女の生い立ちから廃娼運動、婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止法制定運動などの活動の内容とつながりについて史資料の分析を通して明らかにし、彼女の生涯における取り組みの全体像を明らかにする。先行研究には人物伝的な研究、女性史・廃娼運動史・婦人参政権運動史において久布白を取り上げたもの、また久布白の活動の一部分に焦点を当てた学術論文が存在しているが、いずれも久布白の全体像を明らかにしたものではなく、総合的な研究が必要である。

本論文では久布白の取り組んだ運動と女性福祉の関係という視点を設定した。廃娼は当時社会の底辺ともいうべき位置に置かれていた女性と深く関わる問題で、福祉の課題に通底する重要なテーマである。女性福祉とは「女性であるという性を理由に幾重にも重なって生活を脅かす差別をとらえ、支援策を検討しつつ、人権確立をめざすこと」（林 2003:32）であるとされているが、本論文においてもその定義を採用する。また、はじめに述べたように「男性優位な社会」、「男女共同参画社会にはほど遠い女性差別の社会」という現状があり、それゆえに筆者は男女共同参画と同時に、女性福祉が必要であるという視点に立っている。久布白は「運動と福祉は矯風会の車の両輪である」（高橋 2004:9）という言葉を残したと言われている。福祉の実現には必要な権利や法律を獲得するための運動の積み重ねが不可欠であり、社会福祉の歴史において久布白のような婦人運動家の取り組みを分析し、いかに位置づけていくのかは重要

な課題である。久布白の取り組んだ運動と福祉の関係を分析していくことは研究の目的であり、運動の根底にあった思想を分析し、それが女性の福祉にいかにつながるのか、またつながらなかったとしたらそれはなぜなのかも考えていきたい。

論文の各章では次のようなことを明らかにした。

第1章では久布白の生い立ちから1906年のアメリカ滞在時における日本人の売春女性や性教育との出会い、久布白直勝との結婚後、日本に帰国し、矯風会で活動始める以前までを取り上げている。アメリカの地で売春女性たちに対して抱いた「恥ずかしい」という思いが廃娼運動を始める原点となった。その後、公娼制度を必要とする社会と男性が問題であると考え、廃娼の必要性に目覚めていく。

第2章では久布白が1915年に矯風会機関紙『婦人新報』に廃娼論を投稿し、翌1916年の矯風会総幹事に就任後の廃娼運動の取り組み、初期の廃娼論を構成する視点を明らかにした。男女貞操思想は男女の平等化を図ろうとしており、廃娼を女性の人権から捉え、公娼制度は人身売買であるという問題意識も存在したが、売春女性たちを「醜業婦」や「賤業婦」と呼ぶことは彼女たちの支援という観点に立ったものではなかった。

第3章では廃娼運動における久布白の経済問題・労働問題の意識を取り上げた。活動の初期段階から問題意識は存在していたが、1928年のエルサレム会議出席を機にさらに意識を高める。また、男女共同の廃娼運動の取り組みや仏教界との連帯等、矯風会内にとどまらない活動の広がりを見せていく。

第4章では久布白と婦人参政権運動を取り上げた。久布白は廃娼や婦女の保護のために婦人参政権の必要性に目覚め、矯風会内にとどまらず、宗教や思想の異なる婦人運動家らと共同運動を実施した。

第5章では関東大震災における久布白ら女性たちの救援活動を取り上げている。彼女は女性団体の団結のきっかけを作り、女性の視点を生かした活動を進めていった。

第6章では戦前の久布白の性教育論を中心に取り上げた。彼女の主張した早期からの性教育、男子の性教育や生涯教育としての性教育の必要性は現代の性教育の課題でもある。久布白の性教育論は「純潔」と科学の二本柱であった。その「純潔」概念は禁欲という狭い意味ではなく、神の前に男女は平等であって、人間として互いに守らなければならないというものであった。

第7章では終戦直後の久布白の廃娼や婦人参政権要求のための働きかけから矯風会

を離れて廃娼、女性の解放や人権確立のために政界入りを目指した時期、矯風会復帰後の勅令第九号法制化運動等について明らかにした。選挙には落選したが、選挙活動の間、政治への知識を深め、その後『婦人と日本』の発行などに反映されていく。

第 8 章では久布白の戦後の性教育・純潔教育への関わりを分析し、その性教育論の戦前・戦後の連続性・非連続性・変化について明らかにした。戦後、科学的な性教育、純潔教育に加え、家族計画を導入し、久布白の性教育論は三本柱となった。現在の「純潔」を「民主純潔」と考えるなど、「純潔」に新しい意味を吹き込もうとしていた。

第 9 章では久布白の「混血児問題」の取り組みを取り上げた。彼女は「混血児」の数を正確に把握することで問題の実態をつかみ、政府や社会にあまり光を当てられていなかった片親が養育する「混血児」の支援を考えていく。それは「混血児」の母親の権利擁護やエンパワメントにもつながるものであった。また、「混血児問題」の取り組みを通して、性の問題に関する日本の戦争責任や平和への認識を深めていった。

第 10 章では久布白の売春防止法制定運動への関わりやその後の活動を明らかにした。久布白は売春防止法制定促進委員会の委員長を務めるなど、運動の中心的存在であった。法制定後も売春対策国民協議会の会長を務め、法遵守や環境浄化のための様々な取り組みを行う。ただし、久布白は売春女性たちの声を積極的に聴き、共に戦うことはせず、法の制定とともに獲得した婦人保護によって救われた女性と救われなかった女性が存在したのも確かである。

以上、第 1 章から第 10 章まで、久布白落实の廃娼運動とその周辺の活動を明らかにした。売春・買春問題は女性の抱える困難が濃縮されており、性差別の社会構造と大きく関わるものである。久布白の廃娼運動を始める動機は売春女性に対して抱いた「恥ずかしい」という思いであったが、運動を進める中で売春女性を生み出した原因が道德問題だけではなく、経済問題にあるということを認識していく。社会構造を変化させ、女性の性を認め、その人権が保障される社会を目指すために廃娼運動、婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止に取り組んだ側面も捉えることができる。久布白が晩年まで力を入れて取り組んでいたのは教育による意識改革であった。晩年の「ひとは性の奴隷となることなく、主人となって生きてほしい」という言葉は男性も女性も 1 人の人間として自らの性を大切に生きていく、豊かな性を生きていくという可能性も含んだものである。性を人権として捉え、人間としての性のあり方を示したことばであると捉えることもできるのではないだろうか。

### **(引用文献)**

久布白落実（1973）『廃娼ひとすじ』中央公論社.

林千代（2003）「女性福祉」『AERA MOOK 新版 社会福祉のみかた』朝日新聞社,pp.32.

林千代（2008）『「婦人保護事業」五〇年』ドメス出版.

高橋喜久江（2004）「矯風会の車の両輪—運動と福祉—」『婦人新報』1248,9-11.

## 目次

### 序章

第1節 問題の所在	1
第2節 研究史	4
1 自伝『廃娼ひとすじ』について	
2 女性史、廃娼運動史、婦人参政権運動史における評価	
3 人物伝的文献における評価	
4 学術論文における評価	
第3節 研究の目的と視点	8
第4節 研究方法と論文の構成	11
1 研究方法	
2 論文の構成	

### 第1章 久布白落実の生い立ち

はじめに	18
第1節 誕生から女子学院時代まで	19
1 両親について	
2 幼少期の落実	
3 群馬時代	
4 女子学院時代	
第2節 海外生活	23
1 ハワイからアメリカへ	
2 廃娼・性教育への目覚め	
3 結婚	
4 『婦人新報』における久布白の論考から	
小括	28

### 第2章 廃娼運動家としての久布白落実

はじめに	30
第1節 廃娼運動への道	30

1	廃娼論の投稿から日本キリスト教婦人矯風会総幹事就任まで	
2	「五銭袋運動」の取り組み	
第2節	久布白落実の廃娼論	33
1	男女貞操思想	
2	婦人の権利・人権の視点	
3	国辱観・「醜業婦」観	
小括		40

### 第3章 廃娼論の変遷—経済問題・労働問題への意識を中心に—

はじめに	45
第1節 婦人労働問題をめぐって	45
1 婦人労働問題への意識	
2 職業婦人・労働婦人の負担	
3 母性保護の視点	
第2節 廃娼運動の高まり	49
1 私娼対策について	
2 廓清会婦人矯風会連合の設立	
3 仏教界への働きかけ	
第3節 エルサレム会議と労働問題研究	53
1 エルサレム会議（第2回世界宣教会議）	
2 「労働問題物語」からみる貧困問題への視点	
第4節 東北婦女身売り防止運動をめぐって	56
1 東北の凶作と婦女身売り防止運動の開始	
2 東北六県の視察	
3 婦女身売り防止の具体策	
第5節 経済問題とその解決策	59
1 「廃娼と経済問題」（1933年）から	
2 座談会「基督者婦人と社会運動」（1934年）から	
小括	61

#### 第4章 久布白落実と婦人参政権運動

はじめに	65
第1節 婦人参政権への目覚め	66
1 飛田遊廓許可取消運動の失敗	
2 三澤千代野事件と婦女保護への視座	
第2節 日本婦人参政権協会の設立と欧米視察	70
1 日本婦人参政権協会の設立経緯	
2 1922年の欧米視察	
3 久布白の婦人参政権観	
第3節 他団体との共同運動—婦選獲得同盟における活動—	75
1 婦人参政権獲得期成同盟会の設立	
2 久布白の政治観の形成	
3 婦選獲得同盟総務理事の辞任	
小括	81

#### 第5章 関東大震災における女性たちの震災救援活動

はじめに	88
第1節 関東大震災の発生と行政の動き	89
第2節 関東大震災と久布白落実	91
1 久布白と大震災の経験	
2 震災直後の久布白の行動	
3 東京連合婦人会の設立とその活動	
4 矯風会独自の事業—「一週間療院」を中心として—	
5 久布白の帝都復興論	
小括	97

#### 第6章 戦前における久布白落実の性教育論

はじめに	103
第1節 性・性教育をめぐる論考から	104
1 性教育との出会い	



2	早期からの性教育の必要性	
3	男子の性教育の必要性	
4	性教育論の立場	
第2節	研究視察旅行と性教育研究	108
1	1922年の渡米	
2	1928年の研究視察旅行	
3	1935年の渡米と「純潔日本の建設」の発表	
3-1	「法制上より見たる米国の娼婦」	
3-2	「性病に関する国策樹立の必要」	
3-3	「性教育」	
3-4	「淪落婦女の防止と保護」	
第3節	久布白の性教育論	113
1	「我が国に於ける性教育」(1937年)にみる性教育論	
2	「国民の種々層と性問題」(1937年)から	
3	久布白の「純潔」概念をめぐって	
3-1	「純潔」概念の検討	
3-2	矢嶋楫子の告白をめぐって	
3-3	黎明会について	
第4節	戦時下における性をめぐる論考から	119
1	久布白の活動と国策一致の過程	
2	性病対策について	
小括		121

## 第7章 戦後の久布白落実—政治と娼婦—

はじめに	127
第1節 戦後の久布白の行動	128
1 外国軍駐屯地における慰安施設について	
2 婦人参政権・公娼制度廃止の要求	
3 総選挙出馬	
4 「姦通罪問題」をめぐって—公聴会における久布白・守屋の発言から—	

5 児童福祉法と性病予防法について	
第2節 矯風会復帰後の取り組み	135
1 政界進出の目標	
2 個人誌『婦人と日本』の発行	
3 歓楽街問題	
4 勅令第九号法制化運動	
小括	139

## 第8章 戦後における久布白落実の性教育・純潔教育論

はじめに	143
第1節 戦後における純潔教育施策	143
1 純潔教育導入の経緯	
2 純潔教育の方向性	
第2節 戦後における性教育・純潔教育	145
1 戦後の矯風会と純潔教育—『婦人新報』再刊から1950年代半ばまで—	
2 純潔教育委員会資料にみる久布白の性教育・純潔教育論	
2-1 『純潔教育委員会委員に対する問合せ 回答綴』における久布白の回答	
2-2 久布白の性教育論	
第3節 久布白と家族計画	150
1 家族計画の導入	
2 研究調査旅行	
3 第1回純潔教育指導者講習会の開催	
小括	154

## 第9章 「混血児問題」の取り組み

はじめに	160
第1節 「混血児問題」の発生	162
1 「混血児問題」発生の背景	
2 占領期「混血児問題」の封印	

3	厚生省における「混血児」調査	
4	「混血児問題」に関する論考―「戦争」・「アジア」・「人権」の視点から―	
第2節	久布白と「混血児問題」	165
1	「闇の女」問題と「混血」の問題	
2	「国際孤児」即ち孤児問題から「混血児問題」へ	
3	純潔問題中央委員会の設立	
4	「混血児」調査から得られた新しい視点	
5	「混血児問題」への焦点化	
6	アメリカ軍への思いとその変遷	
小括		172

## 第10章 久布白落実と売春防止法をめぐって

はじめに	178
第1節 売春禁止法制定運動の取り組み	178
1 売春禁止法制定促進委員会の設立	
2 売春問題対策協議会の設立	
3 売春禁止法制定促進委員会における久布白の活動	
第2節 売春防止法の制定	183
1 売春防止法制定までの活動	
2 売春防止法制定に対する久布白の評価	
3 売春女性たちの声—『接客女性』から—	
4 『婦人と日本』からみる久布白の売春観	
第3節 売春防止法制定以後の活動	190
1 1956年の研究調査旅行	
2 中国との交流	
3 売春対策国民協議会における活動—機関誌『売春対策』（1957-1963）を中心に—	
4 久布白と婦人保護事業	
第4節 晩年の久布白	200
1 久布白とキリスト教—日本基督教団の正教師として—	

2 晩年の論考を中心に	
3 久布白の最後の活動	
小括	203

むすびに代えて	212
---------	-----

# (資料編)

資料1 久布白落実略年譜	1
資料2 矢嶋家・久布白家 家系図	4
資料3 純潔日本建設運動体系	5
資料4 久布白落実著作・論文目録	6
4-1 著作目録	6
4-2 『婦人新報』掲載論文目録	7
4-3 その他矯風会発行物掲載論文目録	42
4-4 個人誌『婦人と日本』掲載論文目録	43
4-5 『売春対策』掲載論文目録	58
4-6 婦人雑誌掲載論文目録	59
4-7 その他雑誌等掲載論文目録	64

## 序章

### 第1節 問題の所在

「性の問題は永遠の問題である。男と女、夫婦の諸問題が真の解決をみるのは、いつのことか。売春問題は多少の進歩はあったが、これまた真の解決の日はいつくるのか」（久布白 1973:312）。

性の問題は古くて新しい問題であると言われる。『「婦人保護事業」五〇年』をまとめた林（2008:3-4）は貧困の構造が暴力や売春問題を生み出しており、その被害の実態が50年間ほとんど変わっていないということ、それどころか「性への侵害はますますすさまじく、近親関係での性暴力・子どもたちへの性虐待、さらにメディアによる性的な情報に安易に巻き込まれる若年女子の性被害、犯罪にまで及ぶ児童ポルノなどは人間の尊厳を逸脱した危機的状況にあるといえる。その土壌は歴史的に積み重ねられてきた社会の責任故であるといっても決して過言ではないであろう。売春問題についていえば『買春』が問われず、DV問題についていえば『加害者』が問われない男性優位な社会、男女共同参画社会にはほど遠い女性差別の社会が実情である」と指摘している。売春・買春、性暴力、性虐待、性被害など、性の問題は解決するどころか、より複雑・多様化し、見えにくくなっている現状がある。「その土壌は歴史的に積み重ねられてきた社会の責任故」と指摘されているように、性の問題への取り組みを歴史的に見ていくことは、その解決方法を考えていくにあたって重要な課題である。久布白落実（1882-1972）は、『廃娼ひとすじ』という自伝もあり、公娼制度廃止をはじめとした、性の問題の解決のために一生を捧げた人物である。それゆえに、彼女の生涯における活動を見ていくことは、そのまま性の問題の取り組みの歴史をみていくことであると言える。彼女の考えた性の問題とは、またその真の解決とはどのようなものであったのだろうか。このような言葉を遺した彼女は一体どのような生涯を送った人物なのだろうか。

久布白落実（1882-1972）は明治・大正・昭和時代を生きた女性である。1882（明治15）年に熊本の久保真次郎、音羽（旧姓・徳富）のもとに生まれた。落実が幼い頃、父・真次郎は放浪生活を送っていたが、落実が3歳の時に母とともに基督教の洗礼を受け、その後父も改心し、基督教の道に入る。1893年、久保家が群馬県に移った年に、群馬は廃娼を断行している。彼女もそのことを覚えており、最初に「廃娼」に触れたのはその時であった。共愛女学校を経て女子学院を卒業後、父母を追ってハワイへ渡る。その後、アメリカに滞在中の1906年、日本人の売春女性との

出会い、矯風会世界大会での性教育との出会いは久布白の人生の行路に大きく影響を与えた出来事である。

久布白は日本キリスト教婦人矯風会（以下、矯風会）で活動した婦人運動家である。矯風会の起源はアメリカの禁酒運動にある。南北戦争後のアメリカ社会においては、飲酒の害が問題となっており、1873年12月、アメリカのヒルスボロで女性たちが立ち上がり、酒屋・酒場の廃業に取り組んだ。その後、運動が全国的に広がり、1874年アメリカのオハイオ州クリーブランドで米国キリスト教婦人矯風会（米国キリスト者婦人禁酒同盟：Woman's Christian Temperance Union）が設立されている。設立当初の会頭はアニー・ウィッテンマイヤーであり、会務と通信書記はフランシス・エリザベス・キャロライン・ウィラード（以下、ウィラード）が務めていた。1879年にウィラードが会頭に就任する。その後、1883年にウィラードがサンフランシスコで阿片窟を見たことを契機に各国へ禁酒運動（矯風運動）を広げていく必要性を痛感し、世界キリスト教婦人矯風会（世界キリスト者婦人禁酒同盟：World Woman's Christian Temperance Union）を設立、世界に特派員（ミッシヨナリー）を派遣した。1886年6月に特派員のメアリー・レビットが来日し、各地で演説を行った結果、同年12月6日に日本において「社会の弊風を矯め道德を修め飲酒喫煙を禁し以て婦人の品位を開進する」（日本キリスト教婦人矯風会 1986:38）ことを目的として、矢嶋楯子<sup>1</sup>ら 56人の女性キリスト者によって「東京婦人矯風会」が設立された。Temperance を「禁酒」や「節制」ではなく、「矯風」と訳したのは、日本には売春が公然と存在しているため、「禁酒」よりも「矯風」が必要であるという意見があったからである。ここに日本の矯風会の独自性がある。その後、矯風会は全国組織となり、「日本婦人矯風会」（1893年）、続いて「日本基督教婦人矯風会」に名称変更し、発展してきた経緯がある。この名称については「機関誌の表紙裏や裏表紙に、ときおり規則や役員構成がのせられているが、『婦人新報』1900年1月号より、日本基督教徒婦人矯風会規則として登場、しかし文中はいまだ日本婦人矯風会のままである。日本基督教婦人矯風会の名称が登場するのは、『婦人新報』1905年4月号・7月号あたりからである」（日本キリスト教婦人矯風会 1986:214）と記されている。

矯風会は現在も「平和」、「性・人権」、「酒・たばこの害防止」という三大目標を掲げて活動を継続している。女性人権事業として、講演会・学習会の実施や機関誌『婦人新報』の発行を行い、女性福祉事業として、緊急避難所の「女性の家 HELP」と中

長期滞在施設「矯風会ステップハウス」を運営している。2012年4月から公益財団法人になった。

矯風会は創立時から性に関する問題（「在外売淫婦取締の請願」、「一夫一婦の請願」など）を扱っており、1890年に風俗部を設置し、「風俗廃娼家政等の事業」（日本キリスト教婦人矯風会 1986:67）に取り組んできたが、全国的にその活動を開始したのは1916年に久布白が矯風会総幹事に就任した時である。1915年に久布白は『婦人新報』に廃娼論を投稿し、それが矯風会内で反響を呼び、翌16年、矯風会総幹事に就任する。その後、廃娼運動や性教育、婦人参政権運動等に精力的に取り組んでいくことになる。結果的に廃娼や婦人参政権の獲得は戦後まで待たねばならないが、戦後に婦人参政権を獲得してからは、政界から廃娼・売春防止やその後の対策に取り組む必要性を感じ、矯風会を離れて総選挙に出馬した。選挙には落選したが、その後、「混血児問題」に取り組み、民間の立場から売春防止法制定に尽力した。そして、売春防止法制定後も積極的に法遵守のための活動や性教育等に取り組んでいったのである。

さて、久布白落実と同時代に、様々な婦人運動家が活躍していた。母性保護論争を繰り広げた、平塚らいてう（1886-1971）、与謝野晶子（1878-1942）、山田わか（1879-1957）、山川菊栄（1890-1980）、「婦選は鍵なり」という言葉を遺し、戦後には国会議員を務めた市川房枝（1893-1981）、婦人参政権運動に関わり、母子福祉に尽力した山高しげり（1899-1977）や職業婦人社を自ら立ち上げ、消費者運動にも携わった奥むめお（1895-1997）などが存在している。彼女たちの生きた時代は、近代国家における家族制度・公娼制度の下で、男性には性の自由が与えられていたが、女性には与えられず、男性の支配下に置かれ、抑圧されていた。女性に貞操を守るよう要求する一方、国家が売春を公認し、一部の女性には貞操を売らせるということが平然と行われていたのである。また、細井和喜蔵の『女工哀史』に代表されるような女工の劣悪な労働環境の問題も深刻であった。また、働く女性（いわゆる「職業婦人」）の増加に伴い、仕事と育児の両立という問題が発生した（1918年から1919年に繰り広げられた「母性保護論争」につながっていく）。そのような時代の中で、婦人運動家たちが女性解放や母性保護などを目指して、様々な運動や活動に取り組んでいくのである。

## 第2節 研究史

久布白落実について、これまでどのような研究が行なわれてきたのだろうか。また、それらの研究において彼女はどのように評価されてきたのか。その先行研究について概観しておきたい。

### 1 自伝『廃娼ひとすじ』について

久布白落実には自伝『廃娼ひとすじ』が存在している。但し、これは久布白の死後出版されたものであり、彼女自身が編集したものではない。1967（昭和42）年から1969年に『婦人新報』に掲載された久布白の「自伝」、1916年以降の『婦人新報』における論考、個人誌『婦人と日本』における論考や久布白の著書等から、矯風会の高橋喜久江<sup>2</sup>がまとめたものである。この自伝は彼女の生涯における活動を網羅しており、彼女の生涯を辿るにあたり非常に貴重な文献である。しかしながら、久布白と近い位置で働いた人物がまとめたものであり、その内容については慎重に検討していく必要がある。

### 2 女性史、廃娼運動史、婦人参政権運動史における評価

女性史、廃娼運動や婦人参政権運動の歴史の中で、久布白はどのように評価されてきたのだろうか。林（2001:21）が『「人権闘争」と『戦争協力』を両極として、振り子のように、揺れ続ける廃娼運動への評価』と指摘したように、廃娼運動やそれに取り組む人物については、多くの研究者によって様々な評価がなされてきた。

村上（1972:137-139）は『明治女性史』の中で、廃娼運動について「社会運動としてこれほど一貫した息の永い運動はなかった」、「明治年間ただひとつの根源的な人権闘争」であったと評価している。倉橋（2010:97）は廃娼運動家の「限界は容易に指摘できる」が、「限界を持ちながらも、とにかく、彼女たちがいくたの迫害をものともせず、長期にわたって、廃娼運動を戦ったという面を肯定的に評価すべきである」と述べている。竹村（1982）は著書である『廃娼運動』の中で、飛田遊廓許可取消運動に失敗したのちの久布白の発言の重要性について取り上げている。久布白は運動の失敗を女性が参政権を有していないことに起因するものであると考え、参政権獲得を目指すべきであると主張した。竹村（1982:83）は「この久布白発言は、これまで国や地方自治体の政治はもっぱら男性にまかせきりだったことが廓清運動の低迷を招き、ひいては飛田反対運動の敗北にもつながった、という深刻な反省に立つものであった」、ま



た、廃娼運動において仏教界との連帯の重要性を一番よく認識していたのは久布白であったと評価している。一方で 1934 年頃、公娼制度廃止の可能性があると考えていた久布白については「あまりに楽観的な時代認識」（竹村 1982:191）であったと批判も行っている。井上（2011:89）は『さいごの色街 飛田』の中で、久布白の婦人参政権獲得の主張を取り上げ、「画期的な発言」とであると評価している。松尾（1989）は婦人参政権運動の中心的団体となった婦選獲得同盟の設立における久布白の果たした役割について、また千野（1979:241）は関東大震災後の久布白について「積極的にその救護活動に力をつくした」と肯定的に評価している。

一方で、久布白をはじめ矯風会のメンバーたちは売春女性たちを表す「醜業婦」という言葉を用いていることから、売春女性に対する人権感覚の欠如について批判されてきた。森岡（2001:11-12）は、矯風会には『『賤業婦』と蔑む態度』があり、「婦人を男子と等しく人格をもつ存在とみる人間平等観に立ち、それゆえにこそ一夫一婦でなければならぬと主張するのだが、娼妓を無教育な『実に憐れむべき者』と見下した」と批判している。藤目（1997:27）は「欧米の（廃娼）運動には少なくともその当初にはフェミニズムが存在するが、日本の運動にはそのようなものは存在しない。スタートの時点から『醜業婦』を国辱とみなし、国家の体面を論じ、取締を国家に請願していった。国家の売春統制に反対するのではなく、女の売春を禁止するように求めるのである。それは戦後の売春禁止法制定運動の過程でもっとも露骨に表出していく」と指摘している。また、「アジアの同性・国内労働者階級の同性に対する共感の不在」（藤目 1997:333）や「社会科学的分析の視点が軽視・無視されがちで、『純潔』思想と『貞操』道徳がことさら強調されがちであった」ということ、「婦人矯風会や廓清会にとっては、芸娼妓がおかれていた社会の仕組みや制度について根本的に変えていこうとする発想は希薄だったと思われる」（鈴木 1998:32）というように貧困や社会構造の視点の欠如が指摘されている。

また、戦争協力との関係から、久布白ら矯風会の廃娼運動を分析した研究も存在している。戦争に加担した理由として、「個人の身体や性の国家管理を是とする認識と、その認識に基づいた運動の方向性」や「公娼制度が女性差別であるという単純な事実について無自覚であり、したがって廃娼運動を女性の人権問題として展開しえなかった点」（田代 1999:139）などを挙げている。片野（1998:218-219）は天皇制と矯風会の廃娼思想との関係を分析し、矯風会の人々の「信奉する性道徳は、神と天皇の名に

において二重に権威づけられ、絶対視され神聖視されさえする」ということ、「直接に国家と結びつき、時にはひとり歩きをはじめ」、「娼婦や芸妓は神聖なる男女関係と国家とを穢す存在」とされ、「彼女らは救済の対象とはなりえても、運動をともにする対象ではなくなる」と指摘している。

### 3 人物伝的文献における評価

久布白の生涯について取り上げた文献として、池末（1972）、高橋（2001）、瀬山（2004）、松倉（2006）、山鹿市教育委員会教育部文化課（2009）などが存在している。池末（1972:192）は『社会事業に生きた女性たち—その生涯としごと』の中で、「落実の一生は、男女は神のまえに平等であり、互いに人権を尊重し純潔を守るという信仰にもとづく正義感が、それを損ない傷つけているものにたいする激しい怒りとなってぶつかっていった闘いの歴史でもあった」と評価している。高橋（2001）は『シリーズ福祉に生きる 39 久布白落実』を執筆している。高橋は矯風会の職員として久布白と共に働いた経験を持っており、久布白を肯定的に評価している。一方、2009年に学術出版会から『学術著作集ライブラリー 久布白落実著作集』（全6巻）が出版され、久布白の代表的な著作が収録されているが、その解説の中で高橋は次のように述べてもいる。

（久布白が）戦前の状況のなかで広く欧米の現況を理解し歴史も知り表現しており主張しているのに改めて敬意をもった。ただし日本の分析において皇室の“恩恵”を記しているのには時代の限界を感じた。久布白落実は当時としてはかなりの英語使いであり欧米の情報も把握できる立場であった。キリスト者として、地上の目でみるのみでなく、それを超えた視点に立てる人にして、日本の国家主義・皇室崇拝の枠にとらわれることにおそろしさを感じる（高橋 2009:10-11）。

この記述において、高橋は久布白の思想の限界も指摘しており、久布白を客観視したものであると捉えることができる。瀬山（2004）は『わたし』を生きる女たち：伝記で読むその生涯』の中で、久布白が廃娼に目覚めるきっかけとなった出来事から彼女の展開した廃娼運動まで分析を行った。瀬山（2004:193-194）は、久布白のような「女性たちがいたことで、参政権をはじめとする、いま、私たちが享受しているもの

があるのだとを感じる」と評価する一方で、「こうした女性たちを先駆とした日本における家族尊重や純潔日本建設という目標を掲げた廃娼運動の流れは、売春を行う女性を犯罪者と規定する売春防止法を制定させ、女性を分断する方向へと歩を進ませてきた…規制をしいてなお続く売春という現実を、その現実の側から、つまり売春に従事する女性の声に耳を傾けることから考えていくという道筋はみえてこない」というようにその限界を指摘している。松倉（2006:146）は『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』の中で久布白の生涯を取り上げ、彼女を「女性福祉の先駆者」と位置付けている。彼女の取り組んだ運動は「女性が声を持たない時代に、ある時は保護・救援活動、署名、募金、施設運営のように身の回りの急務の仕事をする、『目標』を実現させるための手段と術を知っていた女性の姿である。即ち、信念と時流とのバランス感覚に長けたしたたかで超現実的な運動であったといえる。ゆえに目の前の現実执着するあまり、階級支配や植民地支配への視点に乏しく、…アジアで展開された日本の侵略政策や帝国主義に呼応する発想が散見される」（松倉 2006:147）と指摘している。山鹿市教育委員会教育部文化課（2009）は「近代の山鹿を築いた人たちシリーズ」で女性解放運動家として久布白落実を取り上げている。

以上に挙げたものは、いずれも久布白の生涯に焦点を当てた貴重な文献であるが、人物伝的な研究であり、久布白の論考等を詳細に分析し、その生涯における活動や思想の全体像を明らかにしたものではない。

#### 4 学術論文における評価

学術論文では林（2001；2005）、今井（2002）、小田切（2005）などが存在している。林（2001）は久布白の「市民」論から「国民」論への変容に焦点を当て、1930年代の久布白の思想を分析している。久布白には自伝『廃娼ひとすじ』があるが、久布白自身がその表題通り「廃娼ひとすじ」のみに生きた女性であったのか、疑問を投げかけている。彼女の主張の連続面と断絶面を「ホーム」論の転回としてみたとき、「あるときは真剣に女性の解放を願い、あるときはファシズム国家にとりこまれた一人の人間の姿が、そこに現れる」（林 2001:21）と述べている。また林（2005）は久布白の個人誌『婦人と日本』の分析を通して、1950年代の思想的変遷について研究している。久布白は個人誌において「民主政治」をテーマとしており、「久布白にとって廃娼運動とは、そのスタート地点から、単なる『道徳』問題ではなく『政治』や『法

律』の問題」(林 2005:65)であったと指摘している。林の研究は従来の久布白像に新しい光を当てた非常に興味深い研究である。今井(2002:68)は矯風会と母性保護論争との距離について検討し、「女性の経済的自立の必要性を認めた」久布白を取り上げている。小田切(2005)はキリスト教婦人矯風会と性教育について取り上げ、その中で久布白の性教育論を分析し、その功罪について考察している。これらの研究も久布白の生涯の一部分を詳細に研究したものとして大変貴重なものである。

このように久布白の生涯を人物伝的に取り上げた研究や彼女の活動の一部分に焦点を当てた研究が存在しており、久布白に対する様々な肯定的評価・批判がなされている。しかしながら、いずれの研究も久布白の生涯における活動や思想を詳細に取り上げ、彼女の全体像に迫ったものではない。久布白の活動の評価を行い、現代的な意義について考察していくためには、彼女についての総合的な研究が必要である。

また、久布白の所属していた矯風会やそのリーダーたち<sup>3</sup>に関する研究もそう多くはないが、それはなぜか。矯風会は中流階級女性たちの集まりで体制内の改革しか為し得なかったのではないかという見方があり、あまり積極的な観点から研究の対象とされてこなかったのではないか。また、廃娼運動には初期からフェミニズムが存在していなかった(藤目 1997:27)という指摘もあり、矯風会の廃娼運動は真に女性の人権のための戦いでなかったということや戦争協調体制をとっていたということで批判される傾向があり、マイナスイメージも多い。しかしながら、このような先入観は矯風会の活動の本質や意義を見失うことにもつながるものであると筆者は考えている。確かに、戦時の『婦人新報』を読み進めていくと、矯風会の事業は国家総動員体制の一翼を担っていたことは明らかである。戦後には、矯風会は戦争協力に対する責任を反省し、1947年の戦後初の矯風会全国大会において、世界平和についての大会決議を行っている。

それらをふまえた上で、久布白の取り組んだ廃娼運動とその周辺に焦点を当て、彼女の活動の全体像を明らかにしていきたいと考えている。

### 第3節 研究の目的と視点

冒頭の文章にあるように、久布白は性の問題に関心を持ち、生涯をかけてその真の解決方法を探し求めていた。現在の矯風会もその精神を受け継ぎ、「性・人権」を活動目標の一つに掲げ、性の問題への取り組みを続けている。具体的には売春(買春)、人

身売買、ジェンダーの問題、またセクシュアルマイノリティをはじめとした多様な性について機関紙『婦人新報』で取り上げ、学習会を実施している<sup>4</sup>。

久布白は廃娼運動家という枠組では捉えきれない様々な活動を行っているが、それらに取り組む出発点には廃娼という課題が存在していた。本研究では、久布白が取り組んだ中心的課題を廃娼であると捉え、彼女の生い立ちから廃娼運動に取り組むことになった経緯、また、婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止法制定運動などの活動と廃娼とのつながり、そして、その意義や限界について、史資料の分析を通して明らかにし、彼女の生涯における取り組みの全体像を究明する。このような課題を明らかにしていくために、本研究では次のような視点を設定した。

久布白の取り組んだ運動と女性福祉の関係という視点である。廃娼は当時、社会の底辺ともいうべき位置に置かれていた女性と深く関わる問題で、福祉の課題に通底する重要なテーマである。林（2003:32）は女性福祉について「女性であるという性を理由に幾重にも重なって生活を脅かす差別をとらえ、支援策を検討しつつ、人権確立をめざすこと」であると考えている。本研究においても女性福祉をこのように捉え、分析を行っていきたい。

さて、1999年に男女共同参画社会基本法が施行されている。「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現」が課題とされる中で制定された法律である。法の第2条第1項第1号によると、男女共同参画社会は「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」を指している。男女共同参画社会の時代において、「女性福祉」という視点は不要ではないかという意見もあるかもしれない。しかしながら、第1節で言及したように、現代においても「売春問題についていえば『買春』が問われず、DV問題についていえば『加害者』が問われない男性優位な社会、男女共同参画社会にはほど遠い女性差別の社会が実情」（林 2008:3-4）であり、女性は様々な場面で社会的に弱い立場におかれやすいという現実がある。『平成24年男女共同参画白書』によると、2011年中に検挙された配偶者間での殺人、傷害、暴行のうち、9割は女性が被害者となっている。雇用の面では男性の約8割が正規雇用であるのに対し、女性の過半数は非正規雇用である。また、国立社会保障・人口問

題研究所によると、20～64歳の単身女性の3人に1人が貧困状態であるという。このようなデータから考えても、依然として女性は暴力の被害を受けやすく、不安定な雇用状態に置かれやすい傾向があり、また、女性の貧困化という課題も存在している。それゆえに現在においても「男女共同参画」だけではなく、「女性福祉」という視点が必要であると筆者は考えている。

久布白は「運動と福祉は矯風会の車の両輪」（高橋 2004:9）という言葉を残しており、福祉事業だけではなく運動を行う必要性を説いていた。柿澤（2004:7-8）はこの言葉を取り上げ、「運動にとって現場と連帯すれば運動の焦点が的確に捉えられます。福祉現場にとって利用者援助に必要なこと等、法律による解決なくしてできないことが多くあります。それらに対する要請運動は大きな力となります」と述べている。社会福祉の問題はその事業への取り組みだけでは解決出来ないものが多く、福祉の実現に必要な権利や法律を獲得するための運動の積み重ねが不可欠である。このことは現在にも通じることである。また、「社会福祉の歴史をみる視点において従来から欠如していたのは、例えば女性の視点であり、ジェンダーといった概念をとおして歴史をみていくこと」（室田 2006:4）であると指摘されており、それゆえに社会福祉の歴史において、久布白のような婦人運動家の取り組みを分析し、いかに位置付けていくのかは重要な課題の1つなのではないだろうか。彼女の取り組んだ運動と福祉の関係を分析していくことは筆者の久布白落実研究の目的である。久布白が取り組んだ運動の根底にあった思想を分析し、それが女性の福祉にどのようにつながるのか、またつながらなかったとしたらそれはなぜなのかを考えていきたい。

社会福祉において、1人の人物を取り上げ、研究を行う意義はいかなるものであろうか。室田（2006:3）は『社会福祉は人物である』とよく言われるように、社会福祉の歴史を人物をとおしてみていくことは、きわめて大切な切り口である。国家を中心にした福祉政策や法体系の歴史というより、対象者を目の当たりにして、自己の良心や義侠心から実践へと進んだ人、宗教的動機から実践に駆られた人、西洋の実践や思想に学びながら実践を遂行した人たちが、歴史のなかには存在する。（中略）…こういう人びとを取り上げていくことは、単なる過去の掘り起こしというより、現代的な視点にたって実践者の思想を知ることにつながり、福祉の世界においてきわめて重要であろう」と述べている。久布白はどのような動機から廃娼運動を始めたのか、そしてその後、何が彼女を婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止の取り組みへと

駆り立てたのか。彼女の運動や活動の背景にある思想について知ることは、過去から現代へと続く性の問題について知ることにもつながる。

## 第4節 研究方法と論文の構成

### 1 研究方法

さて、久布白は「多くの仕事、役割をかかえながらよく書いている」（高橋 2009:10）と言われているように、多くの論考や著作を残している。研究史で言及したように、2009年には初の『久布白落実著作集』も刊行され、史料がより身近なものとなっている。著作集には『父』（1920年）、『女は歩く』（1928年）、『婦人新報』に掲載の婦人参政権関連論文（1921年～1925年）、『社会政策体系 第九巻』収録の「矯風問題」、『父と良人』（1936年）、『純潔教育はなぜ必要か』（1949年）、『五十年の歩みと五十日の旅』（1956年）、『日々の食物』（1971年）、『廃娼ひとすじ』（1973年）が収録されている。いずれも久布白の代表的な著作である。

本研究では、久布白落実の著作や論考、彼女の所属していた矯風会に関する史資料、具体的には矯風会の機関誌である『婦人新報』、他の婦人雑誌（『婦女新聞』、『婦選』、『婦人公論』など）や雑誌（『廓清』等）における彼女の論考、久布白の個人誌『婦人と日本』、また新聞記事（『東京朝日新聞』等）などの史資料、また、戦前の女性運動に関する資料を収録した『日本女性運動資料集成』、戦前の廃娼運動や売春に関する資料を取り上げた『買売春問題資料集成（戦前編）』や戦後の売春に関する資料を取り上げた『性暴力問題資料集成』などの復刻版資料も活用し、久布白落実の生涯における活動を歴史的に分析していく。

### 2 論文の構成

公娼制度に対する問題意識を核として、久布白が携わった活動は大きく、廃娼運動、婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止にわけることができる。本研究においては、これら4つを久布白の生涯における活動のキーワードと位置づけ、各章で久布白の活動について詳細に論じていく。論文の構成は次のようなものである。

第1章では、久布白の生い立ち、幼少期、少女時代、女子学院時代から卒業後のアメリカ滞在時における日本人売春婦や性教育との出会い、そして、久布白直勝との結婚後、日本に帰国し、矯風会で活動を始める前までを取り上げていく。また、久布白

は3歳の時に幼児洗礼を受け、キリスト教主義学校である女子学院時代にキリスト教に目覚め、卒業後、アメリカで太平洋神学校に通った経験を持つが、彼女の活動の根本にはキリスト教思想が存在している。彼女とキリスト教の関わりについて分析していきたい。廃娼に初めて触れた群馬の少女時代、学生時代における思想形成、そして彼女が廃娼運動に突き進む原点となったアメリカで出会った日本人売春女性とのエピソードについて分析していく。本章は書き下ろしである。

第2章では、久布白が矯風会の機関誌『婦人新報』に廃娼論を投稿し、矯風会総幹事に就任後、廃娼運動にどのように取り組んでいったのかを明らかにする。特に活動初期における久布白の廃娼論を構成する視点、すなわち、男女貞操思想、婦人の人権・権利、「醜業婦」観・国辱観について分析していきたい。本章は拙稿（2012）「久布白落実の廃娼論をめぐって—女性福祉の視点から—」『Human Welfare』第4巻第1号掲載論文をもとに加筆修正したものである。

第3章では、久布白の廃娼論・廃娼運動の変遷をその論考から分析し、従来の研究ではあまり取り上げられてこなかった久布白の経済問題や労働問題への視点などを明らかにしていく。活動の初期段階から婦人労働への問題意識が存在していたが、1928年のエルサレム会議出席を機にさらに意識を高めている。そのほかに、男女共同の廃娼運動の取り組みや仏教界との連帯等、矯風会内にとどまらない廃娼運動の広がりについても取り上げていきたい。本章は拙稿（2012）「久布白落実の廃娼論をめぐって—女性福祉の視点から—」『Human Welfare』第4巻第1号掲載論文をもとに大幅に加筆修正したものである。

第4章では、久布白が婦人参政権の必要性に目覚めるきっかけとなった飛田遊廓許可取消運動の失敗や三澤千代野事件をはじめとし、矯風会内での日本婦人参政権協会の組織、婦選獲得同盟での活動、他の女性運動家との共同運動の実施まで、彼女の婦人参政権運動の取り組みを明らかにする。久布白は1924年から1930年まで婦選獲得同盟の総務理事を務めており、重要な役割を担っている。婦人参政権運動において、彼女が果たした役割はいかなるものであったのかを考察していきたい。本章は拙稿（2011）「久布白落実と婦人参政権運動をめぐって—1920年代を中心に—」『Human Welfare』第3巻第1号掲載論文をもとに大幅に加筆修正したものである。

第5章では、関東大震災における久布白ら女性たちの救援活動に焦点を当てる。震災時に、数々の女性団体の団結のきっかけを作ったのは久布白であった。震災救援活



動を社会事業的な活動という視点から捉え、久布白ら女性たちがどのように連帯し、活動を進めていったのか、また女性の視点をどのように生かし、活動を進めていったのかを明らかにする。2011年には東日本大震災が発生し、甚大な被害をもたらした。今なお生活の再建に苦しむ人々が存在している。地震大国である日本において、震災救援活動は大きな課題であり、そのような視点も盛り込んで分析していきたい。本章は、拙稿（2012）「久布白落実と関東大震災—女性たちの震災救援活動をめぐって—」『福祉文化研究』第12号掲載論文に加筆修正したものである。

第6章では、戦前の久布白の性教育論について明らかにする。久布白の性教育への関心は1906年のアメリカでの体験がきっかけとなっているが、彼女は『婦人新報』に性教育に関する論考を多く発表しており、彼女の性に関する初期の論考から、研究調査のための渡米後に発表した性教育論、また戦時下の性をめぐる論考まで分析する。本章は拙稿（2008）「久布白落実の性教育論をめぐって—『婦人新報』における1930年代の論稿を中心に—」『関西学院大学社会学部紀要』第105号掲載論文を大幅に加筆修正したものである。

第7章では、終戦直後の久布白の廃娼や婦人参政権要求のための働きかけ、矯風会を退き、総選挙出馬を通しての政界との関わり、矯風会復帰後の勅令第9号法制化運動の取り組み等について明らかにする。本章は書き下ろしである。

第8章では、久布白の戦後の性教育・純潔教育への関わりを分析し、彼女の性教育論の戦前・戦後の連続性、非連続性や変化について明らかにしていく。本章は拙稿（2011）「戦後における久布白落実の性教育論—性の問題解決をめぐって—」『人間福祉学研究』第4巻第1号掲載論文を加筆修正したものである。

第9章では、久布白の「混血児問題」の取り組みについて明らかにする。彼女の「混血児問題」の取り組みを社会福祉の視点から捉え、分析していく。久布白は直接「混血児」の養育に携わっていたわけではないが、彼等の人数を正確に把握しようとすることによって、問題の実態をつかみ、それに応じた適切な支援策を考えていくようになる。また「混血児問題」の取り組みを通して、性の問題に関する日本の戦争責任や平和への認識を深めていく経緯を分析していきたい。本章は拙稿（2012）「戦後の『混血児問題』をめぐって—久布白落実を中心に—」『社会福祉学』第52巻第4号掲載論文を加筆修正したものである。

第10章では、久布白の売春防止法制定運動への関わりを中心に明らかにする。久布

白は3度選挙に落選した後、1950年に政界入りを断念し、矯風会に復帰した。その後、売春防止法制定に向けて民間の立場から運動を続けていく。売春防止法制定促進委員会の委員長を務めるなど、常に運動の中心的な存在であった。また、法制定後も売春対策国民協議会の会長を務め、法遵守や環境浄化のために様々な活動を行っていく。それらの活動から晩年の久布白の取り組みまで明らかにしていきたい。本章は書き下ろしである。

なお、現代的視点から考えると差別的であるが、歴史研究としての時代状況をふまえて、売春女性を表す引用文中の「醜業婦」、「賤業婦」や「パンパン」等の不適切な用語については原文のまま使用している。

### (序章 文献)

- 千野陽一（1979）『近代日本婦人教育史—体制内婦人団体の形成過程を中心に—』ドメス出版.
- 藤目ゆき（1997）『性の歴史学』不二出版.
- 藤野豊（2001）『性の国家管理—買売春の近現代史』不二出版.
- 藤野豊（2012）『戦後日本の人身売買』大月書店.
- 橋本宏子（1996）『女性福祉を学ぶ』ミネルヴァ書房.
- 林千代（2003）「女性福祉」『AERA MOOK 新版 社会福祉学のみかた』朝日新聞社,pp.32.
- 林千代（2004）『女性福祉とは何か その必要性と提言』ミネルヴァ書房.
- 林千代（2008）『「婦人保護事業」五〇年』ドメス出版.
- 林葉子（2001）「『市民』が『国民』になるとき—久布白落実における『ホーム』論の転回」『キリスト教社会問題研究』50,1-30.
- 林葉子（2005）「『娼婦運動家』論・再考—久布白落実と『婦人と日本』（1950～1965）」『大阪大学日本学報』24,63-84.
- 池末美穂子（1972）「久布白落実」五味百合子編著『社会事業に生きた女性たち—その生涯としごと』ドメス出版,pp.183-194.
- 今井小の実（2002）「『婦人新報』と母性保護論争—矯風会の婦人界における位置づけを検討する指標として」『キリスト教社会問題研究』51,63-84.
- 今井小の実（2004）『社会福祉思想としての母性保護論争“差異”をめぐる運動史』

- ドメス出版.
- 井上理津子 (2011) 『さいごの色街 飛田』 筑摩書房.
- 柿澤路津子 (2004) 「女性福祉を担い続ける矯風会」 『婦人新報』 1248,6-8.
- 鹿野政直 (2004) 『現代日本女性史』 有斐閣.
- 片野真佐子 (1998) 「婦人矯風会に見る廃娼運動の思想—再び天皇制下の性と人間をめぐって—」 『日本女性史論集 5 女性と宗教』 吉川弘文館, pp.207-225.
- 菊池正治・室田保夫編 (2003) 『日本社会福祉の歴史』 ミネルヴァ書房.
- 小谷野敦 (2007) 『日本売春史』 新潮選書.
- 久布白落実 (1973) 『廃娼ひとすじ』 中央公論社.
- 倉橋正直 (2010) 『従軍慰安婦と公娼制度 従軍慰安婦問題再論』 共栄書房.
- 間野絢子 (1998) 『白いリボン 矢嶋楫子と共に歩む人たち』 日本基督教団出版局.
- 松倉真理子 (2006) 「第3章 久布白落実—廃娼と女性の福祉—」 室田保夫編 『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』 ミネルヴァ書房, pp.141-147.
- 松尾尊兌 (1989) 『普通選挙制度成立史の研究』 岩波書店.
- 村上信彦 (1972) 『明治女性史 (下)』 理論社.
- 森岡清美 (2001) 「宗教と社会事業を媒介するもの—キリスト教徒による娼妓廃業支援事業を手がかりとして—」 『社会事業史研究』 29,1-14.
- 室田保夫編著 (2006) 『人物で読む近代日本社会福祉のあゆみ』 ミネルヴァ書房.
- 内閣府 (2012) 『平成 24 年版男女共同参画白書』 .
- 日本キリスト教婦人矯風会 (1986) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』 ドメス出版.
- 小田切明德 (2005) 「基督教婦人矯風会と性教育—久布白落実らの大正・昭和前期の活動を中心にして—」 『キリスト教社会問題研究』 54,1-24.
- 小野沢あかね (2011) 『近代日本社会と公娼制度—民衆史と国際関係史の視点から』 吉田弘文館.
- 大越愛子 (1996) 『フェミニズム入門』 ちくま新書.
- 瀬山紀子 (2004) 「廃娼運動を担った女たち 久布白落実・矢島楫子」 楠瀬佳子, 三木草子編 「『わたし』を生きる女たち : 伝記で読むその生涯」 世界思想社, pp.174-194.
- 社会福祉法人慈愛会 (1994) 『慈愛寮百年のあゆみ』 ドメス出版.
- 杉本貴代栄 (2010) 『女性学入門』 ミネルヴァ書房.

- 杉本貴代栄 (2012)『フェミニズムと社会福祉政策』ミネルヴァ書房.
- 杉本貴代栄 (2012)『福祉社会の行方とジェンダー』勁草書房.
- 鈴木裕子 (1998)『日本女性運動資料集成 第8巻 人権・廃娼Ⅰ』不二出版.
- 田島恵子 (2004)「矯風会の性教育のあゆみ」『婦人新報』1248,2-5.
- 高橋喜久江 (2001)『シリーズ福祉に生きる 39 久布白落実』大空社.
- 高橋喜久江 (2004)「矯風会の車の両輪—運動と福祉—」『婦人新報』1248,9-11.
- 高橋喜久江 (2009)「久布白落実著作集 解説」『学術著作集ライブラリー 久布白落実著作集第6巻 廃娼ひとすじ解説』学術出版会.
- 竹村民郎 (1982)『廃娼運動 廓の女性はどう解放されたか』中公新書.
- 田代美江子 (1999)「十五年戦争期における廃娼運動と教育—日本キリスト教婦人矯風会を中心に—」『差別と戦争—人間形成史の陥弄—』明石書店,pp.115-148.
- 山鹿市教育委員会教育部文化課 (2009)『近代の山鹿を築いた人たちシリーズ 010 女性解放運動家 (1882~1972) 久布白落実』.

---

## (序章 注)

- <sup>1</sup> 1833 年、肥後国上益城郡津森村杉堂（現・熊本県上益城郡益城町）で矢島忠左衛門直明・母鶴の元に生まれる。1 男 7 女の 6 女であり、誕生は歓迎されず、三女である姉の順子が「かつ」と命名した。25 歳の時、林七郎の後妻となるが、夫の酒乱や暴力に耐えかね、家を出た。その後上京し、兄・直方の看病をしながら、教員伝習所に通い、小学校教員を務める。その後、1878 年にアメリカ人宣教師マリア・ツルーと出会い、新栄女学校の教師となり、1879 年に受洗。1881 年、桜井女学校の校主代理に就任し、1886 年に東京婦人矯風会を設立。1890 年には新栄女学校と桜井女学校が合併し、女子学院となり、初代院長を務めている。
- <sup>2</sup> 1933 年、東京に生まれる。1955 年、お茶の水女子大学文教育学部を卒業し、57 年に同大学の専攻科を修了し、矯風会に就職。1973 年発足の売春問題ととりくむ会の事務局長を兼務。2004 年 5 月まで、矯風会の会頭を務める。
- <sup>3</sup> 矯風会のリーダーには、矢嶋楫子、守屋東、ガントレット恒子、林歌子らが挙げられるが、その先行研究には次のようなものが存在している。
- まず、創立者矢嶋に関しては、三浦綾子 (1989)『われ弱ければ—矢嶋楫子伝—』(小学館発行)、金子幸子 (1990)「近代日本における女性解放の思想と行動—矢嶋楫子と日本基督教婦人矯風会 (第 2 部論文—伝統と近代化)」『アジア文化研究別冊 (国際基督教大学学報 3—A)』2,203-217、間野絢子 (1998)『白いリボン 矢嶋楫子と共に歩む人たち』(日本基督教団出版局発行)、富上則彦 (2001)「変革期の人物論 (17) 矢嶋楫子命懸けで元老院に “一夫一婦の建白” —女子教育分野でも先駆者の試み」『郵便貯金』51(2),40-42、犬童美子 (1998)「足尾銅山鉍毒事件と熊本の女性—矢嶋楫子・宮崎槌子と田中正造のかかわりを中心に (近代化の中の女たち)」『新女性史研究』3,1-16、今波はじめ (2000)『シリーズ福祉に生きる 30 矢嶋楫子』(大空社発

---

行) 等がある。次に、守屋に関しては、宇野美恵子 (1988) 「社会教育における守屋東の思想と実践—矯風会運動から肢体不自由児教育へ」『教育研究国際基督教大学学報 1 - A (国際基督教大学教育研究所)』30,85-106、ガントレットに関しては、松倉真理子 (2002) 「もう一人の婦人運動家—ガントレット常子 (1920 年代における)」『キリスト教社会問題研究』51,85-112、ガントレット彩子 (2005) 「随想 太平洋戦争とガントレット恒子周辺 (特集・戦後 60 年、被爆 60 年)」『日本学研究』3,84-91 等がある。また、林に関しては、佐々木恭子 (2000) 『シリーズ福祉に生きる 33 林歌子』(大空社出版)、室田保夫 (2003) 「林歌子の渡米 (1905～06 年) をめぐって」『関西学院大学社会学部紀要』94,61-74、室田保夫 (2006) 「林歌子の『博愛月報』掲載論文をめぐって」『関西学院大学社会学部紀要』101,69-82 等が存在している。

- <sup>4</sup> 田島 (2004:5) は科学の発達に伴って、性の考え方も変化し、深まってきたことをふまえ、「人間の染色体に関しても、その組み合わせによって男性や女性のほかに中間の性があることがわかってきました。私たちも性 (セクシュアリティ) について多様な性があることをぜひ学習して中間の性、性同一性障害、同性愛、両性愛に対する理解を深めていきたいのです」と述べている。

## 第1章 久布白落実の生い立ち

### はじめに

さてこの久布白落実なる人物は、悪条件だらけであった。東京にポストをもたない牧師の妻、その夫は開拓伝道を志しており、幼児はつきまとい、姑もいる。本人の私は、米国での経験から「日本婦人の救済」という祈りと願ひだけは絶やさなかったが、この境遇から出て仕事を持つことの無理を知っている。半年もかかって東京と高松の間でやりとりがあった。境遇の重圧を動かしたのは、夫の決心であったといえよう。それは私にとっては救いでもあり、驚きでもあった。当時の私は、二つの我にはさまれ、引き裂かれていた。ひとつは家庭という現実、ひとつはあの願ひであって、まるで小さい体がこの二つの大渦の中でもみぬかれていた感じであった（久布白 1973:309）。

自ら「悪条件だらけであった」と記しているように、久布白は様々な困難を抱えながら、矯風会の総幹事に就任した。本章では、久布白落実の生い立ちとその思想形成に焦点を当て、彼女が誕生した 1882（明治 15）年から矯風会総幹事に就任する直前の 1915（大正 4）年までを中心に、廃娼や性教育との出会いから矯風会総幹事に就任する以前までを取り上げる。

久布白落実は 1882（明治 15）年 12 月 16 日、熊本県鹿本郡米之嶽（現・熊本県山鹿市）に生まれた。放浪ののちに牧師となる大久保真次郎、音羽（旧姓・徳富）の長子である。母音羽は徳富家の娘であり、湯浅初子、徳富蘇峰、蘆花の姉である。また、日本キリスト教婦人矯風会の創立者矢嶋楫子は母・音羽の叔母、すなわち久布白落実の大叔母にあたる。両親をはじめ、これらの周辺人物は久布白の思想形成にどのような影響を与えたのだろうか。1920 年代から 30 年代にかけて、久布白は家族や親戚の伝記を多く出版している。1916 年から 1917 年の『基督教世界』で 22 回にわたって「父」を連載し、その後、1920 年に『父』を出版している。1935 年には『矢嶋楫子』、1936 年には『父と良人』、『湯浅初子』を出版している。また、1958 年から 61 年にかけて、個人誌『婦人と日本』（第 66 号から 86 号）で「母」を 18 回にわたって連載している。このような作品を執筆していることから家族や親戚等が久布白に与えた影響が大きいことが推察される。

## 第1節 誕生から女子学院時代まで

### 1 両親について

落実は『父と良人』の執筆の動機について次のように述べている。

自分は日本の男性を信じる、自分は日本の男性を敬するそれは自分の生涯に与えられた二人の男子、一人は父として、一人は良人として我が生涯に恵まれた二人の男性を通して、我が国の男性を見るからである、信と敬とは当然これを愛にまで導いてゆく、多くの短所欠点が未だ日本男性の内に暴露されて居るにもかかわらず、こうした根深い信と敬とは、押して終に日本男性の全部に広げられるものと信ずる、この信と敬とに基礎付けられたる愛、この愛のみが、将来の日本男性を完成の域にまで押し進めるであろう同時に女性をも亦完成の域に導くであろう、正義と平和の基礎の上に打ち立てらるる純潔日本は、かかる男女によって語らるべきものと信ずる(久布白 1936:1-2)。

このように描かれた落実の父はどのような人物であったのか。父、大久保真次郎は1855（安政2）年4月26日、熊本県で生まれた。大久保万次、たが子の長男である（一男三女）。没落した分家であった大久保家では、一家で家運挽回のために働き、真次郎も農業に精を出していたが、その合間に、近くの漢学の素読を受けに行っていた。その後、真次郎は16歳で熊本医学校（別科）へ行く。「其頃の父（真次郎）は真面目一方な学生」（久布白 1936:12）で蘭語、ドイツ語の初歩と医学を修め、3年後、郷里へ帰って開業することを期待されていたが、北里柴三郎を含む4人で上京し、東京の医科大学へ入学する。熊本出身の在京の大官4人が1人ずつ学資を引き受けてくれた。真次郎が世話になったのは矢嶋直方（矢嶋楫子の兄）であり、その家から医科大学へ通っていた。順風満帆に思えた生活であったが、直方が中央の役人を辞め、地方の役人となり、その後仕官を辞めて国へ帰ることになったため、途中で学資の道は絶たれた。しかし、矢嶋楫子が学資を出してくれることになった。楫子に誉められるほどの切り詰めた生活をして毎月会計報告までしていたものの、学資を受けることを心苦しく思い（楫子の月俸6円のうち3円が真次郎の学資となっていた）、同時に「医者仲間の内情や、又医其のものが人の根本に徹底せぬなどそれやこれやいろいろと不平不満が重なって来て」（久布白 1936:23）、長文の理由書を楫子に届け、医学校を中退し、

直方と共に熊本へ帰った。久布白(1936:24)は「父の心の内には既に医術では人の最奥の所には徹しない、その心は更に奥深いものを求めてやまぬものが、この時から既に動いていたものと見える」と述べている。その後、本願寺や同志社で学ぶが中退した。真次郎は学問にも宗教にも入りそこない、板垣退助を訪ね、しばらく自由民権の信者として政治運動に参加している。しかし、「父の衷心から求めているものは真に人心の救いである、政治が決して父の真心を満足さすはずがない」(久布白 1936:32)。板垣の運動に参加して全国を駆け巡るうちに、真次郎の目は海運業へ向いていった。一時期、成功するかと思えたが、結局は失敗した。そして、徳富猪一郎(のちの蘇峰)の取り持ちでその姉の音羽と 1882 年に結婚する。

母、大久保音羽(1856-1945)は徳富家の三女であり、姉に常子、光子、妹に初子、弟に猪一郎(のちの蘇峰)、健次郎(のちの蘆花)がいた。音羽は殖産興業の時代にああって、「熊本での最初の職業婦人として相当のところまで押し上げていた」(久布白 1936:37) 製糸女工であった。

## 2 幼少期の落実

1882(明治 15)年 12 月 16 日に落実が誕生した。「私の名前『落実』はひとからよく珍しい名前だといわれ由来をたずねられるが、父の生活が落目のときに生まれたので落実と名付けられた。のちに、同志社の新島襄先生に『子供にそんなことをしてはいけない』と父が叱られたのを覚えている」(久布白 1973:15)というエピソードが残っている。当時、母・音羽は苦労の日々、父・真次郎は煩悶の時代であり、そのような中での落実の誕生であった。真次郎は妻子を残して、大阪、そして尾道へ行く。その間、音羽は養蚕や製糸などの仕事を行い、働き続けていた。そのため祖母(真次郎の母・たが子)が落実の世話をしていた。そのような中、音羽の母・徳富久子の勧めで、1885 年、3 歳の落実は母音羽とともに日本組合熊本基督教会(現・日本キリスト教団熊本草葉町教会)<sup>1</sup>に通い、洗礼を受ける。その後、真次郎の父母を伴い、音羽と落実も真次郎を追って尾道へ行く。当時の真次郎は飲酒生活をしており、久布白(1920:25-26)は父について、「何でも大きな、恐ろしい人だと実は思っていた。生みの父ながら、四年振りに迎えた嬉しさも、親しみも無かった」と述懐している。落実は母と共に父が酒をやめるように祈り続け、その後、真次郎は三日三晩聖書を読み、改心する。1886 年に大久保家に次女起実が誕生する。1887 年秋から 1889 年夏まで



の2年間、新島襄の許しを得て、真次郎は再び同志社で学んだ。落実は幼少期の家庭について振り返り、次のように述べている。

父が終生の方針を定め兼ねて半ば自棄酒を飲んで居た時、母も忍耐の緒が切れて自決一步手前位に見えた時、家の中にはどんな御馳走が並んで、客の出入りは多くても、子供は半ば以上餓れて居る<sup>2</sup>、それは胃の腑ではない、魂だ、小さい魂は、信ぜられぬ酒浸りの父を見て恐れ、不安と不満の母を見て案じ、少しも心に安心がない、この家の中に子供は餓れる。父が大悟徹底して、全く己れを捨てて再び一神学生となって新島襄先生の下に、京都の同志社へ戻ってから、妻子かかえて一神学生としての生活は、文字通り貧しいものでは有ったが、家の中には安心があり、希望が生まれた、子供は、父を見て安心し、母を見てゆったりし、「めし」は文字通「めし」となって子供のからだも魂も養った（久布白 1953:18）。

このように「酒浸りの父」と「不安と不満の母」に囲まれた落実の幼少期は決して明るいいものではなかったが、父が改心してからは貧しいながらも、希望のある生活となった。

真次郎の最初の伝道地は埼玉であった。落実にとって秩父での生活は人間としての基礎的なものを形作る期間であった。「いずれも母からのもの」であり、「一つは告げ口をしないということ。二つには、しかけたことは必ずつづけるということ。第三は自分で自分を奮起させたことだ」（久布白 1973:35）と振り返っている。また、自然に囲まれた生活の中で、体も丈夫になった。この期間はおのちの廃娼運動への根気ある取り組みの礎となったのではないか。その後、大久保家は新島の死、次女起実の死（1892年）など、辛い出来事を経験したが、1893年に長男真太郎が誕生している。

### 3 群馬時代

その後、1893（明治26）年に父真次郎は群馬県の藤岡教会<sup>3</sup>へ赴任した。久布白は藤岡に住んでいる時の忘れられない一事として、『廃娼ひとすじ』に次のように記している。

明治二十六年の暮クリスマスのことだ。夜おそくまだ大火鉢のまわりで会員たち

が話している時、ドヤドヤと青年たちが入って来て、

「先生！いよいよ板鼻が廃娼になりますよ」

と言うのである。私はキョトンとして何の事か判らなかったが、これが明治十五年に廃娼令を決議した群馬県が、十年かかってその県下十二ヵ所の遊廓の最後のものを取り払った報告であったのだ（久布白 1973:37）。

これは落実が 11 歳の時の出来事であり、初めて廃娼に触れた時であった。真次郎は 1895 年に高崎教会<sup>4</sup>に転じ、落実は高等小学 4 年の第 1 期の試験を終え、父の希望で前橋共愛女学校予科<sup>5</sup>に入る。共愛女学校は上州のキリスト者婦人たちが力をあわせて立てた学校で、キリスト教を基礎として農村の娘達に 3 年間で高等教育を受けさせる女学校であった。落実は父の意向で毎日 1 時間の英語の特別練習をしてもらったが、英語はあまり好きでなく、教師と何も話さずに帰って来ることもあった。そのようなこともあり、この学校はいわゆる「論旨退学」になった。1896 年、落実は大叔母の矢嶋楯子が院長を務める女子学院<sup>6</sup>に入学した。真次郎は 1897 年に按手札を受け、正式な牧師となる。

さて、落実はこの時代のクリスマス前にある小冊子に出会い、深い印象を受けている。

「人は生活の為に、二十四時間をもつ、魂の生活の為に、この内一時間を捧げる事が出来ないか」、それからずんずん進んで祈祷と聖書研究の事を書いたあと、何を研究するかと云う所になって、著者は云った「第一にイエス、キリストの伝を研究せよ、第二にイエス、キリストの伝を研究せよ」、更に進んで、又繰り返して「第三にイエス、キリストの伝を研究せよ」と。この著者誰だろう、このモット博士であった。ここまで読んで私はその小冊子を閉じ、果たしてこの言葉に従い得るかを考えた、そして其冬休みがすんで学校に戻ってから、卒業まで数年間、兎も角もこの言葉に従って、一日一回を聖書研究と祈りとに捧げる事を決行した（久布白 1926:17）。

#### 4 女子学院時代

落実は女子学院で中学 4 年、高等科 2 年と丸 6 年半を過ごした。両親から離れ、寄

宿生活であった。その間、充実した英語教育を受ける機会に恵まれている。これはのちの海外生活で生かされるものである。院長である矢嶋は「あなた方は聖書を持っていられる。何も規則で縛る必要はありませんまい」（久布白 1973:45）と述べていたように、「自治教育」も女子学院の特徴であった。その間、週末に徳富猪一郎・健次郎の宅で過ごすこともあった。また、矢嶋の部屋でマッサージをして過ごすこともあり、そこで『女学雑誌』や『基督教世界』等の雑誌、矯風会の活動文書や請願文書（一夫一婦、海外醜業婦の取締）に触れる機会もあった。女子学院での生活は後の彼女の活動に大きな力を与えている。

そして、「三歳で幼児洗礼を受けた私は、はじめて自ら進んで信者になろうと考えはじめた。毎週毎週群をなして牛込の弘方町の教会<sup>7</sup>に行った」（久布白 1973:43）と述べており、女子学院で学び、生活する中で久布白はキリスト教に目覚めていく。16歳の時に信仰告白をして、キリスト者としての道を歩む決心をした。その後、19歳の時に新約聖書のピリピ書を読み、感銘を受け、献身の決意を固めている。当時を振り返り、久布白（1961:25）は「ピリピ書の第四章四節に『汝ら常に主にありて喜べ、我またいう、なんじら喜べ』こんな短いところに、喜べ喜べということが二度もくり返されている、不思議だなと思ったんです」、「（使徒パウロの）そんなに名誉も地位もなにもなしになっていて、そして自分がむしゃくしゃするところではない。自分が喜ぶだけでない。人に向かって喜べ喜べ、こんなに人生の勝利者になって、立ちおおせるといのは、いったいどういう力なんだろうか。これはたいしたことだな。もしそういうことがほんとうのキリスト信者の生活なら、そういうものにわたくしもなってみたい。つまり、わたくしが自分を献身しようと決心した十九の年でした」と述べている。

さて、1901（明治34）年、真次郎は高崎教会を辞し、翌1902年に伝道のため、ハワイに渡る。落実が女子学院に在学中のことであった。真次郎はホノルル教会で牧会し、独立のために奮闘した。落実は矢嶋楯子から矯風会の仕事を手伝うように勧められたが、1903年、女子学院高等科全科を終え、父母を追ってハワイへ渡った。

## 第2節 海外生活

### 1 ハワイからアメリカへ

真次郎は1902（明治35）年から1904年にかけて、ヌアヌ組合教会で牧師を務めた。落実は現地の幼稚園で子どもたちの世話をし、日本語教師も務めている。ハワイに滞

在したのはおよそ1年間であったが、この間、「とくに信仰的には、父たちがいつも身を賭して宣教に当たっている実際を目撃し、キリスト教なるものの真剣さを身をもって味わったのであった」（久布白 1973:59）と述べている。

また、落実は「日本人婦人ホーム」について知る機会があり、『やまと新聞』に3回にわたって、その活動を紹介している。「この婦人ホームは単に寄宿舍であるのみならず、また実に逃れの家です、今日まで余りこのホームに就て広告がありませんから、世間に左程知られていませんが、実際このお蔭でひどい難儀を救われ、今では立派に一軒の主婦となり、又は正業に就て独立の生活をして居る人々は沢山あります」（久布白 1904a:3）と記した。

その後、真次郎らは1904年に渡米し、一時期サンフランシスコに滞在し、久布白直勝ら学生たちの依頼でオークランドへ向かう。真次郎はオークランド独立教会初代牧師（現在のシカモア教会）となり、独立運動を行なった。落実は太平洋神学校へ入学し、昼は学生、夜は夜学で英語を教える生活をした。

## 2 廃娼・性教育への目覚め

そのような中で、1906（明治39）年4月18日にサンフランシスコ大震災が発生した。落実はオークランドの第一組合教会の牧師チャールズ・ブラウンに頼まれ、日本人の「醜窟」の視察、通訳として同行する。「……日本人の所謂醜窟へ行った、これは唯一軒であった、しかし此处で落実は終生忘れ難い経験をした、そして又これが彼女の後半生の事業を生み出す源となった」（久布白 1936:177）。警部長の案内で支那町の売春宿へ行き、ブラウンは1人1人の女性に、「君等は無理にやらされてるのか、或は自分の意思でやるのか」と尋ね、「自分の意思なら仕方がない、無理なれば奴隷だから、米国の法律に照らして解放（即ち自由廃業）さす」（久布白 1915a:4）と述べた。しかし日本人女性たちは、「皆云い含められでもしたのでしょう、異口同音に自分の意志です」（久布白 1915a:4）と答えた。落実はこの時のことについて、「生来こんな恥ずかしい思いをしたことはありません。外国の牧師と、警官の前で、妙齢の日本婦人が揃って何十人とかかる家に居るのを見た時の苦しさは今に忘れられません」（久布白 1915a:4-5）と表現している。一方で「然し彼等計りを責むる事は出来ません。海外醜業婦は内地から溢れ出たものです。公娼を認可し、男子の姦淫を不問に置く我が国から、自然の勢いで溢れ出したのです。要は内地の根本的改善に待たなければなりません

ん。公娼絶廃、男子姦淫処刑の厳然たる法律が出来て内地から清まらなければ、決して海外醜業婦計りを取締ることは出来ないと思います」(久布白 1915a:5)とも述べている。

落実はその時まで「女性として、妻として、また母としての日本婦人は、決して世界のどの女性にも劣りはしない。殊に其貞操の点に於いては、大部分の日本婦人は己が身を以てその貞操を守っている」(久布白 1931:11)と考えていたため、「これだけ数千年来貞操を以てきたえこまれた日本婦人が、その一部に於いてかくまで平気で醜窟の中でその身をゆだね得るとはどうした事であろう」(久布白 1931:12)と考えた。その理由は、第一に、「日本の国に於いては、一般の婦女子は堅固に護られている。然しながらその中の一部に対しては、政府も、社会もこれを公に認めて、全く性的娯楽の供給者となしている。一度娼婦となったからには彼等は前借にしばられて、抜きもさしもできないのである。売春行為がその日の口を糊する。唯一つの道となっている。恥じていては生きて行かれない」(久布白 1931:12)ということ、第二に、「日本には貞操という言葉はある。然しこれは女性の道德であって、当時男子という文字と貞操という文字を並べてかいたのをついぞ見た事もなかった」(久布白 1931:12)ということを挙げている。第一の理由から、この時点において久布白は、日本の女性が「一般の婦女子」と「性的娯楽の供給者」すなわち娼婦に二分されていることを認識しており、また第二の理由から、男女不平等な貞操観に気が付いていたことがわかる。この出来事は落実が廃娼運動に突き進む大きなきっかけとなった。

その後、矢嶋楫子の第7回矯風会世界大会(ボストンで開催)出席に同行する。その際「日本婦人は、あれはインモーラルではない、インモーラルは平素は道德を持っているものがときどきふみはずすことだ。日本人のはアンモーラルである。平気で売春をするというのは、道德を持たぬ人間の行動である」(久布白 1973:76)とアメリカ人に非難され、刺激を受けている。そこで、日本において何としてでも公認人身売買である公娼制度廃止を行なわねばならないという気持ちが湧いてきた。また、その大会の会場で1人の婦人が1冊の本を手にしてしきりに青年男女、少年少女に性教育の必要を説いているのを耳にし、久布白はその話を聴きに行った。そしてその時、性教育なるものの必要性に目覚めている。

### 3 結婚

1910（明治 43）年 1 月、落実は父の勧めで、教会に出入りしていた青年の一人である久布白直勝（1879-1920）と結婚した。落実 27 歳、直勝 30 歳の時のことである。

久布白直勝は熊本の士族久布白直宣、夏子の長男として、1879 年 2 月 11 日に生まれた。22 歳で渡米し、苦学を続け、妹の死を契機に受洗した。バークレーのユニテリアン神学校、ハーバード大学で学び、1905 年に卒業した後、シアトルの日本人教会に赴任する。1909 年に按手礼を受けた。

直勝と結婚後、落実はシアトルへ移る。長男明が誕生し、続いて 1912（大正元）年には次男正が誕生する。その頃、真次郎は、自身の俸給を減じ、教会に幹事を置き、日本人のいるデンバー市などにも進んで行くなど、決死の奉仕にかかっていた。「当時沿岸各地にあるキリスト教界が、一致団結して、全米土に散る同胞の救済に当る」必要があると考え、最後の募金を終えてからオークランドの教会を辞職する（1911 年 5 月末）。休暇の後、北カリフォルニア州の各教会の伝道団の設立に取り組み、その巡回牧師として伝道活動を行なう。「伝道団が出来てから最初の一か年は、父は落実らが白人教会を交渉して設けることにした婦人ホームの家に、母を其処の主任として王府住いであった」（久布白 1936:191）。真次郎は各地に行くが、健康を害して帰ってくることもあった。また、様々な人物が真次郎に相談するためオークランドを訪ねてくるが、中心地ではなく不便であったため、サンフランシスコへ移り住むことになる。1912 年 2 月のことであった。

1913 年、久布白一家と大久保夫妻は日本に帰国する。真次郎は様々な人物を訪ね、再びアメリカへ戻り、1914 年 5 月 10 日にオークランドで死去した。久布白家には同年、三男三郎が誕生している。帰国後、直勝は大阪組合協会上町支教会に赴任していたが、健康を害し、1914 年 5 月に高松教会に転じ、一家で高松に移り住んでいる。

### 4 『婦人新報』における久布白の論考から

さて、久布白は矯風会総幹事に就任する以前、『婦人新報』でどのような論考を執筆していたのだろうか。

久布白（1915b:4）は「矯風漫筆」の中で、「公娼を廃すれば密売が増えると言って之に反対する人があります。然し世の中に誰も盗賊が絶えぬといってどろぼう公認を主張する人はありますまい。盗人は物を盗む丈けですけれど、娼婦は人の身体と魂を

盗みます。人格どろぼうです、これ程恐ろしい盗みはありますまい。此れを公認して置かねばならぬというのは実に怪しからぬ話です。唯習慣の力！実に三百年來の習慣の力！！これが我が日本国民の心を麻痺させて居ります」と長年に亘る公娼制度の存在を「習慣」と捉え、存娼論に反対する論を展開していた。また、「娼婦は人の身体と魂を盗みます。人格どろぼうです」という表現していることから、性と人格を結び付けて捉えていたことがわかる。また、「公娼全廃はほんの第一歩です」と述べており、当初から久布白にとっては公娼廃止が最終目的でなかったことが窺える。

また、矯風会では 1915（大正 4）年の大正天皇の「御大典に芸妓を公会の席上に侍せしめざる」（久布白 1915c:5）と主張していたが、与謝野晶子から批判を受け、久布白は次のように反論していた。「天皇陛下御即位式を最も盛大に、且つ純潔に奉祝したいと云う一事です。これを為すために道德上如何わしき業務に従事する人々を正面に出して、事を斡旋さするのを謹みたい」（久布白 1915c:5）、「売淫と云う事は一先ず譲って、単に芸者として」正面に出すことについても、「唯でさえ虚栄にあこがれ、道德觀念の薄弱否、寧ろ皆無と云ってよい下層社会の婦女、田舎の娘等はこれ程の出世はないと云う気にならぬでしょうか。如何に立派に着飾って居ても、ああ云う職業をする人は賤しい者だ、つまらぬ者だと云う事をしっかりと婦女子の心の底に打ち込むことは、堅実なる家庭を造り、国家の基礎を据うる上に於いての最も大切な事柄です」

（久布白 1915c:5-6）と批判的に見ていた。また、「芸妓酌婦を賤業と心得て居るものは田舎などには一寸見当たりません」（久布白 1915c:6）と述べている。これらの記述には芸妓や酌婦という階級に対する差別意識が読み取れる。しかし、一方、同じ文章の中で、「芸娼妓と云う階級を造って、国民の獸欲の犠牲、歡樂の奴隸と為すことは、永續すべき性質のものではないと思います。…我國民も早晚覺醒してこの階級を解放せねばなりません。…唯彼等も人なり、人の子なり、殺す可らず、解放すべし。解放して救済すべしです」とも記している。救済の具体的方法について、「売春を離れて、芸を以て立ち得るよう其境遇を助くるも一方法」、「正業に立ち返らしむるも一方法」、「彼等を憐れむ心ある仁人が、一つの団体を造って、女優養成の如き会を設けて、彼等の職の改善を計るも一方法」（久布白 1915c:7）であると示している。このように論考の後半部では芸娼妓階級の解放や救済の具体策も提示している。この論考には久布白の芸娼妓を低く見る差別意識と芸娼妓という階級を同じ人間として解放・救済すべきであるという 2 つの思いが見てとれる。

その後、1915 年の末に『婦人新報』に「立て戦闘は将来に有り」（廃娼論）を投稿したことを契機として、1916 年に矯風会の総幹事となり、廃娼運動、婦人参政権運動などに取り組み、矯風会の中心的役割を担っていくことになる。戦後は売春防止法の成立に尽力し、1962 年から 1971 年までは矯風会の会頭を務めた。その後、名誉会頭となり、1972 年 10 月に 89 歳で死去している。

## 小括

落実の誕生は、その名前の由来のエピソードからも窺えるように、決して両親から祝福されたものではなく、誕生当時の家庭は明るいものではなかった。しかしながら、母音羽とともに 3 歳で洗礼（落実は幼児洗礼）を受けた後、父が改心し、牧師の道を歩み始めてからは様々な苦労がありながらも、明るいクリスチャンホームで育っていた。また落実共愛女学校や女子学院でキリスト教主義教育を受け、その中で自身の信仰を確立していく。群馬時代の廃娼の経験、ハワイ時代の「日本人婦人ホーム」の事業の見聞、アメリカ時代の「日本人醜業婦」との出会い、性教育との出会いなどは、その後、廃娼をはじめとした様々な取り組みにつながっていくのである。

第 2 章では、1915（大正 4）年末に久布白が投稿した廃娼論の具体的内容から、彼女が取り組んだ廃娼運動における初期の活動について取り上げていきたい。

## （第 1 章 文献）

- 久布白落実（1904a）「日本人婦人ホーム（一）」『やまと新聞』1357,3.  
久布白落実（1904b）「日本人婦人ホーム（二）」『やまと新聞』1358,3.  
久布白落実（1904c）「日本人婦人ホーム（三）」『やまと新聞』1359,3.  
久布白落実（1915a）「道德上の常備兵 海外生活より見たる日本婦人の将来」『婦人新報』213,4-7.  
久布白落実（1915b）「矯風漫筆」『婦人新報』216,3-6.  
久布白落実（1915c）「矯風漫録（与謝野晶子女史に對う）」『婦人新報』219,5-7.  
久布白落実（1916）「立て戦闘は将来に有り」『婦人新報』224,7-9.  
久布白落実（1920）「父」東京市民教会.  
久布白落実（1926）「最近迎えた二人のまろうど」『婦人新報』336,17-20.  
久布白落実（1931）「廃娼運動物語(五)」『婦人新報』396, 7-13.



久布白落実（1936）『父と良人』東京市民協会出版部。

久布白落実（1953）「随筆 食物としての聖書 めし（1）」『婦人と日本』24,18.

久布白落実（1961）「わが信仰の生涯 売春禁止法を通すまで」『月刊キリスト』13(3),22-29.

久布白落実（1973）『廃娼ひとすじ』中央公論社。

---

### （第1章 注）

- <sup>1</sup> 1885年7月1日に創立。熊本バンドの伝統を継承して、今日に至る。
- <sup>2</sup> 餓れる（かつれる）とは、熊本弁で、飢える、お腹が減る、という意味。
- <sup>3</sup> 1889年4月19日に設立。現・日本キリスト教団緑野教会。大久保真次郎は1893年10月31日に着任、1895年8月3日に辞任し、高崎教会へ赴任。
- <sup>4</sup> 1884年に設立。1888年に日本組合キリスト教会に加入。現在の日本キリスト教団高崎教会。
- <sup>5</sup> 1888年に群馬のクリスチャンの尽力によって、前橋英和女学校として設立された。1889年に上毛共愛女学校、1905年に共愛女学校に改称される。現在も学校法人共愛学園として存続。保育園、幼稚園、中学校、高等学校、大学を擁する総合学園である。
- <sup>6</sup> 女子学院は1870年、ジュリア・カロゾルスにより、築地居留地に設立されたA六番女学校に始まる、キリスト教主義の学校。その後、B六番女学校(後の新栄女学校)・原女学校とミセス・ツルーら婦人宣教師たちによってその精神は引き継がれ、1890年に桜井女学校（1876年、桜井ちかによって設立）が新栄女学校と合併して校名を「女子学院」と改め、矢嶋楯子を初代院長として発足。
- <sup>7</sup> 1872年に、日本最初のプロテスタント教会「日本基督公会」が横浜に誕生し、翌年には東京の築地にも教会が生まれた。築地の教会を母体として、1877年11月17日、牛込二十騎町に「牛込教会」として発足し、1941年の日本基督教団の設立に伴い、「牛込弘方町教会」に改称。現在も存続。

## 第2章 廃娼運動家としての久布白落実

### はじめに

「私の生涯の大きな筋は廃娼運動だった」(久布白 1973:303) という記述が自伝『廃娼ひとすじ』にあるように、久布白にとって廃娼は、解決すべき大きな課題であった。本章では、廃娼運動家としての久布白落実に焦点を当て、矯風会総幹事に就任するきっかけとなった論考から、総幹事就任後の初期の活動についてみていきたい。

さて、彼女が廃娼運動に取り組む前、日本における売春をめぐる状況はどのようなものであったのだろうか。1872（明治5）年、マリア・ルース号事件が発生し、明治政府は人身売買禁止令（太政官布告）と芸娼妓解放令（司法省達）を出した。しかしながら、芸娼妓たちのいわゆる更生策もなかったため、1873年には貸座敷渡世規則、娼妓渡世規則を出し、遊廓が復活する形となった。東京婦人矯風会（のちに日本キリスト教婦人矯風会と改称）は1886年に設立され、1893年には全国組織となる。「海外醜業婦取締の請願」、「一夫一婦の請願」などを行っていた。そのような中で1900年、娼妓取締規則が出され、国家が売春を管理する体制が出来ている。久布白（1973:310）は後に「何をするためにお前は夢中になったのだ。そう問いつめてみると、それはつまり、かの一条、売春公認の根拠とされる娼妓取締規則の第一条『18歳未満の者は娼妓たることを得ず』の削除のためだけではなかったか」と振り返っている。18歳未満の者が娼妓になることが出来ないというのは、同時に18歳以上の者は娼妓になることが認められるということの意味していた。

1911年4月、吉原遊廓が全焼し、多数の娼妓たちが焼死した。それを機に同年9月に公娼廃止を目的として、キリスト者たちが廓清会を発足させている。会長は島田三郎<sup>1</sup>、副会長は安部磯雄<sup>2</sup>、矢嶋楫子（矯風会初代会頭）であった。その後、廃娼運動が活発化していくが、久布白はどのように廃娼運動に取り組んでいくのだろうか。

### 第1節 廃娼運動への道

#### 1 廃娼論の投稿から日本キリスト教婦人矯風会総幹事就任まで

1915（大正4）年、久布白は矯風会が大正天皇御大典を記念し、向こう6年間を期して、廃娼を実現するために大会決議したという『婦人新報』の記事<sup>3</sup>を読んだ。その際、久布白はオークランド滞在時に出会った「日本人醜業婦」を思い出し、自分はどうしてもこの運動を助けなければならないという気持ちが湧き立ち、年末に自ら執筆

した廃娼論を矯風会の本部に送った。その中で久布白（1916a:8）は「我等の敵」として「芸娼妓を要する社会」、「芸娼妓なくしては日常の交際もよくせぬ男子」、「子女に芸娼妓を強いる文盲なる父兄」、「日本の道德観念」を挙げている。公娼を必要とする社会や男性、また、そういったことを強制する保護者や許容する日本の道德の問題性を明確に指摘した。さらに日本を「劣等な、腐れきった社会」（久布白 1916a:8）と批判し、個人や社会を教育する必要性を説いている。「芸者も娼妓も、人の子」であり、「彼等のその周囲、教育、境遇が、彼らをして忌むべき境遇に陥れて居ります。殊に娼妓の如き、売買の約定より、其の生活状態に至るまで、純然たる奴隷であることは何人も否みますまい」（久布白 1916a:8）と述べている。このように久布白は売春を個人の責任と捉えるのではなく、売春で生計を立てざるを得ない環境そのものが問題であると捉えていた。また、公娼制度を奴隷制度と捉える視点があつた。これは矯風会の創立当初に活躍した浅井柞の問題意識と通じている。浅井（1888:4）は「娼婦も等しく之れ人なり我等が姉妹同胞にあらずや」と述べており、当時としては画期的な視点を有していた。また、廃娼後についても言及し、「解放して為すべき事は救済」、「廃業後の身の振り方」（久布白 1916a:9）と述べている（当時、救世軍は女性たちの自由廃業の実行を助け、矯風会は慈愛館<sup>4</sup>で生計の道を立てるよう導いていた）。久布白（1971:226）は「社会事業も、そのあとの事を考えて処理しなければならないと思う」と後に述べているが、早くから公娼制度廃止後の対策について考えていた。

久布白の投稿は矯風会内で大きな反響を呼び、当時、矯風会の中心的人物であつた守屋東<sup>5</sup>は久布白を会に招こうと考える。矯風会の中では、子どもや病人である夫を抱えている久布白を招くことに対しては様々な反対意見もあつた。また久布白自身にも相当迷いはあつた。しかしながら、守屋は久布白を招くべきであると主張した。後に守屋（1967:23）は当時を振り返り、「与謝野晶子氏や平塚らいちよう氏などという婦人論客が、公娼や禁酒の問題について我が会の方針・運動の批判をしたりまた揶揄するが如き論説を出される事が多くなった。一指を酬いたくも私には出来ない。実に痛恨の至りであつた。何とか同志の中に婦人論客は無いかと心に念じて居った時、私は快哉を叫んだのである。それは、久布白落実という四国の牧師の夫人から、婦人新報に來た投書であつた」と述べている。守屋の説得に応じ、1916年4月に久布白は上京し、矯風会の総幹事に就任した。

久布白が専任幹事になった時、「向ふ六ヵ年を期して、全国の公娼を全廃すること」

(大正4年度の大会の決議)は大正の義務であることを強く主張している。さらに公娼制度は国家の恥辱であり、1年は準備のうちにすぎたので、残る5年で公娼全廃運動基金を作り、新聞雑誌を用い、演説会を開き、遊説員を派遣し、全国各学校に懸賞文学を募るなどという運動の方法を挙げている。久布白(1916b:8)は「公娼廃止は我国の改革の上から云えば、ホンの第一歩に過ぎぬ」と述べており、廃娼を最終目的とは考えていない。

## 2 「五銭袋運動」の取り組み

久布白は公娼制度撤廃に対する世論教育の具体策として「公娼全廃運動資金」という小さい袋を作り、「五銭袋運動」を始めた。「五銭袋」とは住所や氏名を袋に書いて、カンパに応じてもらうものである。久布白(1961:27)は公娼制度の存在について、「日本の国民は、どうしてもこのような制度を設けておかなければ、日本の男性も日本の社会ももたないと思っている。これを根底からくつがえして、この法律を撤回させるには、教育よりほかはない」と考えた。いくら大正10年を目指して廃娼を唱えても人々の心に廃娼の必要性を浸透させなければ実現できないと考え、啓発と資金作りのための積極的な教育運動を展開した。この袋を何万と作って全国の支部に送った。運動はおよそ10年継続し、教育的効果と共に廃娼運動の資金となる。

1916年5月、警視庁は私娼撲滅方針を示したが、この「根本の精神は公娼制度を保護して、私娼撲滅に資せんとするもの」(矢島 1916:2)であった。久布白(1916d:6)はその方針を批判し、売春を「悪だから禁ずるというのではなく、隠れてするから禁ずると云う結果になれば、男子と生まれて一度位行ってもよいと大威張りで出掛けるものがないとも限りませぬ」と述べ、売春を公に許すことの問題性をはっきりと指摘している。公娼廃止後の策として救済事業の必要性にも言及し、大久保の慈愛館を例に挙げ、「婦人に職業を与え正しき生活の道を与え、これを保護誘導するという事業」(久布白 1916d:8)が全国各地に起こるべきであると述べている。

1916年に飛田の新遊廓指定地の問題<sup>6</sup>があった。この問題に対して、矯風会と廓清会は宣言書を出し、当局者に陳情し、教会や教育家に訴え、公開演説や小冊子によって一般の世論を喚起し、戦っていた。具体的な活動内容として、久布白(1916g:8)は、「源を正して末を納むるために、男女貞操問題を掲げ、宗教家、教育家、其他有志の方々の援助を得てこの問題につき到る所で講演会を催し、一夫一婦の立場よりこの問

題について考究して居ります、又大阪に於いては飛田問題を掲げて直接遊廓指定地取消を極力運動し、これが為に更に全国に訴えて千五百万の運動費を募集（中略）…慈愛館に淪落婦人を收容し、実地救済に勤めて居ります」と述べた。しかしながら、このような取り組みを実施したにも関わらず、飛田遊廓指定地取消運動は失敗することになる。この経験から久布白は女性が政治的な力を持つ必要性を感じ、婦人参政権運動に取り組むことになる。婦人参政権運動の取り組みについては第4章で詳しく取り上げていく。

さて、久布白（1917c:5）は1916年の1年間の経験をもとに、公娼全廃を達成するためには教育運動と直接運動の2つの大道より進まなければならないと考えた。教育運動としては五銭袋、そしてそれを資金に、教会、学校、工場、商店等での講演会（男女貞操問題講演団）を通して世論教育を行うこと、小冊子（「公娼私娼全廃の理由」、「何故に余は公娼私娼の全廃を主張するか」<sup>7</sup>、「ナゼ？」）等の文筆を通して主義を貫徹させること、懸賞文学の募集を通して中等以上の学生に男女の貞操や家庭の問題について考えさせることを挙げている。直接運動としては、全ての府県で遊廓廃止の戦いを進めていくことが大切だと考えた。

## 第2節 久布白落実の廃娼論

### 1 男女貞操思想

林（2001:7）は久布白の「貞操」思想が画期的な理由は「もっぱら女性の『処女』との関連で論じられていた『貞操』を男性の問題として論じ、かつ男性の『性欲』を『本能』として自明視することを否定した点である」と述べている。久布白の「男女貞操」思想は彼女の廃娼論の特徴をなすものであるので、詳しく見ていくことにする。

久布白（1916c:5）は「今日の青年男女の心を打ち破って見れば古来の貞女を以て鏡とする女子到って少なく、又従来家族制度に安んじて束縛せらるる男子殆ど無しと申してもあまり過言では御座いますまい」と指摘し、最も必要なのは「厳然たる男女間の貞操に関する根本思想」であり、「其人格に於いても其体力に於いても又其力量に於いても、我が敬に値し愛を捧ぐるに足る人物を得るまでは、此身を神の宮として護るべしと云う荘厳なる責任観念」（久布白 1916c:5-6）が男女両方に植え込まれる必要があると述べている。また今日まで女性に要求され、教えられた徳は「従順、謙遜、忍耐、犠牲等」であり、女性が「一個の人間」（久布白 1916c:6）として育てられてこ

なかった問題性を指摘している。「道徳上、物質上、二重の枷にめられて今日の卑屈なる婦徳」(久布白 1917e:6)を生み出していると考えた。従来、「貞操」は「女の所有物否むしろ占有物」のように考えられてきたので「(貞操を)男に別ち更に家より移して国家に結び付く」と云う事は、只それだけでも、一種の新しい感じを与えます」(久布白 1916f:5)と記している。「貞操は女のもの、女は家のものと長い長い習慣で定まったことのように考えて居りますが是れが抑々間違いの源」、「今日までの貞操は屈従の別名では御座いますまいか」(久布白 1916f:5)と従来の貞操概念を批判している。久布白は従来の貞操概念を「長い長い習慣で定まったこと」と捉えており、社会的に作られたものであると考えていた。貞操を現在で言うところのジェンダーの視点から捉えている。矯風会が長年主張してきた「一夫一婦の制」は男女貞操思想に立つものであり、「一人の男子と、一人の女子が互いに対し、互いに愛して始めてここに神聖なる恋愛が生じます(中略)…男子も女子も生死を通じて其恋愛を守って始めて真の貞操と云う事が出来ます、貞操は相対であって又絶対です」(久布白 1916f:6)と述べている。また、久布白は平塚らいてふが同年の『婦人公論』で「貞操を論じて、女子に選択権を収む可きことを弁明」していることを「誠に卓見」(久布白 1916f:6)であると評価していた。結婚において男性だけではなく、女性も選択権を持つべきであると主張している。久布白は今後、「婦人に見識を具備さすること」(久布白 1916c:6)や「婦人に自己の尊厳を悟らしむることと自活の力を与えること」(久布白 1917e:7)が大切であると主張した。「一方に女子に向かって絶対の貞操を強いつつ、他方男子に向かっては貞操の文字すら用いし例なき迄の片手落ちの道徳標準あること、又女子に向かって貞操を強いつつ、階級制度は自由に下級の女子の貞操を破りしこと、又家族制度は嗣子のために妾を必要なるものと為せしこと、又男子の不身持を以て男子の力量と混同せしこと」(基督教婦人矯風会 1917:5)と階級制度や家族制度を批判した。

これらの記述から久布白の考える「貞操」は女性だけに屈従を強いるものではなく、男女共に守るべきもの、男女平等であるべきものだということが窺える。すなわち彼女が主張するのは「男女貞操」であり、従来の女性差別的な貞操を乗り越える思想であった。貞操は「相対たるべし」、「訓練を要す」、「犠牲を要す」ものであると考えていた久布白(1916f:6-7)は、「新しい女」が関わった「日陰茶屋事件」(正妻、伊藤野枝、神近市子と四角関係に陥った大杉栄が神近に刺された事件)に言及し、「訓練なき恋愛の、避け難き破綻」、「訓練なき刹那主義」であると批判した(久布白 1916h:8)。

「訓練」の必要性を強調している。

また「貞操は、男女共に、人格と人格とが敬と愛とに依って結び付くの一事です」（久布白 1917e:7）と述べている。先行研究で「その『貞操』論は『人格』の問題として、男女の人間関係のありかたを問題化するジェンダー論であった」（林 2001:19）と記されているが、久布白は女性のみ課せられてきた「貞操」を問題であると捉えており、彼女の「男女貞操」思想には確かにジェンダーの視点が存在していた。「貞操」というのは、男女間の道徳を養成すること、結婚の方を男女間の理性に基づいた愛、敬、信頼の上に置くこと、健全なる恋愛の上に置くこと、男子も女子も直接神に対する自己の尊厳を知って結婚前後その身を純潔にする責任を悟ることである。これによって初めて、真の家庭の平和、子孫の幸福を享樂しうる。そして今日我国に行き渡る大多数の家庭の不和、隠し女、隠し子の数を減ずる」（久布白 1919b:4-5）と考えていた。

また「家の妻に対して絶対の貞操を要求しつつ他面男子は、前述統計<sup>8</sup>の示す如く娼妓階級のものに対し其の身を汚し其の血を汚し」（久布白 1918b:6）と指摘したように、久布白は男性によって女性が妻と娼妓に分断されていると考えていた。いわゆる女性の二分化への問題意識と捉えることもできよう。

さて、1926（大正 15）年 7 月 20 日に大審院で「男子貞操義務」という判決例が出ている（これは中間の判決で、最後の判決は 1927 年 5 月 17 日であった）。ある女性が 3 人の子どもと自分を捨てて他の女性に走った夫に慰謝料と養育費を要求した事件に対する判決である。久布白(1926b:2)は「私共この男女の問題について、四十年来骨折りつづけて来て居るものにとっては、非常な福音」であると捉え、大審院長横田秀雄に面会し、意見の交換を行っている。横田は「これは然し未だ何等責任の伴わない判決なので、実は、余り効果はないものです、然し兎に角、男子にも貞操の義務が在ると云う事を云ったのは事実です」（久布白 1926b:2）と述べたという。その後、久布白は法制審議会を訪ね、今後さらに進んで法制審議会、議会、世論の教育によって「男女道徳標準の平等」（久布白 1926b:3）が確立されるまで進まねばならないと考えた。横田(1927:15)はこの判決を出した理由について、「段々婦人の地位は上がって来た。…元来は女が男に対してそれだけの権利を主張するだけの力がなかったんです。けれどもつまり女子教育が盛んになり、女の社会上の地位が上がって自分の地位を自覚して、それを要求する事が出来るまでになった。なったからやはり前のように押付けて

置く事は出来ない。もうここで女の地位は認めなければならぬという必要がある。…今から十年前に大審院に出たら、我々は否定したかも知れぬ。そこが今申しました法は時代の状態を解釈して行かねばならぬ。今日の状態では義務を認めて差支えないとこう我々は認めた」と述べている。法学博士の穂積（1927:19）はこの判決は「一方から考えれば当たり前の事」、「併し今までの沿革を考えて見ますと、実に大した事です。一時期を画した名判決」であると記している。また、「横田先生の判決に依って、大威張りでそれを法律の義務だ、道德上の義務たる事勿論であるが、夫婦の貞操義務は法律上対等の義務であるという事がいえるようになった」（穂積 1927:25）、「貞操問題はお互いに人格を思い、他人の人格を思うのであります。自分の人格を思えば不品行は出来ぬ。また相手の婦人の人格を思えば、その婦人の人格を踏みつけるような行為は出来べきものでない、人格の尊重、是が問題である。お互いが人格を認めなければならぬ。根本の人格問題から横田院長がこの判決を下された事は、我国社会のために実に喜ぶべきものである」（穂積 1927:28）と評価している。貞操問題と男女の人格の問題を結びつけるのは久布白の問題意識とも通じるものがあった。

## 2 婦人の権利・人権の視点

久布白（1916e:5）は、「公衆の衛生と云い、性欲の安全弁等と申して見ましても、公娼制度はつまり奴隷制度では御座いますまいか、これを許すと云う事は取りも直さず人身売買の公認…盗人の絶えぬ如く、春を売る者を人類の歴史から絶滅することは難しいとしましても、此を盗み同等に罪惡として取り扱うことは法律の力で出来ぬ事では有るまい」（久布白 1916e:5）と述べている。また「国家が全国民を見る時には、そこに一部の人文は金銭を以て売買せられ、又醜業を為す為めに拘禁さるるを許してよいと云う法は有りますまい」（久布白 1916e:6）と考え<sup>9</sup>、本当に「婦人の人権、面目」（久布白 1916e:6）について考えるならば、公娼制度を社会衛生上という名目の下に保存しておくわけにはいかないと指摘した。

また、久布白（1919c:3）は「労働界に於ける婦人と人権」、「男女の貞操より見たる婦人の人権」や「人権と責任」について考察し、「婦人として同性を保護するために、私共は是非とも今一層婦人としての団体意識を持つに到らねばなりませぬ」（久布白 1919c:5）、「人権を考える時に、第一に浮かぶ考えは責任…私共日本婦人が人権を称える前には先ず人としての新しき自覚に立つ必要があります、家庭の一員として又主婦



として、社会の一員として又母として、家庭全般の事に渡り、又社会一般の事に渡り、責任を負うの必要があります」(久布白 1919c:6)と述べた。また、公娼制度の存在は「我々日本婦人は、同性の奴隷制度を黙認し、之れに対して無責任」、「無権利」であることの「烙印」であると指摘した(久布白 1919d:1)。「婦人を人として見る時に、社会政策の為に・・・又一種の風紀衛生の為に・・・非人道的な奴隷制度を、同性同族の一部の婦人に強いる筈はありませぬ」(久布白 1926a:45)と述べ、「良家の子女の保護」(久布白 1926a:45)のために公娼制度を保持するという考え方を否定している。ここからも女性の二分化に対する問題意識が窺える。

また、「我国には未だ人身売買は公然是認せる事実であるからです、人身売買は国民の感情に於て特に女子である人間に対しては一切罪惡の觀念は有りませぬ、人身売買に対する国民の義憤は未だ少しも之れを認める事は出来ませぬ」(久布白 1918b:5)と述べた。

また、公娼制度を廃止するためには3つの問題を根本的に解決する必要があると考えていた。第一に、「人格を無視せる親子の関係」(久布白 1919d:1)の問題である。久布白(1919d:2)は親が子を売するという日本の習慣について「法律が保護し、社会が是認」していると批判した。昔は「親は子に対しては生死の権を握って」いたが、「今後は今一步進んで、子の人権を蹂躪する事は親として許すべからざる事とならねばならませぬ。其子の将来から純潔なる生涯を送る機会を奪い去ると云う事は親として非人道極まる処置」と批判し、「親として子を売るは罪、子として身を売って親を救わんとするは非理と云う事は根本的に国民思想中に打ち込まねばならぬ事」(久布白 1919d:2)と主張した。公娼制度廃止を主張するにあたっては、子どもの人権を守るためという視点もあったのである。第二に、「男子の性欲の乱用を是認する国民思想」(久布白 1919d:1)の問題である。久布白(1919d:2)は「公娼制度は…男子の性欲の為には何等かの設備を為さねばならぬと云う事を社会が認めている姿です、之れが真理であるとすれば、日本全国の婦人は徴兵の如く、悉く抽選ででも公娼と為らねばならぬ仕宣」と述べ、男子の性の教育を行い、性欲をコントロールすることは不可能ではないと主張した。第三に「婦人の社会的死」(久布白 1919d:1)の問題である。女性は家庭において責任を果たすことを求められているが、社会においてその責任は希薄であると考えていた。

久布白は女性の権利や人権という視点を有しており、女性の人権を主張するために

は女性に社会の一員としての自覚が必要で、女性の意識変革や団結を促す必要があると考えた。また、久布白は同じ女性として、一部の女性に対する人身売買制度や奴隷制度である公娼制度を許してはならないと考えていたのである。

### 3 国辱観・「醜業婦」観

先行研究では、「婦人矯風会に娼婦への同情や憐憫がなかったわけではない。いなむしろキリスト教ヒューマニズムに基づく、あわれなるもの、娼婦たちにたいする救済への志と行動は、並大抵のものではなかった。しかし、あえていうならそれはしょせん恩情や慈恵の域をこえてはいなかった。加えて彼女たちは根っからの大日本帝国の愛国者であった。『国辱』観の持ち主であった」（鈴木 1998:26）と言われている。久布白らには女性の人権の視点が存在しているが、一方で、「国辱観」の存在について指摘されている。

久布白は、日本が欧米の国々と対等に進んでいくにあたって、男女の貞操問題が大きな欠陥であると考えていた。当時の日本社会では、妾を持ち、芸娼妓に戯れることは男子の誇りであるかのように考えている人が少なくなかった。久布白（1917b:7）はこの状況を批判し、「男女ともに、其身を天の賜物として、之れを聖く保つことを悟り、家族の為め、又子孫の為め、その身を汚す事が如何に恐る可き結果を齎すか熟知する時は、我が身の神聖を保つと云う事が、取りも直さず天に対し、又国家に対する忠と云う事になります」と記している。

また久布白（1917e:4-5）は「海外醜業婦」の問題に言及し、「一度海外に足を踏み出せしものは、この種の婦人の為めに直接多くの不面目と恥辱とを忍ばねばなりませぬ。内に多くの堅実なる婦人が、婦徳を守って家を治めて居る暇に、彼等は出て、世界の面前に我国を全部青楼国の如く描いて仕舞いました。何たる誣告でしょう。何たる濡衣でしょう」と述べている。また、公娼全廃を訴える理由について、「同胞姉妹の恥を灌ぎ、御国の光栄を万国に輝かす為めに、其曇りとなる一点の塵をも拭い去りたい赤心」（久布白 1917b:7）からであると記し、また売春女性たちを「恥辱を知らぬ活ける輸出品、醜業婦」（久布白 1917d:5）と表現した。ここからは国家の栄光のために「醜業婦」をなくしたいという考えを読み取ることができる。これらの記述における批判の焦点は国家ではなく女性たちに置かれており、家族や生活のために海外で売春に従事せざるを得なかった女性たちをさらに苦境に追いやる発言である。一方、同じ

文中で「我が国の対外政策中、最も醜恥を感ずるは、貿易商人の嘘と醜業婦の出稼ぎ」(久布白 1917d:5)と述べてもいる。売春女性というよりは国の政策を恥だと捉える側面もあったのである。

さらに、「売春」は職業か、「貞操」は売り物かということに関して、世間が売春を「一種の職業と心得て居ることは、争われぬ事実」だが、久布白自身は「破廉恥きわる観念」(久布白 1917a:5)と捉え、公娼制度の影響によるものであると考えている。「飛田問題にせよ、又品川問題にせよ、当局者側より云う時は、彼等に職業を与えねばならぬという条項が御座います、然し、職業と云うからには、…必ず人の益をなして自分を利して参ります、然し遊女屋と云う店丈けは、入っては人の娘をけがし、出では人の主人、息子を精神、肉体、経済三面から傷つけてゆく職業です。入るも罪、出づるも罪と云う斯る明々白々な罪惡の家を、職業と呼ぶ価値が何處に在りましょう、之れを大正の御世に於て、他の正業と肩を並べ、薨を並べさせて怪しまぬと云うは何たる国民的恥辱でしょう」(久布白 1917a:6)と述べた。久布白は、売春は行う本人も相手方も傷つけることになるので職業(正業)ではないと認識している。「入っては人の娘をけがし」という記述から買う方の罪を認識していると捉えることもできるのではないか。

そして、久布白(1918c:45)は『婦人公論』における布川静淵の「日本婦人の面よごし 海外に於ける日本醜業婦の近況」という論考にロシア、中国、南洋方面での日本婦人の出稼ぎの状況が記されているのを見て、「同感の念禁じ難い」と共感を示している。すぐに婦人公論社を訪ね、論考を何部か入手し、「一夫一婦の請願」と「海外醜業婦取締の請願」を提出する際に、議員にその論考を渡すこととなった。翌号の『婦人公論』には、久布白の「『日本婦人の面よごし』を読んで」という論考が掲載されている。久布白(1918c:45)は「日本婦人の海外渡航には、最初から醜業婦と極印打たれしものは稀である。其最大多数は、生活難と、虚栄心とに煽られて誘拐者の罠に陥ったものである」と述べている。布川(1918:82)は「海外醜業婦」を減少させる方法として、第一に「其地方が豊かになりて、他出せずに生計を営むことの出来るよう努むる」こと、第二に「女子の教育が進んで貞操問題に関する敬虔の念を強くし、女子自ら之を恥ずる気性を養成すること」、第三に「婦人の誘拐を業とするものを厳罰に処する」こと、「又斯業者を蔑視して之に社会的制裁を加うるまでに、社会の良心が覚醒するようにならねばならぬ」ということを挙げている。久布白もこれらに共感を示し

ており、特に第三の方法が問題解決の一步となるであろうと考えている。

## 小括

本章では、久布白の初期の廃娼論について『婦人新報』における彼女の論考を中心にみてきた。先行研究で指摘されてきたように必ずしも社会的な視点や人権の視点が欠如しているわけではない。片山（1916:10）が「売る者にして醜ならば買う者も亦醜ではないか。独り婦人を責めて之を要する男子と社会とが平然と存在し得る理由が何處にあらうか」と述べたのと同様に、1910年代の久布白の論考を読み進めると、彼女が問題の焦点としたのは、「芸娼妓を要する社会」や「芸娼妓なくしては日常の交際もよくせぬ男子」（久布白 1916a:8）であった。本文と照らし合わせて、久布白落実の活動初期の廃娼論の特徴を考察しておく。

第一に、「男女貞操」思想は久布白の廃娼論の特徴である。これは彼女が展開する性教育論にも反映されていく。従来の貞操は社会的に作られたもの（習慣）で、女性だけに屈従を強いるものであったという問題意識も存在している。ジェンダーの視点を有し、男女の平等化を図ろうとした思想であった。

第二に、久布白は廃娼問題を「婦人の権利・人権」と同時に「責任」から捉える視点も有していた。同じ女性として、一部の女性だけ売買され、奴隷のような扱いを受ける公娼制度を許してはならないと考えており、女性の二分化に対する問題意識が存在していた。すべての女性に「適切な職業と報酬」が必要であり、中堅婦人が同性婦人を保護するために、代わってそれを要求する必要があるという「権利擁護」<sup>10</sup>の視点にもつながってくるのではないだろうか。

第三に、久布白には公娼（売春女性）は国辱であるという視点を有していた。久布白には日本の発展のために廃娼運動を行うという考えが確かに存在しており、それは売春女性たちの支援という観点に立ったものではない。また、売春を「醜業」や「賤業」と表現しており、これらは売春女性たちを傷つける差別的な表現であることは否定できない。しかし、一方で売春女性というより国家政策としての公娼制度に対する批判を行っていたと捉えることもできる。

さて、本章の終わりに、久布白の廃娼論と比較検討するために同時代に活躍した、婦人運動家である、平塚らいてふや社会主義者の山川菊栄の廃娼論を見てみよう。

平塚（1919:125）は売春を「人権問題の上からも、個人道徳の上からも、社会風教

の上からも、はた国民衛生の上からも甚だよくない」と捉え、その原因は「社会制度の欠陥」と考えていた。矯風会の廃娼運動は原因を取り除こうとせず、結果として現れた現象のみを憂い、男女の貞操を説いて廃娼を企てており、皮相的な考え・やり方であると批判した。平塚（1919:126）は解決策として、「今日の経済組織を改善し、生活難やそれに伴う結婚難から男子を救い出し、性欲期にある総ての男子が正しき方法によって性欲の満足を得られるように計るとか、結婚制度を改善し、個人的な恋愛本位にするとか、女子職業の道を開くと共に、女子の賃金を高め一般女子に売淫以外の方法によってよき金を得る道のあることを示すというような間接手段を通じて漸次に売笑婦の社会的需要と供給とを少なくして行くより外に仕方ないように思われます」と述べている。

山川（1916）は「売淫制度の基礎を成して居るものは、私有財産制の確立に依る富の懸隔と婦人の屈従とである。故に私有財産制の上に立つ現在の社会組織が根本的に革新されない限り、如何なる予防策、如何なる救治策も売淫業の存在を根絶する事は出来ない」、「経済問題と売淫との関係は、売笑婦の供給が、（極めて稀な例外は別として）殆ど全部労働階級乃至無産階級から出て居るのを見れば自明である」、「売笑婦の供給は売笑婦自身の責任では無くて、全く社会組織の欠陥に基づく事が明らかである」と述べている。売春と経済問題の関係を明確に指摘している。久布白にも「婦人の屈従」という見方や売春に従事することを女性自身の責任としないという点においては、同様の問題意識があった。しかしながら、経済問題との関係により深く言及していくのはもう少し待たねばならない。山川（1916）は「売淫の発生が経済問題と、婦人の屈従を強いる教育と、其拘束との結果である事が判然して居る以上、之が根絶は経済革命と婦人解放に依る外無いのは自明である」と述べている。売春問題の解決策を「経済革命」と「婦人解放」だと考えている。廃娼運動に取り組み始めた頃の久布白には前者の視点はあまりなかったが、後者の視点は存在していた。

廃娼運動を開始する前から、久布白にも「芸娼妓を要する社会」を批判する姿勢はあったが、これらの婦人運動家らの廃娼論と比べ、久布白の廃娼論は経済問題という観点からの分析が十分でなく、道德問題という観点からの分析が中心であった。しかしながら、久布白も様々な出来事を経て、経済問題という観点から廃娼を捉えていくことになる。次章では、経済問題との関わりから、久布白がより深く廃娼問題を捉えていくようになる経緯についてみていきたい。

## (第2章 文献)

- 浅井柞 (1888) 「論説 矯風会之目的」『東京婦人矯風雑誌』 1,1-4.
- 林葉子 (2001) 「『市民』が『国民』になるとき—久布白落実における『ホーム』論の展開—」『キリスト教社会問題研究』 50,1-30.
- 平田厚 (2012) 『権利擁護と福祉実践活動 概念と制度を問い直す』 明石書店.
- 平塚らいてふ (1919) 『婦人と子供の権利』
- 穂積重遠 (1927) 「新判決に就いて」『婦人新報』 356,19-28.
- 片山国嘉 (1916) 「余の賤業婦救済意見」『婦人新報』 228,9-11.
- 基督教婦人矯風会 (1917) 『大正六年度 公娼全廃教育運動二』.
- 北野誠一 (2000) 『講座 障害をもつ人の人権 3—福祉サービスと自立支援』 有斐閣.
- 久布白落実 (1916a) 「立て戦闘は将来に有り」『婦人新報』 224,7-9.
- 久布白落実 (1916b) 「希望に輝く五年度へ」『婦人新報』 225,6-9.
- 久布白落実 (1916c) 「寄つて以て立つ処を与へよ 本年度第一期の運動」『婦人新報』 228,5-8.
- 久布白落実 (1916d) 「秋来らんとする前に 本年度第一期の運動」『婦人新報』 229,5-8.
- 久布白落実 (1916e) 「全国の教化せらるるまで」『婦人新報』 230,4-7.
- 久布白落実 (1916f) 「貞操の観念と国家の将来」『婦人新報』 231,5-8.
- 久布白落実 (1916g) 「公娼廃止と飛田問題」『婦人新報』 232,5-8.
- 久布白落実 (1916h) 「矯風会は何を以て国家に貢献するや」『婦人新報』 233,5-9.
- 久布白落実 (1917a) 「根本思想の改造」『婦人新報』 235,4-7.
- 久布白落実 (1917b) 「貞操問題に就て小学校職員に訴ふ」『婦人新報』 237,5-8.
- 久布白落実 (1917c) 「回顧と希望」『婦人新報』 238,4-7.
- 久布白落実 (1917d) 「大阪飛田洗滌運動」『婦人新報』 239,4-7.
- 久布白落実 (1917e) 「矯風会の内的歴史 (平塚明女史の評論を読みて)」『婦人新報』 241,1-7.
- 久布白落実 (1918a) 「国民道德の根底を耕せ」『婦人新報』 251,1-4.
- 久布白落実 (1918b) 「公娼全廃教育運動の三か年」『婦人新報』 256,3-6.
- 久布白落実 (1918c) 「『日本婦人の面よごし』を読んで」『婦人公論』 3(3),44-58.
- 久布白落実 (1919a) 「五錢袋の一ヵ年」『婦人新報』 260,30-31.
- 久布白落実 (1919b) 「基督教婦人矯風会の過去と将来」『婦人新報』 266,3-6.

- 久布白落実 (1919c) 「婦人と人権」『婦人新報』 267,3-6.
- 久布白落実 (1919d) 「婦人の権利と公娼制度」『婦人新報』 268,1-4.
- 久布白落実 (1922) 「日本婦人参政権協会」『婦人新報』 292,2-7.
- 久布白落実 (1926a) 「現代婦人の要求」『社会事業』 10(2),45-48.
- 久布白落実 (1926b) 「四十年の戦」『婦人新報』 344,2-5.
- 久布白落実 (1961) 「わが信仰の生涯 売春禁止法を通すまで」『月刊キリスト』  
13(3),22-29.
- 久布白落実 (1971) 『日々の食物』久布白記念出版会.
- 久布白落実 (1973) 『廃娼ひとすじ』中央公論社.
- 小西加保留 (2007) 『ソーシャルワークにおけるアドボカシー—HIV/AIDS 患者支援  
と環境アセスメントの視点から—』ミネルヴァ書房.
- 守屋東 (1967) 「みどり時代」『婦人新報』 800,22-23.
- 布川静淵 (1918) 「日本婦人の面よごし 海外における日本醜業婦の近況」『婦人公論』  
3(2),69-84.
- 鈴木裕子 (1998) 『日本女性運動資料集成 第8巻 人権・廃娼 1』不二出版.
- 矢島楫子 (1916) 「聖国を臨ませ給え」『婦人新報』 227,1-3.
- 山川菊栄 (1916) 「公私娼問題」『新社会』 2 (12) .
- 横田秀雄 (1927) 「男子貞操義務 判決所蔵」『婦人新報』 356,8-18.

---

## (第2章 注)

- <sup>1</sup> 島田三郎 (1852-1923) は政治家で、キリスト者であった。廃娼運動や矯風事業を支援し、労働組合運動にも理解を示していた。
- <sup>2</sup> 安部磯雄 (1865-1949) はキリスト教の立場からの社会主義を主張した人物である。廃娼運動に取り組み、産児制限にも関心を寄せていた。また、政治家としても活躍している。
- <sup>3</sup> 1915年4月、大正天皇の大典を期に、同志社女学校を会場として第23回矯風会全国大会を開催した。その大会において「公会の席上に醜業婦を侍せしめざる事、其他凡ての風俗を攪乱する行動の取締を嚴重にする事」、「精神的記念として、今後六年間に、公娼制度の廃止を期する事」を決議した。
- <sup>4</sup> 慈愛館は1894年から矯風会に存在している施設で、当時、貧しくて身売の可能性

---

のある女性の保護・教育・自立支援などを行っていた。1953年に社会福祉法人として独立し、現在も婦人保護施設「慈愛寮」として存続

- <sup>5</sup> 守屋東（1884～1975）は福岡県に生まれる。1900年、東京府立第一高女卒業、1901年受洗。1904年から1908年まで東京下谷区万年小学校に奉職、スラム街の教育につとめ、1908年矯風会に就職した。少年禁酒軍の軍長となり禁酒教材を全国の学校に発送し、学生排酒連盟の育成などに尽力。1917年には東京婦人ホーム（1920年に慈愛館と合併）を設立し、婦人救済保護事業に携わる。
- <sup>6</sup> 1916年4月15日大阪府庁が飛田の地二万坪を新たに遊廓敷地として許可した問題
- <sup>7</sup> 『買売春問題資料集成』第2巻（不二出版）に収録。「公娼私娼全廃の理由」は社会、衛生と経済、道徳の視点から箇条書きで書かれたもので全22か条である。また、「何故に余は公娼私娼の全廃を主張するか」は「公娼も私娼も共に廃止する」ことを初めに主張しており、全11か条である。
- <sup>8</sup> 1916年の内務省の統計によると全国五百数十か所にある官許の遊廓は約5万の公娼を有し、客となる人員は1600余万人ということであった。
- <sup>9</sup> 久布白（1922:7）は「社会に安全弁が必要だと云って之れを是認する人が有ります、然らば何故に各自の娘を徴兵の如く抽選で之れに当らせませぬか、一方此の中に入りし婦人をば人外のあつかいを為し、他方、之に入る道を公然開きて法律を以って保護すると云うは何たる矛盾」と述べている。
- <sup>10</sup> 本論文においては、北野（2000:142）による、「個人のアドボカシー（権利擁護）とは、①侵害されている、あるいは諦めさせられている本人（仲間）の権利がどのようなものであるかを明確にすることを支援するとともに、②その明確にされた権利の救済や権利の形成・獲得を支援し、③それらの権利にまつわる問題を自ら解決する力や、解決に必要なさまざまな支援を活用する力を高めることを支援する、方法や手続に基づく活動の総体」という定義を用いる。



### 第3章 廃娼論の変遷—経済問題・労働問題への意識を中心に—

#### はじめに

白リボンを胸につけて、廃娼断行を叫び始めてから、自分丈の年を数えても既に十七年に成る、そしてこの十七年間自分は何を叫び続けたか、それは廃娼の両脚の一つ即ち道德問題だ、むしろ人道問題だ、自分はこの問題が左右の脚を有して居ることを知って居る、一つは経済問題である（久布白 1933:32）。

先行研究において、久布白らの廃娼運動・廃娼論は「社会科学的分析の視点が軽視・無視されがちで、『純潔』思想と『貞操』道德がことさら強調されがちであった」ということ、「婦人矯風会や廓清会にとっては、芸娼妓がおかれていた社会の仕組みや制度について根本的に変えていこうとする発想は希薄だったと思われる」（鈴木 1998:32）、「国内労働者階級の同性に対する共感の不在」（藤目 1997:333）といわれていたように、貧困や社会構造の視点の不十分さが指摘されている。しかしながら、冒頭の文章にもあるように、久布白の論考を読み進めていくと廃娼や売春を道德問題としてだけではなく、「貧の問題」や「経済問題」という視点から捉えたもの、さらに婦人労働問題を論じたものなども 1910 年代後半から確かに存在している。石月（1996:105）は矯風会研究の課題の一つとして「女性労働との関係について」を挙げているが、確かにこれまでの研究ではあまり取り上げられていないテーマであり、久布白の婦人労働の問題意識についても同様である。本章においては、久布白の経済問題・労働問題への意識とその廃娼論の変遷を考察していきたい。時期的には 1910 年代後半から 1930 年前後を中心とする。

#### 第1節 婦人労働問題をめぐって

##### 1 婦人労働問題への意識

久布白（1919b:3）は「学校時代に嘗て埼玉県の一工女の悲惨な物語<sup>1</sup>をきいて非常に心打たれた事がありました、何かしてやり度いと云うような心持ちが、一寸起こりましたが、其後何等の手がかりもなく過ぎて仕舞いました」と述べたように、早くから婦人労働に対する問題意識を持っており、廃娼運動に取り組む中でその解決の必要性をより深く認識していった<sup>2</sup>。1919（大正 8）年の段階で「今や婦人と労働と云う文

字は、唯文字丈けでも時代の一大問題として萬人の考慮を要求して居ります」(久布白 1919b:3) と述べている。彼女の婦人労働問題に対する意識の高まりの裏には、当時、職業婦人が増加しつつあったこと、1916 年の工場法の施行、1923 年、29 年の改正、1916 年の友愛会婦人部の設置、労働運動の高まり、また 1920 年の戦後恐慌による国民生活の貧困化など、様々な社会背景があった。

今井(2002)は『婦人新報』と母性保護論争についての研究の中で、矯風会の女性の就労と育児の両立についての見解、特に久布白の見解に注目し、分析を行った。『婦人新報』では女性の就労に関する論述がほとんど見られず、「女性の経済的自立の必要性を認めた久布白の発言はむしろ稀有な存在」(今井 2002:68)であったと述べている。その発言は「女性の自立を推進する立場」と「廃娼運動の立場」(今井 2002:68)からであったと指摘している。

以下、『婦人新報』における久布白の婦人労働問題に関する論考を中心にその廃娼論との関係を考察していく。

## 2 職業婦人・労働婦人の負担

久布白は職業を持つ婦人についてどのように考えていたのか。妻であり母であり、職業を持つ婦人は家庭でも社会でも多くの役割を果たさねばならないため、その負担は軽くなく、「二重三重の桎梏」(久布白 1918a:6)を負っていると考えていた。これは久布白自身の妻として、母として、また矯風会総幹事としての役割を果たしてきた経験をふまえた発言とも考えられる。当時の状況を振り返って久布白は次のように述べている。

病人と子どもをかかえて家庭的負担の多い私は、矯風会入りを引き受けるについては、条件をだしておいた。「どんなことがあっても家庭第一、勤務は午前十時から午後四時まで。子どもが十歳になるまで、夜の会合にはいっさい出席しない。会の大方針を押し立てて進むことはするが、雑務はしない」(中略)…急いで帰宅してみると、病人は不機嫌な顔をしているし、子どもは泣きわめくし、社会と家庭をかけもちで働く女の苦労を、相当ふかく味わわされた(久布白 1973:113-114)。

このように自ら「社会と家庭をかけもちで働く」女性の苦労を味わっていた久布白

(1918a:7-8)は「家族も妻たり母たる務めを要求するに殆ど少しの斟酌もありませぬ、然して社会は、其労働婦人職業婦人たると否とに関わらず、婦人としての身だしなみ、家の整理を要求する事厳君の観が在ります。一家を持つ婦人の職業を有するは実に四方八方の監視の下に、あらゆる婦人の義務を尽くして、其余暇を以って之れに当り然して相当職業の効果をおさめねばならぬ」ため、「婦人の職業の不振、職業に対する不忠実、不熟練」はやむなき結果であると考えていた。こういった状況をふまえ、「社会の世論、過半数の世論をして、男子の父たり良人たる義務を、婦人の母たり妻たる義務と同等に神聖なるものとして認むるに至らしむること」、「男女道德の標準」(久布白 1918a:7-8)を同じ点まで押し上げる必要があると考えるようになる。家庭における男女不平等さを改善したいと考えていた。妻であり母であり、職業を持つ婦人の負担を軽減するために、男性も家庭において父であり、夫である役割を十分に果たす必要があると考えたのである。この場合の「職業」とはいわゆる「職業婦人」(教師等)だけではなく、工場等で働く女工(労働婦人)も視野に入れており、様々な職業に就く女性を想定していた。それに関連し、婦人の社会事業が活発に発展しない理由として、「退嬰主義、引込思案をせねばならぬ社会」(久布白 1918a:8)を挙げている。このように、久布白は妻であり母である女性が職業や社会事業に従事するには相当な負担があり、それゆえに社会において十分に力を発揮することが困難であるということを批判的に見ていたのである。

また、久布白(1921b:4)は「既婚婦人の能力を保護活用すること」、「家事をととのえる、軽便なる方法が案出されてその家庭の人たる義務を果たしつつ尚其余力を積極的に職業上又自己の進歩の爲め用いる事」を推奨している。女性の能力を家庭だけではなく社会でも活用していく必要性を感じている。

久布白(1919b:4)は「適当なる職業と生計の途ある処には、出稼ぎも少なく、また従って醜業者も減ずる訳です、海外醜業婦に対する積極的方針としては、国内に於いて、適当なる工業を起こすこと、健全なる植民地、また移民地を、国民に与うる事は最も必要」であると述べている。また、中堅婦人が「我が姉妹の為に、適当なる職業と、之れに対する生活を保障する報酬」(久布白 1919b:6)を要求する必要性を主張し、それによって「公娼私娼、海外醜業婦の問題」(久布白 1919b:6)が解決に向かうと考えた。売春で生計を立てざるを得ない女性の生活の権利を代弁しようとしたものである。久布白(1920:4)は廃娼の「実践に伴うて必要なるは、各府県における救済事業」

と感じていた。当時、全国 548 か所の遊廓に対して「少なくとも各府県に一箇所の救済所、ホームの必要」(久布白 1920:4)を感じており、「自由に廃業せしめ、然して之れに静かなる生活と、職業と信念とを与えて再び心身の健康を復し、健全なる生活に立ち返らす道を講ずる事です」(久布白 1920:4)と主張している。久布白(1920:4)は売春に従事する女性たちを「社会の負傷者たるこの不幸の姉妹」と捉えており、彼女たちの「逃れ場」を用意する必要性、婦人保護の必要性を説いていた。

### 3 母性保護の視点

さて、1918(大正 7)年から 1919 年にかけて、女性の育児と就労をめぐる、母性保護論争が繰り広げられた。与謝野晶子と平塚らいてふの論争から始まり、その後、山田わかと山川菊栄も加わった。与謝野は育児と就労は両立可能で経済的自立が必要であると考え、母子扶助を否定した。一方、平塚・山田は現状では両立不可能であり、母子扶助が必要だと考えた。山川は与謝野と平塚の主張はどちらも真実であり、女性自身が選択できることが重要であると考えていた。当時、久布白ら矯風会は母性保護論争について直接言及することはなかったが、久布白自身、どのような考えを持っていたのか。

久布白(1919b:4)は女工の労働状態について、「女工といえは半奴隷の如く苦役して、一二年の内に妙齡の姿を破壊して、省みぬ如き理不尽なる工場も少なからず点々して居ります」と指摘し、「労働時間の制限、生活すなわち衣食住を得しめ、人間としての適当なる修養の施設を与えることは現に妻たり母たり、また将来妻たり母たらんとする女工諸氏のために必要なるのみならず、実に民族経済の上から考えてもこれほど重大な事はありません」(久布白 1921a:4)と述べている。そして、職業婦人の増加に伴って小児の保護、出産前後の職業婦人の保護等が進んできている英国の例と比較し、久布白(1921b:3)は日本の女工生活について「動物の如く寝につく外何もなす余地が無いようです。これでは向上も孝養も望む事は出来ませぬ。女工生活に終日の労を厭わず働きし後は沐浴して一時間位いは淑女らしき座作進退を為し得る環境を作つて与える事は将来民族の母を養成する上に必要な事では有りますまいか」と述べた。日本の女工生活を改善していく必要があると考えている。但し、女工たちが将来妻や母になることを前提としており、母性保護の思想と同時に、「民族経済」や「将来民族の母」という表現から国家の発展のためという考えが窺える。久布白(1918b:4)は「結

婚が子供と云う問題に移る時には既に個人的意味を離れて民族の問題」になると考えており、職業婦人の増加に伴い、「此等の婦人の家庭に於ける努力に対し、保護を与える事は将来当然為すべき事」だと考えている。

さらに久布白（1921b:3）は「貧しい家、労働者の家の小児の保護は又最も重大なる問題です。親達の留守の時も、用事のために他出する時も、何等の危険なく遊び得る為に、小設備の遊技場は何よりの必要」というように労働者の子どもにも視野を広げており、児童保護・児童福祉につながる思想も読み取ることができる。

これらの記述から、久布白は女性の育児と就労の両立を不可能とは考えていなかったことがわかる。女性の就労をめぐる状況の改善を訴え、子どもや女性の保護も必要であると考えていたのである。

## 第2節 廃娼運動の高まり

### 1 私娼対策について

久布白は 1924（大正 13）年に「廃娼の後に私娼をどうする」を執筆し、アメリカの方法について取り上げている。これは 1922 年の渡米で学んできたものである。アメリカは兵士の性病調査を行い、その周辺の私娼について調べる方法を用いていた。その土地の証拠をつかんだ後、市長や知事に通告し、私娼に対し転業や退去命令を出した。市長や知事が動かないときは各地の廓清団体、教会や婦人団体に通告して、さらに市長らに訴え、実行させる方法をとった。そして私娼が退去も転業もしないときには、「直ちに之れを拘引して、留置場に入る方法」（久布白 1924:4）をとったという。そして、「一旦留置したものは、先ず其健康を調べ、適当な医師をつけて治療をします、又家や邸を充分にして、全く別生活に入れて仕舞います、即ち、今までの生活状態を離れ、極く規則正しい、清潔な生活の内に入れ、ここで広々した病院の内に、ミシンや、園芸や、其他適当な仕事を与え、身体を健康を復すると共に、出でて再び以前の生活に戻る必要のないように、職業教育を与えます、そして身体に、職業、精神、凡ての方面から、新しい生活を為し得る準備をしてから、適当な監督の下に、外へだしますから、其大部分は、再び同じ私娼となるものは有りませぬ」（久布白 1924:4-5）と述べている。このような方法を紹介し、「要は、公娼廃止を先ず断行して、徐ろに私娼の問題に進む可きであると思います」（久布白 1924:5）と主張した。

1926 年にも「米国と私娼」というタイトルで『婦人新報』に執筆している。前述の

1924 年当時はまだ世論が喚起されていなかったことをふまえ、より詳細に記述したものである。

さらに 1928 年に久布白 (1928b:5) は「公娼制度が撤廃されたら、今度は直ぐ私娼問題に移る。芸妓、酌婦の問題、次ぎ次ぎに来るであろう。然し我等の目指す所は、国を挙げての健全なる男女関係である。これが我国津々浦々まで行き渡らん事である」と述べていた。

## 2 廓清会婦人矯風会連合の設立

1926 (大正 15) 年 4 月末の警察部長会議で公娼制度改廃に関する諮問案が提出された。同時期、京都で全国貸座敷業者の全国大会が開催され、「一、公娼年齢を満十六才に引下ぐること、二、警察官憲を促して私娼撲滅に尽力せしむること、三、私娼取締の方針即ちこれに対する現行法規励行につき内務大臣の意見を訊問すること、四、当局の意見もし不徹底にして私娼撲滅の目的を達成し得ざる場合には吾人全国の遊郭業者は一斉に廃業すべきこと」(久布白 1931:20-21) が決議された。その後、助言を得て、久布白は学校長、新聞社代表や雑誌社代表、婦人団体代表等の 100 名の賛成署名(「婦女禁売条及公娼制度に関する請願」)を集め、5 月初めに内務省に提出した。その内容は「一、国際連盟主唱の婦女禁売条約加入に付、帝国政府の附したる留保を遂に撤回すべきこと、二、人道上、体面上、茲に風紀上共に有害なる公娼制度を撤廃すべきこと」(久布白 1931:22) であった。5 月半ば頃には全国廃娼同盟を設立する方針等が大方決まっていた。

また、この頃、中央社会事業協会の売淫制度に関する研究会に出席し、研究結果が公娼制度撤廃の決議となった。久布白の提案をきっかけに 6 月、「廓清会婦人矯風会連合」が設立された。委員長は松宮弥平、副委員長は林歌子、事業部長は伊藤秀吉、財務部長は久布白であった。1929 年 6 月までの 3 年間、中央運動(対政府、対議会運動)、地方運動(対県会運動、府県別廃娼同盟会の設置)、教育運動(講演出版等による宣伝)を展開することを決定した。資金 6 万円を目標に掲げ、全国に 600 人(一口 100 円)の申し込みを求めていく。久布白は廃娼同盟設立後全国を駆け巡り、「握り飯運動」として展開した。1928 年 10 月にその目標を達成し、二府四県で運動を開始した。11 月には埼玉県の廃娼案が県会で決議される。

1926 年 10 月に全国廃娼同志大会が開催されている。その後久布白 (1926:4) は「未

だ、中々油断すべき際には在りませぬ、公娼廃止、制度撤廃と、斯程に世間が騒がしくなつては居りますが、内務省の方針は、未だ改善であつて撤廃では在りませぬ、人身売買の事実は否定されては居ないのです（中略）…実際は公娼廃止がいいか悪いかはまだわからないと云う人は、全部と云わぬまでも大部分であることは事実ではありますまいか。今日は実に教育の必要な時です」と述べている。進歩を認めながらも、人身売買の事実を否定するところまでいかねばならない、そのためにまだまだ教育が必要であると考えていた。

久布白（1932:9）は「（廃娼）運動が、大正十五年六月の例の全国廃娼連盟の組織が出来て以来、年毎に勝利から勝利に進みつつある状況を見る時に、はてこの戦いが一段落を告げたら、其時はどうなるか、と云う疑問を我れと我身に投げかけて居るのを見出すことだ」と述べた。当時 2 つの廃娼実行県（群馬と埼玉）、9 つの決議県、38 の連盟組織県があった。久布白は廃娼後の仕事として、「性教育の徹底、経済的援助の方法、陥らんとする人々に純潔思想の樹立、廃業者の授産、健全なる男女交際、健全なる娯楽」（久布白 1932:11）を挙げた。この新しいプログラムについて次のように述べている。「第一に起り来る事は、この人々即ち従来身売りを余儀なくされた人々に対する其大事な瀬戸際に於ける経済的補助の道造ることである、いつぞや或る遊郭業者は、自分に直接云つたことがある。『私共は、こうやって社会事業をして居るのです、この女たちが、二進も三進もゆかなくなつた時に金を出して助けて居るのですからね！』と。この一語は自分を驚倒させたが、然しここに矢張存在の一理由がある、それで此制度の撤廃と共に、矢張斯る境遇に來た場合之が救済の道、即ち金融の道が考究されねばならない」（久布白 1932:11）「第二に來る事は廃業婦人の救済である。又危うき淵に立つ少女等の保護である」（久布白 1932:12）と述べ、各県下に 1 か所ずつそういった施設を設ける必要性を主張し、そのために各地の婦人会の協力を求めている。「第三に積極的事業として、必要な事は、性教育の普及である」（久布白 1932:12）と述べ、矯風会内だけでなく、文部省で整備された組織がなくてはならないと考えている。「性が人生の呪詛でなくして祝福であることと、性が人を制御するのではなく、人が性を制御すべきことと、性は人の獸欲獸性の現れでなく、神より賜わりし人種保存の神聖なる機関として男女各々によりて、最も意義深く尊重せらるる可き事等々の、従来余り多く知られざる嚴かなる真理が、若き国民によって明らかに了解せらるる時、我国の性道德が必ず其進歩の一階段辿るであらう」（久布白 1932:12）と述べた。

1931年には、バスコム・ジョンソンを委員長として、国際連盟派遣の東洋における婦人児童売買実情調査団（ジョンソン調査団）が来日し、久布白らも関わりを持っている。官庁の調査訪問、芸妓学校、吉原の見学、救世軍や矯風会の訪問を行った。1933年に報告書が出されたが、そこには、「公娼制度には、醜業婦を募集するのに、一つの組織された制度がある。支那各地で醜業婦を募集するには、内地同様、周旋業者を通じて行わるが、日本には醜業婦のための特別紹介業が、法律で許可されている。婦人が金策のために醜業に就くには、周旋業者の仲介に訴えるが、この周旋業者を通して、支那の妓楼にも紹介される。故にこれら周旋業者は何ら非合法、又は秘密な方法を用いる必要はない」（無署名 1933:17-18）とされているものの、「海外醜業婦」の数が減っているということも記されていた。また勧告において、第一に「婦女売買の悪弊を撲滅するには、各国間の国際協力の必要」、第二に「婦女の救済には先ず、彼等の取引市場たる公認妓楼を撲滅してかからねばならない」ということ、第三に「婦人児童の国際売買を減少するには、我々は行政手段に俟つと同時に、教育の力によって、婦女子を保護することに努めねばならない」（無署名 1933:23）と記しており、政府当局とミッション（宣教団）及び私設団体との協力の必要性を説いた。この報告書を受け、矯風会では廃娼連盟委員長の松宮弥平や事業部長の伊藤秀吉らを招き、ジョンソン報告批評座談会を開催した。久布白は座談会において、「この報告は我々の運動にとってはまことにヘルプフルなものであり、海外醜業婦がなくなったということは祝福すべき事です。又我々は満州国の健全な発達を願ってやみませんが、日本国内に公娼が存する限り満州に於ける性の問題は解決の仕様がないうと思う。これまで兵士に対しては酒と女という事は常識だったけれども、今後性病にかからぬ様に彼らを教え保護する様に我々が努力しなければならない事だと思うのです」（松宮・久布白ほか 1933:40）と述べている。

### 3 仏教界への働きかけ

久布白（1973:225）は「日本における各種の改革運動には、仏教界は欠くべからざる存在である」と認識し、廃娼運動の完成のために仏教界に働きかけていく。宗教を超えた連帯であり、このことは非常に画期的なことである。和田満子<sup>3</sup>の取り計らいで、臨済宗妙心寺の神月徹宗<sup>4</sup>と面会し、仏教界の賛助を求めた。神月は久布白に仏教界の主要人物と団体を紹介し、日本仏教連合会<sup>5</sup>が決議すれば、仏教界全体の決議となると



いうことを教えた。久布白は和田とともに主要な寺を訪問し続け、1932（昭和 7）年に仏教界の廃娼を取り付けた。

### 第 3 節 エルサレム会議と労働問題研究

#### 1 エルサレム会議（第 2 回世界宣教会議）

久布白は 1910 年代後半から婦人労働問題や女工問題に言及していた。久布白（1921a:2-3）は、公娼制度下における男性の（性欲の）需要に応えるのは「家庭の保護なき婦女、生活の保障なき貧家の婦女」であり、公娼、私娼、芸妓や「海外醜業婦」たちは「貞操も純潔も売物とせねばならぬ生活状態に在り、斯くせねば生活し得ざる環境」を黙認すべきではないと社会を批判している。また、1920（大正 9）年の矯風会の大会では「婦人労働問題の件」を会の綱領の一つとすることを決議している（村岡 1920:25）。宣言書は「各自が生活し得る賃金を得る事」（久布白 1921a:4）を要求しており、労働問題の解決を訴えるものであった。

さて、久布白が本格的に労働問題に関する見識を深めるのは 1928 年に参加したエルサレム会議（第 2 回世界宣教会議<sup>6</sup>）においてである。この会議はプロテスタントの全教派が一堂に会し、国際協力宣教の問題を協議していくものである。日本からは久布白を含め、小崎道雄<sup>7</sup>、鶴崎庚五郎<sup>8</sup>ら合計 8 名が参加した。その中で女性は久布白 1 人であった。久布白はその参加の動機について次のように述べている。

彼女等を救おうとし、又救ったと思う一方から、大波のように入って来、又何處からともなく湧いてくる、この浅ましき姉妹の群だ。これは其底の底に貧が有り、どんづまりの生活がある活きた証拠ではないか。この貧の問題、これをどうすればよいのか。この方角だけは抜きにして、今日までは走ってきたが、今では一つ新方向に目を向けないでは居られない（中略）…労働問題が知り度い産業組織が解り度い、貧の解決の方法はなきか。有ゆる方面に章魚のように探手を出して求めて居たが、其中心は人格問題、宗教的立場からと云った心から、唯物主義の解釈では安心して居られない、それかと云って現在の、キリスト教会には、其指導者は至って少ない。あがき求めて居る際に、このエルサレム会議では産業の人道化と云う項目の有るを幸い、何か手蔓が握れようと、何を措いても行く気になった（久布白 1928c:1-2）。

久布白は自らの運動を振り返り、これまでの方法のみで解決を図る限界を感じていたのである<sup>9</sup>。この会議では第1、2日目にキリスト教と他の宗教（仏教、イスラム教等）と唯物的無神論について、第3日目に新旧教会の関係、第4日目にキリスト教教育の問題、第5日目に農村問題・産業問題、第6日目に人種問題について話し合われた。久布白（1928c:51）によると、産業問題については「教会の立場としてはこの近世の怪物たる産業、資本組織、労働問題に対して、驚いて眺めて居てはならぬ。（中略）…この十九世紀、二十世紀の怪物に対抗し得るだけの力を養って、永久的組織機関をととのえて立ち向かわねばならぬ。人道が産業に織込まれ、人が産業の主人となる根本主義に立つために、新しき責任感拡張と、永久的努力の基礎が据えられねばならぬ、といった所で一まず収まったようであった」ということである。

このようにキリスト教が生活の根本にかかる産業問題に関わっていかなければならないという話があり、久布白が労働問題に対する意識を高めるきっかけとなった。またこの会議は人種問題に対する意識も高めた。朝鮮の女性が関東大震災時の朝鮮人虐殺事件に言及し、「民族と民族との間に間違いの有った時は、せめてあの時は間違っず済まなかったと云う一言の挨拶位は聞き度い、ことに基督教徒として神の子と云う連なりをもつ我々の間にはこれが有り度い、自分達はあの時は日本の基督教会までが沈黙を守った事に関して、云いようのない淋しさを感じた」（久布白 1928a:2）と述べたという。久布白（1928a:2）は「自分はこの言葉をきいてしみじみと心に打たれた。それは自分が今日までこの民族の中に、唯一人も友を持たぬと云う事だ。朝鮮の内に又支那に、又印度に、この近き東洋の国々の内に唯一人も友を持たぬと云う事だ」と記している。ここで「隣邦に対する友誼」（久布白 1928a:2）が生まれている。

久布白（1928c:52）は大会を振り返り、「旧は新を認め、西は東を認め、都会は農村を見出し、キリスト教は他宗教を認め、白人は有色人種を認め、教会は社会、産業を認め、兎に角、上下左右、新旧東西、互いに認め合い、諒解し合い、尊敬し合い、真価値を認め合うという所にあろうか。これが霊火となって根本的に宗教問題、教化、教育、産業、農村、人種等の重大なる世界的問題を人格的に、天意の有る如く解決する事は今後百年の働きに待たねばならない」と述べている。この会議や旅中での出来事は久布白の著書『女は歩く』に詳しく収められている。久布白は旅中、中国やインドなど様々な国の宗教者と出会っており、それもまた人種問題に理解を深める機会となった。

## 2 「労働問題物語」からみる貧困問題への視点

エルサレム会議での経験をもとに翌1929（昭和4）年、久布白は『婦人新報』に5回にわたって「労働問題物語」を連載した。労働問題は18世紀から20世紀に及び、あらゆる階級の人に関わるものであると考えていた。

久布白（1929:15）はこれまで「この階級（筆者注：売春女性）を生み出すに到った今日までの道德思想の欠陥と家族制度の余波」については従来の自分の論法で、答えてきたが、「この境遇に落ち込む原因即ち貧」については全然触れることが出来なかったと考えていた。一方で、久布白（1929:15）は「貧の問題が少なくとも性の要求と相半する一つの大きな動機」であり、売春の原因には「男子側の要求と、女子側の経済的必要」があると考え、前者の要求に対しては「科学的性知識の普及、運動娯楽の施設等」と「道德宗教の力」、後者の経済的必要に対しては、「職業」と「教育」が「最大なる解決の鍵」だと考えた。しかしながら、そのような解決策があっても現状では男性の生活難による晩婚化や女性の経済的独立の困難さなどの問題があり、「双方に弱点と弱点とが結ばれて、売淫はやはりその数を増してゆこう」（久布白 1929:15）と述べている。「どうすれば男子の生活難が除かれるか、どうすれば女子の経済的独立が確保されるか、結局は貧の問題の解決、万人の生活の安定が問題の解決の真相ではないか。自分はいつしか問題の半面的解決に、不満と不徹底を見出して、この方面に手探りを始めていた」（久布白 1929:15）と労働問題研究の動機について記していた。

このように述べた後、久布白はイギリスにおける「産業革命」、「労働運動」、「思想的背影」、「政治的変動」、「革命か社会政策か」、「我国の行くべき道」について考察していく。男性の生活難や女性の経済的独立の問題について考察を深め、結局のところは貧困問題の解決が売春を防止することにつながるという根本的な指摘を行っており、売春問題の核心を突いている。最終回で久布白（1930a:30）は我が国の行くべき道として革命を辿らずして、「今日の労働問題を如何に解決するか、合法的、教育的、漸進的方针によるの外はない。（中略）…少なくとも一般国民が、殊に教育家、宗教家の如き、其他国家の指導の任にあるものが、更に一層の努力奮励をもって根本的解決に当る可きではなからうか」と結んでいる。但し、根本的解決を図るべきであるとは述べているものの、そのための具体策については言及していない。

その後、3回に亘り、『婦人新報』に「東洋労働物語」を連載し、中国・インド・日本について記述した。これも先のエルサレム会議での経験に基づいたものである。日

本に関しては女工問題が中心である。その生活状態について「最近国際労働会議等の影響により、幾分緩和の実を挙げ来った観が有る然し尚未だ其大部に於いては、此等女工の年齢の甚だしく幼稚なると、丁年以上に達すれば多く廃業して結婚する等の理由により多く団結力なく、又将来の為に戦う等の必要を感じず、又稀に感ぜず、又稀に感ずる者が有っても、其力なきより直接法に抵触せざる限り、又其能率を低下せざる限りに於いて有ゆる搾取は行われ易い」（久布白 1930b:21）と指摘している。女工の年齢の若さ、労働時間の長さ、工場や寄宿設備の不備と疾病の関係、また産前の保護の欠如などを問題として挙げ、「要するに女工の状態は今日なお寒心すべき有様にあるにもかかわらず、未だ識者の問題たることが遅く、無言の内に、国家将来の若芽迄摘む如き状態にある、今後大に、その方面に於ける覚醒運動、団結協力の戦線に立つ必要がある」（久布白 1930b:22）と述べている。

#### **第4節 東北婦女身売り防止運動をめぐって**

##### **1 東北の凶作と婦女身売り防止運動の開始**

1934（昭和9）年は天変地異の年であった。関西の風水害、西日本の干害、東北地方の冷害による凶作があり、東北では婦女の身売りが多発する。青森県では農村婦女子離村防止委員会の設立、山形県では身売り防止の座談会、秋田県では離村子女防止保護相談所を設置するなど、東北各県では様々な取り組みが行われた。また、愛国婦人会は10月22日に全国各支部に通牒（子女救済のための金銭貸与）を出し、朝日新聞は10月半ば頃から「東北の凶作地を見る」と題して、10数回にわたり連載を行った。

久布白（1934:6）は10月22日、朝日新聞社に「（東北の凶作について）朝日はただ記事だけですか、それともこれを事実として扱われるのか」と質問したところ、事実として取り扱う回答を得た。久布白（1934:6）は東北の問題について「単なる凶作の問題でない」「従来埋められし一大人道問題」と考え、1932年からの愛国婦人会の働きをふまえ、朝日新聞社と愛国婦人会との協同事業を行うべく働きかけた。愛国婦人会は1932年に身売女性の救済を行うことを発表していた。愛国婦人会、矯風会、朝日新聞社で1934年10月31日に東北凶作地救済運動の第1回協議会を開催する。その後真宗婦人会を加えて11月5日の第2回協議会を経て、9日に総協議会を開催した。募金・救済を決定し、「一般救済」、「欠食児童保護」、「子女の救済」の3部門に分

かれることになる。

婦女身売り防止及び就職斡旋の事業のために、11月13日、朝日新聞社に寄託の3万円を支出することを決定する。「農村子女救済資金」は1人につき100円以内を無利子で貸与、支度金や旅費の要る者には別に30円以内を支給するもので、「婦女就職資金」は女中奉公その他に出るための着物も旅費もない者には30円以内を貸与するものである。救済を要する女性は主催の3婦人団体の県支部関係者、職業紹介所、方面委員等の当局者との連絡を取り、身元調査によって決定される。上京したら3婦人団体がそれぞれの施設等に引き取り、訓練や就職への支援を行うこととなった。

## 2 東北六県の視察

久布白はその後、11月12日～19日に東北6県を視察し、各県での資料収集や秋田婦人ホーム<sup>10</sup>の訪問を行う。東北地方の問題は「山間僻地に医師の無き事、借金の戸毎に殆ど無き家のない事、山林多く耕地少き事、然も其山林が7割までも国有、官有である事、副業の少き事」、「平生から貧困苦悩は日常の生活」（久布白 1934:10）であると考えた。

久布白（1934:11-12）はその根本的解決策として「第一天然を調節、研究する為に气象台の建設」、「第二各県に農事試験場の建設」、「第三郷倉を各町村各部落4700ヶ所に建設する事」、「第四副業の奨励」、「第五山林を拓くこと」、「第六医療機関の充実」、「第七禁酒」（娘の身代金が酒代になった例も少なくないため）、「第八人材を農村に」、「第九教育と宗教を徹底せよ」と記している。久布白（1934:12）は娘売りに対する罪悪感の欠如の原因は「貧のための陋習」ではないかと考え、教化運動・啓発運動の必要性を主張した。一方で、一時的対策として久布白（1934:13）は「廿七万戸の農家に食を与えること」を挙げる。また見逃せない問題として、「妊産婦、乳児の問題」を挙げ、「これはやがては国民保健上の由々敷き大事」になると指摘した（久布白 1934:13）。これらの一時的救済に関しては、「全国総がかりで相互扶助」が必要であると述べた（久布白 1934:14）。「…衣類も、長靴の如きも、又誰れも気付かぬ事ながら、託児所の子供等の玩具、絵本何でもよい、貧しき家々への贈物は有難い。又禁酒運動、教育伝道運動は最も望ましい」というように必要最低限の救援物資だけではなく、子どもの生活を豊かにするものにも言及していた。「学齡未滿の欠食児」は1人2銭で救済可能であり、自分たちの一食を減じてでも提供してきたいということも述べてい

る。そして、この機会をとらえて「殆んど風習となり来って居た『娘売り』なる言葉其ものを事実として抹殺し得るなれば、これは実に禍を転じて福と為すの最大なるもの」(久布白 1934:14) だと述べた。

さて、当時活躍していた他の運動家たちはどのように考えていたのか。奥むめお(1934)は東北の農村窮乏の原因について自然的・人為的両面から考察し、根本的な解決のためには「全国的経済改造」(奥 1934:12)の必要性を主張している。東北地方の娘売りは「社会的経済的圧迫の理論の帰結」であり、「地方農村の無智とか年来の弊習という観点」から考察することは「人情を解せざるも亦甚し」と批判している(奥 1934:6)。また、川野温興(1934:21)は身売防止の根本的対策として「東北農村の永久的甦生」と共に、「子女の身売を当然とするが如き観念を打破するため、無智な地方民の啓蒙を怠ってはならない」と記している。また、「公娼廃止」、「あらゆる人身売買類似の行為を禁止」の必要性を主張した(川野 1934:22)。

婦女身売り防止運動を実施することで救済を要する費用について基礎調査を行うことができた。「窮乏地方婦女子就職資金貸付並救済者調」(自昭和9年11月至昭和11年12月)(対象は北海道、青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島、新潟、東京)では、貸付人数3,976人、貸付金合計約213,177円であった。一人平均53.70円(貸付金を用いていない救世軍の103人を差し引いても一人60円以内)あれば救済できるということになる。1930年代前半、1年間で娼妓になる女性はおよそ8,000人という状況であったが、当時、全国の町村(自治団体)は12,000近くであり、1町村1人を救えば身売りを防ぐことが可能であると久布白は考えた。1933年前後にその実現のために賀川豊彦を訪問し、「組合運動」について学ぶが、その際は実を結ばなかった。しかし、1934(昭和9)年に廃娼近しと考えたこと、また東北地方における婦女身売り防止運動の経験から「従来の教育的方法だけではならぬ、経済の根本を衝いて、ここに救いの手をのばさねばならぬ」(久布白 1938:11)と考えるようになる。

### 3 婦女身売り防止の具体策

1936(昭和11)年、久布白は再び賀川を訪問する。久布白は賀川に実地に婦女身売り防止運動に携わってみて、1人60円以内の金があれば、「娘等を陥らしむる前に正業につかせること事の出来る方法」(久布白 1938:12)があることが明らかになったことを伝えた。現実的に救う道を立ててほしいと依頼し、賀川豊彦、山崎勉治による「純

潔金庫」の案を得る。会の基礎たる資金として正会員と賛助会員から金 100 円を拠出し、正会員は 1 口 20 円の会費を 1 人 5 口以上持つ。拠出金の元金は持分権利を保有したまま、無利子で 10 年金庫に預け、元金の運用によって生ずる利子だけを金庫に寄付する。賛助会員は金庫の趣旨に賛し、一時金 1000 円以上を寄付する者であった。その他は有志家の寄付、会の事業より生ずる収入、公共団体の補助金や交付金などである。「純潔金庫」運用方法は産業組合貯金、銀行預金、信託会社への信託等である。本金庫が身売りせねばならぬ貧農の保証人となり、産業組合から貧農に対し資金を貸し付け、副業を与え、その賃金から月賦で貸付金を返金させるという方法をとる。結果的に「純潔金庫」は実現しなかったが、「廃娼運動の経済的基礎としての純潔金庫要旨並び定款草案（未定稿）」という資料が残っている。ここからは従来、解決策として教育的方法を中心に考えていた久布白の問題意識の変化を読み取ることが出来る。経済問題から廃娼を捉える視点が登場し、解決策が具体化している。

久布白の取り組んだ東北地方における婦女身売り防止運動の意義はいかなるものであったか。まず、朝日新聞社に働きかけ、愛国婦人会・朝日新聞社・真宗婦人会と協同運動を開始するきっかけを作った。そして、東北での実地体験から 1 人の女性の身売り防止のために必要な金額が明らかになり、それに基づき、経済問題を解決するための具体策を求めていく。久布白の婦女身売り防止運動の取り組みは、貧しい農村に生まれ、「女性」という性であるがゆえに身売りされる人たちへの社会的支援（実際の生活問題への解決策と身売りに対する意識改善）であり、「経済問題」と「道徳問題」両方からのアプローチを行うものであった。

## 第 5 節 経済問題とその解決策

### 1 「廃娼と経済問題」（1933 年）から

本章の冒頭の文章にあるように、久布白（1933:32）は「廃娼の両脚」を「道徳問題（むしろ人道問題）」と「経済問題」とであると捉えるようになった。このように考えた久布白は公娼廃止後、「其第一に来る問題は何か、娘を売らねばならぬと云った窮迫の際、何によって之を救うか、如何にせばかかる状態を持ち来さずやってゆけるか、即ち経済問題である」（久布白 1933:32）と述べている。売春の供給側である女性にも需要側である男性にも経済的理由があり、前者は「女子に適する仕事無きこと、同時に土地の貧、家の貧」（久布白 1933:33）、後者は「既に丁年を越ゆる身をもって妻子を

養うの資力なく、永く独身生活を余儀なくさせらるる」(久布白 1933:34)と指摘している。こういった問題をふまえ、女性に対する解決策として次のような経済的援助の方法を挙げた。「其最小限度の金を用立つる金融機関を、全国一万二千の市町村即ち凡ての自治団体の中に、婦人会、青年団、女子青年団体の中にこの為に特別金融機関を設けて之に当ることが最もよい」(久布白 1933:34)と述べている。同時に男性に対しては次のような解決策があると考えている。「性の教育、又童貞の守り得て健康に無害の事を教えることも必要だ、然し、具体案としては出来得るだけ婚期を早め、夫婦共稼ぎの途をつけ、幼児の為に託児所等施設を完備すること、又共同台所等によって、家庭の仕事を省く社会組織等を考え出すこと」(久布白 1933:34-35)であると述べている。働く男女に対し、「家庭生活の様式を従来のまま」にすることは無謀であり、「女子も結婚をもって凡べての人間としての働きを失うものと思うにも及ぶまい」(久布白 1933:35)と述べ、現在で言うところの育児や家事の社会化など、女性の働く環境を整えることも視野に入れた論を展開した。

久布白は 1910 年代後半から売春問題と労働問題・経済問題との関わりを視野に入れた論考を執筆していたが、具体的な解決策については記していなかった。しかしながら、1928 (昭和 3) 年のエルサレム会議を経て、30 年代半ばにかけて少しずつそれを深めていき具体的な解決策にも言及するに至っている。

## 2 座談会「基督者婦人と社会運動」(1934 年) から

1934 (昭和 9) 年に矯風会でキリスト者婦人の座談会が開催され、矯風会や各派の教会の女性たち計 20 名が参加した。その会では、「1 社会事業及び社会運動に対し基督者婦人はいかに考えるか、2 現在の社会運動に対する批判及び希望、3 何が教会婦人と社会運動団体との協力を困難ならしめるか、4 どうすれば今後教会婦人と社会運動団体が円滑に提携協力できるか」(久布白ほか 1934:20) について話し合われた。

『婦人新報』にその抄録が掲載されているが、久布白はどのような発言をしていたのだろうか。久布白は婦人参政権運動などでキリスト者以外の婦人運動家と協同することによって、「外にこうした沢山の専門家が出てくるとき、我々クリスチャン婦人はクリスチャンバデーとしての立場も持たず、調査も研究もなく、従って意見もなく、ただ神様という力でおさまりかえっているという有様です。おいてきぼりをくってるようです」(久布白ほか 1934:21) という現状に気が付き、また、「我々が経済問題をな



ぜ信仰で解決することができないか、社会組織に対しなぜ我々の立場にたって改革が叫べないか、又どうしたら斯ういう切迫した問題を教会内にもちこんで、全体をうるおす方法を考えることが出来るだろうか」という疑問が湧いたと述べている。座談会の中では、これらの原因として、教会の婦人会は主に伝道事業が中心となっていること、生活苦を知らず無関心であることも一因ではないかという意見が出ていた。解決策として、まとまった知識を持つこと、社会運動団体と教会の婦人会が提携していくために、牧師の理解を促進すること等が挙げられた。久布白は「今日慈善救済というのはすでに一けた後れています。社会運動となると社会機構そのものの核心（ママ）となるのだから、経済問題、労働問題、婦選問題いろいろに触れています。慈善事業は大がいにして、社会機構の革新は我々の責任なりというところまで行かねばならない」（久布白ほか 1934:26）と考えるに至っている。このように、久布白はキリスト者婦人たちが狭い範囲におさまるのではなく、「社会機構の革新」という視点を持ち、社会運動にもっと踏み込んでいく必要性を主張していくようになる。

## 小括

本章でみてきたとおり、久布白の中には労働問題と経済問題の解決が売春問題の解決につながるという視点が確かに存在している。久布白は矯風会総幹事就任後の比較的早い時期、すなわち、1910年代後半から、婦人労働問題や貧困の問題に言及していた。「結局は貧の問題の解決、万人の生活の安定が問題の解決の真相ではないか」（久布白 1929:15）という指摘は目新しいものではないが、当時の売春問題の核心を突いたものであり、現在の様々な福祉的課題にも通じるものである。但し、廃娼は「道德問題（人道問題）」であり、「経済問題」であるという意識をどれだけ運動に反映出来たか、即ち売春を行わざるを得ない貧困女性たちへの社会的支援につながる取り組みを十分に実施できたか考えると、実現できなかった部分も多い。しかしながら、久布白は意識改革などの教育運動を中心に行いながらも、経済問題への視点を持って廃娼論を展開し、運動に取り組んでいたことは従来の研究ではあまり取り上げられておらず、注目に値する。その視点は具体的な経済的援助の策や廃娼後の対策の提言につながり、女性の社会的支援に生かされる可能性をも含んだものであった。実際に東北地方の婦女身売り防止運動の実施は女性たちの支援につながった。

久布白はその論考において売春女性だけでなく、家庭における婦人、職業を持つ婦

人などあらゆる層の女性をめぐる状況に言及し、家庭や社会における男女の不平等さを指摘している。廃娼問題にとどまらず、婦人労働問題や家庭における婦人の地位の向上、夫婦の共働きの問題、仕事と家事のバランスの問題など、幅広く取り上げていた。その論はあらゆる女性を取り巻く環境の改善を目指すという側面も有していたのである。家庭内だけではなく、社会における「嬰兒の死亡率と云い、不良少年少女の問題と云い、労働問題と云い、養老、保険の問題と云い、人事に関する事で婦人の携わるを、許さざる問題は殆どありませぬ」(久布白 1919b:6) というように、女性の力を様々な社会事業に利用すべきであると考えていた。

### (第3章 文献)

藤目ゆき (1997) 『性の歴史学』 不二出版.

今井小の実 (2002) 「『婦人新報』と母性保護論争—矯風会の婦人界における位置づけを検討する指標として」『キリスト教社会問題研究』 51,63-84.

石月静恵 (1996) 『戦間期の婦人運動』 東方出版.

伊藤秀吉 (1931) 『紅燈下の彼女の生活』 実業之日本社.

川野温興 (1934) 「東北農村婦女子の身売防止に就て」『社会福利』 18(12),18-23.

川崎正子 (1928) 『公娼制度撤廃の是非』 婦人新報社.

久布白落実 (1918a) 「苦労」『婦人新報』 249,5-8.

久布白落実 (1918b) 「生きんが為に醒めよ」『婦人新報』 254,1-4.

久布白落実 (1918c) 「公娼全廃教育運動の三か年」『婦人新報』 256,3-6.

久布白落実 (1919a) 「基督教婦人矯風会の過去と将来」『婦人新報』 266,3-6.

久布白落実 (1919b) 「婦人と人権」『婦人新報』 267,3-6.

久布白落実 (1920) 「矯風会の二大眼目」『婦人新報』 271,1-4.

久布白落実 (1921a) 「基督教婦人矯風会の本領」『婦人新報』 281,2-5.

久布白落実 (1921b) 「社会改善の歓喜」『婦人新報』 291,2-5.

久布白落実 (1924) 「廃娼の後に私娼をどうする？」『婦人新報』 316,2-4.

久布白落実 (1925) 「自ら進んで特殊国となるか」『婦人新報』 329,18.

久布白落実 (1926) 「四十年の戦」『婦人新報』 344,2-5.

久布白落実 (1928a) 「隣邦中華民国」『婦人新報』 365,2-5.

久布白落実 (1928b) 「純潔」『婦人新報』 367,2-5.

- 久布白落実 (1928c)『女は歩く』市民教会出版部.
- 久布白落実 (1929)「特別講座 労働問題物語」『婦人新報』378,14-19.
- 久布白落実 (1930a)「特別講座 労働問題物語(五)」『婦人新報』383,26-30.
- 久布白落実 (1930b)「東洋労働問題物語(三)日本」『婦人新報』387,20-23.
- 久布白落実 (1931)「廃娼運動物語 (七)」『婦人新報』398,20-26.
- 久布白落実 (1932)「廃娼が出来たらどうなる？」『婦人新報』411,9-12.
- 久布白落実 (1933)「自由論壇 廃娼と経済問題」『婦人新報』418,32-35.
- 久布白落実ほか (1934)「座談会 基督者婦人と社会運動」『婦人新報』432,20-29.
- 久布白落実 (1934)「東北六県の訪問」『婦人新報』441,6-11.
- 久布白落実 (1938)「純潔日本建設の一方面」『婦人新報』487,10-13.
- 久布白落実 (1973)『廃娼ひとすじ』中央公論社.
- 松宮弥平・久布白落実ほか (1933)「ジョンソン報告批評座談会」『婦人新報』421,34-40.
- 村岡花子 (1920)「基督教婦人矯風会第二十八回大会記録」『婦人新報』273,18-25.
- 無署名 (1933)「ジョンソン報告書要綱 調査団の眼に映じた日本事情」『婦人新報』421,14-23.
- 奥むめお (1934)「農村哀し—その対策二三—」『婦人運動』12(9),4-12.
- 鈴木裕子 (1998)『日本女性運動資料集成 第8巻 人権・廃娼 1』不二出版.

### (第3章 注)

- <sup>1</sup> 別の論考でも、「埼玉県のある女工が雇主の非道なあつかいのために明を失って、殆ど片輪になろうとして病院に居ると云う話をきいて唯可愛そうと云う念に充たされましたが女工問題は実に由々しき大事です」(久布白 1921a:4)と述べている。
- <sup>2</sup> 久布白と共闘した廃娼運動家の伊藤秀吉も「労働問題として貴重なる論点は、娼妓てふ人生の最も悲惨な境涯に落ち込む主要原因が『貧困』という経済問題に帰する点である。貧困なるものは個人的な原因もあるけれども、主として社会の生むところで、其責任の大半は社会が負わなければならぬものである」(伊藤 1931:450)と述べた。
- <sup>3</sup> 1869年熊本藩士の子に生まれる。1888年に、結婚するが、1893年に夫と死別。1898年、藩主公爵細川家に奉職、1917年に京都紫野大徳寺へ参禅した。その後、海老名弾正の説教を聴き、1920年、本郷教会に入信、翌21年から同志社の寮母として勤務し、1925年から1940年まで廃娼連盟、純潔同盟、矯風会で働く。1956年に死去
- <sup>4</sup> 1883年、兵庫県に生まれる。臨済宗の僧。1918年に円福寺住職、1923年臨済宗大学学長、1928年、妙心寺派管長に選ばれ1932年までその任にあたった。
- <sup>5</sup> 日本仏教連合会は1900年に仏教懇話会として設立、大日本仏教会を経て、この名称となった。1957年には財団法人全日本仏教会となり、2012年には公益財団法人

---

に移行している。

- <sup>6</sup> 1910年にエジンバラ世界宣教会議でキリスト教伝道に関する世界会議が初めて開催され、国際宣教協議会結成の動きが生まれた。その後、1921年に第1回世界宣教会議を開催。第2回の世界宣教会議（エルサレム会議）では、欧米だけでなく、アジアやアフリカの諸教会も参加した。
- <sup>7</sup> 小崎道雄（1888-1973）は日本組合基督教会の小崎弘道の長男。牧師となり、日本基督教連盟のエキュメニカル運動（キリスト教の超教派による結束を目指す運動）を指導している。
- <sup>8</sup> 鵜崎庚五郎（1870-1930）は牧師である。W.R ランバスから洗礼を受けている。日本人で初めて1920年から亡くなるまで日本人で初めて日本メソジスト教会の監督を務めた。
- <sup>9</sup> 川崎（1928:14）は廃娼は「宗教家や篤志者のみの取り扱う人道問題ではない。政治にも関係し国際上にも影響し教育問題や労働問題や社会問題にもそれぞれ関連する重大問題である」と述べている。
- <sup>10</sup> 1932年に早川かい（1884-1969）によって設立された。現在も社会福祉法人秋田婦人ホームとして存続し、母子生活支援施設、保育園、学童クラブとしての機能を有している。

## 第4章 久布白落実と婦人参政権運動

### はじめに

「私の生涯に、婦人参政権問題は離れがたい一つの問題となった。それは矯風会そのものが婦選とは離れえぬ問題だからである」(久布白 1973:164)。

本章では、久布白落実にとって婦人参政権問題が「離れがたい一つの問題」となっていく経緯、また運動に取り組んだ視点等を明らかにし、久布白が婦人参政権運動において果たした役割を考察していく。久布白自身はのちに「廃娼の為に参政権運動に邁進した」(久布白 1955a:2) と述べたが、婦人参政権運動に取り組む原点に廃娼運動の経験があった。

日本で男性の普通選挙が実現したのは 1925 (大正 14) 年であった。女性が参政権を獲得するのは戦後まで待たねばならないが、戦前に女性たちは婦人参政権獲得のための様々な運動を行っていた。1919 年から 1922 年に存在した新婦人協会<sup>1</sup>では市川房枝、平塚らいてふ、奥むめおらが活躍した。女性の政治的な権利の獲得を目指し、治安警察法第 5 条の改正に成功した。法改正以前は女性には政談集会への参加さえ認められていなかったのである。久布白ら矯風会は 1921 年に日本婦人参政権協会を設立し、1924 年には婦人参政権獲得期成同盟会 (後に婦選獲得同盟に改称) を設立し、大同団結を図り、運動を展開していった。

さて、久布白と婦人参政権運動について、先行研究ではどのように取り上げられてきたのだろうか。政治史など歴史学研究の分野では、婦人参政権運動に関する研究が多く存在している (林 2001、井手 1956、鹿野 1974、松尾 1989、日本キリスト教婦人矯風会 1986、小川 1998、佐治 1986、菅原 1994 ほか)。それらの中で久布白や矯風会に関する論及が多いものは、日本キリスト教婦人矯風会 (1986)、松尾 (1989)、林 (2001) などがある。日本キリスト教婦人矯風会百年史には、会の婦人参政権運動は「先駆者的役割」を果たしており、「関心の高かったひとびとを過激な言動ではなく、納得させるかたちをとりながら、核となるメンバーを特にキリスト教界に拡大していった」(日本キリスト教婦人矯風会 1986:507) ことが特色であると記されている。また、久布白落実やガントレット恒子など、「語学に秀で、海外に知己を持ち、情報を得やすいリーダーたちを擁していたことも、組織上の強味」(日本キリスト教婦人矯風会 1986:507) だと述べている。婦人参政権運動を取り上げた松尾 (1989:336) は『婦女新聞』、『婦人新報』の調査の結果、「これまで比較的資料が出揃い、研究も多い新婦人

協会よりも、ほとんど注目されていない矯風会に新しい光を当てることになった」と述べている。その中でのちに婦人参政権運動の中心的団体となった婦選獲得同盟設立において「矯風会の幹部が果たした役割の大きさ」や「久布白の類まれな人柄」（松尾 1989:386）を評価している。久布白の運動について比較的詳細に記述されているが、政治史研究としてのものであり、運動における福祉的な視点などには触れられていない。林（2001）は久布白の婦人参政権運動に言及し、久布白の法意識を考える上での原点として、三澤千代野事件と飛田遊廓問題のいずれを重視するかについて論じている。日本キリスト教婦人矯風会（1986）等の先行研究では飛田遊廓問題が婦人参政権運動に取り組むきっかけであったと位置付けられていたが、林は三澤千代野事件の重要性について指摘している。

このように先行研究は存在するが、久布白と婦人参政権運動について「運動と福祉」という視点から詳細に分析した研究は管見の限り見出すことが出来ない。久布白と婦人参政権運動に関する研究が少ない原因の一つとして、久布白が「参政権運動では矯風会はむしろ後輩である。この前新婦人協会、無産婦人同盟等治安警察法第五条の撤廃等は既に為されて居たのである」と述べた（久布白 1955b:6）ように、久布白ら矯風会が本格的に運動に取り組むまで少し時間を要したこと、また婦人参政権運動の歴史では、新婦人協会でも活動し、1930年に久布白から婦選獲得同盟の総務理事を引き継ぎ、戦後国会議員になった市川房枝が注目されることが多いということも挙げられる。しかしながら松尾（1989:343）が「この請願運動において、『団体としてよく協力してくれたのは基督教婦人矯風会であった』と『市川房枝自伝』（五十七ページ）は特記している」と述べたように矯風会は治安警察法第五条改正のための請願運動に積極的に協力していた。また久布白は後に他の婦人運動家たちに働きかけ、運動の中心組織となる「婦選獲得同盟」の設立に携わり、その総務理事を5年間務めている。その果たした役割は看過できない。

## **第1節 婦人参政権への目覚め**

### **1 飛田遊廓許可取消運動の失敗**

1916（大正5）年、矯風会総幹事に就任後、久布白は五銭袋運動等を通して、「廃娼ひとすじ」に突き進んでいくように思われた。しかしながら飛田遊廓許可取消運動の失敗、三澤千代野事件での裁判の敗訴など早くも障壁にぶつかることになる。

1916年4月15日、大阪府庁が飛田の地2万坪を遊廓敷地として許可したことを受け、矯風会は1917年10月30日まで請願など反対運動を行なったが失敗した。久布白は、飛田遊廓の1年有余の戦いの敗北の教訓は女性が「無知」であったことであり、「法律」、「己の責任」、「社会の実情」、「罪惡の深み」、「当然与えられる権利」を知る必要があるし、教えていかねばならないと考えた(久布白 1917b:5-6)。運動の失敗により、法律や権利に関する教育の重要性に気がついたのである。その後開催された矯風会全国大会では飛田の遊廓地を眺め、公娼全廃の祈祷会を行ない、久布白は「私共も選挙権を有する迄にならなければ凡てがむなしの望となるのです」(みどり 1918:19)と発言した。また運動に失敗した理由について後に次のように記している。

之は全く我等に力なきが故である、即ち我等は国是を定むる政治に関し全く無能力者であるからだ、我等は是非ともこの力を得る為に祈らねばならぬ、とこの時以来、私の心の奥底に我国五万の不幸なる婦人奴隸の解放を断行する為に、我国の女性が、是非とも参政の権を得ねばならぬと云う考えが強く根ざし始めました(久布白 1924e:32-33)。

このようにこれまでの廃娼運動に限界を覚え、全国大会の後に「進んで婦人参政権の問題すらも、今や殆ど時の問題となって居る有様です」と述べた(久布白 1918:6)。また、久布白(1922a:6)は「私共は滲々と悟りました、我が家を守る為に、我が息子を娘等を守る為に、母は、妻は、是非とも力を持たねばならぬ、国民として我が町を、我が居住の地を安全に保つために、一票の市民権を持たねばならぬと云う事です」と記したように、実際の経験により婦人参政権の必要を感じている。

## 2 三澤千代野事件と婦女保護への視座

久布白の法律に対する意識を高めた、もう一つの出来事は三澤千代野事件である。1917(大正6)年、横浜の三澤千代野という少女が客座敷には出さないという条件で茨城県の宿屋に下女奉公に出されたが、酌婦にされ、次々と転売され、売春を強要された。キリスト者であった母親が矯風会に救済を求めてきたため少女を慈愛館に引き取り、その後矯風会は「我国の娘で自ら貞操を守るの覚悟さえ在るなれば、国家は之を保護する責任ありとその信念の下にこの娘の為に試訴」(久布白 1924e:19)を起し

た。5 年にわたる刑事訴訟であったが、微罪不検挙となる。この事件で明らかになったのは「田舎の娘等間に女中奉公と云う名の下に、又給仕女と云う名の下に事実上の人身売買が行われていること」と「貧家の娘であれば、僅々四五十円の金で、娘の貞操を勝手にして怪しまぬ、社会の状態」であった（久布白 1924e:19）。この事件において、最後に大審院から同じく微罪不検挙の通知を受け取った時、「私共ははじめて、我国に於ける、この問題に対する道德觀念の到って低級な事と、同時に婦女子の貞操保護に関する法律の不備なること」（久布白 1924e:20）が明らかになった。この事件が久布白に与えた影響は大きく、この時点で久布白の中に婦女保護の視点が存在した。婦女保護のための法律の必要性を痛感した久布白はその後国際連盟の「婦女及び児童売買禁止に関スル国際条約」（1921 年調印、1925 年 10 月 21 日批准）を目にする機会があり、議員や弁護士との協力を得て研究し、「婦女ノ人権保護に関スル法律案」を作り議員に托すということを行なっている。その条文は 7 条からなり、以下のようなものであった（久布白 1927b:88）。

第 1 条 自己若くは他人の情欲を満足せしむる目的を以て婦女を雇入れ、又は略取若しくは誘拐したるものは、仮令本人の承諾に基く場合と雖も二年以上の有期懲役に処す。

第 2 条 婦女を欺瞞し、若しくは強迫し、芸娼妓営業を為さしめ、又は演芸場、寄席、活動写真、料理店等、客の来集を目的とする揚屋の雇人たらしめる者は十年以下の懲役に処す。

第 3 条 婦女を勧誘し又は強迫して密売淫を為さしめたるものは二年以上の有期懲役に処す。

第 4 条 芸娼妓にして廃業せんとする時、又は第一条第一項に列記する揚屋の雇女にして解雇を求むるとき、之を妨害したるものは六ヶ月以上七年以下の懲役に処す。

第 5 条 未成年の婦女と雖も、親権者其他尊親族の許可を要せず芸娼妓営業の廃業を為し又は第二条第一項に列記する揚屋の主人に対し、解雇を求むることを得。

第 6 条 婦女の親権者其他尊親族と雖も前第二条乃至第四条の規定に違反するときは他人が違反したる場合と同じく之を処罰す。



第7条 本法に規定する罪は未遂と雖も之を罰す。

久布白(1927b:89)はこの法の中で、「最も注意すべきは、第六条です。即ち父母が其娘を売りし場合も他人と同様に罰すると云う一条です」と述べている。今までの法では未成年者が芸娼妓になるには親権者の同意が必要であった。それは同時に、親権者の同意があれば娘を芸娼妓にさせることができるということを意味しており、久布白はそのことを批判的に見ていたのである。(この法案は第45議会に提出。審議未了、委員付託となる)。

この事件と飛田の失敗を踏まえ、「失敗に失敗を重ねて、真実学び得た事は、力の必要と云う事です、如何に正義であり、人道で在っても、其処に力が伴わなければ、其の正義も人道も実行する事が出来ませぬ」(久布白 1921b:7)と述べている。廃娼も婦人の保護も女性に政治的な力がなければ実現することは出来ないと認識したのである。

また、「嘆願請願の百万よりも唯一票の力はより大なる」と感じた久布白(1924e:58)は、1920年4月の矯風会全国大会の開会式で「我が国キリスト教婦人矯風会の二大目標たる公娼制度全廃と酒造廃止とは婦人参政権獲得の暁に至りて其の成就を見得べし」(村岡 1920:19)と訴えた。婦人参政権獲得を矯風会の綱領の一つにする件で大会の承認を得る。この大会でのこと、新婦人協会結成、治安警察法の法改正の請願があったことを受け、久布白は次のように述べた。

私は永い間この問題については考えて居りましたが、然しいつも尚早という感じで打ち消して居りましたが、この春我国の職業婦人の統計を見るに及んで最早決して尚早ではない、むしろ手遅れだと云う念を強くしました。殊に私共の志す酒造全廃、公娼全廃の如き此れなくしては殆ど不可能だという結論に達して、この四月の大会には会頭の留守をも省みず、大胆に所信を披瀝した訳でした(久布白 1920b:5)。

それまで久布白は『婦人新報』において廃娼問題を中心に執筆していたが、これ以降、婦人参政権に関する論考や記事<sup>2</sup>を数多く執筆していくのである。

久布白は海外生活の経験の影響もあり、海外に関する記事や論考を多く執筆するが、1918年、英米における婦人参政権に関する記事を『婦人新報』に掲載していた。その

頃既に婦人参政権に関する情報を収集していたのである。

また、婦人参政権に関して「私共は是非この問題には婦人が進んで当らねばならぬと思って居ります」と述べ、その道程として「先ず婦人に政談演説聴講の自由と、一般高等女学校に我国の国政に関し、又政事に関し国民として必要な課目を設けて、市民教育を施すの必要を切に感ずるものです、普選すら大正十四年説などが勢いを張る今日です、世界の大勢を観る時に、実に口惜しき限りですが、我国では一般人心に政事は我物なり、国政市政は我義務なりとの観念を打ち込むには、是非ともこの教育から進まねばならぬでは有りますまいか」と記した（久布白 1920a:4）。久布白は教育を重視しており、まずそこから進む必要性を主張していくのである。

## **第2節 日本婦人参政権協会の設立と欧米視察**

### **1 日本婦人参政権協会の設立経緯**

1920（大正9）年4月にロンドンで開催された第10回万国基督教婦人矯風会大会に矯風会のガントレット恒子<sup>3</sup>が参加、その後6月にスイスのジュネーブで開かれた、万国婦人参政権協会<sup>4</sup>の大会に招かれ、出席した。第一次世界大戦後初の大会で東西から600あまりの代員が集まった様子を見てガントレット（1921a:12）は「参政権というものは特種の婦人のみに要求するものではなく、凡ての女性に当然与えらるべきもの」とであると深く感じた。その大会で1人の婦人が「私共が四年前に参政権を持っていたらこの戦争は防ぎ得られたのではないだろうか……世界各国の婦人が参政権を得て世界平和確立のために尽力することを望む」と語ったのを聞き、今までの漠然とした婦人参政権に対する自分の考え方を恥じて、早速日本に帰って運動を起そうと決心したと後に振り返っている（ガントレット 1949:117）。ガントレット自身は平和問題との関係から婦人参政権に興味を抱いたことが窺える。この大会出席により「現在の社会を理解する上にも、私共の子どもを教育する上にも、又、矯風会の趣意を徹底させる上にも、参政権の欠くべからざるものであるという事を確信し、自分も及ばずながら力の限りこの運動の為に尽さなければならない」と思うに到った（ガントレット 1921b:8）。その後『婦人新報』で「英国婦人は如何にして参政権を得たるか」を連載し、イギリスの状況を紹介する。その大会上で日本も万国婦人参政権協会に加盟するよう勧められたため久布白の名を伝え、了解をとることを約束した。ガントレットはイギリス国籍のため、協会の加盟に際して日本国籍の人が必要だったのである。ガン

トレットは久布白に婦人参政権協会の名義人になるよう勧誘したが、久布白はなかなか応じなかった。その責任の重さから、またその年は久布白にとって多事なる1年であったことも影響していると思われる。1月に東京市民教会<sup>5</sup>の定礎式、2月に長女の民子が誕生したが、6月に夫が死去し、教会の建築費の返済に追われる日々を過ごした。しかしながらその後、承諾し、次のように述べた。

私は自らその任に堪へない事を知つて居ります、然しながら、私は、我国の婦人特に淪落の境遇に陥られ居る婦人に対しては責任を感じずる者です、我国より公娼制度を撤廃し、海外に在る不幸なる姉妹等と呼び戻し、我国の処女をして、皆少くとも武士の娘の意気と品位とに返らす迄は我が務は止まざる事を感じずるものです。私共は、男子も女子も、共に神の子たるを信ず、と云ふ矯風会根本の信條に基き、更らに根本的に打ち込んで、我国の婦人問題に解決を与へねばなりませぬ（久布白 1921b:7）。

この記述から久布白は公娼制度や海外における日本人女性の売春問題などの解決の為に婦人参政権運動に取り組む必要があると考えていることが窺える。

1921年の矯風会全国大会で「公式に矯風会は(万国)婦人参政権協会に加入し、我会の働きの一として、この事を採用する事」（久布白 1921c:7）となった。各支部で法律部を設置し、理解ある法律家を招いて研究していくことや身近な村会、市会から入って勢力を扶植して行く必要性を説いていた。7月の矯風会第1回全国常置員会では、どのようにして万国婦人参政権協会に加盟するかという議題が出され、ガントレットは速やかに会を組織する必要があると主張した。こうして矯風会内に「日本婦人参政権協会」が設立され、法律部に属する1つの独立の会となり、全国の30余名の会員が参加した。目的は「婦人の解放、教育、経済、職業、政治上の機会の均等を確立せしむるために正当穩健なる方法により婦人の参政権を獲得する」（久布白 1922a:2）ことであった。

1922年4月の矯風会全国大会で婦人参政権の協議会と議事が行なわれ、婦女保護案と請願に力を入れていくことが決められた。協会の組織方法や草案修正は委員付託となり、規則草案は5月までに各支部から意見をまとめて送ってもらうことになる。協会の組織を個人本位にするのか団体本位にするのかが議論されたが、まとまらず継続

審議となった（翌 1923 年、個人本位に決定）。

## 2 1922 年の欧米視察

久布白は林歌子<sup>6</sup>とともに、フィラデルフィアで開催される第 11 回矯風会世界大会に参加し、その後婦人参政権の研究を主な目的として欧米視察に出かけた。これは既に参政権を握った欧米の国々の状況を知るために行われたものである。7 月の矯風会全国常置員会で久布白の帰国後に「日本婦人参政権協会」の組織や運動方針を定めることが決定される。

当時の久布白は「婦人の政治教育を如何にして行う可きかが最大の問題」（久布白 1931:111）だと考えていたため中学・専門学校を訪問し、市民教育を実施する各クラスについての研究を行ない、各都市の婦人クラブで候補者に政見発表をさせる集会に参加するなど、アメリカでは婦人の政治教育を中心に学んだ。「この旅行中自分を最も啓発してくれたのは英京倫敦の婦人参政権協会万国本部の幹事ボムバス女史であった」

（久布白 1931:112）と述べたが、その後イギリスで万国婦人参政権協会本部の活動状況を見学し、他の参政権運動者を紹介してもらう。1923 年 3 月に帰朝、大講演会を開き、決意を持って今後日本に婦人参政権を取り入れるべきことを報告した。「国家も亦母を要す」と題して講演を行ない、「希くは皇天上帝の助けをもって我が国の女性の人権確立の成就せんことを祈る」と結んだ（久布白 1973:150）。この欧米視察については『婦人新報』で「拾年ぶりに故国を離れて」を 9 回にわたり、また「去年の今頃」を 3 回にわたって執筆している。欧米視察を終え、婦人参政権獲得への意識を高めた久布白は次のように述べている。

国民禁酒と云い、男女の純潔と云い、万国平和と云い、いずれも婦人の自覚なしで出来ることは一つも有りませぬ。婦人が人として立ち、市民として立つ時に始めて成る事は万国の事実を徴して明瞭です、米、英、独、和、カナダ、オーストリア、ノルウェー、瑞西、此等の国々は皆婦人に参政権を与えました。何処に行っても其の結果は良好です、婦人参政権は天下の大道です、遅れ馳せながら私共も全国挙って此れを求めましょう、其の運動に着手しましょう（久布白 1923b:7-8）。

久布白は各国の状況を知り、婦人参政権を獲得して初めて矯風会の三大目標の実現

が可能になると確信したのである。それまでは男女間の法律改正運動への協力、会員に対する政治教育や『婦人新報』での婦人参政権に関する論考の発表等に留まっていたが、実際運動に着手することを決意した。

由来婦人参政権は、いつも人道戦と密接な関係が在ります、黒奴廃止運動と云い、禁酒運動と云い、最近平和運動と云い、いづれも世界人道にとって比類なき大々的人道戦です、今日この世紀の奴隷たる公娼制度廃止と参政権が又々手を携えて我国に於いて歩み出すのも不思議な事ではありますまい（久布白 1924e:54）。

久布白は欧米視察で学んだ海外の参政権運動に関する知見を日本の婦人参政権運動に反映しようと考えていた。

1923年4月の矯風会全国大会で、久布白は「婦人参政権と世界の平和」と題し、講演を行い、欧米視察について報告した。海外の例を挙げ、「我国に於ける男女の機会均等の必要」を主張し、「矯風会員がまづその先覚者たるの自覚に立ち、更に三千五百万の同胞婦人と手を取り力を合せて、我が帝国の政治が真に道德と手をとらんがために尽くし、更に世界の同志と協力して世界の平和、世界の禁酒、世界の純潔の大目標を貫徹せん」と述べた（千本木 1923:47）。この時点で矯風会外の婦人たちと共に取り組む必要性を感じていた。後にも1922年の渡米後に「これは国民運動だ、宗教の範囲其の他を離れ、皆一緒になってやらねばならぬ」と考えたと言っている（久布白ほか 1930:29）。また大会上で婦人参政権の運動方針について協議し、日本婦人参政権協会を個人組織に決定する。運動方針は「妻の財産権、男女道德の平等、婦女保護法案、禁酒法律、公民権の向上をはかる」こと、「市民教育の必要」を挙げ、「対議会運動」と「教育運動」の二本柱で進むことを決定した（千本木 1923:50）。この欧米視察で久布白は禁酒の必要性にも改めて目覚めている。7月の第3回常置員会でも婦人参政権に関する協議を行ない、久布白(1931:121)は「この運動丈けは、必ず三千五百万の婦人と共に為さねば成就せぬものである」と主張した。秋に東京市内の婦人団体を招き連合運動の相談をする計画を立てていたが、関東大震災発生のため実現は1年後となる。

### 3 久布白の婦人参政権観

ここで久布白の婦人参政権観をもう少し見ておくことにする。久布白は「参政権の第一義は実に機会の均等に有る」(久布白 1921d:4)と述べており、男女平等の実現のために婦人参政権運動を獲得しようと考えていた。また、当時の日本婦人は何らかの形で官公職に入っており、能力の進歩と共に門戸は開かれようとしていること、婦人が既に公権を有し、使用しているのは大蔵省で営業税の審査員を選ぶ権利は男女同等であること等を知り、市町村政の知識を持ち、まずこの方面から進んでいかねばならないと久布白は考えた。既に開かれた方面から着実に進むという現実的な姿勢が窺える。当時の市町村の公民は「満 25 歳以上にして一戸を構え、かつ治産の禁を受けざるもの」で、久布白は婦人でこの資格を有する者は公民の義務も権利も有するべきで、婦人で戸主や世帯主の人々は当然だが、婦人の大多数を占める人妻も婦人参政権を得なければならないと考えた。独立の職業婦人も主婦とともに、つまりすべての女性が婦人参政権を得るよう努めていく必要があると主張した。「国家の大多数の代表的婦人が、我家を思う心を以て、我村を思い、我町、我国を愛して之れが改善進歩を量るために力を尽す」(久布白 1921d:6)、これが久布白の考える婦人参政権であった。

『婦女新聞』の婦人参政権特集号の巻頭で「婦人参政権要求の立脚点」として、「個人の要求」、「道徳的立場から」、「真の平和を将来するため」を挙げた(久布白 1923j:3-5)。平和実現のための参政権要求は「矯風会の三大モットーとしての純潔・禁酒・平和にもとづくものであろうが、従来 of 婦人参政権運動にみられない新鮮な論点」と評価されている(松尾 1989:369)。

また「参政権運動は婦人運動の大いなる手段の一つです。これに達する為に、多くの階段を有し、又獲てからこの武器によって更に婦人の領域を開拓せらるるのです」と述べている(久布白 1923e:4)。久布白にとって、婦人参政権獲得は目的ではなく、あくまでも手段であった。婦人参政権を得て「先ず市民としての新しき自覚に目覚め」(久布白 1923e:5)、社会に進出し、さらに公娼制度の撤廃、女性の権利の拡大などを目指していこうという考えであった。

久布白は、婦人参政権運動は権利の上から要求されていたが、「けれど、日本では、義務の上から要求するのが至当の様に考えられます」と主張した。なぜなら元来日本婦人は家の中に押し込められていたため、「自分の権利を主張する事には迂闊であります、反対に義務の観念は非常に強い」(久布白 1925e:7)と述べている。また「国家

は家庭の集合であって、家庭に於て恰も夫と妻とが協力相協力して平和を保つ様に、国家の政治に於いても女子には女子としての任務がある。児童問題、教育問題、社会風教上の問題、其の他、男子の力を及ばぬところに女子の力を持っていることは非常に多い」(久布白 1925e:7) と指摘した。この記述には現代的視点からすると女性の役割固定化につながる等、単純に「進歩」として手放しで評価出来ない内容も含まれている。だが、従来用いられることのなかった女性の力を積極的に活用しようと考えており、当時としては進歩的な考え方であった。

### 第3節 他団体との共同運動—婦選獲得同盟における活動—

#### 1 婦人参政権獲得期成同盟会の設立

先述のとおり、1923（大正 12）年 9 月に関東大震災が発生、久布白は他の婦人運動家らに働きかけて東京連合婦人会を組織し、救援活動に取り組んだ。久布白（1973:169）が「大正十二年九月一日の大震災は、すべてを転倒させたが、婦人運動もたしかに一大変動をした。…はじめて東京連合婦人会なるものができたのをきっかけとして、参政権運動もはっきりとしたスタートをきった」と後に振り返ったように大震災が運動に与えた影響は大きく、これを機に婦人たちの団結も高まっていく。その後東京連合婦人会内に政治部を設け、講演会等の啓発活動や会員による研究を行なった。

1924 年の段階で久布白（1924a:7）はまず「我等の足許なる、最も近き市町村に於て、一個の人として又、市民として認めることを要求します」と述べ、市町村における婦人の公民権を求めている。同年の矯風会全国大会開催時には日本婦人参政権協会の会員募集に力を入れていこうという考え、今後為すべきこととして市民教育の普及、法律・職業・教育の門戸開放、財産権の確立を挙げ、3500 万の女性に広めていくための公民教育、婦人参政権に関する書物の必要性についても触れた。これは婦人参政権叢書一『公娼廃止より婦人参政権まで』の出版によって実現する。

全国大会開催時には、まだ矯風会外の団体の女性たちとの合同の必要性は主張していないが、11 月 2 日の日記に久布白は「普選は今冬政府案として出るそうな、震災で途絶えた運動、起さねばならぬ、どうしても婦人参政権の団体の糾合にかからねばならぬ、会の内の議も定まった、腹案も出来た。一日も猶予されない、直ぐ行動にかかろう」(久布白 1928b:6) と記していた。そのように考え、代議士を訪問し、意見を交

換した。その後、久布白は自身とガントレットの2人の名義で市内の有識婦人たち350名ほどに手紙を出した。「婦人参政権の要求」、「市町村に於ける婦人公民権の承認」など、議会で婦人の要求する諸問題を相談するためである。11月13日に婦人参政権対議会運動懇談会を開き、60名が出席した。久布白は日本婦人参政権協会の沿革や懇談会の趣旨について「我国に於ける婦人参政の問題は最早議論の余地なく、只実際問題としてのみ現存しているのである。故に此の際普通選挙も愈々承認されようとしている第五十議会を前にして我国の婦人が一致してこの婦人の政治的自由の獲得の爲協同することが出ればそれは非常な力である」（婦人参政権獲得期成同盟会 1924）と述べた。懇談会において東京婦人連合会政治部の河崎なつ、山高しげりや市川房枝らと「共同の目的の爲に一致してやろう」（婦人参政権獲得期成同盟会 1924）ということになり、新団体設立を決定した。男子の普通選挙の成立を目前に「婦選なくして、何の普選でありましょうか」ということ、また「一般婦人の爲に、一般婦人によって行われる婦人参政権獲得の一大運動」の必要を感じていた。数回の準備会を経て12月13日に「婦人参政権獲得期成同盟会」を設立し、その総務理事に久布白が選出された。

## 2 久布白の政治観の形成

一方で1925（大正14）年4月の矯風会全国大会では「日本婦人参政権協会」の組織を今後いかに発達させるべきか、従来のように矯風会内に継続するか、新たな団体を作るべきかが問題となる。しかしながら決定出来ず、常置員会に一任となるが、ここでも決められず特別委員会に一任した。その後、日本婦人参政権協会が継続することになったので、久布白は同盟会の総務理事は辞任するのも止むを得ない旨を申し出るが、同盟会の委員たちが協会側に交渉し、協会の代表者を辞し、引き続き同盟会で総務理事を務めることになる。4月19日には婦人参政権獲得期成同盟会が婦選獲得同盟と改称し、一時的な運動連合体ではなく永続的団体となったが、「これは初めから寄合地帯です。運動の都度一致するのが得策でないかとは始めから私の持論でした」（久布白 1925d:11）と述べたように久布白自身は一時的な団体を望んでおり、この時点で同盟のメンバーと組織に対する考えの相違も存在していた。同盟が婦人参政権運動の主流となっていくが、久布白はどのような思いで運動に関わっていたのか。4ヶ月の対議会運動、宣伝運動、財務運動を振り返り、『婦人参政権獲得期成同盟会会報』に次のように記した。



この度の運動で最も力をそそいだ事は、婦人一般の一致した運動でありたいと云う事でした。それ故此度の会に参加したものは、思想におき、職業におき、宗教におき、従来とても一致の行動を執る事の困難と思わるる方も、皆悉く小異を捨てて大同につき、唯一つの婦人参政権獲得を目的として進みました。又会名を一つにし得ざる普選運動の他の団体ともその行動に於いて出来る限り一致の方針を取る事につとめました・・・婦選が完全に獲得せらるるまで、絶えず議会に向かって運動を継続すると同時に、全国の婦人に、政治について其の知識及び理解を普及し徹底するまで継続せねばなりませぬ、職業や階級や都鄙の別なく、所謂三千万の婦人が国政に対して我がことと云う自覚を得るまで、押し進められねばなりませぬ（久布白 1925a:1）。

久布白は議会運動だけでなく、あらゆる層の女性たちに対し政治教育を行なう必要性を感じている。また『婦人新報』で日本婦人参政権協会の発達は継続していくが「各自個人として、この新しき一団（筆者注：婦選獲得同盟）と一つになり、少なくとも来る議会即ち第五十議会に対しては、団結して一致の運動を取り女性の名の下に行動を共にしたい」（久布白 1925b:9）と述べた。他にも「参政権は国民大の問題です。之には宗教・無宗教の別は有りませぬ」（久布白 1926:7）と述べており、これらの記述から久布白はキリスト者で矯風会の人間であるが、広い視野を持ち、宗教や思想を超えて様々な立場の女性たちと団結して、運動に取り組みたいと考えていたことが窺える。

市川（1929:5）は矯風会全国大会を傍聴し、「（久布白は）日本婦人参政権協会は当然新しく生まれた婦選獲得同盟と合同すべきものとの解釈から金沢に於ける矯風会大会（筆者注：1925 年）にその提案をした所、反対があつて遂に今日に到っているがその考え方は今も同様であるとして声涙ともに下るの熱心で述べられた」と記している。同盟の会員は「当時 271 名、内約 200 名は矯風会員」（日本キリスト教婦人矯風会 1986:529）であり、矯風会内で久布白は「日本婦人参政権協会の解体、同盟への合流」（日本キリスト教婦人矯風会 1986:529）を唱えていた。しかしながら、反対もあり協会は独自の運動もないまま他団体との共同運動には名を連ねながら存続していく。

男子の普通選挙法が成立した 1925 年に久布白は「全国的政治教育の必要性」を主張し、次のように述べている。

政治は、我々の生活そのものでなければなりません。即ち私共に生活の安定を与える基礎、唯に生命財産の安全を保証する、警察権のみでなく、我等の職業より危険を除き、又失業の不安を除くもの、我等の収入額に最低額を定めて、生活の必然的の墮落を未然に防ぐもの、母子の身体の保護、市町村の衛生設備、教育設備、道路、住宅、食糧万端にわたって、今日の政治なるものは、其職責を有し又権利を有するものです(久布白 1925c:10)。

久布白は、政治は自分たちの生活を支える身近なものであると捉えている。従来一般的に政治と考えられたのは政党の争いであるが、久布白は政治に対して根本思想に変化・進歩が起こらなければならないと考えていた。

1927 年の矯風会全国大会では最終日に日本婦人参政権協会について議事が行なわれた。日本婦人参政権協会と婦選獲得同盟の役割の重複についても議論されたが、久布白は共に力を合わせる必要性を訴えた。久布白は普通選挙について次のように記述している。

普選は最上の政事教育なりと云う事だ、此度の如き言論戦としては特に著しく感ぜられる。与党の総理を始め三大臣、四大臣打ち揃っての地方の大講演会は勿論、民政党の全国行脚と云い、無産政党は云うも更なり、各政党が其雄をすぐって全国各都市、郡部町村まで大々の政談演説はいやでも全国民を教育せずに止む事は出来ぬ。これ程身にしみた政治教育は無い(久布白 1927a:1)。

1928 年 2 月に普通選挙法成立後初めての総選挙があり、『婦人新報』359 号(2 月号)で普選の特集を組む。久布白(1928a:5)は「女子を除いた国民半数の選挙」であることを強調しつつ、「数年来特に、我が矯風会の運動は、禁酒にをき又、廃娼にをき日一日と政治運動と離るる事が出来なくなった」、「神の御旨を世に為さんとするに、之れを単に教会の門内に止めず、此れを国家の風俗習慣、政治法律にまで到達せしめ、即ち全く国を神に捧ぐるに、我等の運動は政治を他所に見て之を為すことは出来ない、何処々々までも政治の内に入り込まねばならぬ」(久布白 1928a:3)と述べている。また「伝道を選ぶが故に政治を除外せねばならぬ時代ではない。政治は国民のものだ、

政治は民衆のものだ、大工も左官も皆一票の持主だ、我等の日常生活の一部となって仕舞ったのだ、此の際生活の全部に対し、人格の全部に対し責任を有する牧師伝道者がこの点だけを除外してよい筈がない」(久布白 1928a:5) と記したように、キリスト者が政治に関心を持つ必要性を繰り返し訴えた。

1929 年、議会運動を振り返り、久布白は次のように記した。

特に今年我らが学ぶことは、全国各地に於いて、その土地々々の選出代議士に、周到なる注意を払うの必要である。其の改選期におき、また其の政見発表の際に於いて、明らかに禁酒、娼娼の問題に関して其の言責を得ておくの必要がある・・・又同志代議士を、一方我等は、有ゆる合法的方法により援助せねばならぬ。其の最も大なるものは、輿論の喚起であらう。これが為めには、中央は勿論、全国津々浦々に到るまで新聞、雑誌、ビラ、演説会等、有ゆる方法を以って之れが声援を為すことである。個人的手紙、電報等も亦、決して無益でない。即ち我等の代議士たることを、事実 に 於いて証明し、且つ又自覚して貫うことである (久布白 1929:7)。

婦人参政権を獲得していない現段階で女性にとって有効な策は同志の男性の代議士を応援することであり、その具体的方法について考えを述べているが、他の婦人運動家たちとも共通の見解である。この年の矯風会全国大会には婦選獲得同盟から市川房枝、藤田たき、塩原静が出席している。協議の中で矯風会と他団体の関係をめぐり日本婦人参政権協会を解体すべきか継続すべきか意見が二分したが、会での採択の結果、キリスト教的旗色明らかな協会を存続することに決定した。

### 3 婦選獲得同盟総務理事の辞任

1930 (昭和 5) 年 2 月に総選挙が実施されたが、久布白は『婦人新報』で総選挙と婦人の関係について「第一は、我党の者が欲しい。第二は、買収を止め度い。第三は棄権を少なくし度い。この三つは我等婦人としても直接間接に考えて見たい、又出来るだけやる必要がある」(久布白 1930a:6) と述べた。そして婦人の間に政治の根本である一票の力について教育運動を起こす必要性を主張し、総選挙が日本婦人の政治的責任を喚起する一歩となるようにと矯風会の会員たちに訴えかけた。

4 月の矯風会全国大会では、日本婦人参政権協会が矯風会と全く別個のものか、法律部の一部かという根本的問題に関する議論が沸騰する。そして「婦人参政権協会は我が日本に於ける婦選運動の促進に資せんため他の婦人参政権団体と協助援助を辞せざる事」が決議された(無署名 1930:30)。協会の新任理事としてガントレット、小崎、久布白、古田、川崎、井深、千本木、宮崎、時田が選ばれた。そのような中で第 58 議会に対峙し、同 4 月に第 1 回全国婦選大会も開かれている。総務理事である久布白は議事の座長になり、大会では婦選獲得促進の方法、政治教育普及の方法、獲得後の行使などが協議されている。第 58 議会で婦人公民法案は衆議院本会議で初可決されたが、貴族院で審議未了となった。

その後、日本婦人参政権協会の陣容を立て直すため 1930 年 6 月 9 日矯風会理事会で久布白の進退を決定し、以下のように翌 10 日に久布白は婦選獲得同盟の総務理事を辞任する旨の声明(久布白 1930c:8)を協会に提出した。

#### 婦選獲得同盟への辞表

私儀

此度重ねて総務理事として御推挙を辱く致しましたが、左の理由により御受け申上げ難く存じますので、遺憾ながら御免しを願います。

一、同盟の規約はたとい内規といえども個人の為に便宜の処置を採るは同盟の性質上慎まねばならぬ故

一、私の所属する最も関係深き日本基督教婦人矯風会及び基督教界内に婦人参政権運動を充実せしむる必要を痛感する故。

五ヶ年半に亘る浅からぬ御厚誼に対し万感胸に迫る思があります。しかし今日の場合如何ともすることが出来ませぬ、苦心熟慮の末、この結論に到達いたしました、どうぞこの意を諒として然るべく御取計いを願います。

昭和五年六月十日

久布白落実

婦選獲得同盟御中

これを機に日本婦人参政権協会は「日本キリスト教婦人参政権協会」と改称した。婦選獲得同盟の新しい総務理事には市川房枝が就任するが、市川(1930:8)は「日本婦人参政権協会がキリスト教をモットーとして矯風会内に立て籠ることは退歩であり、

本人並びにその団体の意志にそむいて久布白氏を引き戻したことは全日本の婦選運動をかへり見ずして自らの団体を樹てるに急であるのそしりを免れないであろう」と会を批判した。『日本キリスト教婦人矯風会百年史』にも、久布白が婦選獲得同盟と矯風会という2つの団体の狭間にあったということについて記されている<sup>7</sup>。先述したように組織に対する考えの相違はあったが、久布白は「職業や階級や都鄙の別なく、所謂三千万の婦人」、「婦人一般の一致した運動」（久布白 1925a:1）という言葉を繰り返し用いたこと、「婦選運動は宗教を超えて全日本婦人の運動でなければならぬと信じて創立に参加」（XXX 1930:11）したことから考えても久布白自身は共同運動に他の婦人たちと取り組んでいきたいと思っていた。しかしながら、矯風会が日本婦人参政権協会という組織を立て直すにあたって、久布白を必要としており、久布白個人と矯風会という団体の意志に相違があったのである。久布白（1921a:3）は婦人参政権運動に本格的に取り組む以前から「私は何故に全国のキリスト教徒が結束して、この普選運動を起さないか不思議でなりませぬ」と述べており、同盟の総務理事辞任以降、キリスト教界への働きかけを中心に行なっていくことになる。

## 小括

以上、久布白と婦人参政権運動について分析を行ってきた。『『なかなか納得しない代わりに、今度自分が斯うと信仰すればどうしても人を動かさないでは置かないのが久布白さんだ』という既に定評のある久布白夫人」（宮川 1925:24）という記述がある。様々な経験から婦人参政権の必要性を痛感し、矯風会内にとどまらず、宗教や思想を超えて人々に働きかけ、久布白にとって婦人参政権が「離れがたい一つの問題」（久布白 1973:164）になっていく。

まず、久布白が婦人参政権に関心を持ったきっかけには公娼制度の存在や婦女売買に対する問題意識が存在していた。久布白は廃娼や婦女保護は法律による裏付けなくして解決できないものであるということを飛田遊廓許可取消運動と三澤千代野事件の失敗を通して痛感した。久布白の取り組んだ婦人参政権運動にはその根底に常に婦人の権利保護への意識や「婦人向上の一念」（久布白 1953:2）が存在していたのである。また後に「売淫公認の反対とか、小児虐待の禁止とか、老病人の保護とか母子保護法の完備とか人間として当然せねばならぬ」、「法として実施せしめようとするときに、婦人の一票はとなり、又輿論の声となって、国家として之を実施せしむる動力となる」

(久布白 1934:1)と述べているが、婦人問題だけでなく幅広い福祉的視点も存在していた。1930年前後に制定された法律、救護法(1929年)、児童虐待防止法(1933年)を意識した発言であると思われる。1934年の第5回全日本婦選大会では、母子扶助法即時制定を決議し、9月には母性保護法制定促進婦人連盟が結成されている(1937年に母性保護法が制定される)。

また久布白は、特に教育によって女性たちに婦人参政権の必要性を伝え、女性たち自身が力をつけていくことが大切であると考えていた。こういった運動の方法は当時の女性の幅広い意味でのエンパワメントにもつながるのではないか。

久布白は創立時から総務理事辞任時まで婦選獲得同盟の中心的役割を果たしていた。様々な組織の女性たちに働きかけ、共同運動の基盤を創ったのは久布白であり、婦人参政権運動の共同運動の先駆者と位置付けることが出来るのではないだろうか。松尾(1989:386)は同盟会結成が成功した理由について「普選がいよいよ日程に上り、次は婦選という期待感を先進的婦人が一様に抱いたことが、その基礎にあるとしても、具体的には矯風会の幹部が果たした役割の大きさに注目する必要がある」、「矯風会で婦選運動の責任者となった久布白の類まれな人柄があった」と述べたこと、また久布白から総務理事を受け継いだ市川(1974:238)が「久布白氏と私とは五カ年半…獲得同盟の総務理事と会務理事という関係で一緒に運動をしてきた…久布白氏の場合は、私の足りないものを補ってくれ、私は十二分に活動させてもらえた」と述べたことからわかるように、同盟結成、また初期の活動において久布白の果たした役割は大きかった。久布白の宗教も思想も異なる人々と協働・連帯していく姿勢がこれらの評価につながっているのではないだろうか。

また久布白は同盟の総務理事になったとき、「何よりも先ず会の信用」を考え、共同運動に携わった他の婦人運動家たちについて、「いやしくも重要な地位にある人びとには指一本させない意気込み」(久布白 1955b:6)を持っていた。ある代議士が運動に関わる女性を侮辱する発言をした際も事実を確かめた上で翌朝宿所を訪ね、その発言を訂正させている。同盟の中心であった金子(1939:10)は「久布白さんが何かという中央委員全部の人を抱え込んで絶対に責任を持つと言って下さった、この事は本当に肝に銘じています」と後に同盟の座談会で振り返っている。このように久布白がいたからこそ社会における会の信用も保たれ、初期における活動が円滑に進んでいったと言えよう。運動の成功のためには社会全体の理解を得ることが不可欠であり、重

要な姿勢である。

さて、のちに久布白(1973:174)は「みずからが口火役となり、大同団結にいたって産み出したこの婦選獲得同盟の中枢に、しかし最後まで関係することが出来なかった」と述べている。井手(1956:22)は「この間の事情は、無産政党との接触を恐れたため」と記し、鹿野(1974:81)は「矯風会の申し子というべき久布白のこの突然ともみえた決意の裏には同盟の行動への、おそらくはみずからをふくめて矯風会内部の潜在的な不満があった」こと、「婦選運動が同盟ベースではこばれていることへの不満」、「無産運動との連携色をつよめはじめた同盟に、一線を画そうとするうごきが表面化したことにほかならない」と指摘している。しかしながら、筆者は久布白が宗教や思想を超えて連帯することを大切にしていたということや彼女の論考などから、矯風会と久布白の意思に相違があったのではないだろうかと考えている。

次章では、婦人参政権運動の発展とも大きな関わりをもつ、久布白の関東大震災の救援活動の取り組みについて見ていきたい。

#### (第4章 文献)

婦人参政権獲得期成同盟会(1924)「創立準備委員会趣意書」.(財)市川房枝記念会所蔵・

編集・制作(2005)『婦人参政関係史資料Ⅰ 1918-1946』日本図書センター.

婦人参政権獲得期成同盟会(1925)「第一回中央委員会」.(財)市川房枝記念会所蔵・編

集・制作(2005)『婦人参政関係史資料Ⅰ 1918-1946』日本図書センター.

ガントレット恒子(1921a)「万国婦人参政権大会報告」『婦人新報』281,11-12.

ガントレット恒子(1921b)「英国婦人は如何にして参政権を得たるか」286,8-12.

ガントレット恒子(1949)『七十七年の想ひ出』植村書店.

林葉子(2001)「『市民』が『国民』になるとき—久布白落実における『ホーム』論の転回」『キリスト教社会問題研究』50,1-30.

市川房枝(1929)「婦人矯風会と参政権運動—矯風会大会を傍聴して—」『婦選』3(5),5.

市川房枝(1930)「婦選運動の近状を論ず」『婦選』4(6),5-8.

市川房枝(1974)『市川房枝自伝』新宿書房.

井手文子(1956)「日本における婦人参政権運動」『歴史学研究』201,12-23

金子しげりほか(1939)「婦選の思い出を語る」『女性展望』14(4),7-12.

鹿野政直(1974)「婦選獲得同盟の成立と展開」『日本歴史』319,68-85.

久布白落実 (1916) 「公娼廃止と飛田問題」『婦人新報』 232,5-8.  
 久布白落実 (1917a) 「大阪飛田洗滌運動」『婦人新報』 239,4-7.  
 久布白落実 (1917b) 「嗚呼飛田遊廓」『婦人新報』 244,2-6.  
 久布白落実 (1918) 「第二十六回大会」『婦人新報』 253,6-8.  
 久布白落実 (1919a) 「婦人と人権」『婦人新報』 267,3-5.  
 久布白落実 (1919b) 「婦人の権利と公娼制度」『婦人新報』 268,1-4.  
 久布白落実 (1920a) 「民族を担ふて世界へ」『婦人新報』 270,3-6.  
 久布白落実 (1920b) 「動爛の中心に立ちて」『婦人新報』 279,3-6.  
 久布白落実 (1921a) 「基督教婦人矯風会の本領」『婦人新報』 281,2-5.  
 久布白落実 (1921b) 「大正十年の大会を迎へんとして」『婦人新報』 282,4-7.  
 久布白落実 (1921c) 「第二十九回大会」『婦人新報』 284,4-7.  
 久布白落実 (1921d) 「婦人参政権とは何ぞや」『婦人新報』 286,4-6.  
 久布白落実 (1922a) 「日本婦人参政権協会」『婦人新報』 292,2-8.  
 久布白落実 (1922b) 「何故に渡米するか」『婦人新報』 297,2-5.  
 久布白落実 (1922c) 「拾年ぶりに故国を離れて」『婦人新報』 301,18-23.  
 久布白落実 (1922d) 「拾年ぶりに故国を離れて (第二信)」『婦人新報』 302,18-23.  
 久布白落実 (1923a) 「拾年ぶりに故国を離れて(第三信)」『婦人新報』 304,22-27.  
 久布白落実 (1923b) 「只今帰りました」『婦人新報』 306,2-8.  
 久布白落実 (1923c) 「拾年ぶりに故国を離れて(第四信)」『婦人新報』 306,23-30.  
 久布白落実 (1923d) 「拾年ぶりに故国を離れて(第五信)」『婦人新報』 307,20-25.  
 久布白落実 (1923e) 「我等の称ふる婦人参政権」『婦人新報』 308,2-5.  
 久布白落実 (1923f) 「拾年ぶりに故国を離れて(第六信)」『婦人新報』 308,24-30.  
 久布白落実 (1923g) 「拾年ぶりに故国を離れて(第七信)」『婦人新報』 309,23-26.  
 久布白落実 (1923h) 「拾年ぶりに故国を離れて(第八信)」『婦人新報』 310,29-33.  
 久布白落実 (1923i) 「拾年ぶりに故国を離れて(第九信)」『婦人新報』 312,35-38.  
 久布白落実 (1923j) 「参政権要求の立脚点」『婦女新聞』 309,3-5.  
 久布白落実 (1924a) 「市民としての婦人」『婦人新報』 313,4-7.  
 久布白落実 (1924b) 「去年の今頃 (一)」『婦人新報』 313,27-31.  
 久布白落実 (1924c) 「去年の今頃 (二)」『婦人新報』 314,28-31.  
 久布白落実 (1924d) 「去年の今頃 (三)」『婦人新報』 315,20-25.



- 久布白落実 (1924e)『公娼廃止より婦人参政権まで』日本婦人参政権協会.
- 久布白落実 (1925a)「本会の創立より大会まで」『婦人参政権獲得期成同盟会会報』1,1.
- 久布白落実 (1925b)「日本婦人参政権協会の一ヶ年」『婦人新報』324,8-9.
- 久布白落実 (1925c)「全国的政治教育の必要性」『婦人新報』329,9-12.
- 久布白落実 (1925d)「婦人参政権運動を顧みて」『婦人新報』334,10-11.
- 久布白落実 (1925e)「義務としての参政運動」『婦女新聞』1301,6-7.
- 久布白落実 (1926)「第三十五回大会を迎えて」『婦人新報』336,7.
- 久布白落実 (1927a)「普選による府県会議選挙を見て」『婦選』1(9), 1.
- 久布白落実 (1927b)「矯風問題」長谷川良信編『社会政策大系』9.
- 久布白落実 (1928a)「国民半数による総選挙」『婦人新報』359,2-5.
- 久布白落実 (1928b)「ある日の日記 婦選獲得同盟五年目の夏」『婦選』2(7),6-7.
- 久布白落実 (1929)「第五十六議会運動の跡を顧みて」『婦人新報』373,6-7.
- 久布白落実 (1930a)「総選挙と婦人」『婦人新報』383,6-7.
- 久布白落実 (1930b)「婦人参政権運動に関して(社説)」『婦人新報』388,6-7.
- 久布白落実 (1930c)「久布白落実氏愈々婦選総務を辞任(声明書)」『婦人新報』388,8.
- 久布白落実 (1930d)「婦選獲得同盟の役員を退くに際して」『婦人新報』388,9.
- 久布白落実ほか(1930)「婦選座談会—地方代表を迎えて—」『婦選』4(1),21-30.
- 久布白落実 (1931)『新日本の建設と婦人』教文館.
- 久布白落実 (1934)「1934年の主張」『日本基督教婦人参政権協会会報』4,1.
- (財)市川房枝記念会所蔵・編集・制作(2005)『婦人参政関係史資料Ⅰ 1918-1946』  
日本図書センター
- 久布白落実 (1953)「石の上にも三年」『婦人と日本』23,2.
- 久布白落実 (1955a)「あれから十年これから十年」『婦人と日本』43,2.
- 久布白落実 (1955b)「婦選運動十年」『婦人と日本』46,4-7.
- 久布白落実 (1973)『廃娼ひとすじ』中央公論社.
- 児玉勝子(1985)『婦人参政権運動小史』ドメス出版.
- 児玉勝子(1990)『十六年の春秋—婦選獲得同盟の歩み』ドメス出版.
- 松尾尊兌(1989)『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店.
- みどり(1918)「大会の印象」『婦人新報』250,18-19.
- 宮川静枝(1925)「婦人参政権獲得期成同盟会に就いて」『婦人新報』325,23-27.

- 村岡花子(1920)「基督教婦人矯風会第二十八回大会記録」『婦人新報』273,18-27.
- 無署名(1930)「長野市に上がる矯風の叫び 第三十九回大会雑記」『婦人新報』386,26-31.
- 日本キリスト教婦人矯風会 (1986)『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版.
- 小川崇(1998)「戦前期婦人参政権獲得運動に関する考察—婦選獲得同盟の『政治教育』活動—」『日本社会教育学会紀要』35,47-56.
- 佐治恵美子(1986)「浜口内閣期の婦人公民権問題」『日本史研究』292,1-25.
- 千本木道子(1923)「第三十一回大会記録」『婦人新報』307,33-51.
- 菅原和子(1994)「日本の『女性参政権』の成立とその史的背景(一)」『自治研究』70(4),97-115.

---

#### (第4章 注)

- <sup>1</sup> 婦人の社会的・政治的権利獲得を目指して、平塚らいてう、市川房枝、奥むめおらが結成した婦人団体。1919年11月に結成され、1922年に解散した。
- <sup>2</sup> 1921年から1930年までの主な記事を挙げると次のようなものがある。
  - 久布白落実(1921)「婦人参政権とは何ぞや」『婦人新報』286号
  - (1922)「日本婦人参政権協会」292号
  - (1925)「日本婦人参政権協会の一ヵ年」324号
  - (1925)「全国的政治教育の必要」329号
  - (1925)「婦人参政権運動を顧みて」334号
  - (1929)「婦人と公民権」371号
  - (1929)「公民となつたなら」371号
  - (1930)「総選挙と婦人(社説)」383号
  - (1930)「婦選史上を飾る人々」383号
  - (1930)「民法刑法改正法律案」388号
  - (1930)「婦人参政権運動に関して(社説)」388号
  - (1930)「完全公民権か制限公民権か(社説)」389号
  - (1930)「全国町村の婦人は公民権を要せざるか(社説)」391号
- <sup>3</sup> 1873年10月26日に三河国蟹江村の山田謙三、久子の長女として誕生した。6歳から桜井女塾の寄宿舎に入り、桜井ちか子の教育を受けた。女子学院と合併してか

---

らは矢嶋楫子のもとで学んでいる。卒業後は前橋の共愛女学校の教師となり、そこで教師と生徒という関係で久布白落実（当時は大久保落実）と出会っている。その後、1898年にイギリス人のエドワード・ガントレットと結婚、夫の転勤で地方を回ったのち、1916年に東京に戻り、教師をしながら、矯風会の活動を行った。青年部長、副会頭、会頭を務めていた。戦後は平和部長も兼任し、平和運動に力を入れていた。1953年に永眠。

- <sup>4</sup> 万国婦人参政権協会の歴史は 1902 年に始まる。同年、全米婦人参政権協会(The National American Suffrage Association)は年次総会を開こうとしていたが、国際協力の道を模索し、ヨーロッパ各国の参政権獲得団体を招待した。最初の国際会議が開かれ、国際団体の組織を設立した。その後、国際会議から独立し、「国際婦人参政権獲得同盟(International Women Suffrage Alliance)」が設立された。
- <sup>5</sup> 1918 年 7 月 4 日に「東京の市民の精神をキリスト信仰で養う」という理想を掲げ、久布白直勝が設立。1943 年、都制度が敷かれたことに伴って、東京都民教会に改称した。
- <sup>6</sup> 1864 年 12 月 14 日に越前国大野の士族、林長蔵の長女として誕生。1880 年に福井女子師範学校を卒業し、教師として勤務する。その後、20 歳で結婚し、一児の母となるも、離婚。1885 年に上京し、教師となる。1887 年に神田基督教会で受洗。同教会で受洗した小橋勝之助に請われ、1892 年に博愛社に赴任。1899 年に矯風会大阪支部を設立し、1907 年に婦人ホームを開設、廃娼運動でも活躍した。1938 年から矯風会会頭を務めた。1946 年 3 月 24 日に死去
- <sup>7</sup> 「団体をつくる産みの苦しみを担い、五年半にわたって代表者をつとめ、自分が不在中の会議でも出席者全員から総務理事に選挙される信望があったにもかかわらず、婦選獲得同盟と矯風会の二つの団体のはざまにあって選択を余儀なくされたといえよう。婦選獲得同盟内規の『同一目的を有する二団体の役員を兼ねることを得ず』が直接の引き金であり、遠くは同盟創設時の組織論の差、近くは矯風会の日本婦人参政権協会存続決定などが久布白を辞任に追いこんだ」(日本キリスト教婦人矯風会 1986:538-539)。

## 第5章 関東大震災における女性たちの震災救援活動

### はじめに

「大正十二年の九月一日のあの震災火災は、東京の三分の二を灰にした恐ろしい災害ではあったが、しかしこれはまた多くのものを生み出した。矯風会としては、とくにその感が深い」と久布白（1973:158）が述べたように、関東大震災は火事による犠牲者の拡大、またデマの広がりによる朝鮮人虐殺など、様々な波紋を呼んだが、女性団体の団結や廃娼運動・婦人参政権運動の発展の契機となっている。

1995（平成 7）年の阪神・淡路大震災発生以降、ボランティア、災害復興や災害救援などが注目されるようになったが、関東大震災時に女性たちが行なった救援活動についての研究はこれまであまりなされていない。久布白落実のような婦人運動家たちが関東大震災時に直接的、間接的に救援活動を行っていたことについて、詳細に取り上げられることは従来殆どなかった。しかしながら、日本は地震大国であり、近年大きな地震が頻繁に起きていること、また、2011 年 3 月 11 日には東日本大震災が発生し、復興に困難を極めていること、また復興に「女性の視点」を取り入れ、また女性が参画する必要性が叫ばれている現状からも考えると、このような女性たちが行った震災救援活動に関する歴史的研究は大切な課題である。社会福祉の研究においても、「災害福祉」や「災害と福祉文化」というテーマが登場しており、研究を深める必要がある重要分野の一つである。

さて、関東大震災における女性たちの震災救援活動は先行研究ではどのように位置づけられてきたのだろうか。

千野（1979）は東京連合婦人会の活動を取り上げて、「東京連合婦人会結成にもっとも行動的に活躍したのは、日本基督教婦人矯風会の久布白落実であった。大震災直後から、キリスト教界は各教会および各キリスト教社会事業団体をうって一丸として連合救護団を結成し、社会・児童保護・伝導・慰問の四部に分かれて救護活動をくりひろげていたが、久布白もまた、矯風会の会員として、積極的にその救護活動に力をつくした」（千野 1979:241）と記しており、久布白の震災救援活動を評価している。

林（2001）は久布白の思想を分析する中で、関東大震災頃の久布白について言及しているが、主に政治や廃娼運動との関連であり、震災救援活動を直接的に扱ったものではない。

楊（2005）は関東大震災直後の矯風会を中心とする廃娼運動について研究を行って

いる。矯風会が女性ネットワーク運動の先駆的なものであり、関東大震災に際し、女性団体を糾合し、東京連合婦人会の結成にあたって中枢的な役割を果たしたことを評価している。関東大震災時における女性たちの働きに注目した研究であるが、その焦点は廃娼運動にあり、震災救援活動そのものを詳細に分析したものではない。

このように、先行研究の多くは関東大震災時における久布白ら女性たちの活動を主に廃娼運動や婦人参政権運動の発展の契機と捉えており、社会福祉（当時は社会事業）の視点から震災救援活動そのものを深く分析したものではなかった。しかしながら、当時の女性たちの震災救援活動について、次のような記述がある。

関東大震災に際して、今まで全く無視せられていた婦人の力が発現したことは、日本婦人史の上に特筆大書すべき一大記録で、まことに愉快に堪えない所である。・・・もし今回の震災に際して、婦人の活動というものが全くなかったならば罹災者の救護は到底今日だけに行き届かなかったことと誰の目にも想像し得られる。配給事務は男子のみでも出来たかもしれぬが、負傷者の介抱と被服や寝具の裁縫と殊に乳児幼児の保育に至っては、全然婦人の力に依ったのであった（無署名 1923a:1）。

この記事から窺うことが出来るように、女性たちの震災救援活動への参画を社会事業的な活動として捉え、評価していく視点が必要なのではないだろうか。

本章では、福祉の視点と女性の視点から関東大震災時における久布白の震災救援活動を捉え直し、分析を行っていく。先行研究では、久布白ら女性たちの震災救援活動は廃娼運動・婦人参政権運動の発展の契機として重要視されている。確かに重要であるが、一面的な評価であり、福祉的な視点が欠落している。関東大震災時における久布白の震災救援活動を社会事業的な活動として捉え、その意義などを再評価していきたい。時期的には関東大震災発生後（1923年9月）からおよそ1年間を対象とする。

## 第1節 関東大震災の発生と行政の動き

関東大震災は1923（大正12）年9月1日11時58分に発生した。東京府は1917年の東京地方大風水害における救護の経験により「東京府非常災害事務取扱規定」をつくり、非常災害時における救護事務の執行方法を規定していた。この震災でこれを

初めて適用・実施することになった。政府は戒厳令と非常徴発令を出し、公的な救援活動のために9月2日に、臨時震災救護事務局を設置し、罹災地域の治安維持と震災被害対策の体制を整えた。事務局は、内務大臣官邸にその本部を置き、総務部、食料部、收容設備部、諸材料部、交通部、飲料水部、衛生医療部、警備部、情報部、義捐金部、会計経理部の11部から構成されていた。事務局の役目は全体を統制することであり、具体的な罹災者の救護は、府県市に委ねられた。政府は、罹災救助資金として960万、17日には第二次救護金として1600万の支出を決定している。一方、東京市は9月1日に、総務部、救護部、工務部、経理部、電気部を、22日に配給部を設置した。このように政府が組織立った活動を行っていたが、救援活動においては宗教団体が非常に重要な働きを担っていた。生田（1988）は宗教団体の救援活動について次のように述べている。

神道・キリスト教・仏教といった各宗教団体の救護活動は、その全国的（ある場合には国際的）な組織を背景とした義捐金募集、物資寄贈や、敷地・建物の開放、罹災者收容、無料弔祭などを中心としていた。しかし、キリスト教各派のように、本部あるいは主要施設が大損害を被ったため救護活動が思うにまかせなかった場合や、各教団の規模・財政事情によっておのずから活動が制約を受けるなど、それぞれの事情により活動内容、規模には大きなへだたりがあった（生田 1988:297）。

矯風会に関して言えば、本部は火事で焼失したが大久保の東京婦人ホームが残っていたため、活動を続けることが出来た。しかし、矯風会は本部を始め、関東地方の支部で被害が大きかったため、1923年10月4日、宮内省から1000円の見舞金を受けている。また、全国の矯風会支部からすぐに次のような見舞金が集められた。本部へ1000円、東京部会へ1000円、横浜支部へ100円、甲府支部へ30円、志木支部へ25円、鎌倉支部へ50円、1924年にはアメリカの矯風会から1000ドル送られた。全国的・世界的なネットワークがあることもこういった義捐金を集めるに当たって良かったと言えるだろう。また、内務省から矯風会の復興のために3万円、興望館<sup>1</sup>の復興のために5万円を受けた。

## 第2節 関東大震災と久布白落実

### 1 久布白と大震災の経験

久布白が矯風会総幹事に就任したのは1916（大正5）年であり、その7年後に関東大震災を経験している。しかしながら、久布白が大震災を体験したのは初めてではない。久布白は1906年のアメリカ滞在時にサンフランシスコ大震災を経験していた。林（2001:4）は「彼女（久布白）の人生の節目には、大震災があり、その記憶の表象には、彼女の思想が映し出されているのである」と述べているように、サンフランシスコ大震災後に日本人の売春女性たちと出会ったことが、彼女の生涯に大きく影響を与えている。そして、関東大震災の経験も彼女に大きな影響を与えることになる。

### 2 震災直後の久布白の行動

関東大震災が発生した1923（大正12）年9月1日は、理事会の相談のため、久布白は当時赤坂にあった矯風会本部の事務所に出勤していた。新築の矯風会本部会館<sup>2</sup>は火事で全焼したが、会の創立者である矢嶋楫子を引き連れ、矯風会職員一同も近くにあった黒田邸に避難し、無事であった。その後、大久保の婦人ホームに矯風会の事務所を移し、救済事業に着手し始めた。久布白（1973:154-155）はのちに「この時矯風会本部がここに入ったことは、天の導きであるとも思われた。当時なんとしても東京市内の婦人の団結というものができなかったが、この機会にはじめてそれが恵まれた」と述べている。以後、大久保の婦人ホームが女性達の震災救援活動の拠点としての役割を果たすことになる。

自らも被災者でありながら、久布白ら矯風会のメンバーたちは震災後すぐに活動を開始した。まず、久布白らは被害を受けた矯風会員の訪問と婦人たちの状況視察に出かけ、行政にも働きかけた。内務省、東京府、東京市他に挨拶の名刺を出し、「婦人として必要な仕事」があれば行なうということを伝えた。この時点で既に女性の視点を生かした救援活動を行おうという明確な意思があったことが窺える。その後、キリスト教の諸団体で合同の働きを相談し、9月9日に「基督教震災救護団」が設立された。震災により、吉原・洲崎等の遊廓地も全焼し多くの娼妓たちも亡くなったので、この団体の会合の席上で矯風会からの提議によって、大東京都市計画中に遊廓地を設けないこと、芸妓町を表通に置かないことを取り決めた。この提議を以て、小崎弘道牧師、久布白、守屋が山本首相、後藤内相、永田市長、湯浅警視總監を訪ね、遊廓移転の陳

情を行なっている。19日には、矢吹中佐（救世軍の山室軍平の代行）と久布白が遊廓設置運動反対の請願のため、再び上記の四氏を訪ねた。この基督教震災救護団の組織は、「救護」、「児童保護」、「伝道」、「慰問」の四部に分かれていたが、矯風会は救護部の中の被服部門を引き受け、各支部、全国の教会、婦人会から送られる古着類すべての洗濯、仕立て、配布を行った。

この基督教震災救護団は、同年11月の日本基督教連盟設立につながっていく。最高幹部として、常議員21名を置いているが、久布白もその一員になっている。日本基督教連盟<sup>3</sup>は、日本のプロテスタント教界の並列的なつながりと海外の教会との窓口として設立された。伝道部、文学部、社会事業部、教育部、国際部という5つの部が置かれるが、久布白は社会事業部の部長となった。矯風会自体がこの連盟に加入し、年50円の義務金を納めている。

### 3 東京連合婦人会の設立とその活動

東京連合婦人会は震災の発生に伴って設立されたが、その経緯について見ていく。東京市から久布白に5歳以下の子どもに牛乳配給をするために女性の協力が欲しい、100人の女性を手配して欲しいという依頼があり、引き受けることになる。それまで救援活動は多くの婦人団体が個々に行っていたが、団結の必要を感じた久布白と守屋は吉岡弥生（医師）、河井道子（女子青年会）、羽仁もと子（自由学園）ら、各界で著名な女性たちに手紙を書き、援助を求めた。そして、1923（大正12）年9月28日に大久保の矯風会婦人ホームに約30名の代表者が集まって、集会を行なった。そこで「児童殊に乳児及び母性の保護」を目的として、婦人団体の連合会である、東京連合婦人会が成立する。その仮事務所を大久保の矯風会仮事務所に置くこととなった。30日には、矯風会員15名とキリスト教関連団体、同窓会、社会事業団体など16団体（矯風会のほか、基督教女子青年会、桜楓会、愛国婦人会、鷗友会、婦人平和協会、実践女学校、自由学園、東京女子大、婦人協会、二葉保育園、霊南坂教会、バプテスト教会、本郷教会、クリスチャン教会等の各教会の婦人会、関東罹災者救護婦人会等）、総勢130名ほどが東京市社会局に集まった。その会合では、被害地の主な警察署を中心とする所をそれぞれ分担するなど、担当を決めた。具体的な働きは、出来るだけ戸別に、5歳以下の乳児のいる家庭に、3日ごとに1缶ずつの煉乳を配ることや、災害弱者と言われる産婦、傷病者、老弱者、迷子の注意保護、衣服食糧の問題、台所等不潔にな



りやすい場所の衛生状態を調査用のカードで調べて、その結果を毎日社会局に報告することであった。市役所と警察と婦人が協力して「女性でなくてはできないような、きめこまかな」(日本キリスト教婦人矯風会 1986:424) 救援活動を行なったのである。石月 (2001:227) によると、東京連合婦人会は、「女性運動の統一戦線的な役割を担った女性団体」であり、「のちの女性運動にも影響をもたらす」ことになったという。

東京連合婦人会は、発足当初「慰問部」、「社会部」、「研究部」、「職業部」、「教育部」、「娯楽部」の六つの部に分かれ、活動を行なうことになった。「慰問部」はビヤード博士夫人が部長として働き、「娯楽部」はレーモンド夫人が担当し、食料衣服の配給、乳児産婦の救済を行なう。社会部では井上秀子、吉岡弥生、小崎千代、河井道子、羽仁もと子らが活動し、「研究部」では山川菊栄、平塚明子、山田わか、三宅安子、守屋東、久布白らが働き、婦人参政権、廃娼問題などを扱うことになった。「職業部」はガントレット恒子らが担当し、「教育部」では羽仁もと子、吉岡弥生、井上秀子らが活動することになった。

その後、守屋 (1923:34) によると、10月30日現在、「(一) 研究部は公娼廃止、服装問題、普選、(二) 社会事業部は戸別訪問をなして、明確な家庭調査、(三) 職業部は、失職婦人に職を与えよと叫んで遂に蒲団の工賃の支出を震災事務局に訴え、遂に目的を達し、今各地各所で蒲団の作成中である、(四) 職業部第二部は、失職婦人と学校との関係を教育部と提携して調査する事、(五) 教育部、今後の女子教育方針、近き運動としては社会部と提携して戸別調査カードの作成」を行なうこととなっていた。

このように東京連合婦人会は震災直後の救援活動においては目覚ましい活動を行ったが、その後、「有名無実」な団体となっていくた。婦人解放運動に携わり、衆議院議員も務めた田島 (1980:105) は「震災の救援活動が一応終わってみると、会の目標も明確でない連合会としては、しぜん、行動にゆきづまっていった」と述べている。

また、『国民新聞』によると、震災後の婦人界は、三つの方向に分けられたという。一つは、「政治的色彩を帯びたもの」、もう一つは「社会事業から先づ婦人の力を示そうとするもの」、さらにもう一つは、「現在活動しつつも以上の二流の何れにもつかず且つ離れぬ人々で、この流の特色は婦人運動を社会運動と結びつけて居るところにある」(無署名 1923c) という。久布白の活動はこの分類によると第三の方向に入っている。

さて、関東大震災では吉原・洲崎遊廓が全焼し、多くの娼妓たちも犠牲になったた

め、10月1日には吉原追悼会が開かれた。その後、久布白と矯風会の他のメンバー（小崎千代、城、河邊、坂本、宮川）は、警視總監を訪ね、保安部長に面会し、遊廓を再建しないように説得を行なう。後藤内相に請願書・決議文を出し、東京日日新聞、東京朝日新聞、報知時事の新聞社に立ち寄った。

11月3日には東京連合婦人会の政治部が中心となり、これまでの廃娼運動を発展させて、全国の公娼撤廃を実現するために、「全国公娼廃止期成同盟会」が結成された。従来の女性キリスト者を中心とする廃娼運動に新たな流れ、社会主義の立場に立つ山川菊栄らが加わり、廃娼のための女性共同戦線が目指されるようになった。その綱領は次のようなものである。

- 一、 焼失せる遊廓の再興を許さぬこと。
- 一、 全国を通じ今後貸座敷及び娼妓の開業を新たに許可せぬこと。
- 一、 今後半ヶ年の猶予期間を附し、現在の貸座敷業者及び娼妓の営業を禁止すること（全国公娼廃止期成同盟会 1923:11）

同盟会は、震災によって破壊された吉原遊廓などの再建反対運動を精力的に推進していくことになる。12月17日には臨時議会に、「焼失遊廓再興不許可に関する建議書」を提出し、22日には衆議院に上程したが、審議未了に終わった。その後、同盟会の活動は振るわず、自然消滅していったが、たとえ一時期であっても従来活動を共にすることのなかった、久布白らキリスト者女性と山川ら社会主義女性たちが連帯していったことは、婦人運動史において大きな意義がある。

『婦人新報』312号（1923年11月号）では「帝都復興に際して婦人の立場から」という特集を組み、共に活動した他団体の女性たち—日本女子大学教授の井上秀子、山田わか、山川菊栄らが寄稿している。このように矯風会やキリスト者以外の婦人運動家たちの論考が多く掲載されることは珍しいことであった。

第4章で取り上げたので詳細には触れないが、1924年12月13日には婦人参政権獲得期成同盟会が結成された。総務、会務両理事に就任したのは久布白と市川房枝である。しかしながら、先述したように時が経つにつれ、「団体組織（＝東京連合婦人会のこと）は名のみとなって個人組織に変わり、同時に活動の範囲が広まるにつれ、内部の不統一が表面的となって、遂にそのまま維持することが出来なくなった」（市川

1928:8)。1926 年 1 月 14 日の東京連合婦人会第 3 回総会において、労働部が独立して、労働婦人協会が成立し、各部は廃止されることになった。東京における婦人団体の連合よりなる組織として、目的を相互の連絡を図り共通の目的を達するために一致協力することと定め、各加盟団体から 2 名の代表委員をもって、委員会を組織した。委員長に吉岡弥生（日本女医会代表）、副委員長に守屋東（東京婦人ホーム代表）、書記に金子茂（全国娼妓同盟代表）、会計に徳永恕子（府立第二高女同窓会代表）、田中芳子（府立第一高女同窓会鷗友会代表）が就任した。ここには久布白の名前がないが、この頃は婦人参政権問題を中心的課題としていたため、東京連合婦人会の活動にはあまり関わっていなかった。その後、東京連合婦人会の活動は縮小していくこととなる。

#### 4 矯風会独自の事業―「一週間療院」を中心として―

矯風会単独の震災救援活動としては、土地の提供などを行なっている。東京婦人ホームの日本館を赤十字に提供し、産院となり、100 人くらいの妊婦を収容できることになった。1923（大正 12）年 9 月から 1924 年 3 月の 7 ヶ月間で、「出産数 331 名、産婦入院数 375 名」（無署名 1924b:13）という大人数を収容することが出来、そのことで赤十字社社長より感謝を受けている。

また、婦人ホーム表門前の土地を帝大基督教青年会の家庭購買組合に提供している。この土地は、臨時配給所にあてられ、一ヶ月あまりは不眠不休の活動で物資の供給を行なったという。また、広い洗濯場は大久保百人町住民会の第 4 区に提供し、食料その他の配給所となった。もともと広い土地を所有していたことで、震災という非常時に敷地・建物の開放し、救援活動に貢献することが出来たのである。

そして、10 月 20 日には赤坂の矯風会本部焼跡に母と子の「一週間療院」を開院した。久布白とこの事業との関わりを示す記述は管見の限り見出せなかったが、この事業は内務省社会局の児童保護の嘱託で婦人ホームに寄宿していた林ふく子を主任として始められたものである。東京府が 60 坪のバラックを建てて、次のような看板を出した。

##### 一週間療院

思わぬ災厄から引続いた御心配や、日常の激変、生活の変動などから、乳が出なくなったり、お疲れの方はさぞお困りかと存じます。その方々をお迎えして、一

週間の静養をなさる様、赤さん、母さんの健康回復のためにお力添えしたいと思います。安静を得られないでお困りの方はご遠慮なくおいで下さい。費用のご心配はいりません。

□赤坂区新町三ノ四六本部会館焼跡にて

□十月廿日開院

基督教婦人矯風会（無署名 1923b:22）

一週間療院の状況は『婦人新報』で「来る人々はゆっくり温浴してから金谷さんの親切なマッサージをして頂いて大喜びです。六年間頭痛で困った人や、手の上がらなかった人などが治ったと言って感謝しています。...方々のバラックから子供連れのお内儀さんやお婆さん方が来ます。最初はあまり深切にして貰うので何だか勝手が違うという体ですが、非常に喜んで一日ゆっくり休んで帰ります」（無署名 1924a:37）というように報告されている。また、『社会事業』にも「昨今では毎日五六十名の人達が集まってくるが、大概一週間を以て限度とし其期間には殆ど保養の目的を達して喜んで帰っていくそうである」（無署名 1924c:54）という記事が掲載されている。

その後、『婦人新報』に「一週間療院」が掲載されることはないが、当時として画期的な事業である。災害時における妊産婦の心身の健康管理は現代の課題でもある。

## 5 久布白の帝都復興論

久布白（1923a:6-7）は市民として東京市に望むこととして第一に「堅実な市、火に耐え、地震に耐え得る堅牢な家を以て成立する堅実な都市」、第二に「人道の都市・・・人肉売買の許されぬ都市」、第三に「京民として市を愛せしめよ（中略）…すべての住民を市民とし、すべての婦人を市民としここに東京在住者に、市を愛するの権利を与えること」、以上の三点を挙げていた。市民の生活を救援活動で直に見て感じたことであつた。また以前からの廃娼運動の経験も踏まえたものである。大震災から2か月後には、久布白（1923b:2-4）は「帝都の八十万の罹災者を、餓えず凍えしめぬと云う事が、今日第一の当面の問題」、「バラックの設備」、「失職婦人を救う」、「健全な読物と健全な娯楽」が必要であると述べている。そして、「醜業を其営業中に認めざる、都市と為したい」という方向へ進んでいくのである。

『婦人新報』313号では「復興の第一春を迎えんとして」と題し、矯風会の要人た

ちがコメントを掲載している。その中で久布白は震災で得たものについて、「震災は多くの教訓を与えました。然し、我々婦人として得た最大の賜物は、市民を全体として、直接に見る事が出来たと云う事でしょう、調査と云い、配給と云い、失業問題と云い、公衆娯楽と云い、あらゆる問題に遭遇して、僅かながらも、東京市民の今日について、幾分の心を用い、力を致しつつ有るのは、得難い賜物です」(久布白 1924a:25)と述べている。地震により様々なものを失ったが、久布白らはまた、東京連合婦人会における震災救援活動を通して、市民生活の問題を発見し、それをもとに理想の帝都復興論を描いていったのである。その後、1924(大正13)年10月4日に東京連合婦人会の一周年祝賀大会が催されたが、久布白は1923年を振り返り、次のように述べたという。

機が熟した時には、極く小さなことから緒が出るものです。東京市内のあらゆる婦人団体が共同し得る目的のためには、一つになる事の必要は、多くの人から認められていました。然しそれはどうしても実現せられずに過ぎて居ました。大正十二年九月一日のあの恐ろしい震火災は図らずもこの機会を与えました。九月二十五六日の事でした。…其の時フト私の心にひらめいた事は、俄かの冷氣に避難民の多くは、どれ丈け気苦労して居られやう。焼残った婦人だけでも心を一つにして奉仕したらば、何かの力にならぬだろうか(無署名 1924d:3)。

久布白(1924b:3)は災害が生み出したものとして、「婦人が自らを社会的に見出した」ことと「特に東京に於いて、有ゆる団体、又種類の婦人等が、ここに一団となり、然かも明らかに其の部門を別って、各其専門を担当してここに一つの有機団を造り又、造りつつ有ること」を挙げている。先述したように東京連合婦人会自体の活動は期待ほどに深まっていかなかったが、大震災という非常時に女性たちが連帯し、女性の視点を生かした震災救援活動を行ない、その後廃娼運動や婦人参政権運動などが発展していくことになったのである。

## 小括

久布白は関東大震災という非常時に廃娼運動で培っていたリーダーシップや行動力を発揮した。久布白は1916(大正5)年の矯風会幹事就任以来、五銭袋運動などを通

して、キリスト教界だけでなく、行政、また他の婦人団体の様々な人物に協力を求め、積極的に働きかけており、その経験が関東大震災時の活動にも生かされたのではない。震災後まもなく状況視察に出かけ、行政にも働きかけを行なった。その後、数々の女性団体をまとめ、団結のきっかけを作ったのは久布白であった。関東大震災の救援活動において、既に久布白ら女性たちはボランティアの原型と言えるような活動を行っていた。「女性の視点」を生かし、乳児のいる家庭に煉乳を配ったり、母子のために「一週間療院」を設けたりするなど、災害弱者といわれる人々に対して非常に重要な役割を果たしている。その活動の社会的意義も大きかった。

また、久布白にとっても関東大震災は節目であるが、先行研究や久布白が「大正十二年九月一日の大震災は、すべてを転倒させたが、婦人運動もたしかに一大変動をした。(中略) …はじめて東京連合婦人会なるものができたのをきっかけとして、参政権運動もはっきりとしたスタートをきった」(久布白 1973:169)と述べたように、関東大震災を機に久布白自身の活動も廃娼運動や婦人参政権運動全体も活発になっていった。

新聞などのメディアでは「婦人矯風会本部の久布白、守屋両女史は早くも内相と警視總監とを訪問して、遊廓を郊外に移されんことを陳情したそうである。機宜に適した処置とあってよい」(無署名 1923d:1)、「矯風会でも震災後久布白、守屋女史率先して婦人のために産院を設け、妊婦、産婦、乳児を収容し、罹災民の為に、被服類を給与する等毎日目醒ましい活動をしている…今回の震災で足並みの揃わなかった婦人諸団体に意見も一致した」(無署名 1923a) というように、久布白や守屋の活動は評価されている。また、東京連合婦人会は地震によって生まれた「有意義なものの一つ」(無署名 1923f)、「地震の産物」(無署名 1923b) と言われている。

さて、「はじめに」の部分で「関東大震災に際して、今まで全く無視せられていた婦人の力が発現した」、「もし今回の震災に際して、婦人の活動というものが全くなかったならば罹災者の救護は到底今日だけに行き届かなかったことと誰の目にも想像し得られる」(無署名 1923e:1) という文章を取り上げたが、久布白は「女性の視点」から震災救援活動に携わることを通して、市民の生活を目の辺りにして様々な福祉的な課題を発見し、復興に際して必要なものを主張していった。「食、衣、職の問題のあとにすぐつづくのは、精神の食物と、精神の慰安」(久布白 1923b:3) というように、最低限の衣食住の確保に留まらず、精神的な娯楽の必要性も主張しており、生活におけ

る文化の大切さを認識したものである。職の問題の中では職を失った女性の救済についても言及していた。また震災に際して多くの娼妓たちが逃げられず、焼死していったことから、女性を拘束する、公娼制度の問題性を改めて感じ、その廃止を主張していく。

このように見てくると、震災救援活動をきっかけとして、久布白ら女性たちは共同し、社会の中で女性の視点や力を生かした活動を行う福祉文化を生み出していったと捉えることができるのではないだろうか。ジェンダーの視点から考えると、関東大震災時の女性たちの活動は女性という性役割の枠組みにとらわれたものかもしれない。しかしながら、はじめに述べたように震災救援活動における女性の視点の必要性は現在でも指摘されることであり、久布白らが関東大震災時に行った活動は現在でも訴える力を持っている。2011年3月11日に発生した東日本大震災に関する特集記事でも女性の視点の必要性が主張されている<sup>4</sup>。『平成24年版 男女共同参画白書』では「男女共同参画の視点からの防災・復興」が特集されている。「東日本大震災では、あまりに大きな被害の陰に隠れて、女性たちの状況は容易に見えてこなかった。女性たちはそのとき、どう動き、どんな問題が降りかかったのか」（八幡 2012:4）という問題提起がなされている。女性の雇用不安や失業、DVや性暴力の被害—これらは公に語られることの少ない問題である。浅野（2012）は「女性の視点」や「女性の参画」を政策的に位置づけることの重要性を指摘し、「これは人口の半分を占める女性のニーズに向き合うという当たり前のことに取り組むことを意味するだけではない。現状での性別役割の実態を踏まえれば、それは男性だけでは見落としがちな、生活者の視点をきちんと取り入れることをも意味するのである」（浅野 2012:49）と述べている。久布白らは女性の視点の必要性に気がつき、震災救援活動に取り組んでいた。それゆえに、彼女たちの活動を改めて見直すことは現代的意義を有している。また、現代を生きる私たちは女性の視点だけでなく、ジェンダーや多様性の視点からこういった活動を捉えていくことが不可欠であろう。

## （第5章 文献）

浅野幸子（2012）「Ⅱ 多様な支援の形を求めて 第6章 地域防災計画を見直す」

竹信三恵子・赤石千衣子編『災害支援に女性の視点を！』岩波書店, pp.43-50.

千野陽一（1979）『近代日本婦人教育史—体制内婦人団体の形成過程を中心に—』

- ドメス出版.
- 林葉子 (2001) 『『市民』が『国民』になるとき—久布白落実における『ホーム』論の展開—』『キリスト教社会問題研究』 50,1-30.
- 一番ヶ瀬康子・小林 博・河畠 修・藺田 碩哉編 (1997) 『福祉文化論』 有斐閣.
- 市川房枝 (1928) 「東京連合婦人会について」『婦選』 2(1),8.
- 生田正幸 (1988) 「近代における仏教と社会事業 (二) 関東大震災と仏教社会事業 (一) —罹災者救護と仏教教団—」『龍谷大学仏教研究所紀要』 27,290-311.
- 今井清一編 (2008) 『日本の百年 6 震災にゆらぐ』 ちくま学芸文庫.
- 石月静恵 (2001) 『戦間期の女性運動』 東方出版.
- 久布白落実 (1923a) 「我等は如何なる帝都を建設すべきか」『婦人新報』 311,6-7.
- 久布白落実 (1923b) 「帝都復興と公娼問題の解決」『婦人新報』 312,2-4.
- 久布白落実 (1924a) 「復興の第一春を迎えんとして 復興第一の春」『婦人新報』 313,25-26.
- 久布白落実 (1924b) 「一ヶ年の回顧」『婦人新報』 321,2-5.
- 久布白落実 (1973) 『廃娼ひとすじ』 中央公論社.
- 守屋東 (1923) 「帝都の復興と東京連合婦人会」『婦人新報』 312,30-34.
- 内閣府 (2012) 『平成 24 年版 男女共同参画白書』
- 内務省社会局編 (1926) 『大正震災志 (上) (下)』 内務省社会局.
- 中村英雄 (1929) 『最近の社会運動』 協調会.
- 無署名 (1923a) 「仮小屋に雑魚寝する婦人の貞操擁護に立つ」『国民新聞』 10 月 10 日号.
- 無署名 (1923b) 「すっかり組織立った東京婦人の大合同—加盟団体四十余有識婦人は悉く集まり参じた 今後の活動が観物」『国民新聞』 10 月 30 日号.
- 無署名 (1923c) 「婦人界の三潮流」『国民新聞』 11 月 8 日号.
- 無署名 (1923d) 「(社説) 此の際焼いてしまいたい物」『婦女新聞』 1216,1.
- 無署名 (1923e) 「(社説) 婦人の力の発現」『婦女新聞』 1226,1.
- 無署名 (1923f) 「東京連合婦人会—新たに出来た有意義な婦人団体」『東京朝日新聞』 11 月 1 日号.
- 無署名 (1923g) 「一週間療院 (母子の静養のために)」『婦人新報』 311,22.
- 無署名 (1924a) 「掲示板 一週間療院」『婦人新報』 316,37.
- 無署名 (1924b) 「基督教婦人矯風会第三十三回全国大会記録」『婦人新報』 317,13.



無署名（1924c）「一週間療院」『社会事業』8(1),54.

無署名（1924d）「東京連合婦人会の沿革—嬉しかったお誕生日の祝い—」『婦女新聞』1270,3.

日本福祉文化編集委員会編（2010）『新・福祉文化シリーズ 1 福祉文化とは何か』明石書店.

日本福祉文化編集委員会編（2010）『新・福祉文化シリーズ 4 災害と福祉文化』明石書店.

日本キリスト教婦人矯風会（1986）『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版.  
西尾祐吾・大塚保信・古川隆司編著（2010）『災害福祉とは何か—生活支援体制の構築に向けて』ミネルヴァ書房.

田島ひで（1980）『ひとすじの道 婦人解放のたたかい 50 年』青木書店.

東京府（1925）『東京府大正震災誌』東京府.

八幡悦子（2012）「I 東日本大震災下の女性たち 第 1 章 見えない被害・届かない声」竹信三恵子・赤石千衣子編『災害支援に女性の視点を！』岩波書店, pp.4-10.

楊善英（2005）「関東大震災と廃娼運動—日本キリスト教婦人矯風会の活動を中心に—」『国立女性教育会館研究紀要』9,95-105.

全国公娼廃止期成同盟会（1923）「国民に訴ふ—公娼の全廃に就て」『婦女新聞』1223,11.

---

## （第5章 注）

- <sup>1</sup> 興望館は 1919 年にセツルメントとして東京の下町で事業をはじめた。その名付け親は久布白である。現在も矯風会の関連施設として、保育園、児童養護施設、学童クラブなどの事業を行なっている。
- <sup>2</sup> 1923 年という年は矯風会にとっても節目の年である。矯風会は 6 月に財団法人になり、理事を 15 名置くことになった。そのメンバーは小崎千代（当時の矯風会会頭）、ガントレット恒子、林歌子、久布白落実、村岡花子、千本木道子、守屋東、浅田みか、ブラックモア女史、川崎正子、小泉たね、皆川セキ、ピアソン夫人、渡瀬かめ子、宮川静枝である。それに伴い、大久保の東京婦人ホームの土地も矯風会の所有となったが、関東大震災はそういった会の活動も軌道に乗り始めた矢先の出来事であった。
- <sup>3</sup> その後、戦時国家の宗教政策の影響を受け、1941 年に解散し、日本基督教団が設立

---

されることになった。

- <sup>4</sup> 「東日本大震災 暮らしどうなる？」『毎日新聞』7月1日号、2011.

東日本大震災の特集記事で、「避難所における女性の安全配慮」の必要性などから、「復興に男女共同参画の視点を」との提言が掲載されている。

## 第6章 戦前における久布白落実の性教育論

### はじめに

「公娼全廃、性問題教育は、私の仕事の本流です」(久布白 1923:30)と述べたように、久布白の生涯において、性教育は非常に重要な位置を占めるものであった。久布白は矯風会で活動を始める以前の1900年代半ばから、性教育に関心を持っていた。また、本格的に活動を開始してからは廃娼運動の対策として性教育の重要性を訴えていく。矯風会で性教育を担当していたのは『家庭と性教育』という書物を遺したC.B オールズ<sup>1</sup>であると言われることが多い。しかしながら、久布白も廃娼後の対策や性教育等について研究するために幾度か外遊を重ね、それをもとに『婦人新報』に性や性教育をめぐる論考を残すなど、矯風会の性教育の発展に貢献してきた。

本章の目的は、矯風会総幹事就任後から1940年代前半までの久布白の性をめぐる論考と性教育論を分析していくことである。久布白は1935(昭和10)年に渡米し、翌36年、「純潔日本の建設」を、37年に「我が国の性教育」と題し、その性教育論を発表した。1930年代は1927年の金融恐慌、1929年の世界恐慌を経て、1931年の満州事変に始まったが、不況の打開を求めて、中国侵略を展開していく時期であり、戦争に突入していく過程である。矯風会では、1931年のジョンソン調査団(国際連盟派遣婦人児童売買実態調査団)の来日などもあり、廃娼実現が近づいていると信じ、その後の対策を考え、久布白が中心となって活動していた。性教育関係の記事や論考も多い時期であるが、徐々に国策と矯風会の一致が見られる過程でもある。このような1930年代の社会情勢、矯風会、久布白の動向をふまえ、その中で久布白の性教育論がどのように発展していったのか、また1940年代前半の戦時中の久布白の性をめぐる論考を分析していく。

矯風会の性教育について取り上げた先行研究にはどのようなものがあったのだろうか。田代(1999a)は十五年戦争期(1931~45年)における矯風会の性教育について分析し、純潔教育の登場によって、性を多面的に捉えようとする性教育が後退し、性知識教育の否定と性道德の強調へと向かうようになったと批判している。そして、小田切(2005)は、『婦人新報』の記事の分析を通して、矯風会の性教育論を取り上げ、その功罪として次のようなものを挙げている。久布白とオールズの啓発活動の水準の高さについては、欧米の性教育の先駆者らと比較しても遜色はないということ、また、久布白らは、戦後の性教育の方向性にも絶大な影響を与えており、偽動物的扱いの傾

向という弱点もあったものの、性教材の科学的扱いが学校教育に入ったことはその実践の功であると評価している。しかし、「生殖のみの性」しか認めない思想とその具体化、人権としてのセクシュアリティが抑圧され、純潔路線が日本の性教育の骨格となり今日に及んでいることはその罪の方であると批判している。矯風会の性教育のマイナス面が多く浮き出ているが、いずれの研究も久布白の論考を多く取り上げており、久布白は矯風会の性教育において重要な役割を果たしていたことが窺える。このように矯風会の性教育は功罪を併せ持つものであるが、組織の中の一人である久布白の性教育の捉え方は如何なるものであったか、以下の行論で考えてみたい。

## **第1節 性・性教育をめぐる論考から**

### **1 性教育との出会い**

一般的に、第二次世界大戦終了時までの日本近代における性教育は、常にタブーの中で語られ、捉えられてきたと言われている。性教育の重要性は一部の識者によって指摘されながらも、教育において積極的に生かされることはほとんどなかった。そのような状況下で、久布白が性教育の必要性をはじめて認識したのは、アメリカに滞在していた1906（明治39）年である。1906年10月、久布白は自身の大叔母であり、当時の矯風会会頭であった矢嶋楫子の通訳兼秘書として、ボストンで開催された第7回矯風会世界大会に出席する機会を持った。その大会の会場において、久布白は1人の婦人が1冊の本を手にしてしきりに青年男女、少年少女に性教育の必要を説いているのを耳にし、その話を聴きに行くという貴重な経験を持っている。そして後に「其時自分の若い心にも特に新しくひびいたのは、この性教育の問題であった」（久布白1936b:7）、また「初めて性教育の必要性に目覚めた」（久布白1949:15）と振り返っている。

### **2 早期からの性教育の必要性**

1916（大正5）年に久布白は矯風会の総幹事に就任し、五銭袋運動や男女貞操問題の講演会など、廃娼実現のために必要なことを次々と考案していく中で、早期からの性の教育の必要性を主張している。以下は久布白が性教育の必要性について述べた最初の文章である。

少し物心のつき始める頃から、小供は不思議に人の生れる事、其他の有らゆる不可思議な出来事に関して、大人の思い及ばざるまでに脅威の念に打たれて、聞いたがる事実はよく見ききする処で御座います。此時父母たり教師たりするものが、最も純潔な学理的な考えを以って、児童の理解する範囲に真実を以って丁寧に教える処が有れば、児童は満足して、決して他に行つて其説明を求めませぬ。然し此時、無下に沈黙を命じたり、又叱つたり致します時は、児童は何時しか不健全なる方面から其説明を耳にして生涯拭う可らざる悪しき印象を、心に受けて仕舞います。(中略)・・・児童と貞潔の問題は、今や欧米諸国に於て、最も新しき研究の一つとなつて居る場合、我国の識者間にも必ず考量せられて居ることと存じます。願わくは将来、此方面にも家庭、学校共に手を取つて、更に研究の歩を進め第二の国民の将来に光明を与えたいものと思います(久布白 1917:5-6)。

ここには直接、「性教育」や「性の教育」という言葉は出てきていないが、幼い頃から子どもに性に関する教育を行なう必要性の提言である。

田代(1999b)によると、性についての教育的議論は性欲学の権威であつた羽太鋭治、澤田順次郎らによつて、1910年代から先導され、「性欲教育」という形で開始しており、1910年代後半は「性欲教育」の時代であつた。性の問題をより広い範疇で捉えようとする見解が出てくるのは1920年代半ばであり、性欲教育から性教育または性の教育へと進んでいく。現在においても、子どもの性の学習権が否定され、子どもの性に関する疑問に正しく答えるということは徹底していない部分もある。しかしながら、久布白はこの時点で真実を隠すことの弊害を指摘しており、当時としては新しい視点を提示していた。

### 3 男子の性教育の必要性

また、久布白は性の問題に関しては男女両方に多くの教育が必要であると考えていた。特に女子に比べて男子に対する性の教育はなされていないと考え、次のように述べていた。

公娼制度は、取りも直さず、男子の性欲の為には何等かの設備を為さねばならぬと云う事を社会が認めている姿です。(中略)・・・男子の性欲は決して特殊なもの

でなく、又之を制することは決して衛生上不可能な事も有害な事もなく、却って之が為に、男性美を發揮し其の事業技能の發展等には大なる力を与えると云う事は、現実、科学の上に、医術の上に説明さるる事実となって来て居ります、男子の性の教育を云う事は今日単に道德宗教倫理の立場を離れ、単に衛生、能率と云う処から出立しても、是非とも民族保健の上に改めて教育せらるべき価値ある事です、(中略)・・・中学高等学校は勿論、商店、工場の如き、軍隊の如きあらゆる男子の団体に於いて之の問題に関する健全なる知識を与えることは最も必要なことでは有りますまいか、(中略)・・・男子の性の教育と云う事は、今や世界の大問題の一つとなって居ります (久布白 1919a:2-3)。

ここで初めて久布白の文章に「性の教育」という語が登場する。女子に比べて男子の性教育が遅れているということは現代的な課題<sup>2</sup>でもあるが、当時の男女不平等な社会においてこの発想は進歩的であった。公娼制度の存在が男子の性欲乱用を認めることに結びつくとも批判している。また、民族保健、すなわち性病防止のために男子の性教育を行なうのだという視点の存在も垣間見ることができる。さらに、性の問題について次のような記述がある。

近来性の問題が余りに乱雑に、取り扱われる傾向のあるのは嘆かわしい事です。国民の身体に又、精神に至大の関係を有するこの問題については、私共は最も厳かな態度を以て、向うべきであると思います、それについては誰よりも母自身が之れに就いて聡明でなければなりません。・・・(中略) 少年男子の指導、これは理解(わきまえ)ある父に是非頂かねばなりません、然し、母や姉なる人も亦必ず心得ていなければなりません、7、8才から13、14才の男の子には子どものよくおちついて居る時に、静かに、男子の宝は男子の体の内で最も尊いものだ、それだからいつも清潔にして、決して玩んではならないと云う事を厳肅に話してきかせておく必要が有ります。自分の身体を尊ぶ心を養って置くと言う事はやがては他人の身体を尊ぶことになります、「汝等の身体は神の宮殿なり」という言葉を教えて心の底深く自重心を養う事は、成長の後多くの誘惑に勝つ力となりますまいか (久布白 1921:6-7)。

この時点において、既に久布白は性の問題は身体と精神の両方に関係するものであると考えていた。また、性の問題についての母親の責任を強調しており、女性に良妻賢母的な役割を要求する面もあるが、父親の責任にも言及しているということが進歩的であり、ユニークな視点を提示している。

#### 4 性教育論の立場

ここまで 1910 年代後半から 20 年代初めの久布白の論考を中心に見てきたが、田代（1999b）は、性教育論には「良妻賢母主義の性教育」、「優生学的立場からの性教育」、「キリスト教的立場からの性教育」、「社会改革を展望する性教育」の 4 つの立場があるとしている。久布白ら矯風会の性教育論は「キリスト教的立場からの性教育」に属するとされているが、久布白の性教育はその 4 つの面を有している。久布白の文章からは、母親の責任を要求する「良妻賢母主義」の側面、民族保健の立場から男子の性教育の必要性を主張する「優生学的」側面を読み取ることができる。田代（1999b）は、「キリスト教的立場からの性教育」の共通点としては、次の四点を挙げている。第一に、性を肯定的に把握しようとする点、第二に、性を肯定的に受け止めた上で、真実を子どもに伝えるという態度を基本姿勢とする点、第三に、性を多面的に把握する点、第四に、男女の違いを重視し、それを強調した上で、男女の協力や互いの尊重を説いているという点である。確かに、久布白の性教育論には初期の時点からこういった考えが存在している。また、矯風会総幹事に就任するきっかけとなった廢娼論（久布白 1916）において日本の社会構造を批判しており、社会改革の視点も多少は有している。

また、久布白は性についてどのように考えていたのか。久布白（1927:43）は「性ほど力強く、清らかなものはない」と考えると同時に、それだけに、「我々人間が之を支配する事は随分至難なことであります。それ故にあらゆる方面に濫用されているのでありましょう。若し我々人間が完全に性をコントロールすることが出来たら、それこそ理想の社界となるでありましょう」と考えており、性をコントロールするために性教育の必要性を主張していたと捉えることもできるのではないかな。

## 第2節 研究視察旅行と性教育研究

### 1 1922 年の渡米

久布白は 1922（大正 11）年、初めて海外に研究視察へ出かけた。婦人参政権問題や廃娼後の対策を研究するため、アメリカを訪問し、翌 1923 年の『婦人新報』でその成果を 9 回にわたって報告している。その中にアメリカの性教育研究についての報告がある。久布白はニューヨークの性問題教育研究館を訪問していた。「私がこの前に来た時（筆者注:1906 年のこと）は、この問題について研究する人はまだ数える程しかありませんでした。然し今度はこの大きな建物に、十五階全部を占領して、或人は学校対性教育と云う方面から、或人は社会政策の上から、或人は公衆娯楽の方面から、或人は生理衛生の方面から、各々其の専門とする方面から、この売春問題や性教育問題が、研究されて居るのを見て、喜ばしい驚きを感じました」（久布白 1923:30）と報告している。さらに、この研究館での研究結果によってアメリカの社会事業家はその事実の方針を、教育家はその教育方針を、為政家は、社会政策の方針を定めており、あらゆる団体がその資金と人々を出して、各々その方面から専門の人々に、事務室と書記と研究費とを与えてここで研究させており、そこから協同の利益が生まれることにつながっていくと述べている。

久布白はニューヨークでの視察をふまえて、青年男女に性教育を行なう方法に関しては非常に慎重な態度が必要であり、それぞれの専門分野を生かして多方面からの研究と協力が不可欠であると指摘している。

### 2 1928 年の研究視察旅行

久布白は 1928（昭和 3）年に再び、廃娼後の各国を視察する目的で欧州諸国からソ連、北欧の視察を行なった。北欧の社会福祉の充実ぶりにも感心していたが、その後、「公娼廃止後、不良少年少女を出さぬ為には万全の設備を講ぜねばなりません。自由治療の途も出来医者にも政府から補助を出して治療に遺憾なからしめ、又禁酒法を徹底させ最後に倫理道德を中心としたる宗教を植付て純潔を確立せねばならぬと、これが諸外国廃娼の跡を視て来た私の最後に到達した結論であります」（久布白 1928:13）と報告している。



### 3 1935 年の渡米と「純潔日本の建設」の発表

さらに久布白は 1935（昭和 10）年にも内務省・文部省・拓務省の委託によってアメリカを訪問し、研究視察を行った。渡米の理由について、次のように述べている。

自分は最近、是非一つしつかりと手本となし得る国が有れば見度いと真実願つて居つた。其の時に自分に最もアツピールした国は米国であつた。一つ自分を最も驚かせた事は、この国が 1917 年から 20 年にかけて、欧州大戦のために四百万人の壮丁を動員した際に、これを全く禁酒と、純潔の建前で、保護し続けたことである。これは自分に不思議にさへ思はれた、何となれば純潔を保たしむると云ふ事は軍隊では決して容易な事ではない、特に戦時に於ける純潔は更に困難と思はれた。彼らが 1917 年から 19 年まで 27 ヶ月間、この多数の青年を、兎にも角にも、この建前で、一貫した事は少なからず自分を驚かせた。それで自分は、何はともあれ、我国が廃娼を実行する暁には、この国に是非自身往つて、自身の眼で調べて来たいと願つて居つた（久布白 1936a:6）。

このような理由からアメリカへ研究視察に出かけた久布白であるが、その後の『婦人新報』の論考を見ていくと、その性教育論に最も影響を与えたのは、この 1935 年の渡米であることがわかる。政府への報告は『南北米百五十日の旅』にまとめており、その中で久布白（1935:12）は「廃娼令の發布後はやはり当分は黙認の時代を経過せねばならぬと思う。然し其間に根本より男女の性問題に関して国民に真の知識と了解を与え、男女間の中間存在物を許容する事は永遠に民族の将来に禍を為す事を悟得せしめねばならぬ」と述べた。その方法として、「純潔教育、禁酒教育、健全なる性教育、健全なる娯楽の設備、生活の保障、結婚（適当なる時期に於いて）等によって積極的に国民の思想と境遇とを向上せしむると主に一方には未成年禁酒法の励行、売淫の絶対禁止、売淫者としての芸妓廃止、売淫者としての酌婦廃止、女中の純潔保護、女工及び職業婦人の生活保障、純潔保護、修身道徳に於いて親孝行と身売りを分離せしむること、性病に関する知識を普及せしむること」（久布白 1935:12-13）を挙げた。

翌 1936 年に『婦人新報』で 1 年間にわたり、「純潔日本の建設—1935 年度研究発表—」と題してより詳細な研究報告を行なった。「法制上より見たる米国の廃娼」、「性病に関する国策樹立の必要」、「性教育」、「淪落婦女の防止と保護」について発表してい

るが、詳しく見ていきたい。

### 3-1 「法制上より見たる米国の廃娼」

第1回目と2回目は「法制上より見たる米国の廃娼」をテーマに「私娼黙認から絶娼に進んだ米国」、「法制上より見たる米国の絶娼」について記している。絶娼に達する二つの階段として久布白(1936b:6-7)は「売淫行為者、とこれによって莫大の利益を獲得する第三者とを分つ事である。即ち娼妓と業者との問題」と「男女道德律を平等にし男性に性の節制が何等健康に害なしとの科学上、又医学上の声明」を挙げた。また、売春に関するアメリカの法律として白奴廃止法、私娼禁止法、性病に関する法規等を紹介している。

### 3-2 「性病に関する国策樹立の必要」

第3回目から8回目は「性病に関する国策樹立の必要」をテーマに「性病に関する概論」、「性病に関する新態度」、「性病に関する各国の法律」、「性病に関する各国の施設」、「家庭病としての性病と之に対する法策」、「我国に必要な諸施設(イ)法律の改正(ロ)施設の徹底(ハ)教育の普及」(久布白 1936d:6)について記している。

日本における廃娼に対する反対論の中で最も有力なのは「私娼の跋扈と、性病の瀰漫」(久布白 1936c:8)であり、それに対する反論のため久布白は性病問題について解説したいと考えている。公娼検徴制度を反対した、英国のジョセフィン・バトラ<sup>3</sup>の運動を取り上げ、評価している。バトラは「如何に軍隊が国家に必要であろうとも其健康を守るために、同じ国民の一員たる妙齡の女子を、これがために犠牲にすべき筈がない」(久布白 1936c:9)と述べており、久布白もそれに共感を示している。

日本では、1927(昭和2)年に花柳病予防法が制定されたが、国民一般を対象としたものではなかった。「国民が性病に関して尚未だ甚だ無関心であるためにこの法の改正が未だ少しも称えられない」(久布白 1936e:27)ことを批判し、結論として、性病撲滅のためには「第一に其最大の原因である売笑問題の解決、即ち公認を禁ずること、然して純潔なる生活は国民的に何人にも健康に危険又は故障なくして為し得るものなる理解を徹底的に普及せしむる事、次に性病の予防及び治療の方法を国家的に用意して、無資産者にも自由に其治療を受け得るよう施設を為すこと、又対象は単に娼婦に限らず男女子供、いずれも家庭の一員として、又国家の一員として之が全治を要求す

ること、又其治療は一刻を争うものである事をよく悟得せしむること」(1936f:11-12)が必要であると述べている。国民全体を対象とした「即刻治療」、「完全治療」の仕組みをつくることが大切であると考えたのである。

### 3-3 「性教育」

性教育に関しては「ビゲロー博士による性教育」、米国における性教育の発達や現状、良い著者や教科書の出現、社会衛生協会（1914 年創立）の活動、米国政府衛生局の活動など、主にアメリカの事業の紹介を行なっている。ビゲロー博士の性教育に関しては、1924（大正 13）年に利光倫が「ビゲロウの性教育」の訳本を出版していた。

連載の中で性教育の書物に言及し、「我国でも、山本宣治の如き、同志社教授時代私費を投じて研究を重ね、二冊までも著書を出している篤志家もある」（久布白 1936j:8）と述べている。ここで初めて久布白は山本宣治の存在に触れており、その存在を評価していることがうかがえる。また、1939 年、矯風会で性教育の発展に貢献した C.B オールズが逝去した。その際、彼女が多年にわたって蒐集した、性教育を中心とする国書（英書 270 冊、日本書 65 冊）がその夫によって矯風会へ寄付されたが、久布白（1940b:8）は「この問題（性問題）では世界各国とも未だ著書は甚だ少ない。日本書の六十五冊中、翻訳書も少なくない。しかし其の間に多少日本人の手に成ったものもある。これ等は然し今後更に集められる必要がある。例えば山本宣治の性教育の如き、全く日本の調査を基礎として書かれたものが、今後は更に欲しいと思う」と述べている。

山本宣治（1889-1929）は生物学を学んでおり、性教育の第一人者である。1925 年から 26 年にかけて『産児調節評論』『性と社会』という雑誌を出版している。1923 年に『性教育』という本を出版し、それをふまえて、『産児調節評論』『性と社会』に「性教育講話」を連載している。山本はその連載で幼児期から老年期までの性教育について書いているが、「純潔」など道徳的なことは強調していなかった。田代（1999b）は山本の性教育を「社会改革を展望する性教育論」に分類し、性の社会的側面を重視すること、禁欲主義的な性道徳の強調に終始しないことにその特徴があり、性をネガティブに捉えることを批判し、社会運動的な観点から性をめぐる問題を社会・経済問題との関連で捉えようとする姿勢で貫かれていると評価している。

さて、山本は産児調節に取り組んでいたが、久布白は戦前「産児制限」、「産児調節」

についてどのように考えていたのだろうか。久布白(1933:35)は「研究が徹底するなれば、結婚後の或る期間産児の調節等も行い得ない事もあるまい、これも確かに一つの研究問題として真面目に考う可き一つである」と記しており、「産児調節」を課題として認識はしていたものの、すぐに実際に取り組む方向には進まなかった。

### 3-4 「淪落婦女の防止と保護」

ここでは「米国に於ける婦人保護事業(イ)救済(ロ)医療(ハ)教育(ニ)授産」、「米国に於ける少年保護事業(イ)少年審判(ロ)少年保護」について記している。久布白(1936k:10)は、アメリカの婦人保護は医療施設や教育機関の設備を徹底しているということ、また職業教育や職業開拓の道をつけていることを学び、日本でも「性的危険から保護し、健全なる生活に入るの用意を為す為に、更に更に多くの女性の救済保護の機関の充実の必要を痛感する」と述べている。また予防的観点からの少年少女の保護についても言及しているが、日本の特殊事情として「農村に於ける娘等の身売防止」(久布白 1936l:8)を挙げており、「我国の若き女性のためにはよき授産と、其就職中の保護を為せばよいのである」(久布白 1936l:9)と主張した。

この12回の連載の結論として、まず、「我が国に於いて、新しき純潔日本を建設せんとするのに当って、先ず第一に為さねばならぬ事は何を措いても廃娼の完成である」(久布白 1936l:9)と述べ、「次に必要な事は教育である、性は人生の呪に非ずしてこれは祝福であること、又性に対して節制が要求せらるるのは、これは人類のみの特権であること、又性に対する節制は原則として決して健康に害なき事(中略)…この原理を基礎とする健全なる性教育が国民一般、特に青少年に懇ろに与えらる可きこと」、「最後に施設である。身売防止の施設、職業婦人、女工、女中等の人々の保護の施設、又性病に関する法律の改正充実及び国民対象の性病撲滅の施設即ち対性病の国策樹立、及び淪落婦女の保護救済の施設である」(久布白 1936l:10)という結論に達し、そして、目標として純潔日本建設運動体系(資料編参照)を発表している。これは伊藤秀吉の「廃娼後の施設三十二ヶ条」と渡米における研究成果を合わせて考案したものである。大きく教化、予防、廓清、組織の4項目にわかれている。教化では純潔教育、性教育、一般教化、予防では防貧、保護、身売防止、廓清では風紀、衛生を取り扱っている。この運動体系を実現することは「積極的事業」(久布白 1936k:11)であると考えていた。久布白ら廃娼運動家たちの理想が込められた図である。

### 第3節 久布白の性教育論

#### 1 「我が国に於ける性教育」(1937年)にみる性教育論

「純潔日本の建設」の連載後、1937(昭和12)年1月から6月に6回にわたり、「我が国に於ける性教育」を連載している。『婦人新報』の読者に向けた「自分流の性教育、よみものの的なもの」(久布白 1973:244)であり、久布白の性教育論の柱となるものであった。戦後に『純潔教育とは何か』という書物を出版しているが、この連載を基盤としている。この連載ではまず性を題材とした物語を書き、その後に知的教育・情操意志教育の観点からコメントするという形をとっていた。(一)では、幼年期、すなわち3～6歳までの学齡前家庭を、(二)少年期は、7～12歳までの学齡児童を、(三)青春初期は、13～16、7歳までの中学時代を、(四)青春後期は、18、9～25歳までの高等学校、大学時代を、(五)結婚期は、25歳から30歳前後までを、(六)は40歳前後を対象としている。以下、その六階梯に沿って、久布白の性教育の具体的な内容について詳しく見ていくことにする。

まず幼年期、少年期における知的教育は動植物の話が中心となる。同時に情操意志教育も幼年期から始められ、「時を定めて用を足す事、人中で平気で用を足さぬ事、おむつを余り堅くせぬ事、局部を弄ばさせぬ事」(久布白 1937a:18)、3、4歳前後には「下着を余り堅くせぬ事、片ことでも野卑な言葉を使わせぬ事、寝につく時手を外に出して置く事等」(久布白 1937a:19)を課題として挙げている。5、6歳になったら、「よく納得のゆくように性についての質問に答え、これは大切な事だから濫りに口に出さぬよう言い含める事」(久布白 1937a:19)、また自慰の習慣がつかないように気をつけるなどの注意を促している。この時期、あまり深い話をする必要はないが、必要に応じて子どもにどれだけ話してもいいと考えていた。子どもの疑問には十分に答えつつ、衛生的な面では親が注意を払う必要があるという考えであった。書物や実物で、少年期までに動植物のことは適当に教え、「知的教育面には全く基礎工事を終えねばならない」(久布白 1937b:24)と考えているのである。

青春初期は知的教育として「生理的、衛生的に女子と生殖機関に関して」、「生理的、学理的に男子生殖機関(ママ)に関して」、「月経の原理」、「内分泌の原理等々」を、情操意志教育として「青年期に於ける生理的変化を明にして其衛生を教え其準備をさせる事」、「肉体的にも精神的にも動揺多きこの時代を父母共に注意し、悪習に染ませぬ事」(久布白 1937c:8)を挙げている。

青春後期は知的教育として、「異性との交渉に関する予備知識」、「私生児問題」、「売笑婦問題」、「性病問題」、「処女童貞生活の研究」、「結婚に関する健全な知識と準備」、情操意志教育として、「男女の交渉における常識の涵養」、「男女交際における行儀作法の養成」、「男女の交渉における倫理道德の確立」（久布白 1937d:6）などを学習材料として挙げていた。この時期に取り上げる問題は多岐にわたっているが、結婚前の男女双方の貞操を重視しており、誰もが結婚することを前提として、結婚準備教育や倫理道德を重視していることがうかがえる。

結婚期には、知的教育として「男女の交際」、「婚約」、「結婚」、情操意志教育として、「以上に於ける理想とその実現」（久布白 1937e:22）を、40 歳前後では、知的用意として「男女共に生理的用意の必要」、「四十歳前後の生理衛生の研究」、「相互の仕事、習慣、趣味、性格等の了解」、情操意志鍛錬として「新夫婦道」、「相互の鍛錬」（久布白 1937f:8）等を課題に挙げている。

この連載は矯風会支部の学習会にも影響を与え、高知支部が久布白の性教育の連載を主題として、一年間にわたり研究会を続けた。また、その後、1939 年、1940 年の矯風会全国大会で矯風会は性教育の普及を決議している。

久布白の性教育論の特徴を一言で表すと、発達段階をふまえ、子どもから大人までを対象とした生涯教育としての性教育であった。1930 年代半ばの時点において、久布白の性教育論は生物学的知識を重視する科学的な性教育と精神的・道徳的な概念である「純潔」の両方を重んじる教育であった。概ね知的教育が前者に対応し、情操意志教育が後者に対応している。しかしながら、科学的性教育を主張しているにもかかわらず、自慰を悪習慣として否定している点では、従来の性欲教育に近い部分もある。

## 2 「国民の種々層と性問題」（1937 年）から

その後、1937（昭和 12）年 7～12 月には、久布白は『婦人新報』に 6 回にわたり「国民の種々層と性問題」を發表し、あらゆる階層の性問題の解決のためには性教育が必要だという結論に達した。この連載では、「陸海軍人と性問題」、「学校青年と性問題」、「工場青年と性問題」、「農村青年と性問題」、「商業青年と性問題」、「工場、農村女性と性問題」を扱っている。

「学校青年と性問題」における「学校青年」とは、高等教育を受けている青年たちを指している。最高学府に学び得る人々として「その生活態度も、社会に対する責任

を先ず考える必要があるのではあるまいか」(久布白 1937h:10)と述べている。また、工場は産業の発展とともに必要不可欠なものであり、「今後これに従事する人々が、職工の人格、特に其最も乱れの根源たる性生活の純潔に対する徹底的教育を与えて置くこと」(久布白 1937i:25)が大切であると考えていた。農村については身売りの問題とも関連し、性病に関する国策を立てることが最大の急務と考えており、「性病を対国民的問題として、其治療否むしろ強制治療を一般国民に及ぼす事は、其最も著しい効果は農村にあるであろう。又其必要も此処にあるであろう」(久布白 1937j:10)と述べていた。「工場、農村女性と性問題」で、久布白は女工たちの性生活上の危険について考察し、法の目をくぐった小工場の労働条件の劣悪さや虐待に耐えかねて女工から酌婦、女給、娼妓になる者がいると指摘した。そして特に農村女性の身売り防止が課題であると述べている。この連載の最後に、久布白(1937k:11)は「若し禁酒と純潔とを守り且つ自身の相手となる異性に之を要求する事を会是として立ち得らるるなればそれ自身我国の性生活の是正の根底であると信ずる、性生活が是正されて行くなれば我国家庭の最低の第一基礎は据えられたと云ってよい」と締めくくっている。

### **3 久布白の「純潔」概念をめぐる**

#### **3-1 「純潔」概念の検討**

科学と純潔という二本の柱から成る久布白の性教育論を理解していくにあたって、その「純潔」概念を検討していくことは不可欠である。1935(昭和10)年の研究視察旅行以前から久布白自身の文章に「純潔」という語が登場している。久布白(1919b:5)は、男女の問題についての記述で、「男子と女子の交わりは、人類のもっとも純潔高貴なる生命の源となるべきものです(中略)・・・、今後の結婚は、純潔なる恋愛が中心となって、理性の導きの下に行われねばなりません、結婚前の男女を解放して、自由に交際する機会を与えることは当然為すべきことと思います」と述べていた。ここからは久布白の主張する「純潔」という言葉が必ずしも保守的な意味ではないということが窺える。当時、一般的には「家」本位の結婚が行なわれることが多く、久布白自身も親の勧めた相手と結婚していたということを考えあわせると「結婚前の男女を解放し、自由な交際する機会を与える」というのは積極的な視点である。

### 3-2 矢嶋楫子の告白をめぐる

さて、「純潔」概念を取り上げるにあたり、忘れてはならないことがある。それは矯風会の創立者で、久布白の大叔母である矢嶋楫子の告白である。1923 (大正 12) 年春、徳富健次郎が『竹崎順子』伝を発表し、その中で矢嶋楫子の生涯について記していた。矢嶋は林七郎と結婚し、一男二女をもうけたが、夫の酒乱のため、離婚した経験があった。以下の引用は、その後、矢嶋が兄・直方の家庭で暮らしていた時の出来事である。

此時です、私は申すも苦しき次第ですが、兄が頼みとして居った書生の一人と愛に陥って妙子を宿したのです、其男は家を持つものでした、私は其後全く往復を断ち、導かれて神の道に入り、五十余年の精進の生涯を営むことが出来ました、然し罪は罪を生みます、私は妙子の不行跡に対し、母としての責任を感じます。九十一歳の今日までながらえて、今日私は、皆様の前に恥を忍んで、この告白を致しますのは、死よりも苦しい事です、然し私の生涯の後半の事業として残す基督教婦人矯風会は、強きが故に設立したのでなく、弱きが故に、実に弱きが故に、人間の行路を少しでも誘惑を減じ、人生を歩み安くする為に、建てたものです (矢嶋 1925:6)。

これは 1923 年 7 月に久布白が矢嶋から聞き取ったものである。久布白は矢嶋の過去の出来事を知るところとなり、悩み苦しんだ結果、「基督教婦人矯風会は、順境に育ちし、小娘の寄合では有りませぬ、今日ますます荊棘を拓いて進まねばなりませぬ、先生の生涯のこの一頁を捨てて、どうしましょう」(久布白 1925:40-41) と考えた。そして矢嶋に「叔母さんは五十年前に今日の最も新しき女性が為しつつあることを、一身に於いて為し、躓き、かつ起きて今日まで歩み通されました、ここに真正の救いがあります、私は、矯風会の、少なくとも日本の矯風会の真髓と信ずる純潔を、振りかざして、立って来ました、然し矯風会の基礎は叔母さんです、若し今日叔母さんが、この過去を明かにして下さらなければ、私は叔母さんの死後、矯風会の根底に地崩れが来ると思います」(久布白 1925:41) と伝えた。そして矢嶋は「云うのは苦しい、生命がけの仕事です、然しあなたがそれをして呉れるなら、有難い」(久布白 1925:41) と答え、久布白が矢嶋の口述筆記を行った。このことを実際に発表するのは矢嶋が死



去した後になる。

それまで「純潔」を当然守るべきこととして、受け入れてきた久布白が妻子ある人との婚外恋愛で妊娠、出産し未婚の母となった矢嶋について知った時はどんなに衝撃的であっただろうか。それゆえに発表することに躊躇もしたのであろう。久布白（1925:40）はこのことを通して、「弱きが故に戦わねばならぬと、性の誘は、云い難く強きが故に、正しき行路を拓かねばならぬ」と考えるようになり、彼女のその後の論考にも影響を与えていく。

1935 年の研究視察旅行以後、久布白の文章には度々「純潔」という語が登場する。同年、公娼廃止が目前に迫ったと考えた娼連盟は国民純潔同盟<sup>4</sup>に改称した。それを受けて矯風会風俗部は 1937 年に純潔部に改称している。久布白（1937g:4）は人格の基礎工事に最も一つ不可欠であるものは純潔であるとした上で、「童貞、処女を万一、一度傷つけたとしてもそれは其人の最後ではない、然し出来る事なれば、この与えられた貴い我を貴く守り終せ度いと云うことは、万人の願いである。我等が純潔と云う事を禁欲と解する時は其考えが窮屈である、消極的である。然し、純潔と云う事は、そんな狭苦しいものではない。我等の云う処、少なくとも基督の青年男女として考える時、それは満ち満ちた生活である」（久布白 1937g:5）と述べている。「純潔」は『広辞苑（第六版）』においては、①けがれの無いこと、②異性と接していないこと、とある。久布白はこういった一般的な捉え方のように「純潔」を消極的に捉えてはおらず、もっと積極的なものであると考えていた。キリスト教的視点からの神の国の建設が最後の目的であると考えた上でその基盤となる個々の人格の建設において、「根本条件なる純潔なる生活、然かも豊富にして積極的な純潔なる生活を築き上げ度いものである」（久布白 1937g:5）と考えていた。

### 3-3 黎明会について

また、久布白は以前から若い男女のための健全な交際機関の必要性を感じていたが、早稲田大学と専修大学の婦人問題研究会会員との話が実を結び、1936（昭和 11）年 6 月 13 日、矯風会風俗部と国民純潔同盟が協力して、青年男女の健全なる交際をはかる会として「黎明会」を発足させた。矯風会本部会館内に事務所を置き、座談会、講演会、見学、ピクニック、鑑賞会等、様々な方法で目的を達成したいと考えていた。久布白は黎明会の活動に参加し、「黎明会は決して単なる青年男女の健全なる交際機関た

るに止まらず、男女両性の協力による文化社会建設という大きな目標を目指して、相互の接触により互いの認識を正しく深めつつ共同に研究し、遊び、黎明会でなくては出来ぬ仕事をなし、明朗、純潔な新しい文化社会実現に盡したい、と云う対社会的な尊い使命をもつものでございます」(女子部幹事 1937:36)。

黎明会が発足してから3年経った時、1人の男性が久布白、島津トシ(矯風会風俗部、黎明会の世話人)らのあたたかい庇護や支援に感謝し、『婦人新報』誌上で次のようなコメントを掲載している。

本当の意味の純潔とは何か、ということが、こうした生活場面における協力の間に実際に、この会に集まる人々の間に理解されてきたという事実なのである。殊に男子の側には明瞭に生活の上に考え方の上に少なくない影響を与えているのである。また、こうして男子の変化に従って女子の間にも、唯だ概念的な、そして消極的な「純潔」という考え方から転じて、もっと内容的なものにまで深くなっていることも、十分に観察されるのである。男性が女性を単なる性的対象物として眺める事を止めることは、とりも直さず女性が自らの人格を自覚する時でもある。その時本当の「純潔」ということがあり得るのだと思う。そして人格的な自覚とは具体的に言えば民族的な、国民的な自覚にほかならないのである。それだから真実の純潔ということは男性と女性の民族的自覚によって本当に完成されるものだと思う(矢島 1939:40)。

これは久布白の「純潔」概念の捉え方と近いものがある。久布白らの積極的な「純潔」の考えは黎明会のメンバーに着実に浸透していたことがうかがえる記述である。

また、「娼妓は全くふき出ものの治療であり、あとには全身に清純な血液が流れて、全身を健全にせねばならぬ、すなわち全国民の青年男女は、汚れを知らぬ、公明正大な交際が出来ねばならぬ」(久布白 1941d:18)、「宗教を問わず、男女の別なく、禁酒、禁煙は無言律とし、純潔は其縦糸となって今日に到った、丁度五ヵ年の記念会をこの夏催したばかりである。純潔なる男女の、明朗な交際が、従来の不純な、又不潔な男女の交渉と代る時に、はじめて、社会の風紀問題は解決を見るのである」(久布白 1941d:19)と述べている。このように久布白は男女の積極的な交際を勧めているが、それはあくまでも「健全な」関係においてのものである。この「純潔」思想は戦争遂

行時の人的資源作りに組み込まれていく。男女の積極的な交際を経て、良い家庭を作ること、さらに、丈夫な良い子どもを産み育て、国家に貢献していくということにつながっていく危険を孕むものであった。

## 第4節 戦時下における性をめぐる論考から

### 1 久布白の活動と国策一致の過程

久布白が国内外で様々な研究や活動を行なうことによってたどり着いたのは「純潔日本の建設」であった。これは皮肉にも戦争とも矛盾しない思想、むしろ適合する思想として進んでいくことになる。そして、戦後にまで「純潔日本の建設」は受け継がれることになるのである。

1936（昭和11）年に「純潔日本の建設」を発表したが、1938年にも「来らんとする五十年に於ける純潔運動体系」を発表している。「純潔日本の建設」がより具体的になったものである。また、1939年にも3回にわたって「純潔日本の建設」を連載している。これは読み物的なもので、身売り防止が中心的話題である。また、1940年には「新体制下の純潔運動」を『婦人新報』に5回にわたり連載している。「性病と新体制」、「風紀と新体制（学生風紀、職工風紀）」、「身売防止と新体制」、「保護救済と新体制」、「人口増殖と新体制」が5回のテーマである。それらの論考の中には「新体制下に於て物資の節約も必要には違いないが、人的資源特に次代の母の素質を下落させぬ為の努力は、国家として当然とるべきもの」（久布白 1941a:15）等の記述も見られる。

また、1931年から東京婦人ホーム<sup>5</sup>の理事長を務めていた久布白（1941b:25）は女性の保護救済について、「然し我国の所謂淪落婦人は、自ら進んで入るのでなく、純なる娘が、無智の為、生活の為、又誤れる親孝行などから入る為、未だ其純情が更生の可能性を多分に蔵して居る。更生機関としてのホームの必要も明らかであると思う。同時にこれを未然に防ぎ、健全なる女性を汚さず、傷つけず、其のままによき国家の妻たらしめ、母たらしむるの道は、今後いよいよ研究されねばならない。我が国の社会が娼妓、芸妓、カフェーの女給等の生活に入る娘を要さぬ時代を創造り上げねばならない。我国の女性の覚醒と同時に最も必要なものは男子の覚醒である」と述べている。

久布白は以前から「女性の性を国法に於いて認めて、そして保護して貰いたい」と考え、国家による「性のコントロール、国法による性の保護」を望んでいた（久布白

1927:44)。それゆえに国家によるコントロールに違和感を持つことなく、一致していたのであろう。国家総動員体制に組み込まれ、戦時色が濃くなってきた頃、久布白はまず公娼廃止を行ってから一般の売笑問題や風紀問題に取り組まねばならないと考えた上で、「最近の試みである学生宿舎相談所の如き、既に東京市内で百数十件の家が提供され、文部省は勿論市、区、警視庁等も賛意を表して之れの協力に当らるる等、実に時は驚く程熟し来て居る。我等常に流れに遡って泳ぎ来たものには、不思議と思わるるまでに我等の目標は国策と合致して来て居るのだ」(久布白 1940a:8) と述べている。1942 年には国策に対する積極的事業として興亜女子指導者講習会を開催している。プログラムには、拓務省、外務省の講習、久布白の純潔講座、小塩完次の酒精・民族優生の講座、竹内茂代の民族衛生救急法などがあつた。性に関する問題解決策が戦争に利用されていくことになり、久布白も含め、矯風会全体が戦争に取り込まれていくのである。

## 2 性病対策について

1940 年代に入ってから、性教育そのものに関する記事は少なくなり、性病防止に関する記事が増えてくる。久布白 (1942c:7) は「今日戦時中に於いて、性病は国内中のみならず、この東亜に於いては特に重大性を持つものである以上、我国としては従来の目標である純潔日本建設の途上常に率先してこの問題を研究調査し、又其の実際に努力すべきである」と考えていた。「優勢な民族を造る上に、又数的に之を増進する上に」(久布白 1942b:10)、性病対策に重点を置いていく。

1942 (昭和 17) 年、厚生省による「健民運動」が登場し、そこでは久布白らが従来から唱えてきた性教育、純潔教育、性病問題も取り上げられている。性病相談、無料診療、母の検診等も含まれており、喜びの声をあげているが、これも戦争に備えて優秀な人材を確保しようとするためであった。

このように、性教育など久布白ら矯風会の活動も戦争体制の中に組み込まれていたのは否定できない。その性教育論も幼少期からの心身の健全な発達と種の育成を目的としていることが様々な記述からうかがうことが出来る。従来から性に関することに国家の介入を求めていたこともあり、矯風会の活動は国策に矛盾することなく、再編・利用されていった。但し、久布白はそのような中でも「性の研究はまだまだ深く進めねばならぬのだとしみじみ思う」と考え、「性病対策運動と共に科学的、衛生的研究を

絶えずつづけて欲しい」、「性病撲滅運動に邁進するとともに、一方で性教育についてははっきりとした科学的知識を持って出るならば性病は未然に防ぐことが出来る」(久布白 1942a:10) というように科学的知識に基づいた性教育を変わらず重要視していた。小野沢 (2010) は、久布白らの廃娼運動の担い手が様々な官制運動と接点があったのは確かであるが、戦時であっても根本的に方向性を異にしていたということについて、その研究で明らかにしている。

また、戦時体制内においても、久布白 (1942d:7) は「我等の純潔運動の如き、廃娼の完成に措き、其性教育に措き、又最近特に性病予防・撲滅に於いては、妊産婦問題に関する方面又青少年方面に於いて、大に押し進む可き余地があるのではないか。…婦人更生、淪落防止の方面では、従来の我等の婦人ホームなるものは、今後我等の独特の奉仕の部門として継続すべきではないか」と主張している。婦人ホームについて、「これが今後予防の方面に、むしろ保護事業としての方面に、更に多くの使命を有するかも知れない。勿論何時の時代でも、踏み違えた娘の世話と云う事は絶えない。従って母子の寮も必要となる。之等は今後考えられねばならぬ問題である。婦人保護の問題で我等がこれに任ずる外に、公私ともに責任問題の存在する限り、婦人救済更生機関としての婦人ホームの経営は決して之を中止することは出来ない」(久布白 1942d:7) と述べた。このように、戦時体制の中でありながらも、久布白は婦人ホームなど独自の事業の継続を模索していたのである。

1942 年に矯風会は YWCA とともに日本基督教団第三項所属団体に統合され、1944 年 4 月、出版統制の影響で『婦人新報』も休刊した。

## 小括

久布白の性教育は「純潔日本の建設」を目指した性教育であるということ、また 1930 年代後半から使われ始めた「純潔教育」という言葉から、保守的な性教育であろうとマイナスイメージを持って見られる傾向がある。しかし、『婦人新報』等の久布白の論考を分析していくと、その性教育論の中には進歩的な視点も提示されている。また、純潔日本建設運動体系の図を詳しく見ていくと、幅広い視点から教育や貧困の防止、女性の保護など、様々な事業を行う必要性が提示されていた。本章の終わりに、中畠 (1994) の大正期から昭和期 (1943 年頃まで) の性教育書の特色を手がかりに、久布白の性教育論を考察しておきたい。

第一に、大正時代初期においては、生理的な性の問題に焦点を当てて個別的な具体的な性欲を対象とした教育に焦点を当てていたが、1920年頃を境に性教育の語が一般化し、山本宣治『性教育』（1923）などの影響もあり、性教育の範囲が拡大している。久布白も1919年頃の文章に性の教育という言葉を使用していた。それ以前にも、久布白は性教育に関する文章を執筆していたが、実際に「性の教育」、「性教育」という言葉を使い始めるのは、1920年前後である。

第二に、性教育のほとんどは性道德の教育が中心に置かれている。また、性欲をおさえるものとして、キリスト教の立場から禁欲的なものとしての主張などが挙げられるという。久布白もキリスト教的な立場を基本としているが、必ずしも禁欲主義であったわけではない。久布白の主張する「純潔」はそのような保守的な意味だけでは捉えきることが出来ないものであった。時代背景をふまえると、男女平等の「純潔」の主張は従来とは異なる価値観であった。しかしながら、「純潔」は誤解を生む表現であり、たとえ積極的な意味合いが含まれていたとしても、そのように解釈し難いものである。また、売春女性たちをさらに苦しめる原因にもなり、先述したように、矯風会もそういった配慮から、1985年に「純潔」部を「性・人権」部に改称した。また、久布白自身も戦後、時代が進むにつれ変化を遂げていくことになる。

第三に、男性に対する性教育と女性に対するそれとの間に乖離が見られるとしている。性教育の性別規範の問題であり、男性に対しては甘い女性に対しては厳しく、純潔・貞操・良妻賢母たること、母としての責任を要求されることが多い。確かに、久布白の論考には良妻賢母的な性役割を求める記述も見られたが、父親の責任にも言及している。また、第2章の久布白の廃娼論で言及したように男女平等の貞操を主張していた。

第四には、社会的な問題として性教育が扱われることが少なかったということを挙げている。切実な問題であるにもかかわらず、売春婦の存在や性病の蔓延に対して、道德的対応や恐怖や無視の態度を取っているという。久布白は少なくとも恐怖や無視の態度はとってはいない。道德的対応の側面も見られるが、売春や性病に対して問題意識を強く持っており、社会的な問題として受け止めていた側面もある。

第五に、国家的要請と優生学的視点の存在である。富国強兵、海外進出をはかる日本では、健康な体を持つ国民の増加が求められ、性教育もここに結び付けて説かれている。確かに、戦時体制に入るにつれ、矯風会全体としてそういった面があることは

否定できない。国家は健康な国民をつくるために、すなわち戦争遂行のための人的資源作りとして、性を利用し、性病予防に重点を置くようになり、矯風会もそれに協調していくのである。久布白（1973:251）は「戦争は、とくに太平洋戦争は、矯風会の活動、私の分野でいえば廃娼、婦選運動の手や足をしばった」とのちに振り返っている。しかしながら、そのような中においても、久布白が科学的な性教育の重視や婦人ホームなどの事業の展開で独自性を出そうとしていたことは見逃せない事実である。

## （第6章 文献）

赤川学（1999）『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房。

女子部幹事（1937）「黎明会は単なる男女の交際機関たるに止まらず」『婦人新報』473,36-37.

金子由美子（2000）「ジェンダーフリーの教育を」『婦人新報』1200,10-12.

久布白落実（1916）「立て戦闘は将来に有り」『婦人新報』224,7-9.

久布白落実（1917）「貞操問題に就て小学校職員に訴ふ」『婦人新報』237,5-8.

久布白落実（1919a）「婦人の権利と公娼制度」『婦人新報』268,1-4.

久布白落実（1919b）「偉大なる時代の進運」『婦人新報』259,3-6.

久布白落実（1921）「生活の中に現るる神の像」『婦人新報』290,4-7.

久布白落実（1923）「拾年ぶりに故国を離れて(第八信)」『婦人新報』310,29-33.

久布白落実（1925）「恩師愛師矢島楫先生」『婦人新報』331,40-42.

久布白落実（1927）「私は性をかう思っております」『優生運動』2(6),43-44.

久布白落実（1928）「廃娼後の欧州」『婦人新報』364,8-13.

久布白落実（1929）「特別講座 労働問題物語」『婦人新報』378,14-19.

久布白落実（1932）「全国小学校の先生に願ふ」『帝国教育』630,20-21.

久布白落実（1933）「自由論壇 廃娼と経済問題」『婦人新報』418,32-35.

久布白落実（1934）「風俗部の将来」『婦人新報』432,8-11.

久布白落実（1935）『南北米百五十日の旅』日本基督教婦人矯風会。

久布白落実（1936a）「純潔日本の建設（一）1935年度研究発表」『婦人新報』454,6-11.

久布白落実（1936b）「純潔日本の建設（二）1935年度研究発表」『婦人新報』455,6-9.

久布白落実（1936c）「純潔日本の建設（三）性病に関する新国策樹立の必要」『婦人新報』456,8-12.

- 久布白落実 (1936d) 「純潔日本の建設 (四) 性病に関する新国策樹立の必要」『婦人新報』 457,6-10.
- 久布白落実 (1936e) 「純潔日本の建設 (五) 性病に関する新国策樹立の必要」『婦人新報』 458,20-27.
- 久布白落実 (1936f) 「純潔日本の建設 (六) 性病に関する新国策樹立の必要」『婦人新報』 459,8-12.
- 久布白落実 (1936g) 「純潔日本の建設 (七) 性病に関する新国策樹立の必要」『婦人新報』 460,6-9.
- 久布白落実 (1936h) 「純潔日本の建設 (八) 性病に関する新国策樹立の必要」『婦人新報』 461,6-11.
- 久布白落実 (1936i) 「純潔日本の建設 (九) 廃娼後の施設研究」『婦人新報』 462,6-10.
- 久布白落実 (1936j) 「純潔日本の建設 (十) 廃娼後の施設研究」『婦人新報』 463,6-11.
- 久布白落実 (1936k) 「純潔日本の建設 (十一) 廃娼後の施設研究」『婦人新報』 464,6-10.
- 久布白落実 (1936l) 「純潔日本の建設 (十二) 廃娼後の施設研究」『婦人新報』 465,6-11.
- 久布白落実 (1937a) 「我が国に於ける性教育 (一)」『婦人新報』 466,14-19.
- 久布白落実 (1937b) 「我が国に於ける性教育 (二)」『婦人新報』 467,19-24.
- 久布白落実 (1937c) 「我が国に於ける性教育 (三)」『婦人新報』 468,8-14.
- 久布白落実 (1937d) 「我が国に於ける性教育 (四)」『婦人新報』 469,6-12.
- 久布白落実 (1937e) 「我が国に於ける性教育 (五)」『婦人新報』 470,22-25.
- 久布白落実 (1937f) 「我が国に於ける性教育 (六)」『婦人新報』 471,8-12.
- 久布白落実 (1937g) 「修養 神の国建設の礎石」『婦人新報』 473,4-5.
- 久布白落実 (1937h) 「国民の種々層と性問題 (二) 学校青年と性問題」『婦人新報』 473,6-10.
- 久布白落実 (1937i) 「国民の種々層と性問題 (三) 工場青年と性問題」『婦人新報』 474,20-25 .
- 久布白落実 (1937j) 「国民の種々層と性問題 (四) 農村青年と性問題」『婦人新報』 475,6-10.
- 久布白落実 (1937k) 「国民の種々層と性問題 (六) 工場、農村女性と性問題」『婦人新



- 報』 477,6-11.
- 久布白落実 (1940a) 「皇紀二千六百年の大会を迎ふ」『婦人新報』 503,6-8.
- 久布白落実 (1940b) 「性教育文庫について (オールズ夫人記念)」『婦人新報』 509,6-9.
- 久布白落実 (1940c) 「新体制化の純潔運動 (一) 性病と新体制」『婦人新報』 512,16-19.
- 久布白落実 (1940d) 「新体制化の純潔運動 (二) 風紀と新体制」『婦人新報』 513,14-17.
- 久布白落実 (1941a) 「新体制化の純潔運動 (三) 身売防止と新体制」『婦人新報』 515,12-15.
- 久布白落実 (1941b) 「新体制化の純潔運動 (四) 保護救済と新体制」『婦人新報』 516,22-25.
- 久布白落実 (1941c) 「新体制化の純潔運動 (五) 人口増殖と新体制」『婦人新報』 517,18-21.
- 久布白落実 (1941d) 「純潔日本建設のプログラムと黎明会」『婦人新報』 524,18-19.
- 久布白落実 (1942a) 「二つの要点」『婦人新報』 531,8-11.
- 久布白落実 (1942b) 「人口国策と矯風会」『婦人新報』 532,10-12.
- 久布白落実 (1942c) 「純潔日本建設途上における性病問題」『婦人新報』 536,4-7.
- 久布白落実 (1942d) 「現下我等の行く可き道」『婦人新報』 537,6-8.
- 久布白落実 (1949) 『純潔教育シリーズ 2 純潔教育はなぜ必要か』 社会教育連合会.
- 久布白落実 (1955) 「矯風会と家族計画」『婦人新報』 662,6-8.
- 久布白落実 (1973) 『廃娼ひとすじ』 中央公論社.
- 間野絢子 (1998) 『白いリボン 矢嶋楯子と共に歩む人たち』 日本基督教団出版局.
- 村瀬幸浩 (2000) 「重要! 男子への性教育」『婦人新報』 1200,6-9.
- 中畠邦 (1994) 『「性教育研究基本文献集」解説編』 大空社.
- 日本キリスト教婦人矯風会 (1986) 『日本キリスト教婦人矯風会百年史』 ドメス出版.
- 小田切明德 (2005) 「キリスト教婦人矯風会と性教育—久布白落実らの大正・昭和前期の活動を中心にして」『キリスト教社会問題研究』 54,1-24.
- 小野沢あかね (1997) 『1930 年代の廃娼運動—公娼廃止から性教育へ』『史学雑誌』 106(7),57-77.
- 小野沢あかね (2010) 『近代日本社会と公娼制度—民衆史と国際関係史の視点から—』 吉川弘文館.
- 柴本枝美 (2005) 「1920 年代における性教育論の目的規定について—山本宣治の性教育

- 論を中心に―』『京都大学大学院教育学研究科紀要』 51,290-301.
- 東海林路得子 (1997) 「純潔教育は女性の人権を支えたか」『婦人新報』 1158,12-13.
- 田島恵子 (2004) 「矯風会の性教育のあゆみ」『婦人新報』 1248,2-5.
- 高橋喜久江 (1998) 「活動史の視点から 人権を主張した矯風会」『婦人新報』1170,2-3.
- 高橋喜久江 (2001) 『福祉に生きる 久布白落實』 大空社.
- 田代美江子 (1999a) 「第三章 十五年戦争期における娼妓運動と教育―日本キリスト教婦人矯風会を中心に」松浦勉・渡辺かよ子編『差別と戦争―人間形成史の陥弄』明石書店,pp.115-148.
- 田代美江子 (1999b) 「性差と教育―近代日本の性教育論にみられる男女の関係性」歴史学研究会編『歴史学の現在 9 性と権力関係の歴史』 青木書店,pp.139-169.
- 矢嶋楯子 (1925) 「全国の会員と知友の前に申す」『婦人新報』 331,6.
- 矢島直一 (1939) 「黎明会のこのごろ」『婦人新報』 492,40-41.
- 山本直英 (1999) 『山本宣治の性教育論 性教育本流の源泉を探る』 明石書店.

---

#### (第6章 注)

- <sup>1</sup> C. B. オールズ (1874～1936) は同志社創立者の1人であるデビスの次女である。アメリカで教育を受けた後、宣教師夫人として宮崎に10年、新潟に8年、岡山に18年余り奉仕した。性教育を使命と感じ、岡山時代は特に力を用い、矯風会教育部長として、各地で性教育の講演を行っていた。
- <sup>2</sup> 村瀬 (2000) は、長い間、日本の性教育は主として女子を対象に行われてきており、男子の性に焦点を当てて学び考えさせる性の教育は未だに行われているとは言い難いと指摘している。
- <sup>3</sup> ジョセフィン・バトラー (Josephine Butler:1828-1906) はイギリスの社会改良家であり、女性教育運動や売春女性の救済に尽力した。国際娼妓連盟を設立した人物である。
- <sup>4</sup> 国民純潔同盟は1890年5月に結成された娼妓連盟が1935年に改称したものである。娼妓連盟は前三年、後五年の運動で公娼制度廃止は目前に迫ったと考えて、娼妓後の施策検討と純潔運動を始めることになった。
- <sup>5</sup> 東京婦人ホームは1917年に守屋東が始めたものである。

## 第7章 戦後の久布白落実—政治と廃娼—

### はじめに

婦人参政権こそは敗戦に伴うマッカーサーの贈り物として我が国女性に与えられたかの観があるが、決して左様なものではなく、我が国の婦人参政への運動は、婦人界においても、又国会の歴史においても、相当程度までの動きは見せていたのであり、又敗戦後の政界においても、保守革新を問わず、マッカーサーの指令を待たずして、実現を目ざした事等は、改めて銘記すべきであろう（久布白 1955a:3）。

婦人運動家たちの様々な取り組みにも関わらず、戦前に婦人参政権獲得は実現しなかった。それゆえに、婦人参政権や公娼制度廃止はマッカーサーからの贈物とされている。しかしながら、戦後の混乱期にあっても、マッカーサーからの指令が出る前に久布白や市川房枝など婦人運動家たちが様々な働きかけを行っていた。

終戦前後の矯風会はどのような状況下におかれていたのだろうか。1945（昭和 20）年 5 月 25 日の東京大空襲により、大久保の矯風会本部会館、東京婦人ホーム等は全焼した。2 か月間婦人ホームの防空壕を仮事務所としていたが、7 月に日本基督教団の 2 階を借り受けて事務所とした。東京婦人ホームは 1946 年に世田谷で再開する。1948 年に全国 16 か所に婦人保護施設が設置されるが、婦人ホームはその時に慈愛寮という名称となった。矯風会本部構内に新築移転するのは 1951 年のことである。大久保の土地にバラックの仮事務所が建設されるのは 1948 年 7 月であり、翌 49 年に新築の本部会館が落成した。

本章では、第二次世界大戦直後の久布白の婦人参政権獲得・公娼制度廃止の要求に向けた活動をはじめ、矯風会を退いて総選挙に出馬する頃から矯風会復帰後までの彼女の活動について明らかにすることを目的としている。時期的には 1945 年から 1951 年頃までを対象とし、久布白が政界にあった時期を中心として取り上げていく。戦後、性をめぐる様々な政策が出てくるが、それについて見ていきたい。

## 第1節 戦後の久布白の行動

### 1 外国軍駐屯地における慰安施設について

1945（昭和20）年8月17日に東久邇内閣が発足し、翌18日に「外国軍駐屯地における慰安施設に関する内務省警保局長通達」が発せられた。終戦の3日後のことであった。駐屯軍のための「性的慰安施設」、「飲食施設」、「娯楽場」の充実に図るものとされており、営業に必要な女性には芸妓、公娼私娼、女給、酌婦等を優先的に当てることとされていた。同日、警視庁が都下の売春業者に対し、慰安施設について「政府はできるだけ応援するから、是非民間でやってもらいたい」（坂口 1949:1）と依頼し、21日には正式に業者の代表が警視庁に呼ばれ、慰安施設を作るよう指示を受けた。23日に創立総会を行ない、27日に認可申請書を警視庁に提出する。「一億の純血を護りて国体護持の大精神に則り、先きに当局の内命を受け」（坂口 1949:1）、設立された。占領軍に「慰安婦」を提供し、良家の子女の防波堤にしようとした政策であった。その後、性病の蔓延のため、翌年3月にGHQは慰安所の活動を停止させ、将校たちの慰安所出入を禁止している。

矯風会の機関誌『婦人新報』は1945年12月に再刊しているが、その時の論考において久布白（1945:3）は「此処に起り来った二つの問題は、第一進駐兵の事、第二食糧問題です。これに対する我等の動きは、当局に対し、又、施設に対し之れ日も足らざる有様です。即ち全国各地の支部から御注意を頂きましたが、交通機関不自由なる東都の中を、右往左往、教団委員会各位と共に、内務大臣、首相の宮殿下を始め各方面に対して、新聞記事の不当を責め、事件の不当を詰問し、マッカーサー司令部の真意を問う等、凡有る方法を盡して、終に、当局に於いては廃娼の問題は従来通り、決して後戻りなく進捗するの言明を得、又マッカーサー司令部とは、我等の間より健全なる女性を送って、先方の希望により毎週土曜日午後 母の家 土産の家 を開催することとなりました」と述べている。この施設というのは進駐兵の慰安施設のことであらうか。久布白は慰安施設に対して何らかの働きかけを行っていると思われるが、資料から具体的な動きは見出すことが出来なかった。後に久布白（1956a:3-4）は「日本政府から昭和20年8月18日すなわち終戦直後に外国駐屯軍慰安施設設備要領、婦人少年局資料、第三十一号参照なるものを各府県に発せられて居る。その指令の第三項に、性的慰安施設の一項があり」と記しているが、この施設の存在を正面から批判した論考は管見の限り、見出せなかった。

## 2 婦人参政権・公娼制度廃止の要求

さて、市川房枝は東久邇内閣や陸軍省の次官に婦人参政権実現を申し入れていた。市川（1974:617）は「十八日まで東京にいて友人たちを訪問し、新しい計画について相談して歩いた」と述べている。1945（昭和20）年8月25日に、久布白は市川らと共に戦後対策婦人委員会を結成している。9月24日の第1回の会合には、40数人の女性が参加し、政府や両院に対し、婦人参政権等を要求することを申し合わせた。これはマッカーサーから要求が出される以前の出来事である。10月にマッカーサーは日本の民主化のための五大改革（婦人の解放、圧政的諸制度の撤廃、教育の自由主義化、労働組合の結成、経済の民主化）を要求しており、その中に「選挙権賦与による婦人の解放」が含まれていた。11月3日には、市川が参政権運動のために「新日本婦人同盟」を結成している。また、一方で「日本婦人協力会」という団体も結成され、その過程で10月26日に戦後婦人対策委員会は解消された。11月に久布白は平塚らいてふ、平林たい子、市川房枝らとともに婦人参政権問題講演会を開催している。

また、GHQ本部が設置された9月15日頃、久布白は伊藤秀吉とともに、内務大臣と警保局長を訪問し、「公娼制度は国家の恥辱であるから、マッカーサーの指令が出る前に、日本政府の手で廃止すべきことを進言した」（日本キリスト教婦人矯風会 1986:698-699）。久布白（1945:3）は「進駐軍の上陸と共に一挙にして又存娼国芸妓国となる事は敗戦の上に恥の上塗り」であると考えていた。大臣は善処すると約束したが、警保局長は心もとない返事であったため、久布白は「此期に及んで腹の切り様も知らぬでは困ると詰め寄った」（伊藤秀吉 1953:42）というエピソードも残されているが、警保局長は「御趣旨は御尤であるが、今となつては政府は体面問題は考えておらぬ、それより貴下方が G・H・Q に進言なさる際お手柔かに願いたい。余り高遠な理想をお述べになって実行困難な指令が下ることを恐れます」（伊藤秀吉 1953:42）と答えた。このように、久布白は GHQ から要求が出される以前に、政府に対して積極的に働きかけを行っていたのである。

1946年1月12日には内務省から公娼制度廃止に関する通達が出された。公娼を廃止し、私娼としての稼業継続を認めるものであった。同15日には、矯風会、廓清会、国民純潔協会、日本キリスト教復興生活委員会の連名で娼妓取締規則廃止と残存制度撤廃を堀切内相に請願している。1月21日付で GHQ から公娼の存在はデモクラシーの理想に反するものとして、「日本帝国政府に対する覚書」（日本における公娼廃止に

関する件）が出されている。久布白は「最後の仕止めをマッカーサー司令部にして貰った事は千載の遺憾です」（久布白 1946b:1）と述べている。同月 24 日には公娼制度廃止命令が出され、内務省は 2 月 2 日に娼妓取締規則と関係法規廃止を発令した。同年 11 月 14 日には次官会議決定で、「私娼の取締並びに発生の防止及び保護対策」が出され、公娼廃止後の風紀対策、「闇の女」の発生防止及び保護対策について定めている。

1947 年 1 月 15 日には「婦女に売淫をさせた者の処罰に関する勅令第九号」が出された。勅令第九号の内容は次のようなものである。

- 一、 婦女を暴行脅迫によらず婦女を困惑して売淫させたものは一カ年以下の懲役又は一万円以下の罰金に処す
- 一、 婦女に売淫することを内容とする契約をしたものはこれを一カ年以下の懲役又は五千元以下の罰金に処す
- 一、 右二条の未遂罪もこれを罰す

要約すると、「婦女に対して親子関係、雇用関係その他支配関係にある者が、或はその関係を利用し、或はその他の方法で婦女を困惑させて、その婦女を売淫させることを禁止したもの」（石井 1953:43）である。もし暴行脅迫によって売淫をさせた場合は刑法 223 条<sup>1</sup>によって罰せられることになる。この勅令をもって、売春等による搾取は禁止された。しかしながら、この法は骨抜きであった。先の「私娼の取締並びに発生の防止及び保護対策」で「社会上已むを得ない悪として生ずるこの種の行為については特殊飲食店等を指定して警察の特別の取締につかせ且つ特殊飲食等は風致上支障のない地域に限定して集团的に認めるように措置すること」が認められていたからである。

### 3 総選挙出馬

1945（昭和 20）年 12 月 17 日、選挙法が改正され、20 歳以上の男女共に投票権を持つことになった。その頃、代議士の松山常次郎<sup>2</sup>が久布白のもとを訪れ、「此度の総選挙に、日本自由党の公認候補としての推薦が有る、受けぬか」（久布白 1946a:4）という話を持ちかけていた。家族会議や矯風会の職員会議を経て、久布白は矯風会の会

務理事を退き、その話を受けることとなる。久布白（1955b:82）は「自分が婦選を求めた最大の理由は、婦人の性的解放にある。公娼制度の撤廃、集団売春の禁止、即ち婦人の人格と人権の確立これが最大の願いである。代議士たらんと願ったのもこの事を法の上に実現せんと願ったのに外ならない」と述べている。このような志を持ち、政界に入ろうとしたのである。

1946年4月10日に戦後初の選挙（第22回衆議院議員選挙）が実施された。79人の女性が立候補し、39人の女性が当選したが、久布白は次点で落選している。久布白は同年5月、自由党婦人部長となった。また、臨時法制調査会委員と司法法政審議会委員の任命を受けている。

その後、1947年4月20日に第1回の参議院議員通常選挙に、1950年6月4日に第2回の参議院議員選挙（全国区）に出馬したが、いずれも落選し、矯風会に復帰することになる。

久布白が自由党から出馬したことについては、様々な批判がなされた。久布白は後年、『思想の科学』のインタビューにおいて、当時、自民党よりも社会党の方が「日本社会の貧困、旧家族制度、未開放部落」（永井 1959:7）の問題を取り上げていたのではないかという指摘を受け、次のように述べている。

一つは私が無知だということもあるんだな。党派なんぞどうでもよい。とにかく売春が犯罪だ。他人の娘が売春婦になっているおかげで、自分の娘が保護されているというのでは罪悪だ。これだけのことを法律にするという第一段落に達するには社会党より、むしろ自民党の連中にわかってもらおうという気持ちもあったんです（永井 1959:7）。

久布白はこのように述べているが、選挙に関して認識が甘かった部分もあるのではないだろうか。彼女の息子である久布白三郎は彼女の落選の原因について「第一に我々選挙事務に当たった者の不手際もあると思いますが、何より久布白女史自身が、従来は全く社会から目を閉ざされていた全日本の女性の運命と、その来べき将来に対して、十分なる認識が欠けていたのではないかと思います。実際久布白女史は、過去の長い経歴を持つ廃娼運動を、新しい政治のコースに乗せるという面が強く、全日本女性の新しい感激であった婦人と日本の政治という面には、聊か無頓着でありました」（久布

白三郎 1956:6) という見解を示している。

市川房枝 (1972:19) も久布白の自由党入りを疑問に感じており、久布白家・都民教会葬の弔辞で「最初の選挙の時『加藤シズエ氏が社会党から、あなたが自由党からというのはおかしい、逆ではありませんか』と申し上げたら『自由党の松山氏にすすめられ、お世話になっているから……』と仰有いました。参議院に立候補された時には『参議院は無所属の方がよい、キリスト教関係の方の中にも久布白さんは立派だが、自由党はいやだといっているから……』と申し上げたのですが『今迄世話になっていて変わるのはいやだと仰有いましたね。その後自由党の婦人部長をしていられた時、『売春防止法にも仲々賛成してくれない自由党にどうして籍をおくのですか』とにくまれ口を申し上げたこともあり、この頃のあなたのご心境は今でもよくわかりません」と述べている。

また、大島 (1972:26) も「参議院全国区に、こともあろうに自民党から立候補された政治感覚にわからず失望していた」と述べている。佐藤栄作はのちに久布白の個人誌『婦人と日本』第1号にコメントを寄せており、「久布白さんが十分な実力をお持ちであったのに、かような結果になりましたことは色々原因もありましょうが、やはり現代の若い人々に訴えるところ不十分であったのでしょうか。ラジオ放送など大変良かったと聞きましたが、街頭などでも非常に受けていたようですが、少し時間が長過ぎた様に思われます。もっと時間を短くして多くまわられた方が効果が多かったのではないかと思います」(佐藤 1950:2) と分析している。これらは久布白が選挙に落選した原因につながるものであると考えられる。政治的感覚の乏しさや戦略の不十分が久布白の落選に影響しているものと思われる。

#### 4 「姦通罪問題」をめぐる—公聴会における久布白・守屋の発言から—

去る八月十一日面白い出来事が有った。それは、国会開設以来初めての公聴会と云う席へ守屋女史と自分とが出席し、然かも二人とも公述人と云う資格で出席し、一人は撤廃、一人は不撤廃の立場を取った事である (久布白 1947:4)。

旧刑法第 183 条には「有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ。此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シ



タル者ハ告訴ノ效ナシ」という条文があった。すなわち、夫のある女子で姦通した者は、6ヶ月以上2年以下の重禁錮に処し、その女子と相姦した者も同様とする。本条の罪は、夫の告訴がなければ公訴を提起することができないということである。ただし、夫自らが姦通を認めていた時は、告訴は効力を有しないという規定である。このように姦通罪は姦通した女性のみを罰するという男女不平等な規定であり、矯風会は創立当初から「民法刑法の改正に関する請願」を行っていた。

1947（昭和22）年5月3日、日本国憲法が施行され、その第14条には「すべて国民は、法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」とあり、男女平等が定められていた。そのため、同年8月11日の司法委員会において「刑法の一部を改正する法律案（姦通罪廃止の可否に関する件）」の公聴会が開かれた。久布白と守屋が公述人という資格で出席し、その際、この刑法の男女不平等の姦通罪について久布白と守屋で見解を異にしている。矯風会は長年にわたり、「純潔、貞操に於いて、道德の標準は、男女平等であらねばならぬ」という信念から請願活動を行ってきた。いずれも「男女平等」という観点からの発言であることは共通していたが、守屋は姦通罪撤廃、久布白は不撤廃の立場をとった。その理由として、守屋（1947:5）は「今までは女子の罪となっておった。婦人矯風会は民法刑法の改正請願を数十年に亘って出しておった。女子だけでなく男子も同様にしたい、或時は法律案にせよと申された事もあったが、罪人を出すのが目的でない、即ちこれは道德律であるべきだ。刑法の真髓は希望を持たせ、更生せしむる、という所に改正刑法は重点をもつものである。従つてこの問題は刑を与えてよくなるものでない。むしろ家事裁判所にゆくべきものだ」と考えていた。公聴会では姦通罪で罰せられる親の「子供の身になったらどうかということを、ここに是非考えて頂きたいと思う（中略）・・・私はどうしてもこの問題は一般の道德の問題、それによつて何かその道を開くのでなければならないということを考えております。（中略）・・・私は是非共この姦通罪というものは刑法から取つてしまふ。そうしてそこにそういうことの起こらないように進めていく途を他に開くという立場の気持ち」（参議院会議録情報 第001回国会司法委員会第11号:3）をもつて、姦通罪撤廃に賛成していると発言している。一方、久布白（1947:4）は「憲法其ものの改正によつて、堂々と、両性の本質的平等と云う事が明にせられ、それによつて刑法民法共に改正が実現されつつあることは喜びに堪えない」と記しながらも、姦通罪を「刑法から取り除い

て、民法の問題即ち離婚の原因として、損害賠償で処理しようと云う事は望ましい事である。然し現在の日本の状況、道義混乱の現実を見る時。果してこれが、実に国民を益する方法であるか否かは少なからぬ考慮を要する問題」であると考えている。公聴会において守屋の子どもの立場についての話に共感を示しながらも、「私がこれを置きたいというところの理由は、これによって罰したいのじゃない、併しながら国民の目の前にはっきりと、男にも女にも、この純潔ということは守らなければならないものだ、一家の土台というものは純潔に行われなければならないものだ、姦婦などという手合が家庭の中に、あるべきでないということ事柄を、心の底から分るように法律においても明示して置きたい。(中略) …女性の中にもこの頃闇なんといつて、縛る法律も何も……前借というようなことが禁ぜられても、まだ自分から進んで行く娘もあります。(中略) …これはいわゆるこの法律は何に役立つかと言えば、赤信号として役立つ」(参議院会議録情報 第 001 回国会司法委員会第 11 号:9) と発言している。

守屋の発言は社会事業家として直接、女性たちの身の上相談や子どもたちに関わってきた経験から来るものであり、久布白の発言は婦人運動家として国家が公に売春を認める公娼制度の廃止に取り組んできた経験から、終戦後の性道德の乱れなどを批判的に見ているためであると思われる。女性や子どもの人権や福祉という視点から考えると、どちらが真に彼女ら・彼らの立場に寄り添ったものとなったのであろうか。

公聴会の終わりに守屋は「(男女の問題は) 人間の人間としての一番苦しみ」であるが、「いっそう宗教的に、又教育的に、こういう問題を麗しい、厳かな、大切な問題として取り扱って行くようにして参りたいという気持ち」(参議院会議録情報 第 001 回国会司法委員会第 11 号:16) があると述べており、久布白もその意見に同意している。結果的には、1947 年 10 月 26 日に刑法が改正され、姦通罪は撤廃された。

さて、この公聴会において久布白は「夫に不貞行為をさせる女性」に対してどのような考えを持つかと質問され、次のように回答している。「今日では芸妓という人たち、その人たちも人の家庭を破壊して本当の幸福はないし、それから又あの人たちも中途半端の恋愛をしても、それがために幸福はありませんから、いわゆる芸者は芸を売る人であって、恋を売る人でないようになって貰いたいということが私共の主張であって、又それに向かってこれからもやろうと思います」(参議院会議録情報 第 001 回国会司法委員会第 11 号:15)。芸者の問題については、売春防止法制定以降にも取り組んでいくことになる。

## 5 児童福祉法と性病予防法について

第二国会では様々な法律が通過したが、久布白は児童福祉法<sup>3</sup>と性病予防法<sup>4</sup>の通過に注目した。1947（昭和 22）年に成立した児童福祉法はすべての児童（満 18 歳に満たない者）を対象とした法律で、第 34 条第 1 項第 6 号において「児童に淫行をさせる行為」が禁止された。久布白（1948a:2）は児童福祉法について、「往年年を越えて争った未成年女子の売淫、すなわち若き芸妓の水揚げと称えて、その処女膜を破ることをもって巨利を占めた組織が、ここに其の徹底的の禁止を見た事は大きな喜び」であると述べている。

1948 年に成立した性病予防法については「全国的にまた従来 of 如く単に業態業者に止まらず、一般に対して、予防及び治療を徹底せしむるため、都道府県を通じ、その施設を為し、病者を発見した時は、これに強制治療を命ずることもできる相当強力な制度となって居る」（久布白 1948a:2）と評価している。その第八条は「婚姻をしようとする者は、予め相互に性病にかかっているかどうかに関する医師の診断書を交換するようにつとめなければならない」、第九条は「妊娠した者は、性病にかかっているかどうかについて医師の健康診断を受けなければならない」というものであった。戦前から導入を望んでいたものであり、久布白はこの 2 つを「家庭を護る二つの鍵」と評価している。同時期に売春法処罰法案も提出されたが、成立せず、「遺憾の極み」と述べている。この原因については法務委員長の伊藤修が「結局、売春だけを禁止してもこれに伴う厚生施設の予算が出せなかったからです」（伊藤修 1953:62）と述べている。

## 第 2 節 矯風会復帰後の取り組み

### 1 政界進出の目標

久布白は戦後初の選挙と参議院の選挙に出馬したが、いずれも落選し、その後、学び得たこととして「第一に政治は正なりであらねばならぬと思った。それはまず自分自身外観、内容共に恥じざるものとならねばならぬ、ということだ。（中略）…第二に全国区というからには、真に全国に友を得ねばならない。（中略）…第三に目標である」（久布白 1948b:6）と述べている。

前節で述べたように、性病予防法は成立したが、「我国の青年および男子即ち国民全体を護る法として今尚、売淫禁止法が残っているのである。この法の通過は明治十九年以来我が矯風会が志し来った家庭の純潔、国民の純潔を完成するものである。これ

はただ通過だけでなく、国民の良心と常識とを納得せしめて通過させねばならない。自分は第二国会後に岸登女史よりこの事を聞いて今更のごとく自身がこの立法の府に入らんとする使命の具体化を見る心地がした。法は死力を盡して打ち立てられねばならない。特に道義に関する法はそうである」(久布白 1948b:7) と述べた。久布白は自身が政界に入る目標を「売淫禁止法の制定」においたのである。

しかしながら、先述したように 1950 (昭和 25) 年、再び参議院議員選挙 (第 2 回・全国区) に出馬するが落選し、周囲の勧めで同年 9 月に矯風会に復帰した。その際久布白は「自分が (矯風会を) 出て行ったのは、廃娼令の出たあとの施設そのものが、結局国会機関につながって、此処に根拠を取ることが必要欠く可からざるとの考えからであります。しかしその道が今許されないとしても、この本来の仕事は 1 日も捨て置くことは出来ませぬ」(久布白 1950a:3) と述べている。そして「売淫禁止法」「その他性病問題、湯の町建設問題、姦通罪問題等々性道德確立、純潔教育に関する問題等幾多の問題」(久布白 1950a:3) が山積しており、矯風会として積極的に事に当らねばならないと主張している。「自分がそもそも柄にもない選挙などに出た唯一つの理由は、丁度根本正氏の禁酒禁煙法の如く、女性の人格と人権の為めであった、進まんとして進み得ず、又本の道に留り婦人矯風会の純潔部長として、全国の同志と共に公娼廃止、売春禁止の促進に当ることは自分としてはむしろ早道かも知れぬ」(久布白 1956b:2) とのちに振り返っている。久布白は三度の選挙落選によって政界入りを諦めたが、矯風会に復帰し、民間の立場から政府に対して様々な働きかけを行いながら、売春問題に取り組んでいくのである。

## 2 個人誌『婦人と日本』の発行

矯風会に復帰した久布白は、三男の三郎に勧められ、1950 (昭和 25) 年 8 月から、個人誌『婦人と日本』を発行する。

久布白 (1950d:4) は第 1 号の編集後記で「終戦後日本中を歩くこと、約千日随分沢山の友を持ち、たびたびの選挙にも心からの援助を頂いている自分はほんとうに幸福です。しかし、一人一人にお目にかかってお話をすることは全く限られています。止むにやまれぬ気持から、この小新聞を発行することにしました」と『婦人と日本』の発行の経緯について述べている。また、同号の社説において「自分は今ここに女性の民主化を実現すべき階ていにある。憲法は男女を平等にした。然し女子は尚未だ平

等ではない。誇をすて身分を忘れて街にほうこうする女性、男性といがみ合う女性、女性自らが己を傷つけ女性を傷つけて居る」（久布白 1950c:1）と述べている。また、寡婦を保護し、所得を得る道の必要性を主張しており、その実現のために「婦人の政治意識は昂揚」（久布白 1950c:1）されなければならないと指摘している。

『婦人と日本』の第1号は4ページであったが、第2号は8ページになり、徐々にページ数を増やしていく。久布白の社説をはじめ、「婦人と法律」、「婦人民主政治講座」、「社会時評」など、政治に関する記事が多い。福祉に関連するものでは、「我国の社会保障制度」と題して、5回にわたり、社会保険、母子福祉、健康保険、老人問題などの現状に言及したものなども存在する。『婦人新報』掲載の論考と同様に、売春問題に関する論考も多いが、個人誌である『婦人と日本』ではより自由に多様なテーマについて執筆している。

### 3 歓楽街問題

1946（昭和21）年に公娼制度は撤廃され、遊廓の存在が許されなくなったが、類似の営業は続いていた。1950年10月、東京都大田区池上小学校の前に歓楽街が作られようとしており、学校は警察に取り消しを要望していたが、警察は取り合わなかった。その後都立高校のPTAも動きだし、久布白ら矯風会も動き出した。『婦人と日本』掲載の「私の日記」において久布白（1950e:8）は、「10月17日 警視庁国家警察、建設省等を訪問、幾多の運動にもかかわらず事件が法と法の間には有って阻止する道なき有様であるのを知り、何等かの道を講じねばならぬと思う」と記している。法をもって禁止する道がないということがわかったのである。久布白（1950b:9）は「法無くば法を造ってもという意気込み」で10月20日、YWCAの植村環（当時国家公安委員も務めていた）を訪問し、文部省、警視庁、法務庁、建設省、東京都や新聞社等に手紙を書いた。10月27日の夕刊中外はその手紙の全文を掲載した。世論を喚起し、衆議院でもこの問題が取り上げられるに到り、11月16日に公布、23日から施行される「建築基準法」が適用でき、文教地区の設定を行えば問題を解決できるということになった。そのため、11月16日、業者側も中止を申し出て問題は解決を見た。久布白はこれを「終戦後初めての民衆の手による道義の戦い」（久布白 1950b:10）と評価した。翌17日に、植村と連名で先述の十省と新聞社等に感謝の手紙を送っている。

#### 4 勅令第九号法制化運動

久布白（1951b:7）は「廃娼運動の歴史は古い、しかしこれの出来上がったのは頗る新しい。即ち終戦後昭和二十一年二月即ちマ元帥の覚書によって、内務省より勅令第九号の発布を見、これが今日全都道府県へ通牒された時である」と述べている。講和に伴い、占領期に出されたすべての政令が審査されることになった。勅令第九号は先述したとおり、売春をさせることを禁止し、売春を条件とする金銭の貸借を禁ずるものである。久布白（1953:6）はこの勅令第九号について「僅々三ヶ条の量から云っても真に小さい法令ながら、其効果は我国の女性を守る大きな力、即ち人権擁護の法律」であると考えていた。しかしながら、前借が禁止されても、ブローカーは存在するため、そうした仕事を押さえなければならない。また、農村には不況と経済問題が相変わらず存在しており、経済的事情のため、芸妓屋に売られる女性もいる。そして中には、そのことを悲観して自殺を図る女性も存在している。そのため、久布白（1951c:6）は「こうした生々しい若き女性の声なき声を聞いて、其絶望から彼らを救わねばならない。（中略）…問題の徹底的解決を見る為に我等は法的に婦人の保護に又経済面に於いて極力力を盡さねばならぬと思う」と述べている。女性たちを未然に保護する重要性を主張していたのである。

久布白（1951b:7）は「売淫そのものは強盗殺人と同じく中々その跡を断つというのは容易ではあるまい。しかし人権を無視し、金銭貸与の条件の下に無垢の女性に売淫なさしむることは我等の憲法にももとの不法行為である」と考え、1951（昭和26）年5月頃から勅令第九号の法制化に向け、運動に着手した。矯風会内で委員会を組織し、6月に第1回の会合を開く。伊藤秀吉（元廓清会理事、文部省純潔教育審議会委員長）や神崎清（青少年福祉審議会）、法務委員会のメンバーの参加もあった。政令委員の訪問、法務委員会・法務委員の訪問、同志の糾合、署名運動の全国的開始、法務府との折衝という順序で仕事を進めていく。第2回の会合では法務委員会のメンバー全員を招待した。第3回の会合では法務委員である代議士を訪問し、法務府から議会に出す法案の草案を提出された。第4回ではさらに練られた案が提出された。法務委員会に提出し、提案者の代議士を定め、国会提出の準備を進めた。

9月には矯風会の竹上正子がキリスト教協議会にこの問題を提出し、社会部が取り上げた。そのため、キリスト者が挙って取り組むべき問題であるという共通認識ができ、教会・学校・婦人会へ署名用紙を配布した。11月には「公娼制度復活反対協議会」

が結成され、久布白が会長を務めた。矯風会を中心として、YWCA、日本婦人有権者同盟、大学婦人協会、日本婦人平和協会の5団体で勅令第九号法制化のための署名運動を行った。1952年1月には久布白は仏教界に働きかけて、運動に参加してもらう。運動には80の団体が参加し、96万余りの署名を集めて、2月に国内法として残すよう国会に要望を行った。署名は衆参の女性の代議士が提出した。2月、3月は議会の傍聴を行う。3月29日には衆議院で可決、5月6日には附帯決議付きで参議院も通過し、国内法となるのである。

#### 附帯決議案

本法案中勅令第九号婦女に売淫をさせた者等の処罰に関する勅令は婦女の人身売買の防止並びにその基本的人権の保護については極めて不充分である。よって政府は右勅令の根本的な改正法案を速やかに国会に提出すべきことをここに要求する。

右決議する。

昭和二七年五月六日

#### 小括

本章では、戦後約5年余りの間の久布白の活動について見てきた。アメリカ軍の占領下にある中で、久布白らはGHQから通達が出る前に公娼廃止や婦人参政権獲得のために様々な働きかけを行っていたということは特記すべきことであろう。これらのものはアメリカ軍から一方的に与えられたものではないのである。また、久布白は廃娼の完成を目指して選挙に出馬したものの落選し、政界入りを果たすことはできなかった。しかしながら、5年もの間、政治を志し、意識を高めたことは、『婦人新報』や個人誌『婦人と日本』における様々な論考からも窺うことができ、その後の売春禁止法制定運動の高まりにもつながっていく。

久布白の「私の日記」(『婦人と日本』に掲載)には、「五月十二日 国会にゆく、勅令第九号衆参両議院通過、書類を貰い各所に挨拶して帰る丸々一カ年の歳月と国を挙げての矯風会員、キリスト教界、仏教界、婦人界各団体、主婦団、各界挙げての大運動であった深い感謝である。直ぐ次ぎの法案の準備にかかる」(久布白 1952b:11)とある。この後、5月31日に矯風会は公娼制度復活反対協議会のメンバーを招いて、参議院会館で今後の活動方針を協議し、自由意思の売春を取り締まる法律の制定に向け

て着実に進んでいった。また、講和と共に日本国内において、「国際孤児の問題（混血児問題）」が大きく取り上げられ、久布白もその問題解決に取り組んでいくことになるが、その取り組みについては第9章で取り上げていく。次章では、戦前から性教育論を展開していた久布白の戦後の性教育・純潔教育との関わりについて取り上げていきたい。

## （第7章 文献）

- 市川房枝（1972）「おわかれの言葉」『婦人新報 久布白落実追悼号』19.
- 市川房枝（1974）『市川房枝自伝 戦前編』新宿書房.
- 石井春水（1953）「売春取締法令の現在と将来」『警察時報』8(4),43-46.
- 伊藤秀吉（1953）『売春のない日本に』社会教育協会.
- 伊藤修（1953）「売春禁止法の制定を前に識者の見解」『警察時報』8(4),61-62.
- 久布白落実（1945）「婦人新報の再刊に当りて」『婦人新報』554,2-4.
- 久布白落実（1946a）「私のこと」『婦人新報』555,4.
- 久布白落実（1946b）「娼妓完成の歓喜と純潔日本への邁進」『婦人新報』556,1.
- 久布白落実（1947）「姦通罪問題と婦人矯風会」『婦人新報』571,4.
- 久布白落実（1948a）「家庭を護る二つの鍵—第二国会を通過した性病予防法」『婦人新報』581,2.
- 久布白落実（1948b）「第六十三回創立記念日を迎えて」『婦人新報』585,6.
- 久布白落実（1950a）「全国同志の皆様へ」『婦人新報』606,2-3.
- 久布白落実（1950b）「湯の町問題と婦人矯風会」『婦人新報』606,9-10.
- 久布白落実（1950c）「三度敗れて尚……」『婦人と日本』1,1.
- 久布白落実（1950d）「編集後記」『婦人と日本』1,4.
- 久布白落実（1950e）「私の日記」『婦人と日本』3,8.
- 久布白落実（1951a）「終まで耐え忍ぶもの（勅令第九号法制化運動）」『婦人新報』613,4.
- 久布白落実（1951b）「勅令第九号法制化運動について」『婦人新報』616,7-8.
- 久布白落実（1951c）「人権擁護と身売問題」『婦人と日本』4,6.
- 久布白落実（1952a）「勅令第九号法制化運動 一カ年の戦い（公娼廃止の終止符）」『婦人新報』622,2.
- 久布白落実（1952b）「私の日記」『婦人と日本』12,11.



久布白落実（1953）「矯風会の昨今」『婦人新報』624,5-7.  
 久布白落実（1955a）「月間展望」『婦人と日本』46,3.  
 久布白落実（1955b）「東西婦選運動の今昔」『政界往来』21(2),78-83.  
 久布白落実（1956a）「廿年の動きと今度の旅」『婦人新報』666,3-5.  
 久布白落実（1956b）「婦人と日本第五十号を迎えて」『婦人と日本』50,2.  
 久布白三郎（1956）「本誌五十号記念に 執筆五カ年の思い出」『婦人と日本』50, 6-12.  
 日本キリスト教婦人矯風会（1986）『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版.  
 守屋東（1947）「このごろ（第五）」『婦人新報』571,5.  
 永井道雄（1959）「生活と信条 久布白落実会見記」『思想の科学』5,4-7.  
 大島孝一（1972）「久布白先生の思い出」『婦人新報 久布白落実追悼号』26.  
 参議院会議録情報 第001回国会 司法委員会第11号.  
 坂口勇造(1949) 『R・A・A協会沿革誌』.(再録：2004,『性暴力問題資料集成第1巻』不二出版).  
 佐藤栄作（1950）「所感」『婦人と日本』1,2.

---

## (第7章 注)

- <sup>1</sup> 刑法第223条は強要罪、強要未遂罪である。条文は次のとおりである。
  - 1 生命、身体、自由、名誉若しくは財産に対し害を加える旨を告知して脅迫し、又は暴行を用いて、人に義務のないことを行わせ、又は権利の行使を妨害した者は、3年以下の懲役に処する。
  - 2 親族の生命、身体、自由、名誉又は財産に対し害を加える旨を告知して脅迫し、人に義務のないことを行わせ、又は権利の行使を妨害した者も、前項と同様とする。
  - 3 前2項の罪の未遂は、罰する。
- <sup>2</sup> 1884年、和歌山に生まれる。1905年、東京帝国大学在学中に日本組合基督教会霊南坂教会で洗礼を受ける。戦前、衆議院議員や海軍政務次官を務める。娼妓や婦人参政権に力を入れた代議士であった。海軍政務次官を務めたことから、戦後は公職追放され、政界を引退した。1961年に永眠。
- <sup>3</sup> 児童福祉法第1条では「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるようつとめなければならない。」「2 すべて児童は、ひとしくその生活を

---

保障され、愛護されなければならない」と定められている。

<sup>4</sup> 性病予防法第 1 条によると、法の目的は次のようなものであった。

「この法律は、性病が国民の健康な心身を侵し、その子孫にまで害を及ぼすことを防止するため、その徹底的な治療及び予防を図り、公衆衛生の向上及び増進に寄与することを目的とする」。本法律は 1998 年に感染症法が制定されたことによって、翌 1999 年に廃止されている。

## 第8章 戦後における久布白落実の性教育・純潔教育論

### はじめに

「ひとは性の奴隷となることなく、主人となって生きてほしい」（高橋 2001:115）。

高橋（2001:115）によると、これは久布白の「遺言ともいうべきことば」であり、現在で言う「性の自己決定権」と捉えることの出来るような言葉である。久布白の性に対する価値観を象徴している。

本章の目的は、久布白の性教育論の戦前と戦後の連続性、非連続性、また変化について分析していくことである。久布白は戦前・戦後を通して性の問題解決のために性教育・純潔教育の必要性を訴え続け、それらに関する論考を数多く執筆していた。

戦後の純潔教育に関する研究で久布白や矯風会に言及したものとして、田代（2003）、牧（2007）がある。田代（2003）は純潔教育施策への矯風会の関わりに触れ、矯風会のメンバーたちは売春女性を「醜業婦」や「闇の女」と呼ぶことに疑問を持たず、かつ批判していたという点において彼女たちの人権を十分に認識していたとは言い難いと指摘している。また牧（2007:187）は久布白ら矯風会の主張は男女両方に禁欲と結婚まで貞操を守ることが求められるという点での対等性はあるが、「家父長制社会が既存のものとして容認した、売春女性と妻に代表される社会機構における性の二重規範への批判」はなく、問題を孕んでいると指摘した。

久布白落実はどのような視点を持ち、戦後の性教育・純潔教育に取り組んでいったのか。第7章で言及したように終戦直後から性をめぐる様々な国家政策が登場するが、まず純潔教育はどのようにして始まったのかを見ていきたい。

## 第1節 戦後における純潔教育施策

### 1 純潔教育導入の経緯

1946（昭和21）年11月14日、政府によって「私娼の取締並びに発生の防止及び保護対策」が出され、「闇の女」の発生防止及び保護対策について記されていた。その中で「子女の教育指導に依って正しい男女間の交際の指導・性道德の昂揚を図る為」、また「正しい文化活動を助成して青年男女の健全な思想を涵養する為」（文部省社会教育局長 1947）の措置の必要性が主張された。この純潔教育施策が「私娼の取締」という観点から出発したことは「純潔教育の本質に関わる重要な事実」（田代 2003:215）であると言われている。すなわち純潔教育の出発点は風俗・治安対策の一環としての

ものであった。そして 1947 年 1 月、文部省社会教育局長が都道府県に「純潔教育の実施について」を通達する。子女の教育指導に関しては「同等の人格として生活し行動する男女の間の正しい道德秩序をうち立てることが新日本建設の重要な基礎であることを強調すること」（文部省社会教育局長 1947）等に留意するよう記されていた。この時点で文部省において「男女間の道德を確立し、社会の純化を図るに必要な純潔教育に関する具体的方策を調査審議し、又は進んでこれに関し建議すること」（純潔教育委員会規程案 1947）を目的とした純潔教育に関する委員会設置の計画を持っていた。翌 2 月に純潔教育準備委員会、6 月に純潔教育委員会第一回総会を開催している。この委員会は関係官公庁職員及び学識経験者 40 人で組織され<sup>1</sup>、久布白や矯風会の岸登恒子（ガントレット恒子が戦後、夫とともに帰化して「岸登」姓になった）や千本木道子もその委員となった。

## 2 純潔教育の方向性

1949（昭和 24）年には「純潔教育基本要項」が発表され、「純潔教育は、単にいわゆる性教育の部面にとどまることなく、同時に一般道德教育、公民教育、科学教育、芸能文化教育との連関において、およそ左のような点に目標をおき、総合的に推進すること

（一）社会の純化をはかり男女間の道德を確立すること

（二）正しい性科学知識を普及し、性道德の高揚をはかること

（三）レクリエーションを奨励し、健全な心身の発達と明朗な環境をつくることに努めること

（四）宗教、芸術、その他の文化を通じ、情操の陶冶、趣味の洗練をはかること」（文部省純潔教育委員会 1949:10）と記されている。ここで示された純潔教育は幅広い側面をもつものである。またその方針として目先にとらわれず根本的に恒久的な対策を樹立すること、家庭・社会・学校が連携すること、乳児期から純潔教育を実施し、指導者の教師等の教育に重点をおくことを挙げている。また具体的には植物、動物、人間の順に学んでいく事が良いとし、正しい用語、科学的、客観的態度を養わせることが大切であること、形式的画一的に取り上げる危険性を指摘し、個人差・年齢差に注意するよう促している。そして 1947 年に実現された男女共学は「相互の人格を尊重し、理解し、正しい交際をもつためにより方法であるが、同時にまた、いかなる場合

でも礼儀と規律が必要」(文部省純潔教育委員会 1949:16)であり、「恋愛及び結婚に対する観念、感覚は純潔教育によって洗練され、高められるべきである。また、貞操は相手のためにのみ守るのではなく、みずからの人格として必要であり、男女相互の倫理であることを自覚するように導くこと」(文部省純潔教育委員会 1949:16)とされている。

このように純潔教育委員会が設置され、基本要項で純潔教育の方針も明らかにされた。藤目(2006:10)は『純潔』は、戦後の売春統制を解くキーワードの一つといえよう」と述べたが、戦前から「純潔」の重要性を主張していた久布白は戦後の性教育・純潔教育にどのように関わっていったのか、次節以降で見ていきたい。

## 第2節 戦後における性教育・純潔教育

### 1 戦後の矯風会と純潔教育—『婦人新報』再刊から1950年代半ばまで—

1944(昭和19)年4月から矯風会機関誌『婦人新報』は休刊していたが、体制が整い、1945年12月にザラ紙8ページで再刊した。第7章で取り上げたように、久布白は1945年から1950年の間は選挙出馬のため矯風会の活動から離れていたが、その間も久布白は『婦人新報』には執筆を続けており、1946年初めに再び「純潔日本建設の四大方針」<sup>2</sup>を示している(戦前にも示していたものである)。その四大方針の中に「性教育・純潔教育」も含まれていた。11月には矯風会が関係当局に対し、「売淫取締に関して」、「性道德の確立とその普及徹底」、「防止と施設」の三つの視点から「風紀対策に関する意見書」(日本キリスト教婦人矯風会 1946:4-7)を提出している。その中で「最近検挙されました『闇の女』についても性教育の不足と性道德に対する確たる信念を持って居らぬが為」(日本キリスト教婦人矯風会 1946:5)と指摘、12月には性教育書の発行を計画、官民有志の権威者を招待し、風紀問題懇話会を開催した。それらを受け、1947年度の矯風会の進路として久布白は第一に「闇の女問題」を挙げ、「其二と云うべきか、むしろ、一とせねばならぬ事に純潔教育がある。闇の女の落ちゆく道が、好奇心と云う点に大問題の有限り、教育の必要は実に重大である。文部省はこれが為に、積極的に立ち上って居られる事は喜びに堪えない」(久布白 1947:2)と述べている。さて、久布白(1947:2)は「闇の女問題」と関連して、「これが国際的に混血を生ずる時は更に国民的問題である」と述べていた。米軍占領により発生した「混血児問題」は1952年以降、独立後の日本においてマスメディアに取り上げられ、

社会問題となる。久布白は「混血児問題」に関する論考を執筆し、実態調査、日米間の連絡調整や世論の喚起等を行なっていくが、それらについては第9章で論じていく。このようなこともふまえ、純潔教育によって「闇の女問題」を解決しようと考えていた。具体的には C.B.オールズの『正しい性教育』の再刊、講演班を組織して全国的に思想の普及活動を計画し、この年の『婦人新報』に5回にわたってオールズの「家庭と性教育」を掲載している。1948年から1950年代半ばにかけて各地のキリスト教関係の学校等で純潔問題に関する講演などを頻繁に行っていた。

また、矯風会のメンバーである竹上(1947:5)も「時代の要求は、我が会が六十年叫び続けて来た此問題を国家として教育実施するの機運となった」と述べている。国家でも矯風会内でも純潔教育を重要な課題であるとしていたこの時期、6月の矯風会全国大会で青年男女の純潔教育運動を盛んにすること、性病予防のための映画、性教育書の発行、科学的知識をもって性教育に当るべきであると協議された。これらの記述から考え合わせると、久布白らも国家と同様に私娼対策には純潔教育が有効だと考えていたことが窺える。「純潔教育ということはある意味において国家の急務」(久布白 1948:2)だと述べていたが、私娼の問題を社会や貧困に起因する問題というより、国家政策として教育で解決すべき問題であると考えていたという点では現実を正しく認識していたとはいいがたい。問題を根本的に解決するには貧困対策が必要である。

1950年の矯風会全国大会で性教育の普及徹底のために講習会を開催する必要性を取り上げた。9月には性教育の権威であった安藤晝一を招き、「私の性教育観」というテーマで第1回性教育講習会を開催している。医学的・生物学的立場から性教育について講演し、当面の課題として性教育に当る指導者の教育を挙げた。また、「特に性教育は社会性の大きいものであるから常に社会と結びついてゆかねばならない。映画、雑誌も純潔教育に関係が深い。学校と家庭と社会とが三位一体となってゆかねばならない」(安藤 1950:6)と述べている。第2回目は「医学から見た結婚」というテーマで1951年2月に開催した。1952年の評議員会では性教育・純潔教育指導者養成について協議し、「性教育は我等として新時代に入らねばならぬ時期となった、即ち各支部が今や指導的立場に立ち、支部自体が指導の任に当たらなければならぬ」(日本キリスト教婦人矯風会 1952:11)とされた。

## 2 純潔教育委員会資料に見る久布白の性教育・純潔教育論

「大正五年以来、口と筆に数十年を廃娼にぬりつぶした私は、昭和二十一年この方その建設面である純潔建設で、また殆ど一色にぬりつぶさんとしております」(久布白 1950a:4) と述べたように、久布白も純潔教育委員会の一員となった。しかしながら、「選挙運動期とかちあい、矯風会で熱心だったのはガントさんと千本木さんであった」(久布白 1973:268) とのちに振り返っている。久布白が政界にある間は、岸登や千本木が中心となり、『婦人新報』で純潔教育について執筆していた<sup>3</sup>が、久布白も『純潔教育委員会委員に対する問合せ 回答綴』<sup>4</sup>や『純潔教育はなぜ必要か』<sup>5</sup>でその考えを表した。これらの資料から 1940 年代後半の久布白の性教育論を見ていきたい。

### 2-1 『純潔教育委員会委員に対する問合せ 回答綴』における久布白の回答

『純潔教育委員会委員に対する問合せ 回答綴』には 16 項目の質問があるが、その中で久布白は 1.「純潔の意義」について「純潔とは男女の性生活が精神的に又肉体的に自然に法って最も健全に明朗に行われしを指す」と述べ、2.「純潔教育」とは「従ってその教育（純潔教育）はこうした生活を実現するよう青年男女を精神的にもまた実生活上も指導することを指す」としている。また、3.「性教育」とは「性に関する生理衛生が主体となって、これを基礎として男女の性生活の根本の原理を打ち樹つること」であり、4.「性教育と純潔教育との関係」については「性教育は純潔教育の科学的基礎で、純潔教育はその基礎の上に立って、更に精神的道徳的意義を一層深く教育するもの」と考えていた。性教育と純潔教育の区別は戦前からのものと変化していない。そして 5.「純潔教育と喫煙飲酒の関係」は「どれだけ純潔教育しても喫煙飲酒をしては純潔は守れない」、「禁酒禁煙は純潔生活の最も良き温床」だと述べている。禁酒禁煙は従来からの矯風会の方針である。また 6.「純潔教育と男女交際及び男女共学」については「男女共学、男女交際ともに今日行われている以上純潔教育は試みられるべきでこれは決して不適當でも不可能でもない」と考えていた。7.「結婚と純潔教育」については「純潔な男女交際が最も良い結婚の準備」であり、8.「純潔教育の立場より見る恋愛」については「純潔教育の内に真の恋愛は生まれると考え、現在は過渡期のため過去の良いものと現在の良いものを合わせていく事が大切」だとしている。そして 9.「健全娯楽と趣味教養」については「純潔生活には趣味の向上や健全娯楽が必要」であり、10.「売笑婦に近づかせない方策」は「廃娼と私娼窟の撲滅が第一

義で、その内の自由売笑いわゆる闇の女についてはまず男女共に各々その貴い天命を自覚すること」であると述べている。11. 「性教育は必要とお考えですか（その理由も）」という質問に対しては、「性教育は必要と確信します」とはっきりと述べ、その理由として①嬰兒の生まれる母体を守るため、②嬰兒時代の育て方を知る、③幼年期の好奇心を基礎的な科学知識と呼ぶこと、④少年時代の好奇心に植物動物の生理と共に必要な脅威を与える、⑤青年期の指導をする、⑥成年老年期の注意する、という6つのことを挙げていた。12. 「性教育は何歳くらいから始めたらよいか」については「習慣のことは嬰兒時代から、知識的には幼児の問いの始まる時からその知識の発達に応じて」と述べ、13. 「誰が性教育をやればよいか」については「母、教師、医師と言うような順序が最も良い」とし、14. 「どんな方法でやるのがよいか」については「絵画・映画など年に応じて用いる道は千差万別」としている。15. 「家庭の純潔を保持するためにどういうことが必要か」ということについては「父母が純潔であること、また交わる人々が正しい生活をして居る人であること」と述べている。そして 16. 「映画、演劇、書籍、雑誌等と純潔教育の関係」については「映画、演劇、書籍、雑誌は風紀上でどれだけ大きい影響を持つかわかりませぬ、これらと手を組んで今後の社会教育に付当たらねばならぬと思う」と締めくくった。

ここに現れた久布白の考えは戦前とそう変化したものではない。本回答綴の他の執筆者と比較して、早い時期から性教育を始めるべきであると考えており、「純潔」を幅広く捉えている。

## 2-2 久布白の性教育論

久布白の『純潔教育はなぜ必要か』は純潔教育シリーズ（他に望月守が執筆した「青春期の性と心理」（1951年発行）等がある）の一つとして1949（昭和24）年に出版された。その内容として、純潔教育の目標、方針（科学的・生理衛生的・道徳的）、対象、場所、方法、諸問題（1.男女交際と共学 2.恋愛と結婚 3.娯楽と趣味 4.飲酒と喫煙 5.性病の問題）を取り上げている。久布白は純潔教育の目標は「民族優生と男女道徳の確立」（久布白 1949:8）であると考え、「民族優生」のために性病の撲滅を訴えていく。これは戦時中の性病対策の流れを汲んだものであるといえよう。また、「男女道徳の確立については、これ以下に落ちてはならぬという最低の限界—つまり法律—の上に、さらに高くうち立てられるべき」（久布白 1949:13）と記述している。



この本は1937年の『婦人新報』の連載「我が国に於ける性教育」(全6回)を基盤としている。1937年の時点で性教育の対象は40歳前後までであり、生涯教育として広く性教育を捉えていたが、『純潔教育はなぜ必要か』ではさらに対象が広がり、乳幼児から老年までとなる。「純潔教育は人間の生涯を通じて必要」(久布白 1949:20)と記され、生涯教育としての性教育がより明確に打ち出されている。そして「純潔教育の場所として一番大せつなのはもちろん家庭であります」(久布白 1949:23)と述べており、家庭を最も重要な教育の場だと考えているのは変化していない。また男女共学については「たがいの認識を深め、また男女たがいに学業の上での切磋琢磨をつむことができ、また従来あまりわけへだてをしたために、異性に対して極端なしげきを感じるのをやわらげ性的差別意識をよわめて人間としての相手と淡白に交際できるように導く上に効果的」であると評価しているが、「何といてもまだ思慮に欠け、社会的経験にとぼしく、意志も自律心もしっかりできあがっていない年代ですから、この点における指導は、父母はもちろん、学校でも慎重に熱意をもってあたなければならない」(久布白 1949:44)と注意も促している。青年時代は「各種各様の生物の性生活についてまなぶ機会をもつことから進めて人体の性生理学をもっとも科学的に了解させ、さらに実際の方面で、いわゆる青春期の衛生を指導する必要」(久布白 1949:19)があり、男女それぞれの特徴を「青春기에乱用することなく、正しい日々の生活によって、本来の任務をまっとうすることができるよう、男子も女子もこの危険な時代を自覚して自重させることが大切」(久布白 1949:20)と述べた。中年や老年についても言及しているが、性病や売春問題と関連し、「もっとも急を要するのは、結婚の前における、すなわち妊娠前における男女の教育」(久布白 1949:20)と主張している。これらの記述から「生殖の性」を重要視していることが窺える。

性教育の方法として「講演会」、「小冊子による啓蒙宣伝」(久布白 1949:34)を挙げしており、これらは矯風会がその後も継承していくものである。

また戦後の世相で最も問題になる、「浮浪児」と「闇の女」を救うには「もちろん政策と経済的な裏づけが必要である」と述べた上で、「必ずしもこれらの貧困だけが売春や家出の原因でなく、世の人びとは深く反省し、研究し、その上にたって教育にあたなければならない」(久布白 1949:73)と主張した。また「純潔の教育も、ありとあらゆる論議をつくしても、けっきょく、ただ1つ『不品行をするな』という一ことでつくされるのではありますまいか」(久布白 1949:75)と述べている。これらの主張が

らも、社会的政策も大切だが、教育による個人の意識改革を重視する姿勢が読み取れる。但しこれは占領期の文献であるということも一定配慮しなければならない点である。1945～49年までは検閲制度があり、占領によって発生した問題について個人の主張を自由に記すことが出来たわけではない。のちに久布白自身もそのことを指摘している<sup>6</sup>。

ここまで見てきたように、1940年代後半の性教育論は基本的には戦前からのものを継承しながら、「闇の女」問題など、戦後の社会問題も視野に入れている。しかしながら、戦後の久布白には大きく変化した部分が存在する。それは「家族計画」の導入である。次節では、久布白と「家族計画」の関係を見ていくことにする。

### 第3節 久布白と家族計画

#### 1 家族計画の導入

林（2005:75）は「久布白が『婦人と日本』で産児調節の必要性を論ずるのは1954（昭和29）年5月からであり、産児調節運動が既に敗戦直後から再開されていたことを考えれば後追的な観を否めない」と記している。但し、実際には『婦人と日本』の第1号で「産児調節」という言葉が登場している。「四つの島に、今や九千萬近くの民がうごめき合っている。地軸の底まで掘り返してもといわれる通り我等の土地は八割五分の山で、山頂まで耕しても中々養い切れないのである。産児調節も止むを得ない」（久布白 1950c:1）と述べたように、論ずるまでいかなくとも人口問題の解決のために「産児調節」の必要性に言及してはいたのである。産児調節運動家のマーガレット・サンガーが初めて来日したのは1922年で、その後日本にも加藤シズエなど、「産児調節」に取り組む運動家が登場している。だが、久布白はそういった人物とも親交があり、早くから性の問題に関心を寄せていたにもかかわらず、戦前、産児調節に殆ど言及したことがない。第6章で触れたように、1930年代半ばに産児調節に関する記述があるが、その後実際に取り組む方向には進まず、1950年代半ばにようやく具体的に言及し始めるが、それはなぜなのか。久布白の論考から読み取ってみたい。

久布白は個人誌『婦人と日本』31号で「自分は産児調節反対論者であった、一度も今日までにこの問題で筆を執ったことはない。しかし今日どうしてもこれについて筆を執らざるを得なくなった。それはどういう訳か、それは余りにも問題が波打って来て、我が足の下まで迫って来て居るからである」（久布白 1954:4）とはっきりと述べ

た。この時期に言及し始めたのは 1948 年の優生保護法成立、1952 年の厚生省の「受胎調節普及実施要領」の発表とマーガレット・サンガー氏再来日、また彼女の指導による 1954 年の「日本家族計画連盟」発足や人口問題審議会による家族計画の推進、中絶の増加の影響等、家族計画を避けては性の問題を論じることが出来なくなった時代状況もあると思われる。また『婦人新報』で「この調節なる方法は、明治初年の間抜き、つぶしのように、既に全とうに生まれたものを処分するのではなく、又堕胎のように半分できかかったものを処置するのでもなく、受胎前に道を講ずるので、最も合理的でもあり又道徳的でもある」(久布白 1955a:7) と評価している。そして「官民力を協せて最も健全にして、徹底した性教育、純潔教育を普及さすべく文部省、厚生省協力の下に指導者の養成に当るべきだと思う。又適當の資材の供給に当るべきだと思う。これに関しては、計画家族の問題等は当然この内に取り上げらるべきものと思う」(久布白 1955a:8) と述べている。ここからも国家の積極的な関わりを求める姿勢が窺える。

## 2 研究調査旅行

1956 (昭和 31) 年の売春防止法制定後、6 月 9 日から 7 月 30 日にかけて久布白は矯風会の他のメンバーらとともに法務・文部・厚生省の委託を受け、法的措置、婦人更生措置、性病対策、性教育・純潔教育の四項目に関する研究調査に行った。政府より財政的支援は受けていないが、売春防止法が制定されたものの、万全ではない状況があり、婦人保護など様々な対策を先進国から学んで、日本でそれを生かしてもらおうという政府の意図があったと思われる。ドイツで開かれた第 22 回矯風会世界大会に出席後、ヨーロッパを周り、スウェーデンを訪問した。海外を視察し、「国民全体を対象とする性病政策をがっちりと建てなければならない。それと同時に性道徳を男女に教えて、男性の人格と女性の人格を互いに傷つくることなく、互いに踏みにじることなく、ここにほんとうの性道徳を築き上げるよりほかに方法はないんだ」(久布白 1956a:8) と述べている。ここでは男女の関係性を問題にしている。さらにその報告を『五十年の歩みと五十日の旅』にまとめ、「性教育といっても今後我等が着手せねばならぬ事は、単なる性の衛生、性の道徳丈けの問題ではない」、「つまり性の主要目的である生殖に関し、国家として其国土と人口と云う深刻なる問題を含む、所謂現在全世界の大問題である、計画家族の問題をもこの際取上げねばならぬ」(久布白 1956b:56)

と述べた。そして小中高と性教育が必須であるスウェーデンの公立学校等の例を紹介し、その内容にページの多くを割いている。また中絶は衛生上倫理上慎むべきで産児調節によることが出来れば幸いであると考え、「この点からいえばスウェーデン式に、若い世代の人々に科学的に学校において生物学的に又倫理的に一般教育して、性教育、純潔教育の一部として性生活の健全なる有り方を身につけさせる事は重要な一つの方法として考う可き事ではあるまいか」（久布白 1956b:67）と述べた。また「唯一つ大いに我が意を得たと思われたのはスウェーデン」（久布白 1956b:56）と記しており、スウェーデンの視察から非常に大きな影響を受け、家族計画の重要性について確信を持っている。

### 3 第1回純潔教育指導者講習会の開催

研究調査旅行などを経て、矯風会の70周年記念募金の中で純潔教育のための予算を計上し、「純潔教育、性教育、更に家族計画をも加えて一貫した性生活に対する指導方針」（久布白ほか 1959:1）を打ち立てるべく、五ヵ年計画の純潔教育指導者養成プログラムを用意することになった。久布白（1957:4）は「法案通過後に教育とは遅きに過ぐる嫌がないとも云えないが、然し法は一時であり、教育は永久である、国民のあらん限り教育は進められねばならない」と述べ、教育の重要性を再認識している。「従来自分らの講習会は、性の機関（ママ）、性の衛生、性の常識、性の道德倫理から男女交際を始め男女間の純潔問題、結婚、結婚の有り方、等に止まって居たが、この度は更に一步を進めて家族計画にまで進み現今我国を禍いして居る『中絶排止』問題にまで進んだものを実施しようとして居る。即ち売春防止法成立後の国民の性生活の有り方という処へいよいよ其啓蒙の一步を進め得る時になりつつある・・・男女生活については全く時代は百八十度の転換をして居る」（久布白 1958:5）と記している。1958（昭和33）年11月5日から7日に、第1回純潔教育指導者講習会を開催し、翌年に報告書を発行した。その中で久布白はかつてなぜ家族計画に反対していたのか、また考えの変化の理由について次のように述べた。

最初に産児制限と云ふことは、これはほんとうの途じゃないと思ひまして、どうしてもそれに賛成することができませんでした。それで私は、性教育と云い、純潔教育とは云ひましても...産児調節ということには一向、手を触れず、耳もかき

ず、それに対しましては反対でございました。しかしながら、だんだんその後の日本の動きかたや世界の動きかた、又人口問題や現在の日本における中絶の弊害など、ここ数年間、婦人のあいだに甚だしい禍いの起きていることをみまして、これはどうしても捨て置かれないという気持ちになり、私どものいままでの性教育、純潔教育に、もう一桁加えるものがないならば、この現代の日本の要求に答えることはできない、ということを考えるに至ったのでございます」(久布白ほか 1959:51)。

人口の増加・中絶の増加等、女性を取り巻く状況や時代の変化によって、家族計画を導入しなければならないと考えるようになったということがわかる。さらに次のようにも述べた。

つまり人間に性生活というものに対しまして、今まで性は我等を押さえて、我等を指導するのが性であったと思っていましたのが、人間が性を指導することができる、指導は我等の手の中にあるということで、私どもは性生活を十分に楽しんでよいし、またその受胎という点におきましては、我等はこれを調節する力があるという、その点がはっきりしましたので、これを徹底させまして、いま行なわれております厚生省の中絶ということは止めて、厚生省にも調節によって徹底させていくようお願いしていく。こういうふうにしてゆきますならば、ほんとうの途が掴めますので、それによってはじめていわゆる性教育、純潔教育、家族計画というこの三本が成り立ちまして、私は性生活に対しますところのほんとうの指導が出来るのではないかと思った次第でございます (久布白ほか 1959:53)。

久布白(1927:43)は戦前から「もし我々人間が性をコントロールすることが出来たらそれこそ理想の社界」であると考えていたが、ようやくその方法を見出した。本章の冒頭の「ひとは性の奴隷となることなく、主人となって生きてほしい」(高橋 2001: 115)という言葉ともつながるが、「家族計画」を導入することで、人間は「性の奴隷」から「主人」となって生きていくことができる、久布白はそのように確信したのではないだろうか。

また久布白(1968:11)は「性は本能である……性は人間の永存のため、生きるという

事にかかっている。矯風会が、八十年の年月をかけても、解決しきれないのも無理ない事である。だが、自分はスバラシイ事を発見した。いや今頃になって気がついた」と述べた。カール・G・ハートマン<sup>7</sup>が 1962 年に出版した、*Science and the Safe Period* という書物に出会った久布白は数年がかりで翻訳し、「これを我が同志に提供することは、矯風会としての問題解決の道程に欠く可らざること」（久布白 1968:12）と考え、『受胎安全期とは何か』を 1970 年に出版する。「家族計画」を「性のあり方に関して根本的指導を与え得る方法」（久布白 1971:7）と捉え、晩年に「生殖に支配されず、生殖を支配する力が人間には在るのだという真理を理解させて、之をリードすることが、今後の我等の仕事である」（久布白 1971:7）と記しているように、久布白が性の問題の解決策として、その生涯において最終的に辿り着いたのは受胎安全期を利用した「家族計画」であった。しかしながら、「個人によって安全周期なるものが必ずしも一様でなく、且つ安全でないために、この方法に頼ることは危険であり且つ不便である」（加藤 1946:27）と戦後すぐに指摘されていたことから考えると、「受胎安全期」について取り上げた、この本をこの時期になって出版する意義については疑問が残る。久布白の到達した「家族計画」の限界を見る思いがする。

## 小括

本章では久布白の性教育論の戦前と戦後の連続性、非連続性及び変化について見てきた。久布白は性教育をはじめ、性の問題に対して国家の積極的な関わりを求めているということ、また彼女の性教育論は戦前から基本的な部分に変化していないということから戦前と戦後の連続性を読み取ることが出来る。但し戦前の久布白の性教育論は科学的な知識教育（性教育）と性道德などの精神的な教育（純潔教育）の二本柱で構成されていたが、戦後 1950 年代半ば以降に家族計画が本格的に加わり、三本柱となった。ここからは戦前と戦後の非連続性や変化を読み取ることが出来る。

久布白の性教育論の鍵となる「純潔」の概念を今一度検討しておきたい。久布白は戦後の座談会で「人間として自分にたいして、自分の性生活を守らなければならない。人格と性生活は一致しなければ、人間ではないという新しい意味の純潔標準が、これから産み出されなければいけないわけですね。でもいまのところ男に対しても、女に対しても、純潔という言葉が、日本語では説明できないと思う」（神近編 1956:95-96）と発言しており、彼女自身も「純潔」の定義の難しさを感じている。「新しい意味の純

潔標準」と表現しているが、従来の純潔は「封建純潔」で「昔日本の女性は堅固であった、少くとも三百年武家時代には妻の貞操は生命にかけて守られて居た。だがこれは、家の娘、家の妻、家の母としてであった」（久布白 1955b:2）。しかし「民主時代の今日最早や家は婦人を守らない。女性も人間だ、一個の人間だ、人間たる以上、自ら養い、自ら立ち、自ら守るのは当然」であるため、これからの「純潔」は「民主純潔」であると記している（久布白 1955b:2）。「封建純潔」と「民主純潔」は久布白独自の表現で非常に興味深いものである。「民主純潔」は、従来の家族制度の中で女性の純潔だけが守られるのではなく、これからは女性も1人の人間として自ら「純潔」を守る、男性もまた同様であるという考え方である。また久布白には戦前から男女両方が「純潔」を守ることが大切だという視点は存在していたが、これは男女関係なく、人間として自身の性を守り、大切にするという考えにもつながる。

「座談会 現代の性風俗と矯風会」の中で、性の問題が時代と共に変わっていくことをふまえて、「婚前性交もスペシャルのスペシャル（特例中の特例）として、線は崩さない方がよろしい」（久布白ほか 1968:15）という考えを持っていた。「線は崩さない方がよろしい」と言いながらも、「婚前性交」を全く否定するのではなく、「スペシャルのスペシャル」と表現したのは、第6章の第3節で取り上げた矢嶋楫子の告白が影響していると思われる。「矢嶋楫子の事件が明るみに出た時、そりゃ五十年も立派な生活を送った後だけど、初めてわたしは悟ったんだ。矯風会って所が強い女がする所じゃない、弱きがゆえにと。男も女も皆あり得ることを皆で一緒に正しくやって行くのだとね。聖書がそうでしょ。ルツにしてもラハブにしても」（久布白ほか 1969:26）と「座談会 性革命を考える」において述べている。

また久布白は「神より与えられた、この身体を汚さないように性、純潔、家族計画を教えなければならない、性は素晴らしいものである、幸福で楽しみに満ちたものである。教育によってそのことを教えなければならない」（久布白 1965:17）と述べている。戦前にも「性は強く、清くあり得るものであって、決して呪うべきものではない」（久布白 1927:44）、「純潔と云う事は、そんな狭苦しいものではない。我等の云う処、少なくとも基督の青年男女として考える時、それは満ち満ちた生活である」（久布白 1937b:5）という記述があったが、キリスト者として肯定的に性を捉えるということは戦前・戦後で変わることなく一貫している。だが、多田（1999:14）が「矯風会で話す『純潔』がキリストに対する真心と貞節を意味し、他人を差別するものでなくても、

一般社会の共通語としての『純潔』には明らかに女性差別、女性間差別の歴史がつきまとう」と述べたように、久布白の「純潔」概念に差別意識がなくても、売春女性たちが久布白のようにこの言葉を肯定的に受け止めることは困難だったのではないだろうか。しかしながら、久布白の性教育論における、男女ともに一人の人間として自身の性を大切にするという視点や性を肯定的に捉える視点は今日の性教育においても非常に重要な視点である。

## (第8章 文献)

安藤画一(1950)「私の性教育観」『婦人新報』605,3-6.

藤目ゆき(2006)『性暴力問題資料集成 買売春問題資料集成[戦後編]解説・総目次』不二出版.

岸登恒(1946)「純潔運動の今昔」『婦人新報』561,1-4.

林葉子(2005)『『廃娼運動家』論・再考—久布白落実と『婦人と日本』(1950～1965)』『大阪大学日本学報』24,63-84.

『純潔教育委員会規程案/純潔教育委員会委員』(1947)(再録：2004,『性暴力問題資料集成第1巻』不二出版).

神近市子編(1956)『サヨナラ人間売買』現代社.

加藤静枝(1946)『産児制限と婦人』読売新聞社. (再録：2001,『性と生殖の人権問題資料集成第8巻』不二出版).

久布白落実(1927)「私は性をかう思っております」『優生運動』2(6),43-44.

久布白落実(1937a)「我国に於ける性教育(一)」『婦人新報』466,14-19.

久布白落実(1937b)「修養 神の国建設の礎石」『婦人新報』473,4-5.

久布白落実(1947)「1947年度に於ける矯風会の進路」『婦人新報』565,2.

久布白落実(1948)「官郷夫人と甲州を巡りて」『婦人新報』583,2.

久布白落実(1949)『純潔教育はなぜ必要か』社会教育連合会.

久布白落実(1950a)「純潔運動と矯風会」『婦人新報』602,4.

久布白落実(1950b)「湯の町問題と婦人矯風会」『婦人新報』606,9-10.

久布白落実(1950c)「三度敗れて尚……」『婦人と日本』1,1.

久布白落実(1952a)「行政協定後の矯風会の有り方」『婦人新報』620,4-7.

久布白落実(1952b)「社説 独立の春に」『婦人と日本』11,2.



- 久布白落実(1953)「女よ強かれ」『婦人と日本』20,4-7.
- 久布白落実(1954)「国家と家族 瑞典の女流思想家—アルバ・ミルダルを読む—」『婦人と日本』31,4-7.
- 久布白落実(1955a)「矯風会と家族計画」『婦人新報』662,6-8.
- 久布白落実(1955b)「日本の味」『婦人と日本』42,2.
- 久布白落実(1956a)『欧米より帰りて(売春状態実地報告)』.(再録:2005,『性暴力問題資料集成第11巻』不二出版).
- 久布白落実(1956b)『五十年の歩みと五十日の旅』日本基督教婦人矯風会本部.(再録:2005,『性暴力問題資料集成第12巻』不二出版).
- 久布白落実(1957)「十一月を迎う」『婦人新報』686,3-4.
- 久布白落実(1958)「収穫の秋」『婦人新報』698,4-6.
- 久布白落実ほか(1959)『第一回純潔教育指導者講習会』日本基督教婦人矯風会.(再録:2006,『性暴力問題資料集成第18巻』不二出版).
- 久布白落実(1965)「三大目標について 純潔部」『婦人新報』777,16-17.
- 久布白落実(1967)「純潔運動の理念」『婦人新報』805,13-14.
- 久布白落実(1968)「性という事」『婦人新報』818,11-12.
- 久布白落実、高橋喜久江ほか(1968)「座談会 現代の性風俗と矯風会」『婦人新報』815,12-15.
- 久布白落実、岩村信二ほか(1969)「座談会 性革命を考える—新世代の性思想(五月号)に答えて—」『婦人新報』823,22-29.
- 久布白落実(1971)「純潔部の一年の活動展望」『婦人新報』843,6-7.
- 久布白落実(1973)『廃娼ひとすじ』中央公論社.
- 牧律(2007)「山室民子にみる自律意識と純潔教育」恵泉女学園大学平和文化研究所編『占領と性』インパクト出版会,179-211.
- 文部省純潔教育委員会(1947)『純潔教育委員会委員に対する問合せ回答綴』(再録:2004,『性暴力問題資料集成第1巻』不二出版).
- 文部省純潔教育委員会(1949)『純潔教育基本要項 附 性教育のあり方』社会教育連合会(再録:2001,『性と生殖の人権問題資料集成第34巻』不二出版).
- 文部省社会教育局長(1947)『純潔教育の実施について<発社一号>/私娼の取締並びに発生の防止及び保護対策(昭和二十一年十一月十四日次官会議決定)』(再録:2004,

- 『性暴力問題資料集成第1巻』不二出版).
- 日本キリスト教婦人矯風会(1946)「風紀対策に関する意見書」『婦人新報』563,4-6.
- 日本キリスト教婦人矯風会(1950)「第五十二回全国大会」『婦人新報』506,4-9.
- 日本キリスト教婦人矯風会(1952)「日本基督教婦人矯風会全国評議員会報告」『婦人新報』621,4-12.
- 千本木道子(1947)「性教育の主眼」『婦人新報』565,3.
- 多田恵子(1999)「『純潔』を『人権』に—『婦人保護』から『シェルター』への流れの中で—」『婦人新報』1182,14-15.
- 高橋喜久江(2001)『福祉に生きる 久布白落實』大空社.
- 竹上正子(1947)「吾等の進むべき道」『婦人新報』566,4-5.
- 田代美江子(2003)「敗戦後日本における『純潔教育』の展開と変遷」橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』川島書店,213-239.

---

## (第8章 注)

- <sup>1</sup> 純潔教育委員会は1949年に「純潔教育分科審議会」へ改組。1954年に存置の分科審議会となり、1961年に存置期間が終了し、廃止される。
- <sup>2</sup> ここでいう彼女の四大方針とは「法律の完成」、「性病対策」、「性教育・純潔教育」、「淪落婦人の保護・身売防止・少年少女の善導」のことである。
- <sup>3</sup> 二人の純潔教育に関する記述には次のようなものがある。「人倫の道を踏み外して、悲惨な境遇に落ちて行く娘達の多数は、性生活に対する無知からであります。世相のいまはしいのをなげく暇に我々は各家庭に於いて、学校に於いて、或程度の性生活に就ての科学的知識を与えることが、今日の急務」(岸登 1946:3-4)。性に関して無知であることが売春の道に入る原因であると考え、社会や貧困の視点が欠けているように思われる。また千本木(1947:3)は性教育の主眼について「性生活の営まれる家庭生活を真実な祝福されたものとしてよりよい子孫を残す様に努めねばならない」と述べており、「よりよい子孫」という記述から優生学的思想が垣間見える。
- <sup>4</sup> 『性暴力問題資料集成第1巻』に収録されており、これまであまり研究対象とされておらず、手書きの貴重な史料である。委員会のメンバーのうち、原文兵衛、高島米峰、花木チサオ、大山正、久布白落實、山室民子、久慈直太郎、植村益蔵、寺本慧達、伊藤秀吉、安藤画一、千本木道子、寺中作雄の13名が回答している。

- 
- <sup>5</sup> 『純潔教育はなぜ必要か』は 2008 年に出版された『近代日本のセクシュアリティ 第 28 巻 性教育の変遷』(ゆまに出版)に戦後の性教育の文献として収録されている。
- <sup>6</sup> 「占領中には、…日本女性の妊娠は、一切問題として取上げないと云う定めであったときく。然し講和発効後は苟か問題は変って来るのではあるまいか。勿論駐在兵に国家の安全を委ねる以上思うままの事を云う訳にも行くまいが、世界に対してわれらも多少正面から物を云う事を学んでもよいのではないか」(久布白 1952b:2)。
- <sup>7</sup> カール・G・ハートマン (1882-1969) は米国イリノイ大学動物学、生物学の名誉教授であり、マーガレット・サンガー研究所顧問等を務めた人物である。

## 第9章 「混血児問題」の取り組み

### はじめに

「性の問題は、戦いと云う問題とからんで何処にも悲劇を巻き起こしている」(久布白 1952c:7)。

戦争と性は「従軍慰安婦」問題や売春問題に代表されるように、切り離せない問題である。戦後の占領に伴い、アメリカ兵と日本女性の間には「混血児」が誕生した。「混血児問題」に取り組んだ人物と言え、沢田美喜<sup>1</sup>が取り上げられることが多いが、久布白も「混血児問題」に関心を持ち、問題に取り組んでいたのである。

本章の目的は、久布白の「混血児問題」の取り組みについて明らかにすることである。ここでまず「混血児」、「混血児問題」という語について定義を行っておく。本章における「混血児」とは占領下においてアメリカ兵と日本女性の間生まれた子ども、すなわち日米間の「混血児」を指す。また「混血児問題」とは、厚生大臣官房広報連絡課(1953:61)によると「混血児は、終戦以後と駐留軍と日本人婦女子の間に戦争の申子として一般の社会問題として波紋を投じた。占領期間中は、占領軍に対する考慮から、この問題は、広く一般の問題まで波及せず、一部の篤志家の対策に委ねられていたが、独立後、先ずジャーナリストがこの問題を大きく取上げ、本年これら混血児が小学校入学の問題が生じる機会に、社会の関心事までになるに至った」とされる。占領下で発生した戦後特有の社会問題という認識である。

时期的には 1950 年代を中心とし、久布白と「混血児問題」をめぐる活動の限界や意義を明らかにしていく。また他の有識者や当事者(「混血児」の母)の論考も分析し、彼女の考えと比較する。主たる検討時期は 1952(昭和 27)年 3、4 月頃から「混血児」の数や実態などが公表される 1953 年にかけてであり、この時期を中心に『婦人と日本』や『婦人新報』に執筆した「混血児問題」に関する論考を取り上げる。久布白の当該問題をめぐる考えや活動を辿り、戦後の性の問題と深く関わる「混血児問題」の彼女の捉え方の変遷やその論考から見えてくる問題意識などを考察していきたい。

さて、「混血児問題」に関する先行研究にはどのようなものが存在しているのだろうか。まず福祉分野における研究では村上(1987)があり、占領期の福祉政策研究の中で児童福祉政策を取り上げ、非嫡出児の養護問題、すなわち「混血児問題」に言及し、考察を加えている。「混血児問題は、戦災孤児等とは切り離して、別の面から戦後の児童問題として現れてきた。ある意味で、戦災孤児等の問題が刈り込み等の形で正面か

ら問われたのに対して、これら混血児問題は、裏面でひたかくしに埋没されていったといえる。政府が混血児問題を取り上げるのは、1952 年になってである」とし、GHQ も厚生省もこの問題に取り組もうとしなかったと指摘する（村上 1987:119）。

久布白と「混血児問題」の関わりに言及した研究として林（2005）がある。久布白の個人誌『婦人と日本』における論考を分析し、1950 年代の彼女の思想的変遷を辿るが、その中で久布白の「混血児」論は世界平和論に向かっていくと述べている。久布白が問題としたのは「児童保護問題」であり、『混血児』がしばしば『捨子若しくは捨子同然』となることが問題とした」（林 2005:78）、また「久布白にとって『混血児』問題の解決とは、まず第一に、『混血児』たちが貧困に陥ることをふせぐための養育費問題の解決であった」（林 2005:79）と分析している。しかしながら久布白の「混血児問題」の解決策に社会福祉実践につながる論としての意義を見出したものではない。

また、加納（2007）は女性史の中で慰安婦や「パンパン」と呼ばれた売春女性については戦争に伴う性暴力問題として取り上げられているが、「混血児問題」は其中で「一つ抜け落ちていること」（加納 2007:214）であると考え、「混血児問題」をジェンダーの視点から検討し、表象分析中心の研究を行った。メディアにおける「混血児」表象を取り上げ、「黒い少女の悲しみ」（加納 2007:255）としてジェンダー化されていくと述べている。また占領軍当局及び日本政府がとった対策、「混血児」とその母がおかれた状況に言及しているが、彼等への具体的な支援という観点から分析を行ったものではない。

このように「混血児問題」に関する研究は存在するが、社会福祉史研究において当該問題や久布白の取り組みについて取り上げられることはあまりない。しかしながら、女性や子どもや外国人の人権・福祉にかかわる問題であり、社会福祉の領域でも取り上げる必要がある。また久布白は「混血児問題」に関する論考を多く残しており、積極的に問題解決のための取り組みを行っていた。現代では「混血児」に代わり、「国際児」という語が用いられるが、「日比国際児」に代表するような差別問題や生活問題は根強く存在している。したがって、「混血児問題」は現代につながる問題でもあり、久布白を通して過去にどのような形で「混血児問題」への取り組みがなされていたのか、社会福祉の視点、すなわち「混血児」とその母の生活支援という視点から検討することは有意義であると思われる。

## 第1節 「混血児問題」の発生

### 1 「混血児問題」発生の背景

まず「混血児問題」の発生した背景として、第7章でも触れた「外国軍駐屯地における慰安施設に関する内務省警保局長通達」（1945年8月18日）に言及しておかねばならない。「一億の純血を護り以て国体護持の大精神に則り、先きに当局の内命を受け」（坂口 1949:1）、設立された。占領軍に「慰安婦」を提供し、良家の子女の防波堤にしようとした政策であるが、「純血を護り」という表現から「混血」の発生を防止しようという意図が見える。1946（昭和21）年3月には性病の蔓延のためGHQは慰安所の活動を停止させ、将校たちの慰安所出入を禁止する。

しかしながら、慰安施設については「国体護持という一面において国家的に行なわれた」が、「当然の結果として出てくるところの混血児問題には、国家として何もしようとはしなかった」（村上 1987:119）と指摘される。この占領期、「混血児問題」に関してどのような動きが出てくるのか。次にそれを見ていきたい。

### 2 占領期「混血児問題」の封印

1946（昭和21）年3月、アメリカ人宣教師キルマー女史が日本の非嫡出児と未婚の母親のために養護施設を作る計画についてサムズ大佐と協議する。サムズ大佐は「現時点で占領軍兵士との間に生まれた非嫡出児の数を概算することは不可能である」こと、「GHQはそういった養護施設を作ることは反対であるが、未婚の母親をそれぞれの家庭で養護し、自活していくための職業訓練を与えることには賛成である」（連合国最高司令官総司令部公衆衛生福祉局 1946:143）と述べた。のちに厚生省児童局（1959:21）が児童福祉施策について「連合軍最高司令部の管理政策の方針、あるいは、態度、考え方等によって、その施策の推進をはばまれたことも多かった。たとえば、戦没者遺族対策、母子保護対策、混血児対策、および基地対策等について、このような消極的、否定的関与が見られたりした」と述べたように、「混血児対策」に積極的に取り組もうとはしなかった。この問題に関しては当時の厚生省の葛西社会局長も「日本では私生児に社会的汚名が貼りつけられることはない、また未婚の母親も普通それぞれの家庭で親の世話をうけている」のだから、「養護施設を作ることでこの問題の満足のいく解決は得られないだろう」（連合国最高司令官総司令部公衆衛生福祉局 1946:143）という見解を示し、未婚の母親とその子どもたちの養護は連合国最高司令部

から示された福祉・救済総合計画（無差別平等の原則）の下で行うことに同意した。これは「勝者への迎合」であり、「日本政府自体の『主体的な』混血児忌避」（加納 2007:219）に起因するとの批判があるが、アメリカ側も日本政府も「混血児対策」には積極的に取り組もうとしなかった。

メディアでは「混血児問題」をどのように報道したのか。先行研究によると「混血児第一号誕生をラジオが伝えたのは…46年6月28日だった。日本占領開始のちょうど10ヵ月後である」（加納 2007:219）が、1人のラジオ評論家が「混血児」の誕生を「占領軍の最初のプレゼント」と伝えたためマッカーサー司令部からクビにされた。「爾来、これはダイナマイトのような問題」（P.キャリッシャー 1952:4）と表現されたように、その後「混血児についての報道はタブー。52年4月28日の独立まで、混血児問題がマスメディアに取り上げられることは非常に少ない」（加納 2007:219）という有様であった。こうした状況下にあつて、久布白も占領期には「混血児」の存在に触れることは殆どなかった。久布白（1952b:2）は「占領中には、自動車の引き逃げ、接收家屋の火事と、日本女性の妊娠は、一切問題として取上げないと云う定めであったとき」と述べており、「混血児問題」は「講和発効と共に始めて開かれた問題」（久布白 1953a:9）で、占領期には封印された問題であった。「混血児問題」が公に現れたのは1952年4月以降で、『婦人公論』などの女性誌でも1952年から53年の間、頻繁に取り上げられていく。「混血児問題」に関心を持つ有識者、「混血児」の養育に関わる社会事業家、さらに「混血児」の母等による論考等が出てくる。

### 3 厚生省における「混血児」調査

厚生省は「混血児問題の重大性に鑑み、その実数調査」（厚生大臣官房広報連絡課 1953:62）に乗り出していく。1952（昭和27）年8月11日発表の「養護施設及び乳児院に在所中の混血児調査について」では、「混血児」は合計482人であった。これは1952年3月1日現在で養護施設と乳児院に在所中の児童の身上調査票から白色あるいは黒色「混血児」の事項欄に記入のあった児童数を集計したものである。

また「助産婦、産婦人科医師が終戦以来取扱った混血児出生数」（1952年12月23日発表）は総数5064人であった。1952年8月31日現在で厚生省が全国の助産婦、産婦人科医師等に調査票を配布し、彼らが取扱った「混血児」数を記録又は記憶によって報告してもらったものの調査結果である。これは厚生大臣官房広報連絡課編集

の『児童の福祉 1953』に詳しく掲載されている。

引き続く「いわゆる混血児童の実態調査」（1953年2月1日現在）では、「混血児」の総数は3490人となる。それに基づき、7月に中央児童福祉審議会に対して「混血児問題」対策の基本方針についての諮問が行われ、5回の審議を経て答申<sup>2</sup>に至る。さらに、8月19日、児童局長名で全国の都道府県知事宛に「混血児問題対策について」<sup>3</sup>という通知が出され、今後の取り扱いが指示された。

当初、「混血児」数は10万ないし20万と言われていたが、多数ではないことが判明したため、大きな社会問題ではないと見なされ、「混血児問題」は一応の収束を見ることになる。

#### 4 「混血児問題」に関する論考—「戦争」・「アジア」・「人権」の視点から—

先述したように、『婦人公論』等の雑誌には様々な運動家や評論家らによる「混血児問題」に関する論考が掲載されている。彼らは問題をどのように捉えていたのだろうか。

「人道問題であり、婦人問題であるが、同時に重大な社会問題であり、経済問題である」（市川 1952:55）と問題を幅広い視点で捉えたもの、「戦争が残した惨禍」（野上 1952:35）、「混血児の問題は、直ちにその母親の問題であり、推定五十万といわれる売春婦の問題であろう。すれば、そこでも未亡人の問題と一しょに、又しても戦争の問題」（帯刀 1952:187）というように原因として戦争に言及したものが多い。さらに「日本にいる混血児の問題は、太平洋戦争のあいだに、南方諸地域に、日本の軍人軍属たちが、同じく婚姻以外の関係でのこしてきた子供たちの上につながる問題」（帯刀 1952:187）というように日本とアジアの国々との間の「混血児問題」に視野を広げたものもある。さらに「父なるアメリカ人の大多数が、日本の若い女性にうませた自分の子どもをすててかえりみない人間的な責任感の欠如は、児童福祉の世界思想に反する深刻な人権問題であるとさえ、私はいいたい」（神崎 1953:133）というようにアメリカの責任を厳しく追及したものも存在する。

このように戦争・アジア・人権の視点からの論考が存在するが、久布白は問題をどのように捉えていたのか、またその捉え方はいかに変遷していったのか次節で見ていきたい。



## 第2節 久布白と「混血児問題」

### 1 「闇の女」問題と「混血」の問題

久布白が『婦人新報』で「混血」の問題に初めて言及したのは 565 号（1947 年 1 月号）と早い時期であった。「闇の女」問題に関して「我国の女性が世界的に立ち上る時、こうした女性を我国に数多く持つ事は、実に国家の恥辱である。これが国際的に混血を生ずる時は更に国民的問題である」（久布白 1947:2）と述べていた。当時、国立公衆衛生院長を務めていた古屋（1953）は「混血問題」と児童保護問題としての「混血児問題」を分けて考える必要性を主張したが、この時点の久布白に児童保護の視点は見られない。解決策として「闇の女」の「更生」のためのホームの事業や純潔教育に言及したことからもわかるように「混血児」ではなく、「混血」と「闇の女」を問題の焦点としていた。

### 2 「国際孤児」即ち孤児問題から「混血児問題」へ

その後、1952（昭和 27）年まで『婦人新報』で「混血」や「混血児」に関する論考は管見の限り見出せなかったが、終戦後の矯風会についての文書で「今後の方針としては先ず国際混血児即ち孤児問題に対して適切且つ合理的な方法によって解決を図り」（日本キリスト教婦人矯風会 1952a:7）と記すように、矯風会として「混血児問題」に取り組む姿勢を示している。

久布白が『婦人新報』で再び「混血児問題」に言及するのは、620 号（1952 年 4 月号）において、『婦人と日本』で初めて取り上げるのは 10 号（1952 年 2 月 29 日号）においてである。ただしその際は「国際孤児の問題」（久布白 1952a:2, 1952c:6）という表現を用いていた。この時点から孤児である「混血児」に問題の焦点を当てていることが窺える。

『婦人と日本』で最初に登場した「国際孤児」に関する記述は次のようなものである。

行政協定に於いても国民が不安を感じる点は、やわり（ママ）米軍の在り方である、例えば僅か六年の間にさえすでに出来て居る国際孤児の問題、又若き娘に対する風紀紊乱の現況、近くに刑事の権が完からぬ為めの社会不安、等々云う可くして云い尽し得ぬ問題として残るであろう。今後六師団もの兵が、半永

久的に駐在するとなれば問題は増しても減ずる事はあるまい、これ等に対し、従来どおり見ざる聞かざる云わざるで過すことは出来ない、やはり問題は国家的に考え、国際的に訴えて、最善の解決をつけねばならない(久布白 1952a:2)。

独立後は国家として「国際孤児」の問題を積極的に解決していくべきことを訴えている。

また久布白(1952c:6)は『婦人新報』の中で占領期を振り返り、「今日我等が六年のあとを省みる時に、此処に今日まで人々の目から隠されてきた事実が現われて来た。それは如何に隠しても隠し切れない国際孤児の問題だ」と述べる。戦争と絡んだ「性の悲劇」と捉えるようになる。

独立後の初期段階で、久布白の問題認識はどのようなものになるのだろうか。「今日国の面に投げ出されて居る国際孤児の問題、これは固より現在、日本人と日本政府が、全面的に之を担って居るが、黒白にかかわらず半分は進駐軍の責任であることは認められねばならない。また其物心両面に於ける責任も其半分は分担さたれるのが道ではないだろうか」(久布白 1952b:2)、また「靡びいた方にも罪なしとは云わない。然し半分の責任は相手方に在りはしないか」(久布白 1952c:6)と述べるように、第1節の4.で触れた神崎(1953)の問題意識と同様にアメリカ軍の責任を問う視点があった。「世界共通の戦後の悩みとも云うべき国際孤児の問題等も今後朝野内外の人と共に大いに考究せねばならない」(久布白 1952d:3)と述べ、積極的に「混血児問題」に取り組もうとする姿勢が窺える。

4月の矯風会全国評議員会で久布白は、エリザベス・サンダース・ホームを見学した旨の報告をし、「国際孤児一〇萬—二〇萬といわれ確定しないが大磯、横浜の施設の事実を見て来た所で五百名位収容している…これをどうしたらよいかという事が我々に課せられた問題である」(日本キリスト教婦人矯風会 1952b:11)との認識を明らかにする。また福岡の戦災引揚孤児施設の例を挙げながら、国際孤児について「我等、最早猶予は出来ない。明年の春に学齢となる、我等はこれらを、よき子として育み育てねばならない。彼等に何か一つでも優れたものを与えることはたしかに一つのよき解決策をと云い得るであろう」(久布白 1952e:12)と「混血児」の養育についての示唆を出す。

久布白の論考に初めて「混血児」という言葉が登場するのは『婦人新報』では 623

号（1952 年 7 月号）、『婦人と日本』では 17 号（1952 年 12 月号）においてである。久布白（1952f:4）は「全国に駐留した兵によって全国的に家々に撒き散らされた混血児の数は目下の所推定以外確実なもの掴むことは困難のようであるが、然し現実唯今我等の中に、1 才から 5 才までの未だ我等の経験せし事なき子供が、其多くが父もなく又母もなく現に各々小さき一戸の主として育まれ、其或ものは明年は既に学齢に達せんとして居ることは打ち消す事の出来ない現実である」と記している。「混血児」という語を用いているが、この時点ではまだ孤児である「混血児」だけを問題として取り上げている。

### 3 純潔問題中央委員会の設立

独立後の風紀問題や「混血児問題」の解決を目指し、1952（昭和 27）年 6 月に矯風会と YWCA を主軸とする「純潔問題中央委員会」が発足した。委員長は植村環（YWCA）、副委員長は久布白で、「法律問題」、「調査」、「純潔運動」、「混血児の将来」の 4 部門に分かれ、活動を行っていくことになった<sup>4</sup>。

法律問題では少なくとも「駐屯兵に関すること」、「混血児に関すること」、「国内法の樹立」の 3 つを扱わなければならないと考える。久布白らは過去 6 年 8 ヶ月の占領期の間、その数さえも把握していなかったが、「彼等（筆者注：米軍）と我等の娘との間に相当の交渉の有ったこと」（久布白 1952h:3）が明らかになった。駐屯兵が継続する限り、日米間の結婚を許可すること、「混血児」の養子縁組が容易に出来るように法律をゆるくしてもらうこと、そして国内で自由意志による売春を禁止する法の制定が必要だと主張している。過去 6 年 8 ヶ月の間、マッカーサーとその後の人々は駐屯兵に日本女性との結婚を免じていた（1953 年までの規定）ことを知り、久布白は外務省渡航局へ調査に出向いた。その結果、「昭和 27 年 6 月末日現在で、其婦人の数は 5801 人に上って居る。この外に、既に結婚しても未だ渡航せぬもの結婚しても相手が戦死したもの等々を計算すれば何としても万に近い人々が結婚の道を辿った」（久布白 1952g:3）ことを把握する。それをふまえて「今我等が急を要すると思う事は、この規定が取り去られて、尚今後駐屯兵が更に継続されるということである。今日まで多くの問題が在ったとしても、少なくともこれ丈けの男女は正当な結婚によって結ばれ将来日米間の絆となるものである。この法規によれば混血児は生まれ出づるであろうが、棄児、孤児は絶対に出来ない、我等は社会の最悪の不幸を除く為め是非この法規を復

活して貰わねばならない」、また棄児、孤児の内、「黒人を父とする子等は、特によき養父母が望ましい。これ等の子供等に養子の規定は目下非常に困難である。この法規をゆるくして貰うことは第二の問題」(久布白 1952g:3)と述べている。その後米国の移民法の制定により、今後アメリカ兵が海外で結婚した場合、その花嫁を本国に連れて帰ることが永久的にできるようになったため久布白の懸念していたことは解決した。

「調査」に関しては純潔問題中央委員会として全国医師会、産婆会、厚生省統計局に連絡し、「混血児」の実数を把握しようと務めている。混血児の将来については「何とかして彼等の為に問題が少ない国処で育てる所はないか」(久布白 1952h:4)と述べている。

その後7月初めに厚生省は矯風会等の団体の代表を招き、「混血児」の父の認知・養育扶助・養子の斡旋に協力して欲しい旨を伝えた。「現在の混血児の中には、軍の移動等により父方の所在の不明なものが相当に多い。これらの混血児のために、父の所在を探し、その養育費の問題を解決し、それが同時に児童の福祉のための解決策となる」

(厚生大臣官房広報連絡課 1953:64)と後に記される。翌8月に久布白は宣教師 U.G. モルフィ<sup>5</sup>より情報を得て、国会図書館で米国の庶子法を調査し、父親はその子の母親に対し養育費として月25ドルないし40ドルまでの金を子どもが16歳になるまで払う義務があるとの情報を得るに至る。

#### 4 「混血児」調査から得られた新しい視点

先述したように新聞や雑誌で「混血児」数が10万～20万と報道されていたため、久布白(1953a:9)は「何としても確実な数なしには何事も出来ない」と考え、調査に取り組んだ。正確な実数調査によって問題を明らかにした上で、対策を講じようという姿勢がある。さらに調査を通して、「今日まで漠然と社会に訴えられた問題に更に新しい立場と考えとを与え、且つ今後我等がこの問題に関連して為さねばならぬ新局面を開くのではないか」(久布白 1953a:9)と考えるようになる。久布白は「混血児」を「捨子」、「片親若しくは家庭の子」、「結婚している両親間の混血児」の3つのグループに分ける。

第1に「捨子はむしろ少数」ということである。エリザベス・サンダース・ホーム等の施設に入所している子どもたちは「厚生省から現在数482人」と発表された。他の団体の調査でも同じ数を得ており、主にその「最大部分が捨子若しくは捨子同様の

子供等」で、「政府は原則として各自に養育費を与えて各施設に委託している。また各施設にはこの子どもたちのために特に篤志家の寄付等も徐々に集まりつつあるので一応その道がついて居る。但し学齢に達する者のためには国家施設の学校が受けるか、あるいは特別のものを設けるか、いずれにしても、その数は現在のところそう大きな数となるとは思われない」(久布白 1953a:9) と判断する。久布白が当初問題としたのはこのグループであったが、施設の養育体制が一定整ったことで、残る問題は就学をどうするかという点に行き着く。

第2のグループは「片親若しくは家庭の子」で、この施設外の子どもを調べる事は容易ではなく、様々な方法を試みた。矯風会の依頼で全国840の医師会を通じて各府県で調査してもらったところ、その数は910人となった。また全国社会福祉協議会<sup>6</sup>の調査では1582人となった。更に厚生省が6万人の助産婦、約1万人の産婦人科医師を通じて数ヶ月にわたり調査を行った。その返事は77%に達し、その総数は5013人<sup>7</sup>と発表された。これらの調査を一覧すると全部を平面的に加えてみても7500余人となる。「この子供等の特徴は、重もに父親が不在と云う事である。又親の家とか親戚とか誰れかがかかえて居ると云うことである。若し今後何かせねばならぬとすれば、丁度独乙でやって居るように、この子等の父に認知させて、この子等が女親若しくは親戚の負担とならないように米国法に従って子供の為に扶助料を請求してやることである」(久布白 1953a:10) と解決策にも言及する。

第3のグループは「結婚している両親間の混血児」である。久布白らが最も驚きを感じたのはマッカーサーの下で許されていた「日米間の結婚と、それらの女性に対する渡航許可」についてである。先述の通り、久布白は昨年7月に混血児数の調査の目的で外務省渡航局を訪ねた。戦後に渡航局が外国人と結婚した婦人に渡した旅券の数は1952(昭和27)年6月末までに5801で、11月末までに800有余を加えて6644であった。さらにその後12月24日の移民法により、渡航を待つ婦人の数は2000人に近いということであった。「両親があり、それが正式に結婚して居り、其花嫁は彼等と共に渡航して居るとすれば、それは少くとも社会的負担にはならない。又道徳的に非難の的にはならない、子れは米軍が兵に対して取った新しい方法と見るべきものだ」(久布白 1953a:13)とアメリカを評価している。

このようなことをふまえ、久布白らは「一方に売春禁止法を提げ、他に基地の母の家を持ち我等は消極、積極な面から、我が国の浄化、日米の安全弁を開かねばならな

い」(久布白 1953c:8) と考え、売春禁止法制定運動と健全なレクリエーションと交流の場を提供する「母の家」設置に取り組んでいくことになる。米兵の望むのは「健全なる日本の家と日本人」で「若し我等が中に立って健全なる日本の家を開かせ、尊敬すべき日本女性との交際の道を開き得るなれば、これは彼等を正しく守り得る唯一の道である。これに対して我等何千万の健全なる家庭婦人母等は何か出来ないであろうか」(久布白 1953c:7) と考えるようになった。「母の家」は日本基督教協議会<sup>8</sup>の協力を得て、2月17日呉市基督教協議会によって発足した。「米兵、米軍は決して無法を我国にしているのではない、努力の足らざる所がかかる結果を生んだのである。我等はこれを諒として力の限り我等も彼らに協力すべきではないか」(久布白 1953c:7) とする。

捨子に関しては「養育の道を立て又今や教育の域に進まんとして居る。だが同じ混血児ながら第二のグループ所謂家庭に保護されて居る五千人から七千人に上るであろう子供に対しては従来何も為されて居なかった。だが事実これらの子等は大いに世話を必要とするのである。それは父をして認知せしむる事、同時にこれによって扶助料を請求してやる事である」(久布白 1953d:13) と述べている。この時点で久布白の関心は父が不在の家庭で養育されている混血児にあった。よって、「父が認知すると云う事、其父が扶助料を送ると云う事これ程当たり前の事はない。それなのに何故今日までこれらの多くの子等に対して何等の道がつかなかったが、むしろ不思議と云うべきだ。ここに街の女の悲劇がある。だが然し今後若しここに道が開くなれば、これ等の重荷を負うて世に送り出された子等の相当数が、其父を知り、又廻り会うの幸福を得、又淋しく子等を抱いて苦しむ母に光を力を与える途がつくのではないか」(久布白 1953d:14) と提言する。同時に久布白(1953f:7) は、「五千から七千に登る母親丈けの手で育てられて居る所謂家庭内の子等に対して政府も社会も何等為す処なくすて置かれている」と肝心の問題に切り込んでいく。

ここより久布白は「自分は何とかして、この事を人々、特に厚生省発表の五千余人の不幸な母達に知らせ度い」(久布白 1953g:15) と述べ、認知と扶助の制度について周知させたいと考えるようになる。久布白を来訪した『週刊朝日』の記者にこの制度について語り、それが記事<sup>9</sup>となった。その後、久布白は朝日新聞社から手紙を受け取る。その記事を見た一人の女性から面会してもらえぬかとの手紙が寄せられ、久布白は面会し、事情をたずねる。認知と扶助を得て欲しいという話で、久布白はモルフィ

に手紙を書いて取り次いでもらう。またその女性にも自身で相手に手紙を送るよう勧め、数回のやりとりを行う。その後、父親からの一時金送金という成果を残している<sup>10</sup>。この後も厚生省から2つのケースが久布白のもとに送られた。その相手がハワイ人であるため、ホノルルの牧師の協力を得て、認知と扶助を得るために手紙のやりとりを行う。久布白はモルフィヤ牧師と連携し、日米の連絡係としての役割を果たした。

このような経験から久布白は「この片親の仲間もよく調べれば相当教養もあり生活力もある連中である<sup>11</sup>。この人々は当然自ら立って自己の人権を守り、子供の人権を守るべき筈である」（久布白 1953g:15）ということ、また「混血児」の母自身が「己れを護り子供を護る義務」（久布白 1953g:15）を忘れてはならないということ、制度を知った上で、自分自身で権利を獲得していく必要性を主張するようになる。

## 5 「混血児問題」への焦点化

1953（昭和28）年、久布白（1953h:5）は「丸一ヵ年の間、混血児問題に取り組んで来て、いよいよ問題は明瞭になった」と述べ、「捨子と云う五百人以下のグループは兎も角も施設の中で、政府の保護即ち一人一ヶ月平均五千円程度の支給で満十八歳まで支えられて居る。又一万一千有余の既に結婚せる人々は相携えて渡米して各其生活を営んで居る。だが問題はこの片親の或いは父母、養父母、祖母其他の手にあってかかえられて居る子等である」と考えるに至る。続けて、「これに対し政府として直接に事に当ることの困難さから目下民間諸団体に委託の方法が講ぜられている、矯風会は目下理事会承認の下にこの事に着手しつつある。全国各府県に於ても、いづれもこの子等を持たざる県はないのであるから若し認知や、扶助の必要を認めた際は助けの手を伸べて協力する事は大事な仕事の一つであると信ずる。議論の時期ははや過ぎて実行の時となって居る。子等も己に六才七才、八才さえもある、だが最も多いのは一、二、三才のものである、我等は戦後の悩みを癒す一つの途として片親の手に在る混血児問題に心を向く可きではあるまいか」（久布白 1953h:5）と問題提起をする。

当初は「国際孤児」、即ち孤児である「混血児」を問題としたが、政府は片親が養育する「混血児」に対策を講じていないことを把握し、焦点を移していく経緯がわかる。

## 6 アメリカ軍への思いとその変遷

先行研究で勝者への迎合や親米的だと批判もされたが、久布白はアメリカ軍に対し

てどのような思いを抱いていたのか。売春問題に関する記述で「少なくとも海外より来て我国を一時の家または宿とする人々に対して、従来の如き婦女子に対して木戸御免的態度は、此の際更めねばならぬとの覚悟を持たしめねばならない。又自身を提供せんとする婦女のみならず、彼等に家を提供するもの、室を提供するもの、はた又彼等のため客引の役をつとむるもの、其いづれに対しても犯罪者意識を持たしむる必要がある、娘等だけではない、客となる相手方それがたとい如何なる国籍のもので有ろうとも、同じく犯罪者として逮捕される事を承知して貰わねばならない。呉や千歳や各地で先方から日本娘の謹慎を求める声さえ上げられて居るのだがこの声は当方からも上げられねばならない」(久布白 1953j:5)、また「外人が我等の若き女性を荒らししても、之を禁ずる道がないなどと云うぶざまなことは一日も早くこれを改む可きではないか」(久布白 1953i:2)と述べたように、アメリカ兵であれ、日本人であれ、買春をした男性は法の下に処罰されるべきであると考えていた。そこには勝者に対する批判が含まれている。一方で「混血児」の数が明確になると、久布白(1953k:4)は「米兵、国連兵なるものを無暗に恐れ軽蔑する必要はない。むしろ彼らの内には我等と協力して、我国の向上に喜んで参加するものもある事が明かにされて居る今日、我等は徒にただ基地の風紀紊乱に雷同して騒ぐ可きではない。むしろ退いて、徐々に最もよき解決に前進すべきである。此处に我国の現在の禍を転じて福となすの道がある」と記し、アメリカと協力する必要性を主張する。また「内の娘は我等が守るぞと云う一線丈けは先ず一日も早く国民の意志として、此处に制定し、発表せられねばならぬ」(久布白 1953k:3-4)と述べ、「混血児問題」に関して「教育的に社会的に為す可き事は今後決して少なくない、だがこの最も忌む可き捨て子を増す如き売春施設による解決はこれは下の下、文化人として取る可き道でない事は余りにも明瞭である」(久布白 1953b:14)と述べた。問題の実態が明らかになったことを契機に、久布白は売春禁止法制定へと課題を移していく。

## 小括

久布白は「混血児問題」の解決のために様々な取り組みを行ったが、彼女の果たした役割とはいかなるものであったのか。沢田のように「混血児」の養育に直接携わったわけではないが、廃娼運動の経験から宣教師モルフィとの交流があり、また海外に人脈もあることから「混血児」の母への「認知と扶助」の斡旋という支援を行うことが



できた。父親不明の「混血児」への支援には触れていないという意味での限界はあったが、「混血児」の父親の責任を求め、政府も社会もほとんど注目していなかった片親の家庭の「混血児問題」の法的解決に取り組んだ点では、社会福祉実践に特化した論を展開していたといえよう。当事者である「混血児」の母親も『婦人公論』においてそのようなことを課題として挙げていた。

いま世間では混血の孤児たちだけのことが主として取上げられていますが、父に捨てられてもその子供とはどんな苦勞や迫害にあっても、子供の成長だけを唯一つの望みとして生きて行こうとする母に、安定した生活を与えるため、その相手に父親として子供の養育費を負担させるような新しい法律を、アメリカに要求して解決するようにはならないものではないでしょうか（保谷 1952:142）。

このような記述から考えても、子どもだけではなくその母に光を当て、『週刊朝日』という大衆雑誌を通じて、子どもの養育費を負担させる法律の存在を知らしめたことは「混血児」の母の権利擁護にもつながり、大きな意義があった。同時に、「混血児」の母自身が制度を知った上で、その権利を獲得する必要性を主張するようになるが、これは広い意味で「混血児」の母である女性のエンパワメントにつながるものである。先行研究ではこういった側面にはふれられてこなかったが、久布白が展開した「混血児」とその母への生活支援には、社会福祉の理念である権利擁護やエンパワメントというべき視点が存在していた。

また久布白の「混血児問題」に関する論考から見えてくるものがある。先行研究は「戦後の市民的団体もまた、20年代のそれと同様、アジアと無産階級への視点は欠落していた」（藤目 1997:332）と指摘し、矯風会を批判しているが、久布白の「混血児問題」に関する論考の中に次のような記述がある。「戦時中我が将兵の行動について少なからず批難を聞かされる。事実全く無根として打ち消すことは出来ないようだ。（中略）……国内に有り、平時に有っては、皆それ相当な人々が、戦時と云う事、又他国に有ると云う事で、特に戦争の殺戮、戦場で犯した事柄に対し、誠に相済まぬと云う感に堪えない」（久布白 1952c:7）、「我等の若き人々が南方各地に残した子等が八万もあると云われている。こうした問題は又我等にも大いなる反省と努力の問題を提供するであろう。我等は今後の世界にいずこにもかかる悲劇を生まぬ道をさらに真剣に研究

せねばならない」(久布白 1952h:5)、また、「かうしたドサクサまぎれの時代にはG I  
の中でも非人道の事のあるのは否まれない。断じて免し得ぬ事も決して少なくないが、  
然し全部を挙げて悪玉と烙印して仕舞うことは慎まねばならない。日本の貞操の最も  
先きに出てくるのと同じような事を真昼間日本人が支那の女性に加えた、つい最近  
目撃者と云う人が語って居た」(久布白 1953e:6)。

ここより、性の問題に関する日本のアジアの国に対する戦争責任の認識を読み取る  
ことが出来る。戦後の日米間の「混血児問題」に留まらず、戦時中の日本とアジアと  
の「混血児」の存在や、戦時に日本人が行った性的暴行にも言及し、それに対する反  
省が窺えるからである。第1節の4で触れた帯刀(1952)と同様の問題認識がある。こ  
れらは未だに解決をみていない難しい問題であり、当時の久布白の問題意識は現代に  
おいても十分訴える力を持っている。

## (第9章 文献)

藤目ゆき (1997)『性の歴史学』不二出版。

林葉子 (2005)「『廃娼運動家』論・再考—久布白落実と『婦人と日本』(1950～1965)」  
『大阪大学日本学報』24,63-84.

保谷美津子 (1952)「混血の児を抱いて 野上弥生子先生へ」『婦人公論』38(7),142-143.

市川房枝 (1952)「『独立』日本の婦人問題 パンパンと混血児問題の解決を」『東洋  
経済新報別冊』8,51-55.

加納実紀代(2007)「『混血児』問題と単一民族神話の生成」恵泉女学園大学平和文化研  
究所編『占領と性』インパクト出版会,pp.213-260.

神崎清 (1953)「白と黒 日米混血児の調査報告」『婦人公論』39(3),128-139.

古屋芳男 (1953)「混血ものがたり—世界的に見た混血児問題—」『婦人公論』  
39(4),164-169.

久布白落実 (1947)「1947年度に於ける矯風会の進路」『婦人新報』565,2.

久布白落実 (1952a)「国家防衛と民主主義」『婦人と日本』10,2.

久布白落実 (1952b)「独立の春に」『婦人と日本』11,2.

久布白落実 (1952c)「行政協定後の矯風会の有り方」『婦人新報』620,4-7.

久布白落実 (1952d)「昭和二十七年度の評議員会を終わりに」『婦人新報』621,3.

久布白落実 (1952e)「時事雑感 (二)」『婦人新報』622,10-12.

- 久布白落実 (1952f) 「日本に母はないか」『婦人新報』 623,4-5.
- 久布白落実 (1952g) 「行政協定後に残る諸問題」『婦人新報』 624,3-4.
- 久布白落実 (1952h) 「純潔問題中央委員会」『婦人新報』 625,3-5.
- 久布白落実 (1953a) 「混血児問題の新局面」『婦人新報』 628,9-12.
- 久布白落実 (1953b) 「混血児問題の基本線」『婦人と日本』 18,12-14.
- 久布白落実 (1953c) 「売春なき日本の実現」『婦人新報』 630,5-8.
- 久布白落実 (1953d) 「混血児問題と新しき二つの面」『婦人新報』 630,11-14.
- 久布白落実 (1953e) 「女よ強かれ」『婦人と日本』 20,4-9.
- 久布白落実 (1953f) 「矯風会第五十三回大会の成果」『婦人新報』 632,6-8.
- 久布白落実 (1953g) 「身をもって民主主義を教えた米人」『婦人と日本』 22,14-15.
- 久布白落実 (1953h) 「混血児問題への救いの手開く」『婦人新報』 634,3-5.
- 久布白落実 (1953i) 「秋に憶う」『婦人と日本』 24,2.
- 久布白落実 (1953j) 「新らしき秋を迎えて」『婦人新報』 636,3-5.
- 久布白落実 (1953k) 「基地に対する二つの方策」『婦人新報』 637,3-5.
- 久布白落実 (1953l) 「私の日記」『婦人と日本』 26,22.
- 厚生大臣官房広報連絡課 (1953) 『児童の福祉 1953』.
- 厚生省児童局編 (1959) 『児童福祉十年の歩み』 日本児童問題調査会.
- 村上貴美子(1987) 『占領期の福祉政策』 勁草書房.
- 無署名 (1953) 「青い眼の一年生—混血児の入学問題」『週刊朝日』 58(9),4-11.
- 日本キリスト教婦人矯風会 (1952a) 「終戦後の日本基督教婦人矯風会」.
- 日本キリスト教婦人矯風会 (1952b) 「日本基督教婦人矯風会全国評議員会報告」『婦人新報』 621,4-12.
- 野上弥生子 (1952) 「パール・バック女史へ 混血児を幸福な道へ」『婦人公論』 38(5),28-35.
- P.キャリッシャー (1952) 「蝶々夫人の子供たち—GI ベビーの問題—」『週刊朝日』 57(44),3-11.
- 連合国最高司令官総司令部公衆衛生福祉局 (1946) 「記録用覚書 主題：非嫡出児の養護」社会福祉研究所 (1978) 『占領期における社会福祉資料に関する研究報告書』 143.
- 坂口勇造(1949) 『R・A・A協会沿革誌』.(再録：2004,『性暴力問題資料集成第 1

巻』不二出版).

帯刀貞代 (1952) 「未亡人と混血児」『改造』33(11),184-187.

植村環 (1952) 「リッジウェイ夫人へ パンパンに新しい道を開くためには」『婦人公論』38(5),36-40.

全国社会福祉協議会 (1952) 「意外に少かった混血児 全社協の調査まとまる」『社会事業』35(12),46.

---

(注)

- <sup>1</sup> 沢田美喜(1901-1980)は三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の孫娘として生まれ、外交官の沢田廉三と結婚、4人の子に恵まれる。終戦後、エリザベス・サンダース・ホームを創設し、2000人近くの混血孤児を育て上げた社会事業家。
- <sup>2</sup> (一)混血児が一般児童と差別されないよう、児童憲章の精神にもとづきすべての児童と平等に育てられるべきこと、(二)混血児およびその家族に対しては、その特殊な事情からとくに、児童福祉司、児童委員等による実情のは握、指導等を十分に行い、施設入所の措置、家庭援護の万全を期すること、(三)混血児問題に関する一般人の啓蒙を行い偏見の除去につとめること、(四)政府は、積極的に海外諸国と連絡を取り、海外民間団体・篤志家の協力を求めるよう努力すること等である(厚生省児童局 1959:75)。
- <sup>3</sup> その通知には「混血児が当面している諸問題には父親の国と関連することが多いが、この解決策として政府は、海外と密接な関連をもつ民間団体、篤志家等の協力を求め問題解決のための活動を極力促進し、支援すること。即ち国内の混血児で養子縁組、父親による認知、これらに附随して起る海外渡航等を希望する者がある場合、都道府県乃至市町村の社会福祉協議会は必要な調査を行い全国社会福祉協議会連合会に通知し、全国社会福祉協議会連合会は前述の民間団体、篤志家と連絡し、これらの問題を個別的に解決していく方針であること」(厚生省児童局 1959:281)と記されていた。
- <sup>4</sup> 役員の構成は、法律部：市川房枝、榊原千代、久布白落実、調査部：大瀧スエ、植村環、母と子の純潔教育：竹上正子、加藤八重、混血児の将来の問題：岸登恒となっていた。
- <sup>5</sup> ユリシーズ・グランド・モルフィ(U.G.Murphy) (1869-1967) は米人宣教師で、明

---

治期の日本において娼妓の自由廃業運動を行った人物。

- <sup>6</sup> 全国社会福祉協議会(1952)では各都道府県社協を通じて、全国の混血児数の調査を行った。居宅の混血児を児童委員等が警察官、町内会等の協力を得て、できる限り面接で行った。未報告の東京、岐阜、和歌山の三都県の方は含まれていない。合計 1644 人で、久布白の挙げた 1582 人という数字は公的扶助を受けていない人数のことである。
- <sup>7</sup> 朝日新聞 1952 年 12 月 24 日号でこの数が発表されており、久布白はこの数値をその論考において採用している。しかし、厚生省のデータでは先述したように 5064 人である。
- <sup>8</sup> 日本のプロテスタント教会の並列的なつながりと海外の教会との窓口として 1923 年に日本基督教連盟を設立、国家の宗教政策の下で 1941 年日本基督教団が設立されると共に解散。これが協議会の前身であるが、日本基督教連盟は戦後日本基督教団から旧教派の教会が離脱することによって再び国内の教会間の連絡役と海外の教会との窓口が必要になり、1948 年 5 月、日本基督教協議会（後に日本キリスト教協議会）が設立された。
- <sup>9</sup> 『週刊朝日』の 1953 年 3 月 1 日号に久布白へのインタビューが掲載されている。「アメリカでは、父が認知さえすれば、子供が 16 歳になるまで毎月 25 ドル乃至 40 ドルの養育費を支払わねばならぬ法律がある。たとえ、父は日本で子供を生まれ放しにして帰米しているとしても、いつ頃、どこの何部隊にいた誰だと分れば、アメリカに連絡して認知させる方法がある。西独では、母が然るべき機関に出頭して、片っぱしから認知させた。が、日本では、まだ誰一人も養育料を請求した者がいないようだ。昨年、シャトルのカングリケイション派のモルフィ牧師が来朝して、この仲介の斡旋を申し出た」（無署名 1953:10-11）。
- <sup>10</sup> その後、このケースについては次のような動きがあった。「十一月某日、混血児の母 I さん見える。父から二回目の送金があった。然かもそれが規定の額である」（久布白 1953I:22）。
- <sup>11</sup> 一方で、同じキリスト者女性である植村環（1952:38）は「(混血児の)母親の多くは、無論教養のない、感情の質の低い者たちに違いありません」と述べていた。久布白も当初は「闇の女」と「混血」を結びつけて考えていた（久布白 1947）。

## 第10章 久布白落実と売春防止法をめぐって

### はじめに

売春防止法は、万人が納得、賛成してできた法律ではない。多くの反対を、正義が、世論が、私たちの力が、押しきって成立したものだ。(中略) …因みにいえば、売春防止法の効果は管理売春の否定にあった。いまは万人が、売春女性たちが搾取される形態は不可という。かつて法的に廓が公認、特飲店が黙認される状況のときは、女性が豪奢に搾取されるのを国家として認め、やむをえないとしていたのである。人びともまたそうであった。いまはみんな、そうは思わぬ。ザル法と悪口をいわれるが、私は売春防止法制定の意義は大きいと思う(久布白 1973:297)。

本章の目的は、久布白の取り組んだ運動の集大成とも言うべき、売春防止法制定をめぐる運動の内容と意義、また法制定後の活動について分析することである。久布白は民間の立場から売春防止法制定に関わったが、どのような法律を目指していたのか、その背景にはどのような売春観があったのかを明らかにする。彼女の取り組んだ運動が、売春防止法制定や女性の福祉にどのように結びついていったのかを考察していきたい。時期的には1953年頃から久布白が死去する1972年まで研究対象とする。

### 第1節 売春禁止法制定運動の取り組み

#### 1 売春禁止法制定促進委員会の設立

勅令第九号法制化運動や混血児問題の取り組みを経て、久布白は売春禁止法の制定に向けて本格的に取り組んでいく。1948、49年頃から東京都や一部の自治体では売春禁止の条例が制定されていたが、それらは都道府県や市町村に限られたものであり、国家として一律に売春を禁止した法は存在していなかった。

矯風会、キリスト教女子青年会、大学婦人協会、婦人平和協会、婦人有権者同盟の5団体が結束し、弁護士の馬越旺輔に売春禁止法の前案作成を依頼し、さらに宮城タマヨ議員、伊藤修議員の案と照らし合わせ、法案を提出することとなった。そして、1953(昭和28)年1月10日、5団体で「売春禁止法制定促進委員会」を設立した<sup>1</sup>。委員長は久布白、副委員長は神近市子(婦人団)と植村環(キリスト教女子青年会)、

書記通信は福田勝（矯風会）と櫛静枝（キリスト教女子青年会）、会計は伊藤てる（婦人有権者同盟）が務めた。3 月頃には自由党婦人部、社会党各派婦人部、日本キリスト教協議会、全国社会福祉協議会など、19 の団体が参加するようになる。最終的には 33 団体<sup>2</sup>が参加した。1953 年 3 月 3 日に第 15 国会に議員提出法案として売春禁止法案を提出する。第一条の法の目的で「この法律は、売春及び売春をさせる行為に関する刑罰規定を定めることによって風紀びん乱を防ぐとともに、婦女の基本的な人権を擁護し、もって、健全な社会秩序の維持に寄与することを目的とする」と定められている。売春をした者と相手方、また、勧誘をした者も処罰されることが定められていた。久布白（1953a:6）はこの法案について「個人が自由意思による売淫、そのものを禁止するのである。性病を伝播するとか市内を騒がすとか云うのではない、売淫其ものが人倫を乱すものであるから禁止するのである。即ち我国に売笑婦ある可らず、売笑なき日本を建設せんが為めの法案である」と記している。また法の制定は、「国の体面の上からも考えねばならぬ事である」（久布白 1953a:11）と考えていた。しかしながら、3 月 14 日に国会が解散し、審議未了となった。同月 21 日には売春処罰法制定促進婦人大会が開かれ、「この法案の成立に賛成の候補者を支持し、これに反対の候補者に非協力すること」（売春禁止法制定促進委員会 1953）を決議した。

6 月末に委員会において、議会对策委員、資金委員等を決め、本格的に運動に取り組んでいくことになる。また、久布白は 7 月に犬養法務大臣を訪問し、売春なき日本建設の法制化を要請し、婦人議員との話し合いを行っている。久布白（1953b:2）は、売春禁止法の制定は「我等の若き女性を守り、同時に国民道徳に対して、戦後崩れた男女間の生活に明確な基本線を引くこと」、「社会の基本を為し人間生活の土台となる人倫の根本を保護する為めの法案」、また、「我国の女性の人権を守り、人格の破壊を保護する」（久布白 1953d:2）のものであると考えている。ここから久布白の売春観を読み取ることができる。彼女は売春を人権や人格と結びつく問題と捉えていたのである。

## 2 売春問題対策協議会の設立

政府においては、1953（昭和 28）年 12 月 2 日に衆議院本会議で犬養法相・小坂労相が協議会の設置に言及し、18 日に売春問題対策協議会<sup>3</sup>の設立が閣議決定された。

売春問題が、黙過し難い現状にあるのに鑑みて、政府は、売春問題対策協議会（仮

称)を設置し、売春行為等の防止及びその取締、並びに売春婦の更生保護等売春に関する諸般の問題を検討し、これに関する立法その他総合的根本対策を協議するものとする。

備考

昭和三〇、一〇、六 廃止

会長は山崎佐（弁護士）、副会長は村岡花子（評論家）で、久布白、平林たい子（作家）、山高しげり（地婦連会長）、正木亮（弁護士）、津田正夫（新聞協会事務局長）、高橋明（東大名誉教授）が委員を務めた。1954（昭和 29）年 2 月 6 日に第 1 回会合が開かれる。その後協議を重ね、「売春の防止および処分について総合的な立法措置を必要とするという結論に達し」、答申をまとめ、9 月 2 日に内閣に提出した。「売春を犯罪であると規定しながらも、処罰に重点をおかず、婦女の転落防止、売春婦の保護更生を中心とし、売春婦に対しては、保護観察、矯正処分などによることとして、悪質などのを除き処罰をさけた点」（全国婦人福祉施設連合会 1955）が従来提出された法案との違いであるとされている。

### 3 売春禁止法制定促進委員会における久布白の活動

売春禁止法制定促進委員会は 1954（昭和 29）年にかけて各府県の支部の設立に力を注ぎ、久布白もそのために各地を訪問している。また、法案通過後の実施方法についても考えていくようになる。久布白（1954a:12）は「教育の面もあり、身売防止の面もあり、保護、授産の面、更生施設等々幾多の面がある、又若き世代に対しては性教育、純潔教育、健全娯楽の供給もあり、又対外的には基地の浄化、兵士ホーム等もそれぞれ考えられなければならぬ」と述べた。伊藤秀吉は「集娼廃止善後策 32 か条」<sup>4</sup>を發表し、それをもとに促進会では研究を進めていく。その後、数回審議を行い、「売春禁止対策二十七条」を發表し、全国の促進会支部へ配布している。久布白（1955a:4）自身も「ただ（売春禁止）法の成立丈けではない、法の現実に於ける実施を見定めねばならない」と考えている。

1954 年 2 月 8 日、売春禁止期成全国婦人大会を開催している。400 人の女性が参加し、バス 2 台を繰り出して国会へ陳情を行った。その決議文で、法律の内容に織込むものとして次のようなものを挙げている。



- 1 人身売買業者、悪質な業者に対して、罰金及び体刑が併行する重罰を課すること。
  - 2 転落防止のため、生業貸付金制度を立法化すること
  - 3 これら婦人の更生保護施設の拡充強化
- と共に、
- 1 売春問題解決のために婦人保護司、民生委員等の積極的活用
  - 2 売春対策協議会を即時開催し、立法化に協力せしむること（売春禁止期成全国婦人大会 1954）

1955 年 6 月 10 日、売春禁止法制定促進関東大会が開催される。参加者は 500 人であり、猛運動を展開することとなった。大会宣言には、「本大会は売春禁止法制定の必要を再確認するとともに、公約せる売春禁止法の制定実現、女性の人権擁護と売春なき純潔日本建設の確立のスローガンの下に新たなる決意の上に立って、女性の結束を一段と強化し、初期の目的貫通のため正しい運動を展開し、あくまで斗いとらんことを誓うものであります」（売春禁止法制定促進関東大会 1955）と記されている。同日、神近市子代議士他 18 名が売春等処罰法案を提出している。久布白（1955g:131）は法案を「基本人権確立法」であり、「封建制度の中から生れ、封建的家族制度を維持して来た、集団売春、個人売春を廃して生きた男女の人格の基礎の上に社会を打ち立てることである」と考えている。売春は基本的人権を脅かすものであり、封建主義から人格主義へ移行すべきであると考えていた。その後、久布白をはじめ、促進委員会の委員らも連日陳情や議会の傍聴などを行った。14 日に久布白は鳩山首相を訪ね、また、市川房枝からの希望で国会において署名取りを行っている。しかしながら、反対 191、賛成 142 で法案は否決となる。久布白（1955b:4）はその理由として「法案の不備」、「予算措置のない事」、「経済界の問題」の 3 つを挙げている。具体的には、個人売春に関する見解はまだ研究の余地があるということ、売春に従事する女性たちの保護救済更生の予算措置が伴っていないこと、赤線・青線区域への金融の問題である。

法案の否決を受け、売春禁止法制定促進委員会は次のような声明を出した。

今回の売春等処罰法は圧倒的与論の支持にも拘らず、これを故意に不成立に終わ

らしめ、婦人の期待を裏切ったことは国民の選良たる議員の良識を疑わざるを得ない。これは明らかに売春業者を擁護する立場を自ら暴露したものである。

われわれはそれらの議員がかくの如き態度をとるに至った原因を追求し、社会及び婦人選挙民、並びに売春禁止法制定促進委員会の参加団体にその真相を徹底せしめ、あくまでも所期の目標にむかって決意をあらたにし、強力なる運動を展開することを宣明する（売春禁止法制定促進委員会 1955:9）。

一方で、売春問題対策協議会の婦人委員として久布白、村岡、平林、山高は声明を発表している。

政府与党たる民主党は政府機関たる売春問題対策協議会を斥けて新たに審議会を設け、改めて立案を期する旨の決議を強行して法案を否決に追い込んだ。私どもは売春問題対策協議会の婦人委員として今日まで禁止法の立案に協力してきたが、不日答申が行われようとしている協議会案の内容はすべての売春を禁止しようとするものである。しかるにこれを活用せず新機関を設けようとする民主党の態度は真剣にこの問題を解決する意思のないものと認めざるを得ない。ゆえに私どもはあくまで協議会案の内容たる完全禁止の実現を期するとともに、新機関への婦人の参加の拒否を求めるものである。

この後、7月29日に反省会を開き、次の国会でさらに強力な運動を行うことにした。また、中央文化映画社が促進会と共同で売春に関する短編映画を作成したいと申し出、それについて検討し、制作を企画していくことになる。思想的な啓発が必要であると考えるのである。

1955年10月15日には売春禁止法制定のための署名運動と資金集めのための国民募金を開始する。「みんなの力で売春のない明るい日本を建設しましょう」をスローガンに一人10円のカンパを目標とし、20名署名の用紙2万枚を広げ、約190万円が集まった。

この頃、政府の売春問題対策協議会は売春問題連絡協議会<sup>5</sup>に改組される。会長は菅原通済（常盤山文庫理事長）、副会長は田辺繁子（東京都教育委員）で、神近市子、宮城タマヨらが委員となった。矯風会からは慈愛寮長であった福田勝が委員を務めた。

先の声明にもあったように、久布白はその委員を務めていない。売春防止法（仮称）要綱案並びに売春防止法（案）の施行に伴う行政措置要綱案が作成された。法律による取締を強化し、転落防止・保護更生対策を総合的に推進していくということであった。

## 第2節 売春防止法の制定

### 1 売春防止法制定までの活動

1956(昭和31)年に入ってから、久布白らはあらゆる方面に働きかけを行っていく。引き続き、政府や国会へ陳情を行い、マスコミの取材にも応じた。

売春問題連絡協議会は1956年3月には売春問題審議会となり、法律案の審議および売春対策全般に関する重要事項の調査に当たった。久布白はその婦人委員とも懇談した。4月に審議会の答申が終わり、売春禁止法制定促進委員会は衆参両院に要望書を提出している。久布白(1956b)は「法の全きを期するため」、「売春は国家的に禁止条項として之に対し、適當の措置」を加えること、即ち単純売春を罰すること（両罰）を要求していた。

しかしながら、「この法案については私共は、色々な意見を持って居りますが、売春を国から取り除こうとする実については同じ」（売春禁止法制定促進委員会 1956）と考え、答申の法案でいこうということになる。5月2日、第24国会に「売春防止法案」が提出され、15日に衆議院を通過し、18日に売春禁止法制定貫徹全国大会を開催する。その間に参議院の法務委員会を通過した。21日に参議院を通過し、24日に「売春防止法」が公布された。21日の売春防止法通過時には、久布白は議会を傍聴しており、その時について、のちに次のように振り返っている。

議場は静かであった。都合の悪い人びとは欠席したのであろう。とにかく定数は残って出席している。参議院では藤原道子代議士が、やおら演壇に立ち上がって、「延々八十五年にわたって戦いつづけられた売春公認も、いよいよ今日をもって撤回されるに至りました」と拍手のうちに語り終え、一同の賛成をもって幕を下ろしたのであった。ついに可決確定となった時のことは、今も忘れることはできない。二十二年間戦いつづけた未成年飲酒禁止法でも、この売春防止法でも、最後の幕を閉じた時は、至って静かなものだった（久布白 1973:289）。

## 2 売春防止法に対する久布白の評価

このようにして制定された売春防止法はどのようなものであったのだろうか。法は「第1章 総則（第1条から第4条）」、「第2章 刑事処分（第5条から第16条）」、「第3章 補導処分（第17条から第33条）」、「第4章 保護更生（第34条から第40条）」に分かれていた。その目的は第1条で「この法律は、売春が人としての尊厳を害し、性道德に反し、社会の善良の風俗をみだすものであることにかんがみ、売春を助長する行為等を処罰するとともに、性行又は環境に照して売春を行うおそれのある女子に対する補導処分及び保護更生の措置を講ずることによって、売春の防止を図ることを目的とする」と定められた。売春両罰にはならず、第3条で「何人も、売春をし、又はその相手方となつてはならない」と売春禁止が定められ、売春を行う目的で勧誘等を行った者（第5条）、売春の周旋をした者（第6条）は処罰されることとされた。また前借（第9条）、売春をさせる契約（第10条）、場所の提供（第11条）、売春をさせる業（第12条）、資金等の提供（第13条）の禁止も定められた。補導処分については、その処分に付された者は婦人補導院に収容し、更生のための指導を行うこと、処分の期間は6か月とされた。保護更生の部分では、都道府県において婦人相談所の設置義務（第34条）、婦人保護施設の設置（第36条）等について定められている。婦人相談所では「性行又は環境に照して売春を行うおそれのある女子（「要保護女子」）の相談、調査ならびに判定、指導、また、一時保護を行うこととされていた。

久布白（1956c:7）は「売春防止法が去る五月十五日、衆参両院を通過した事は、大きな喜びである。又感謝である。これによって我国に於いて、はじめて正面から売春が悪であると云う事が明示され、又この売春中の最大悪と云う可き、人身売買及び搾取の姿である赤線、青線が存在が禁止され誘拐、室提供、家提供、金提供が凡べて厳罰の対象となり、この国土に於いて公然たる存在たることを得ざることが、全国民の前に明になった事は、誠に画期的な前進であると信ずる」と『婦人新報』において喜びを表している。

『婦人と日本』では、「七十年来会が目指して居た売春防止法は通過を見て、国家も、国民も挙げて之を撲滅する可く、少なくとも其人身売買、搾取面に於ける所謂業者の公的存在は之を否認する時代となって来た。この際これが善後策に関しては誰か、真剣に当たらねばならない」、「我が国の四世紀に亘る売春肯定の生活が、我が国民、特

に我が女性に及ぼして居る影響は決して小さいものではない。この無神経にさえなつて居る、このきづなを切りほどいて我が国の女性に人格の自由、自尊、性の自主性を取り戻し真に人間として新しい時代に奉仕せしむる為には、この法律通過後の措置を全うせねばならない」(久布白 1956g:2)、「売春防止法はともかくも通過した、そして政府は雀の涙程でも予算を取り、婦人相談員を造ることに着手された。たとえどんな荒っぽい網でも張られないよりはよい。又如何に僅かでも全くしないよりはましである」(久布白 1956i:2)と記している。また、「ザル法とは云われながら、この売春防止法なるものは、少なくとも三重のかせを断ち切ったのだ。即ち、業者の手から金で娘を縛るきづな 親の手から娘を売って食物にするきづな 政府の手からこの奴隷を正業化するきづな この三重のきづなは真向から断ち切られたのだ」(久布白 1958d:2)と述べている。「荒っぽい網」や「ましである」という表現から、売春防止法の不完全さについて批判的な視点を持ちつつも、売春が悪であることが示されたということ、婦人相談員の設置等が定められたことについては評価している。また久布白は売春に従事する女性ではなく、人身売買を行う者、性的搾取を行う者を罰することに重点を置いているということが窺える。

また、売春防止法施行を前にして、「もみにもんだ売春防止法も、いよいよ四月一日で現実となって現れねばならない」(久布白 1958a:2)と述べており、転廃業の前途多難さを心配している。また、「廃業した娘の行く道は大体三通りだ、家に帰るか、結婚するか、仕事につくか、このいずれかに落ち着ければ上々である、これに落ち着く為めに先ず相談所へ来れば間違いがない、又各府県ではいよいよ県毎に施設の用意を始めた。(中略)・・・娘等はさきのいずれかに落ち付かぬとき、又落ち付くまでこの施設に暖かい居住を見出すことが出来る」(久布白 1958a:2)と述べている。売春防止法が制定されたため、婦人相談所や婦人保護施設に法的根拠もでき、これらを利用することが可能となった。そして久布白(1958a:2)は「国民の協力」の必要性を強調し、「業者といっても一県下では五、六百軒に過ぎない。この人々に正業を見出させる為めに各府県では全県民が少しずつ場所をあけて欲しい。従業婦と云っても、生れた時から売春婦は一人もない。これも県に別ければ三千人内外だ、この一人一人に、安住の場所と、出来る仕事を与えることに各府県の婦人団労働団事業主は力を貸してほしい」と訴えかけている。法律ができただけでは不十分であり、国民の理解や協力がなければ業者も売春女性たちも転廃業し、生活することができないことを主張している。ま

た、「更生の道をけわしくするのは、人々の白い眼だ、と云う事はだんだんわかって来て居ろう。中国などは殆ど娘は同志仲間に入れて仕舞ったらしい。我々もここ何年かの間には売春婦と云う言葉もなくして仕舞い度いものだ」(久布白 1958d:2) と述べている。売春に従事していた女性たちを差別することなく、同じ人間として捉えることが大切であると考えている。

### 3 売春女性たちの声—『接客女性』から—

さて、1956（昭和 31）年 1 月 12 日には東京都女子従業員組合が結成されている。売春女性たちの「生活権擁護」を銘打って結成されたが、久布白（1956a:44-45）は「今日の時代にこうした組合が日の目を浴びて堂々と結成されるという国は、世界中おそらく日本を除いて他に無いであろう」、「時代錯誤」であると記し、「男女の貞操なるものを、人格の上に置かず、家族制度の上に置いているところにその誤りの根元があるのではないか」と分析している。久布白（1956a:45）は組合の結成について「限なき遺憾と苦悩を感じ、だがこれをさせたのは彼等自身ではなく、全く業者らの策動であり、しかもそれを又支持、指導したのが二人の社会党員であるという事が明にされて来た。社会党がこの二人を除名する処置を取るとの事は当然すぎることである」と述べている。また、「何よりもかかる女性達が、深く反省自覚しなくてはならぬ事は、単なる個人の自由意志でなす売春といえども、凡そ女性がその肉体を商品として社会的に公示する時には、必ずや第三者の暴力的搾取の対象となり自らの人権を甚だしく傷つけられる危険があるという事である。要するに売春は社会的権利とはなり得ぬものであり、女性自らが敢てかかる権利を主張することは、自らの基本的人権を自ら放棄する結果となろう」（久布白 1955f:3）と述べたように、人権擁護や暴力防止の観点から売春の危険性を指摘している。

売春女性たちは矯風会等の婦人団体をどのように見ていたのだろうか。東京都女子従業員組合の機関紙『接客女性』の中で久布白の名前を管見の限り見出すことができないが、婦人団体について記したものから当事者の声を拾っていきたい。

婦人団体への希望として、「わが女子組合が日頃主張している通り、売春防止は、転落防止だ。転落防止に関する諸般の施策が徹底されない限り解決出来る問題ではない。婦人団体はよろしく『女子福祉法の研究』等に大きな役割を果す時期が熟していることを考えて欲しい」（無署名 1956a:3）と記している。また、売春防止法を批判し「三

年計画位のプランで、文化政策の面から売春問題に関する大啓蒙運動を起こし、国民に対する『性倫理教育』の徹底を図り、売淫の社会悪を根絶する国民運動を展開すべきであろう。それからでも法的措置はおそくはないのである」(無署名 1956b:1)と述べている。婦人団体を批判し、「更に私達が婦人団体に申し上げたいことは『転落防止』の国民的視野における大運動を、何故具体的に展開されないのかと云うことである。売春問題の解決は転落防止以外にはないのだ。取締りとか更生とか実に枝葉末節のことだ」(T 生 1956:1)と記されており、国民の意識改革と転落防止を二本柱として、売春問題の根本的な解決方法に言及している。戦前に久布白が示した「純潔日本の建設」には、既にこのようなことが示されていた。

久布白はこの機関紙を読んでいたのだろうか。確かに組合の結成も機関紙の発行も業者の操作であるという側面は否定できず、全てが当事者の真の意見であるとは言えないであろう。しかしながら、そのような制約があっても組合や機関紙は売春女性たちが意見表明をすることができる数少ない場であったのではないだろうか。業者の策動であるという先入観もあり、久布白自身にこういった機関紙等における売春女性の声に耳を傾ける姿勢はあまりなかったのではないかと思う。批判的な目を持ちつつも、売春女性たちの声に耳を傾け、問題の実態を把握することは、運動を行う者には不可欠であり、久布白にもそういう姿勢が必要であったのではないか。ここに運動家と当事者の乖離の問題が存在している。

#### 4 『婦人と日本』からみる久布白の売春観

久布白は『婦人と日本』で繰り返し、売春について論じている。個人誌であるという性格上、『婦人新報』と比べ、より彼女の個人の意見が反映されていると思われる。『婦人と日本』から彼女の売春観を読み取っていきいたい。特に売春防止法制定前後の1954年から1959年にかけて、「月間展望」というコーナーでほぼ毎月売春問題を取り扱っている。

「ここ(赤線区域)に行われる売春は、女性の貞操の搾取であり、人権の蹂躪であり、人身売買の奴隷市の公認であるからである。これはいやしくも男女平等の民主国家の女性として日本女性の人権と尊厳を世界の面前に護るものとして、絶対に廃止される様、挙って主張すべき点であろうと思う」(久布白 1954b:3)、「思うにこの運動の成否は、我国婦人参政の試金石の一つとなるであろう。徳川三百年の伝統を負う、婦

人の奴隷的金銭売買の遺習を今だに残す売春街—赤線区域の存続を許すということは、女性の人権無視の最たることを、全日本女性が黙認することであり、折角与えられた男女平等も、婦人参政も自ら放棄するに等しくなるからである。よろしくこの問題には、全日本女性が超党派的に目ざめ立上ることを望むものである」(久布白 1954c:3)と述べ、女性の人権擁護の視点から売春問題を論じている。また、「この際何よりもの急務は、売春を肯定する社会的環境の絶滅である。つまり国家黙認の公然たる売春市である赤線青線区域の撤廃でなくてはならぬ。つまり娼家経営なるものを最大の社会悪として刑罰の重点としなくては街娼私娼の取締は何の意義もなさぬ。次に売春の為の場所を提供する者を積極的に罰すべきである」(久布白 1954d:3)と述べている。

久布白(1955c:3)は「売春とは、女性の肉体の商品化でありこの最大の悪は、之を社会に公然と公示している市場の存在である。之を我が国では、女性のみならず男性の人権をも徹底的に無視して来た封建制度の遺習によって、何ら奇とすることなく今日に至っているのである。けだし今日の特飲業者の絶滅をはかることは、ある意味で我が伝統的社会習慣に対する革命的運動でもあるのであって、真に男女がお互いの人権を尊重し合う民主国家を確立するためには、是非とも克服しなければならぬ人権上の最低線でもあるのである」と述べている。封建制度によって女性だけではなく男性もまた人権を擁護されてこなかったという問題を指摘している。久布白はそのような視点を持っていたことが窺える記述である。「男性と女性がお互いの人権を本当に尊重し合う民主国家」という表現から、現在で言うところの男女共同参画社会の理念につながるものを見出すこともできる。また、「街娼等の淪落女性に対しては、成るべく行政的保護処分を取り、その人権を出来るだけ傷つけることなく、保護厚生を拓くべく施策を講ずべきであろう。この売春問題こそは、ややもすれば何人も真の社会悪と、単なる個人悪と混同して了う恐れのあるものである。法律は真の社会悪にこそ最も適切なものでなくてはならないと思う」(久布白 1955d:3)と述べている。ここからは久布白がどのような法律を目指したのかを窺うことができる。

久布白(1956h:3)は売春防止法成立後、かつては公娼制度が「我が国民の人権意識と民主精神の確立を阻んでいた大きな障壁だった」と批判し、法の制定を「真の民主的革命」と評価している。そして「公娼制度そのものは、我国の家族制度における女性の人権無視の精神が社会の最下層にしわ寄せられて出来上がっていたと言ってよいのである。今後われわれ国民は、今日女性の性的自主性を侵し搾取の対象とする売



春業なるものを、一つの犯罪として徹底的に憎み、又売春を肯定さすに至る社会習慣を克服してゆかなくてはならないであろう」(久布白 1956h:3)と述べている。憎むべきものは売春を行う女性ではなく、売春を肯定する社会である。久布白は運動の途上で赤松常子代議士と吉原の過去の娼婦たちの焼香に行ったことがあったが、彼女たちのことを「社会組織の犠牲者」(久布白 1955e:24)と捉えていた。

「凡そ売春は、女性の人格的性的自主性の放棄にはじまる。而してその最も甚だしきは、人身売買による、人身拘束、強制売春の形式であろう。…凡そ売春が、女性の正当なる生活方法でない以上、必ずそこに反社会的な弱点が生じる。この弱点を巧みに握んで、女性を搾取するのが売春業者である。これは公的売春営業が禁止された以後といえども、女性の売春には、必然につきまとう社会的暴力である。今日女性の個人的単純売春は罰せられぬとは云え、その裏には、無限の社会的犯罪的暴力が、つきまとう事を覚悟しなくてはなるまい」(久布白 1958b:3)。また、「如何に個人の売春は自由であるかに見えても、売春は女性が自らの人権を侵される最も危険な一線であることを、今一段と明確に啓蒙されてゆく事が望まれるのである」(久布白 1959b:3)と述べているように、自由に売春をやっている、好きでやっているのだと言う人がいたとしても(それらは本心であるとも限らないが)、絶えず様々な危険が付きまとうのは否定できない、これは現代でも同様である。

久布白(1958c:3)は「云うまでもなく今度の法律は、敢て売春そのものは罰せず、凡そ女性の肉体を商品化するあらゆる場面を罰している。これは我国社会における対女性意識の根本的革命を来すものであり、それには従来の女性の性的隷属性から女性が自らの性的自主性を強く意識しなかったならば、この法律の貫徹は期せられないであろう」と述べている。

久布白(1956f:2)は運動を進めるにつれ、売春の問題が「如何に婦人の凡有る問題に関係があり、即ち家族制度、家族計画、封建制度、国民道徳、其他経済問題、職業問題等々即ち国民生活の全般に渡るものであるか、更に戦によってまざまざと教えられた国際問題即ち進駐兵、混血児問題等凡ゆる問題に関連のあることが一日一日と明らかになって来た」と述べている。売春問題への取り組みを進める中で、視野を広げて売春問題を捉えていく必要性を認識するようになったのである。

久布白は、『思想の科学』のインタビューにおいて次のように述べている。

だから、昨年、あの法律の実施にこぎつけたのも、全く第一歩にすぎないんだ。ここまでするのに、こんなに時間がかかった。ほんとの仕事はこれから始まる。たしかにあんたのいうように貧困、家族制度、部落、米軍の駐屯など、厄介な問題は沢山ある。これからこういう問題を解決しなければならないが、とにかく売春は犯罪だ、というただ一つのことだけがわかるのところまで来たと思っているんです（永井 1959:7）。

久布白自身、法の制定がゴールではなく、スタート地点であるということは十分理解している。しかしながら、彼女は「法制の上で売春を認めてはならない。合法化させてはならない。売春業は職業ではないのである」（久布白 1973:310）という考えを持ち、この運動に取り組んでいた。そういう意味ではこの法の制定を一つの進歩であると捉え、一定の評価を与えていたのである。

### 第3節 売春防止法制定以後の活動

一億挙って世界奉仕に  
一人の娘も迷わせず  
一人の息子も不良とせず  
訓練された親心で  
家を、国を、世界を、守りましょう（久布白 1965:4-5）

売春防止法制定後、久布白は上のようなスローガンを掲げた。法が実施され、「昔の、家のため親のため実を苦海に沈めるという道徳は根底からくつがえされた」が、「法の遵奉、啓蒙、宣伝、環境浄化、更生保護、性生活指導、性病対策等々仕事は山積して居る」（久布白 1965:5）と記している。また、「母だけでは追い付かない。社会事業もまた実に父を必要とする。男女が挙ってこれに当らねばならない」（久布白 1965:5）と述べたように、男女が協力して取り組む必要性を説いている。

#### 1 1956 年の研究調査旅行

売春防止法制定後、1956（昭和 31）年 6 月 9 日から 7 月 30 日に久布白は「法的措

置」、「婦人更生措置」、「性病対策」、「性教育純潔教育」の研究調査のために外遊する。法務省、厚生省、文部省の3省から委託を受け、売春防止法通過後の各国の状況を視察し、ドイツ、イギリス、フランスの法的措置、アメリカの最近の動きや性病対策、また、スウェーデンの性教育などを調査している。ドイツでは第20回世界キリスト教婦人矯風会の大会に出席した。

帰国後の報告会において久布白（1956d:9-10）は「われらの中に売春婦という言葉削ってしまつて、一人もそういうことをすることのないように、健全なる社会の娘に引き戻さなければならない。業者も今まで何だかんだといて、彼女らを利用したようなことはないといわれぬ。しかし彼らもやはりすめらみ国の民であります。正しい健全なる生活に帰れるように社会はこれを助けなければならないと私は思う。それがもしも海外進出というようなことが始まるなら、これはほんとうに世界の苦しみであると思います」と述べている。

研究調査の報告書『五十年の歩みと五十日の旅』をまとめ、1956年11月に出版している。久布白（1956e:73）は世界を巡って、売春問題は「実に西も東もない、昔も今もない人類共通の大きな悩み大きな課題であると云う事だ。そして我等人類として、原水爆の破滅と戦うと同じ熱意と努力をもって全世界の売春解決、性道德の樹立に振り立たねばならぬと云う事である」と述べている。

1956年10月9日に売春防止法完全実施要求国民大会を開催し、売春禁止法制定促進委員会を売春対策国民協議会に改組する。久布白は引き続き、会長を務めることになる。

「昭和二十年八月十五日、我等は全く自力で三十五県まで廃娼を決議させまた実施させて居る。このあとをたどつて一県一県を処理してゆかねばならない。政府も民間も力を一にして、業者の立ち直りも本当に考えて欲しい。又所謂従来の延数何千万の『お客』なる人々に、新しい性生活の在り方も示されねばならない。否日本人の結婚其ものに、新しい有り方が齎されねばならない。問題は実にこれからである」（久布白1956i:2）と考え、法制定後も様々な取り組みを続けていくことになる。

## 2 中国との交流

1957（昭和32）年4月7日から5月17日に、久布白は訪中日本婦人代表团30人の団長として中国を訪問し、売春問題を解決する方法等について学ぶ機会を得ている。

久布白（1957b:2）は中国の売春撲滅で特筆すべきこととして「婦人団体の協力」を挙げ、「北京の場合、いよいよ発令と共に用意された教養所に連れてこられた娘等をなだめすかし、教え導き、これに心身共に安心感を与え、行く可き道を示して居るのは婦女連合会の人々である」と記している。滞在中の一日、久布白は婦人労働教養所を訪ねた。売春女性たちの入所する施設であり、仕事の指導、文字の教育などを女性工作人員が担当していた。中国を視察した久布白（1957e:2）は「売春問題の解決は政府が徹底的にやる気にならなければむづかしい、ということである。それと国民の協力とこの二つが絶対に必要である。日本の政府にその気があるかどうか、またこれから私たちがどうするかは大きな課題である」と述べている。翌年の桜の咲くころに日本に中国の女性を迎える約束をするが、費用等の関係から実現するのは1961年になる。

この視察については、新吉原女子保健組合機関紙『婦人新風』で「あきれた視察」と題して、次のように批判されている。「きくところによると久布白落実女史は（中共に於ける売春政策を実地に見て来て日本の参考に役に立てたい云々）と云って飛び立った。これはまことにおかしな話だ。自由主義国家群の一員である日本の売春問題をどうするか研究するためになにも共産主義国家の中共へ見学に行く手はなかろう。（中略）…どうせ行くならフランスかイタリーへ行くべきではなかろうか」（無署名 1957:2）と批判されており、その後も同様の批判記事が執筆されている。確かにここで指摘されているとおり、自由民主主義国である日本と共産主義国である中国には、国家体制の違いがあるのは明らかであり、中国の政策をそのまま日本に当てはめることは不可能である。しかしながら、先の引用のとおり、久布白は中国視察を通して、国を挙げての取り組みと国民の協力が必要であるという結論に達していた。

### 3 売春対策国民協議会における活動—機関誌『売春対策』（1957-1963）を中心に—

売春対策国民協議会は「売春防止法の完全実施を促すため中央及び地方のニュースを報道し、併せて全国各支部及び有志の皆様と緊密な連絡をはかるため」（久布白 1957d:1）、1957（昭和 32）年 5 月から機関紙『売春対策国民協議会会報』を発行することになった。1957 年 9 月以降は『売春対策』に改題し、発行している。本機関紙は『性暴力問題資料集成』第 23 巻に収録されている。協議会の活動や国の動きなどを毎月報告しており、久布白も記事や論考を多く執筆している。

売春防止法は完全施行まで時間があつたため、久布白は巻き返し運動を危惧してい

た。「女性の血と肉を売らせて其れで生活するのを職業と称すること、娘を売って親孝行と思ったり思わせたりすること、人買いを社会事業と間違えたりすること、こうした時代錯誤はこの度こそ法の前に一掃されねばならない」と主張し、「性が人生に於ける最も重要な、又悪用され易い問題である限り、又之れに利益が伴う限り巻き返し運動は名を変え姿をかえて起り来ることは当然予期せねばならない、之に備うることはこの問題を完成に導く唯一の道である」(久布白 1957c:2) と述べている。中には売春防止法制定が性病の蔓延や生活問題などの発生に影響を与えると主張し、売春防止法に反対する人も存在していた。それに対して久布白(1957a:3-4)は、性病については、「今後国民全体を対象としたものを全国的に更に徹底的に取上ぐる事は当然の行き方である。これが売春防止反対の理由にはなり得ないことは世界の良識の証明する処である」、生活問題については、「日本には生活保護法もある、有ゆる未亡人保護の道もある」と反論している。

1957 年は協議会として、婦人相談所や婦人保護施設の未設置県を訪問し、設置促進運動を展開した。久布白も佐賀県を訪問し、講演を行っている。矯風会と協議会の佐賀県支部で施設設置のための不足予算を集めて提供する計画を進めた。また、政府に対し、売春防止法を期日通り実施するよう要望し、官房長官の確約を得ている。法の全面実施にあたり、業者に対する補償・特別融資をしないように、また、売春汚職の徹底的な糾明を要望している。8 月の第三回母親大会の三日目の総会で久布白は議長を務め、売春防止法の完全実施を決議した。年末に久布白は、大蔵大臣を訪問し、売春対策の予算獲得のための協力を呼び掛けている。

1958 年 1 月 8 日に 1958 年度予算の原案が発表されたが、売春対策等経費は要求額 21 億 2,500 万円に対し、査定額は 3 億 800 万円であった。久布白らは岸首相と面会し、「大蔵省の原案は余りにもひどい。これでは、政府に法実施の熱意があるのかどうか疑わしくなる」(無署名 1958a:1) と述べ、首相の協力を要望した。首相から売春対策について熱意を持っており、最低限の予算確保をしたい旨の回答を得ている。この後、1 月 18 日に売春対策予算獲得緊急大会を開き、予算復活の要求を行った。最終的には 5 億 1100 万円を獲得できたが、不十分であるとして、1 月末に協議会として首相の政治責任を問う声明書を提出した。

久布白らは同年 2 月に東京の婦人相談所を訪問し、都内の団体から集めた 1 万 2 千もの品物を所長の手に渡した。売春対策予算の不足もあり、日用品まで手が回らない

状況であったが、「国や都の予算が少ないからといって、着のみ着のまま、赤線から放り出された不幸な婦人達を、そのままにしておくことは出来ない。彼女達の社会復帰にあたってせめて、小ざっぱりしたいでたちで迎え、おくりたい」（無署名 1958b:3）という趣旨から『売春対策』10号で日用品や衣類などを集めて送るための募集記事を出していた。

久布白は法の完全実施を前に、自分たちが出来ることについて次のように述べている。

一、各府県を各自守ること、国家の態度が幸に売春業を犯罪と認めたのだから、どの県でもこの業で衣食するものは存在させぬ事だ、これには警察の力を待つことが多い。否、絶対と云ってもよい。然し警察をはっきりと、いつもこの立場に立たせるのは与論の力である。この点先ず世論を守らねばならない。

二、従業婦の更生に万全を期さねばならない。病気を医すこと、精薄（ママ）等は別に永久的措置をすること、其他は家に帰すこと、結婚させること、仕事に就かせること、つまり一箇の女性に帰らせること。このためには各府県の相談員丈けではない。民生委員も保護司も、一般婦人団体も力を添えねばならない。施設の有り方も亦更めて見守らねばならない（久布白 1958e:2）。

売春女性たちについて、「然し何より必要な事は一般婦人がこの人々を受け入れる態勢である。たとえどんなに染み込んでいても、生れた時からの売春婦は一人もある筈がない。いずれも清浄無垢で生れてきたものであるから、これを私達の一人として受け入れることが最大の事業である」（久布白 1958g:39）と述べている。売春に従事していたからと言って、差別することなく、同じ人間として受け入れていくことが必要であると考えていた。後に『婦人新報』の久布白落実追悼号において、YWCAの植村環が次のようなエピソードを紹介している。

随分昔の事になる。或る能力のある婦人が矯風会で働く事になり、先生もその人を信用していらっしゃった。処が、私はその人の余り他人に知られない過去の醜い所業を知っていたので、「会が信用を落としては大変だ」と申し出たものだ。すると、先生は、「大切なものは前歴ではありません。現在と将来ではないでしょう

か」と言い切られた。私は、そういわれた先生に対して心中詠嘆のようなものを感じたのである。それこそは、主イエス・キリストの御思いに合っている考え方であると悟った（植村 1972:20）。

このように、久布白には人間の過去にとらわれない視点があった。

4月1日には売春防止法施行記念の講演と映画の会を開催している。5月にはメーデー行進に対して、「売春のない明るい社会、よい家庭を作りましょう」、「売春汚職のないきれいな政治にしましょう」、「更生婦人に温い手をさしのべましょう」という呼びかけを行い、久布白も参加している。7月の総選挙後には新内閣に対し、売春の総合対策に関する要望を行っている。

また、久布白（1958f:4）は婦人補導院の必要性について「女性を保護し外界のわなから守り、そうとう長い期間、その身体健康も回復させ、又技術なども身につけさせるためには、少しは堅固な設備の中でじっくりと保護指導するところも一カ所や二カ所はなければすむまいと思われるのであります。（中略）…つまり病人を扱うのに軽症もあり重症もありというわけで、特にこうした必要のある人々のために、できるだけよい環境を用意し、提供することは、私どもこの法の実施を求めた女性仲間としては、むしろ進んでなすべきではないでしょうか。要保護者を路傍に捨て、我が子の安全だけを守ろうとするのは、愚かな措置といわねばならないのではないのでしょうか」と記していた。婦人補導院は売春防止法第5条（勧誘等）の罪を犯し、執行猶予となつて併せて補導処分に付された満20歳以上の女子を収容する施設である。1958年5月に売春防止法と婦人補導院法制定に基づいて栃木刑務所の一部に栃木婦人寮として東京女子補導院の分院が発足した。1960年2月に東京八王子市に施設が完成している。

法の完全実施後、協議会として現状視察ともぐり売春絶滅運動に取り組んでいく。厚生省が各県に協議会のもぐり売春絶滅運動に協力し、啓発活動を行うように通達を出す。1958年10月の久布白の長崎市と佐世保市の講演会から始まった。年末には久布白らと有志の婦人議員で予算確保の懇談会を開催し、大蔵省に対して陳情を行った。1959年度予算の第1次査定額は昨年度より1億4千万削減され、3億8千6百万余りであった。その後、性病予防費用は削減されたままであったが、婦人相談員の手当の増額等は認められ、4億2千万円となった。しかしながら、1958年度を下回っていたのである。

1959 年は引き続き、もぐり売春絶滅運動に取り組んでいる。2 月に政府に対して要望書を提出している。第一に、第一線行政への指導と配慮として、婦人相談所の機構拡大、婦人相談員の身分保障、婦人保護施設を要保護女子の程度に応じて類別すること等を、第二に、法の改正については、単純売春の処罰、売春によって生活している者（ヒモなど）の処罰、第三に予算の増額を要望している。7 月には 1964 年のオリンピック開催に備えて要望書を提出している。また、関東及び近県の婦人相談員との懇談会を開催し、上記のような要望を行っている。8 月 31 日から 9 月 5 日にかけて久布白は福島県、宮城県において 9 回の講演会、座談会、懇談会を催している。青少年の性犯罪増についての話があったが、久布白（1959a:3）はこれに対して、「売春問題の最後の又最大の問題は即ち一般大衆である。特に青少年に関しては、従来性教育、純潔教育戦後なる者は、文部省でも逸早く取上げて審議会等もつくられたが、これは将来是非とも国策的に、性の衛生、倫理、純潔教育、男女交際、ひいては家族計画まで一貫した性生活の有り方が打ち立てられねばならない」と述べている。11 月、久布白は廃娼運動家伊藤秀吉とともに藍綬褒章を受賞した。その後、久布白を囲む会が開かれ、菅原通済（売春対策審議会）、藤原道子（国会議員）、松原一彦（厚生省売春対策審議会委員）らが出席している。厚生次官から「会議や陳情の際、いつも感じられるのは先生の気概である。一生をかけての仕事によって培われた気魄（気迫）である。一生をかけての仕事によって培われた気迫を尊いものに思う」（無署名 1959:2）という祝辞が送られ、久布白は「安田さんに祝辞をもらったのはうれしい。金がないとベソをかけた時安田さんが骨を折って下さった。これが今年だけに終わらないようにしていただけないものか。法ができて、十年くらい根がためをしないと折角の法が倒されてしまう」（無署名 1959:2）と述べている。この頃、売春対策審議会の菅原、松原、久保田から東京や高知で実施されている芸妓登録制を勧奨するよう要望書が出されているが、12 月 7 日付で久布白ら協議会としては売春肯定につながりうるとして芸妓登録制については慎重を期せられたい旨の要望書を提出した。

1960 年度の売春対策予算確保のための運動も行われたが、最終的に 4 億 1 千 33 万 9 千円で昨年度より 7 千万円余り削減された。1960 年初めに、久布白は売春防止法根固め運動の第 2 年の問題点として次のような四点を挙げている。第一に「法的に問題はないか—もぐりの問題、ひもの問題、暴力と結託の問題、旅館、バー、トルコ風呂等の問題」、第二に「保護、取締りに問題はないか—街に女性の姿の絶えぬ事、施設の



完全利用の問題」、第三に「更生施設の設備拡充の問題—精薄（ママ）、知能低劣者（ママ）のあつかい、一般社会に復帰し易くする道」、第四に「国際的な問題—これは一国の問題でない全世界の問題だ、特に基地の問題、国際的売春業者の連絡」（久布白 1960:1）である。また、3 月には久布白らが法改正の要求事項を婦人議員の会合で説明している。その内容は相手方を処罰するよう罰則の拡大、ヒモなどの取締強化、婦人相談所長の権限強化、婦人補導院の入所期間の延長等であった。5 月には売春防止法制定 4 周年記念集会が開かれている。久布白は 10 年の根固め運動の必要性和オリンピックを迎えるまでには恥のない国にしたいということを力説した。8 月に厚生大臣を訪問し久布白や福田勝らはコロニー建設を要望している。

1961 年に売春防止法制定五周年を迎えて、久布白（1961a:1）は「ザル法でも何でも、法ができたのはよかった。これで我が国民は始めて売春は悪だ、犯罪だということを合点した。人の娘を金で縛る、そして売春させることは悪だ、犯罪だということを合点した。ただこの二つがわかっただけでも、この法は立法する価値があると信ずる」と述べた。残るのはあと始末であり、「ホテル問題、コールガール問題、マッサージ、風呂屋、ガイド、曰く何、曰く何と、もぐりの数々、また高級な売春稼業の生態なども捨てるのができないのが今日の状態である」（久布白 1961a:1）と指摘している。既に売春の形態が多様化し、問題となっていたのである。そして久布白（1961a:1）は今後「国民の性生活の健全化」が必要であり、具体策として定員に満たないような施設を「勤労女性の家となし、授産、授職、一般婦人も協力共用できる場所とすること」、「性教育—純潔教育—家族計画、この三つを一貫して、性生活のあり方を国民の常識として一般に与える用意を文部省としてすべきではないか」と述べた。売春女性だけではなく、その他の女性にも対象を広げ、施設の有効活用を行うこと、また、性教育の必要性を説いている。

売春防止法が制定されて、娘売り、身売り、人買いは犯罪となり、久布白（1961b:1）は「売春防止法の第一要項は、女を人間と考えるという点にある」と述べている。

1962 年 4 月の矯風会全国大会（於：軽井沢）で久布白は矯風会会頭に就任している。1971 年に辞任し、名誉会頭に就任するまでの 9 年間、矯風会会頭を務めることになる。

協議会の活動として、1962 年に「売春のない日本をつくりましょう」というパンフレットを作成している。3 月には厚生省、警察庁、内閣に対して「トルコ風呂（ママ）の取締りについての要望書」を提出している。それ以前から「トルコ風呂（ママ）」に

については紙面で取り上げていた。4 月には警察庁、法務省、警視庁に対して「売春事犯取締り強化についての要望書」を提出し、都知事に対して、売春対策の見地から東京オリンピック開催の延期か辞退を要望している。「売春をなくす運動」を政府と共に 5 月 24 日から実施する予定であったが、中止になった。5 月 24 日付で、協議会は政府に対し、中止についての意見を求め、各政党に対して、「売春対策の見地から公認候補の厳選」を要望した。また、厚生大臣に「コロニー建設についての要望書」を提出している。9 月に自民党の広報委員長の小泉が赤線復活論を唱えたことに対して、久布白（1962:1）は「逆コースもはなはだしく言語道断」と批判し、抗議を行った。

1963 年、久布白は売春防止法制定 7 年を迎え、法について次のように記している。

現在の売春防止法は、その極悪の面だけを明示し、あとの部分は、これを男女の道德律として残している。（中略）…自分は思う。法はいちおう、あれでよい。売春の極悪面である管理売春が犯罪だという、一つの真理だけでもひとまず打ち立てられたことは、民主国家としてのテコ入れである。これは絶対に動かすべきではない、その上で、男性も女性も、はっきり人間という立場に立って、恐れず騒がず、法の改正をやるべきだと（久布白 1963:1）。

さて、1965 年 11 月に売春対策国民協議会は社団法人売春対策国民協会となる。久布白は死去するまで、会長を務めている。久布白の死後、1973 年 1 月に「売春問題ととりくむ会」となり、現在も「売買春問題ととりくむ会」として存続している。

売春防止法制定 10 周年を迎えた 1966 年、久布白（1966a:5）は「現在我等が持つこの売春防止法を、何としてでも更に十ヶ年守り通したい。守り通そうと決心している一人である。法を守ることと、他方国民に対する性生活のあり方の指示とが、この問題を解決する道であると信じてそれに邁進するものである」と決意を新たにしている。「売防法は何と言っても我国に於いては道德法と言わねばならない。（中略）…性生活規制法は、法よりも教育が必要と思われる。性教育、純潔教育、家族計画を一貫する徹底した国民教育を樹立することが目下の緊急事」（久布白 1966b:1）と述べる。また、慈愛寮長として婦人保護に携わっていた福田勝（1966:5）は当時マスコミで、赤線復活などがテーマとして取り上げられていたことをふまえ、「赤線復活に賛成する

女性が居たとしたらそれは我が夫、我が子がそこを利用する事を肯定する女である事を先ず認識しなければならない。我が娘がその様な業につく事を考えただけで生きる心地はしないであろう。他人の娘も同じ人間である。自分に縁のないこととしてこの問題に無関心であってはならない」と指摘している。売春問題を自分に関係する問題として捉える必要性について説いている。

法制定の10周年の記念行事として5月24日午前に政府主催の売春防止法制定10周年記念式典、午後に民間団体主催の売春防止法制定10周年記念全国集会が開かれている。政府主催の式典では久布白、菅原通済、田辺繁子に首相から感謝状と記念品が贈られている。

#### 4 久布白と婦人保護事業

矯風会と婦人保護事業は深い関わりを持っており、久布白は婦人保護事業の重要性を早くから認識していたものの、寮生の指導など直接的な婦人保護事業にはあまり関わりを持っていなかった。戦前は守屋東が中心に事業に関わっていたが、久布白は1931（昭和6）年から婦人ホームの理事長を務めていた。また、戦後、慈愛寮では福田勝が寮長を務め、寮生の指導にあたっていたが、1954年から死去するまで、久布白が慈愛寮の理事長を務めていた。久布白は直接的援助には携わっていなかったが、理事長としての役割を果たす中で、どのような援助観を持っていたのか、彼女の論考から考えてみたいと思う。

売春防止法制定後、婦人保護施設が設置されていたが、当時の施設では出産すれば子どもは乳児院に入れなければならなかった。柿澤路得子によると、「子供との別れは女性にとって非常に厳しいことだし、新しい生活を築こうとする意欲をはばむ辛いことだから、ぜひ妊産婦を預かれる所を作って欲しいと、強く都に要請したのです。そして当時の理事長久布白先生の英断で、慈愛寮がそれを引き受けました」（間野1998:208）ということである。1959年度から収容分類基準が導入され、慈愛寮には単身の女性、通勤可能者が入所していたが、1965年度から東京都より母子の一時保護の委託を受けている。1967年度からは妊産婦専門の婦人保護施設となっている。このような新しい取り組みを行うことはリスクもあり、勇気の要ることであるが、久布白自身、その時々に必要な仕事を行う姿勢があったため、実現したのであろう。

1958年6月、久布白は売春問題対策協議会のメンバーと共に婦人保護施設いずみ寮

(社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家)<sup>6</sup>の見学に行った。久布白と寮生が会話をする中で、その中の一人が「自分たちがここを出てから、世の荒波にもまれ、再びくじける事のないように、自分達の力で生産し、そして生きていけるような部落—コロニーがほしい—ここを出てからの事が一番不安です」(無署名 1958c:3)と述べた。それに対し、久布白は「他人の助けを待っていてもだめだ、一人一人が、一円でも十円でも出し合って自分たちの希望を実現する“種”をつくらなくてはいけない。今日私が、その“種のタネ”を置いていきましょう」(無署名 1958c:3)と述べたという。「他人の助けを待つ」だけではなく、「一人一人が…自分たちの希望を実現する」というところから当事者の力を引き出そうとした久布白の姿勢が窺える。この会話を交わした寮生はのちに城田すず子という名で『マリヤの讃歌』という手記を出版している。彼女は売春の経験から慈愛寮を経ていずみ寮に入所していたが、慈愛寮時代に久布白の家庭集会に出席した経験があった。彼女の手記の中でこのいずみ寮のエピソードが記されている。当時のいずみ寮の寮長であった深津文雄もアフターケアに力を入れたいと話していた。これは後に、「かにた婦人の村」<sup>7</sup>建設につながっていく。

また久布白(1961c:29)は『月刊キリスト』のインタビューで「更生はむずかしいですが、人間というものは寝るところがあり、食うものがあって、愛する人があれば、悪くはない。善になるのは本筋ですよ。ですからそうやってどんどん変わっていきます」と述べている。久布白は女性たちが経済的に保障され、安定した生活を営み、そして安心できる家庭(もしくは人間関係)を築くことが出来れば、売春に従事する必要はなくなるということを言いたかったのではないだろうか。

## 第4節 晩年の久布白

### 1 久布白とキリスト教—日本基督教団の正教師として—

牧師の家庭で育ち、またミッションスクールに通った経験を持つ久布白の生涯において、キリスト教は核となるものであった。また、20代のアメリカ滞在時には太平洋神学校に通い、B.D. (Bachelor of Divinity: 神学士)の学位も得ていたのである。牧師・久布白直勝の妻としての働きもあった。1966(昭和41)年、83歳で日本基督教団の正教師の試験に合格し、その後、東京都民教会の牧師を務めている。

『婦人と日本』24号から86号(1953年から1961年)で「食物としての聖書」(全52回)を連載している。聖書を食物に例えており、「この食物、『めし』の味は日々新

しい、鮮な生命を日々我身に供給してくれる」(久布白 1953c:18) と述べている。連載で聖書の様々な箇所を解説をしていく。また 1971 年に『日々の食物』という書物を出版している。元旦の 1 月 1 日から大晦日の 12 月 31 日までの 365 日、一日一日、聖書の箇所とその解説を書いている。久布白は 20 代からこれを書き始めていたというが、自身でこの書物を「内村鑑三先生の『一日一生』が牛肉の缶詰なれば、これはかぶと油揚げの煮しめ」(久布白 1971:297) と記している。現在でも婦人保護施設慈愛寮で用いられている。

## 2 晩年の論考を中心に

久布白は 1965 年から 1967 年の『婦人新報』に 22 回にわたって、「売春防止法の出来るまで」、1967 年から 1969 年に 30 回にわたって、「自伝」を執筆している。これはのちに『廃娼ひとすじ』の柱となった。「売春防止法の出来るまで」の最終回では、売春問題について、「この問題は実際根が深く、特に本能と貧乏とがからむので決して簡単にすむことではない」、また「法は道を示す。しかしこれに歩むには光が必要で、教育は光である」(久布白 1967:19) と記している。売春防止法を守り続けるには、教育が必要であるということを繰り返し訴えていく。また、久布白(1968:10)は「(売春防止)法は一応守られているが、トルコ風呂(ママ)、連れ込み宿、タクシー、其他のチラシ等々中々問題は決してなくなっていない。法は遵法と共に、更に改正の必要もあるのではないか」と述べている。

久布白は当時の矯風会の三大目標であった「平和」「純潔」「禁酒」について、次のように記している。

今我らが当面している問題も、けっして生やさしいものではない。酒の問題でも、売春、更に性の問題でも、はた又平和の問題でも、逐一問題は精密化し、複雑化し、精巧化して、過去の大ざっぱな手法では処理しきれないものばかりである。しかし現代には現代の道がある。それぞれの方法によって処理せらるべきである。酒に関しては、時代がどれだけ進んでも、これが神経系統をはじめ、内臓、身体に及ぼす害毒は、不変である。しかもその魅力は、決して減少していないことは、交通事故だけを見ても明らかである。このことに関する戦いは、人類の生命の続く限り、続けねばならない。性の問題も同様である。売防法は出来ても売春の事

実はむしろ地下水の如く広がってはいないか。性の紊乱は至る処で大問題を起こしているのではないか。それはやがて家庭の破壊となって、人類の苦悩を一層深いものにしようとして居りはせぬか。平和も同様だ。全世界、戦争を否定しながら、今日ほど人類全滅の危機が我らの上に蔽いかぶさっている時はないではないか（久布白 1969:5）。

久布白は時代の変化に伴い、平和、性、酒の問題が複雑化するものであると考えており、時代に応じた取り組みの必要性を主張している。

### 3 久布白の最後の活動

1968（昭和 43）年に第 24 回矯風会世界大会を日本で開催し、久布白はその主催者を務めている。1971 年に矯風会会頭を辞してから、第 25 回世界大会（於：シカゴ）に出席し、その後ブラジルを訪れている。

高橋（1972）によると、久布白が出席した最後の外部の集会は 1972 年 5 月 12 日の「沖縄の売春問題ととりくむ会」であった。同年 3 月初めに、当時の参議院議員田中寿美子らが沖縄婦人問題調査団として沖縄を訪問、前借金問題等、本土復帰前に解決を要する問題が多くあることがわかった。その後、衆参両院の婦人議員や市川房枝らを個人加盟とし、婦人会議、矯風会、救世軍、全国婦人相談研究会、全織同盟、日本民主婦人の会、有権者同盟、全地婦連、全国婦人保護施設連合会、婦人問題懇話会、婦人民主クラブ、沖縄県人会、売春対策国民協議会の団体が加盟し、4 月 11 日に「沖縄の売春問題ととりくむ会」が発足し、矯風会に事務局を置いた。政府に対して要望活動も行った。5 月 12 日の集会で久布白は売春対策国民協議会会長として「この問題は根深い。気を永くして之に沖縄も本土もととりくもう」（高橋 1972:40）と挨拶した。5 月 18 日に東京婦人補導院で講演、同月 24、25 日に松山で開催された矯風会全国評議員会に出席している。9 月には東北部会の要請に応じて講演に行った。「総会での二回に亘る講演は、私共に生命の尊さを教え、産児制限より計画産児の必要を説かれました」（高橋 1972:41）と記されている。久布白は最後まで性教育を重要視していたのである。

『婦人新報』掲載の最後の論考は、1972 年 8 月号の「未成年者飲酒禁止法施行五十年 こういう人は死なない」であった。未成年者飲酒禁止法施行 50 周年を記念して

の論考である。また、外部に寄稿した最後の論考は「我が国の公娼制度と婦人矯風会」であり、1973年に、東京都民生局婦人部福祉課が出版した『東京都の婦人保護』に収録されている。この論考で久布白は矯風会の1886年から1956年までの70年間の歩み、請願運動、直接的な廃娼運動について記している。

久布白は矯風会会頭を辞した後も、最後まで「神が主宰者の『天下清掃株式会社』」（久布白 1973:311）で働き続け、1972年10月22日に89歳で永眠した。久布白の死後、矯風会では『婦人新報 久布白落実追悼号』を発行、1年後の『婦人新報』で「久布白先生召天一周年を迎えて」という特集を組み、1982年に久布白落実十周年記念文集『真実とユーモア』を発行している。

## 小括

久布白の売春防止法制定をめぐる運動はどのように評価されているのだろうか。売春防止法制定前後、婦人議員として活躍した藤原道子<sup>8</sup>（1972:22）は「売春防止は難産でした。業者の激しい抵抗はもとより、一般男性の無理解とも戦わねばなりませんでした。国会に於いてさえも男性議員の理解を得るのに長い期間を要しました。婦人議員の超党派の努力も去ることながら、院外で久布白先生を先頭とした婦人たちの、息の長い運動が、ついに国会全体の流れを変えたのです」と述べている。また、永井（1959:7）は『思想の科学』で久布白へのインタビューを終えて「久布白さんのいうとおり、売春の禁止はいまだに多くの場所で、事実上は実現していない。ただ法律の上で犯罪に決まっただけのことだ。けれども、だからといって社会的条件の分析や変革にまで乗り出さない久布白女史や矯風会は甘いというのはあまりにもあさはかである。ここまでくるのにも、久布白女史がいうように単純で、無知な根気のよい一念が必要だった。どこの社会にも、利口者よりはるかに力強いこの馬鹿の一念が乏しい」と記している。国会議員だけではなく、久布白ら民間の婦人運動家の根気のある運動が不完全な形であれ、売春防止法という形となったのは事実であろう。また、久布白にとって売春防止法制定は一つの目標ではあったが、ゴールではなかった。法制定後も政府の動きを監視し続け、要望活動を積極的に行っている。久布白はその人生の終わりまで、遵法、環境の浄化や性教育に取り組んでいった。

久布白はその論考において売春女性ではなく、「売春を肯定する社会的環境」や「社会習慣」を繰り返し批判し続けていた。また、久布白は性を人権や人格と結びつけて捉えており、たとえ自由売春であっても、たえず暴力や人権侵害がつきまとうという

ことを危惧していた。それは現代の売春にも当てはまることであろう。しかしながら、人権という視点を提示しながらも、彼女の中にも内なる偏見や差別観が存在していたことは否定できない。「私たちにすれば殺すなかれ、盗むなかれ、姦淫するなかれ、これは悪だということを子供のころからたたきこまれてますから、売春が悪だということは明々白々の事実なんです。それなのに売春婦たちが、どうして職業の自由ということから、自らの職業を正しいと云っているのか、私たちには分らないところなんですがね」(神近編 1956:91)と発言している。キリスト教的な価値観で育った久布白にとっては、「自らの職業を正しい」と言う、売春女性たちを真に理解することは難しかったのではないかと思う。また、売春女性たちの「正しい」という言葉の背景にあるものを汲み取ることもできなかったのではないか。すべての運動や援助に携わる者は自らの内なる偏見や差別観を吟味し、それらを自覚する必要がある。久布白の取り組みは現代に生きる私たちにそのことを気づかせてくれる。

## (第10章 文献)

売春禁止期成全国婦人大会 (1954)『決議文 (案)』(日本キリスト教婦人矯風会資料 (売春防止法関係) 売春禁止法制定促進委員会・印刷物総括 (正)・昭和 29・30・31 年 6 月)

売春禁止法制定促進委員会 (1955)「売春処罰法上程までの経過」『婦人新報』659,5-9.

売春禁止法制定促進委員会 (1953)「売春禁止法制定促進委員会活動史料」(日本キリスト教婦人矯風会資料 (売春防止法関係) 勅令九号及売春法関係書類:一九五二、五三:1953 春)

売春禁止法制定促進委員会 (1956)「要望書」(日本キリスト教婦人矯風会資料 (売春防止法関係) 売春禁止法制定促進委員会・印刷物総括 (正)・昭和 29・30・31 年 6 月)

売春禁止法制定促進関東大会 (1955)「大会宣言 (案)」(日本キリスト教婦人矯風会資料 (売春防止法関係) 売春禁止法制定促進委員会・印刷物総括 (正)・昭和 29・30・31 年 6 月)

売春問題対策協議会婦人委員 (1955)「新機関へ参加拒否 協議会の婦人委員声明」『婦人新報』659,9.

売春対策審議会 (1968)『売春対策の現況』大蔵省印刷局.



- 藤原道子（1972）「情熱は益々強く」『婦人新報 久布白落実追悼号』 22.
- 福田勝（1966）「売春防止法十周年を迎えて」『婦人新報』 788,4-5.
- 伊藤秀吉（1953）『売春のない日本に』 社会教育協会.
- 神近市子編（1956）『サヨナラ人間売買』 現代社.
- 久布白落実（1953a）「売春禁止法に至るまで」『婦人と日本』 19,3-6,11.
- 久布白落実（1953b）「秋に憶う」『婦人と日本』 24,2.
- 久布白落実（1953c）「随筆 食物としての聖書 めし（1）」『婦人と日本』 24,18.
- 久布白落実（1953d）「送り迎ふる年の瀬に立ちて」『婦人と日本』 27,2.
- 久布白落実（1954a）「売春禁止法はどうなって居るか」『婦人新報』 646,11-12.
- 久布白落実（1954b）「月間展望」『婦人と日本』 28,3.
- 久布白落実（1954c）「月間展望」『婦人と日本』 29,3.
- 久布白落実（1954d）「月間展望」『婦人と日本』 31,3.
- 久布白落実（1955a）「この春の東京」『婦人新報』 655,3-4.
- 久布白落実（1955b）「我等は敗れたか」『婦人新報』 659,3-4.
- 久布白落実（1955c）「月間展望」『婦人と日本』 42,3.
- 久布白落実（1955d）「月間展望」『婦人と日本』 43,3.
- 久布白落実（1955e）「私の日記」『婦人と日本』 46, 24.
- 久布白落実（1955f）「月間展望」『婦人と日本』 47,3.
- 久布白落実（1955g）「八十年も通らぬ法案 その名は売春等処罰法」『政界往来』  
21( 9),126-131.
- 久布白落実（1956a）「売春問題は一たいどうしたらよいのだろう」『開拓者』 51 (2),  
37-45.
- 久布白落実（1956b）「要望書」（日本キリスト教婦人矯風会資料（売春防止法関係）  
売春禁止法制定促進委員会・印刷物総括（正）・昭和 29・30・31 年 6 月）請求記  
号 13:8-37
- 久布白落実（1956c）「売春防止法の通過に当りて」『婦人新報』 669,7-10.
- 久布白落実（1956d）「欧米より帰りて（売春状態実地報告）」（万国基督教婦人矯風会  
第二十回大会報告講演会」での講演速記）.
- 久布白落実（1956e）『五十年の歩みと五十日の旅』.
- 久布白落実（1956f）「婦人と日本第五十号を迎えて」『婦人と日本』 50,2.

- 久布白落実（1956g）「出発に際して」『婦人と日本』 51,2.
- 久布白落実（1956h）「月間展望」『婦人と日本』 51,3,
- 久布白落実（1956i）「社説 1956 年を送る」『婦人と日本』 55,2.
- 久布白落実（1957a）「売春防止法実現への大道」『婦人新報』 684,3-4.
- 久布白落実（1957b）「売春問題と国民の覚悟」『婦人と日本』 60,2.
- 久布白落実（1957c）「売春法のまき返し運動」『婦人と日本』 62,2.
- 久布白落実（1957d）「発刊の辞」『売春対策国民協議会機関紙 会報』 1,1.
- 久布白落実（1957e）「本協議会関係 訪中婦人代表帰国報告」『売春対策国民協議会  
機関紙 会報』 2,2.
- 久布白落実（1958a）「売春防止法完全実施へ」『婦人と日本』 66,2.
- 久布白落実（1958b）「月間展望」『婦人と日本』 66,3.
- 久布白落実（1958c）「月間展望」『婦人と日本』 67,3.
- 久布白落実（1958d）「婦人と日本第七十号」『婦人と日本』 70,2.
- 久布白落実（1958e）「売春対策の今後」『売春対策』 11,2.
- 久布白落実（1958f）「婦人補導院に関して」『売春対策』 19,4.
- 久布白落実（1958g）「売春防止法はどうなる—国民の立場よりその行方を見守る—」  
『警察時報』 13(4),38-41.
- 久布白落実（1959a）「月間展望」『婦人と日本』 77,3.
- 久布白落実（1959b）「売春防止法根堅め運動 福島・宮城のもつ問題 青少年の性犯  
罪・芸者問題など」『売春対策』 30,3.
- 久布白落実（1960）「売春防止法根堅め運動の第二年」『売春対策』 34,1.
- 久布白落実（1961a）「売春防止法制定五周年を迎えて」『売春対策』 49,1.
- 久布白落実（1961b）「売春防止法を眺めて」『売春対策』 54,1.
- 久布白落実（1961c）「＜わが信仰の生涯＞売春禁止法を通すまで」『月刊キリスト』  
13(3),22-29.
- 久布白落実（1962）「売春防止法はゆきすぎではない—小泉純也氏に問う—」『売春対  
策』 62,1.
- 久布白落実（1963）「売春の根絶やしにさらに一步をすすめよう」『売春対策』 71,1.
- 久布白落実（1965）「一億挙って世界奉仕へ」『婦人新報』 775,4-5.
- 久布白落実（1966a）「売春防止法十周年に思う」『婦人新報』 786,4-5.

- 久布白落実（1966b）「売春防止法制定十周年に当りて」『月刊婦人展望』141,1.
- 久布白落実（1967）「売春防止法の出来るまで（二十二）」『婦人新報』797,18-19.
- 久布白落実（1968）「〈純潔部〉待望の世界大会と純潔運動」『婦人新報』810,10.
- 久布白落実（1969）「人生とは何と素晴らしいものだろう！」『婦人新報』825,4-5.
- 久布白落実（1971）『日々の食物』久布白記念出版会.
- 久布白落実（1972）「未成年者飲酒禁止法施行五十周年　こういう人は死なない」  
『婦人新報』862,26-27.
- 久布白落実（1973）『廃娼ひとすじ』中央公論社.
- 間野絢子（1998）『白いリボン　矢嶋楯子と共に歩む人たち』日本基督教団出版局.
- 無署名（1956a）「単純売春とは」『接客女性』1,3.
- 無署名（1956b）「女子組合は売春の絶滅を期している」『接客女性』2,1.
- 無署名（1957）「あきれた視察」『婦人新風』52,2.
- 無署名（1958a）「政府の法実施の熱意を疑う―本協議会、岸総理に陳情―」『売春対策』9,1.
- 無署名（1958b）「更生する婦人たちを助けよう―婦人団体一万二千点の物資持ちよる―」『売春対策』10,3.
- 無署名（1958c）「“いづみ寮”見学記」『売春対策』14,3.
- 無署名（1959）「売春禁止の根固めへ　藍綬受賞の久布白先生を囲み」『売春対策』32,2.
- 永井道雄（1959）「生活と信条　久布白落実会見記」『思想の科学』5,4-7.
- 高橋喜久江（1972）「最後の活動」『婦人新報　久布白落実追悼号』40-41.
- T 生（1956）「婦人団体へ警告する」『接客女性』3,1.
- 植村環（1972）「久布白落実先生を思う」『婦人新報　久布白落実追悼号』20.
- 全国婦人福祉施設連合会（1955）『法案否決後の促進会の動き』（日本キリスト教婦人矯風会資料（売春防止法関係）売春禁止法制定促進委員会・印刷物総括（正）・昭和29・30・31年6月）

---

## （第10章 注）

- <sup>1</sup> 「独立国家として出発したわが国の健全な発展のためには、人格が重んぜられ、人権を基礎とする民主的政策が採られなければなりません。売春問題は今や極限に達し、このままに放置すれば日本は売春国として滅び去る運命にあります。売春禁止

---

法制定促進委員会はここに売春を『社会上止む得ざる悪』とする通念を打破し、女性の純潔を守り、健全な社会をめざして立ち上がったものであります。売春を婦女子に強いてこれを搾取する悪徳業者を撲滅し、これら婦女子を守るような政治が行なわれなければなりません。私共は早急に売春禁止法の制定を期し大いに与論を喚起し、これを全国民の運動にまで推進し、この法令の実現に邁進するものであります」(売春禁止法制定促進委員会 1953)。

- <sup>2</sup> 最終的には、売春禁止法制定促進委員会に以下の 33 団体が加盟していた。

全国地域婦人団体連絡協議会、日本基督教女子青年会、日本キリスト教婦人矯風会、くらしの会、全国繊維産業労働組合、全国社会福祉協議会、全国婦人福祉施設連合会、国民純潔同盟、婦人問題研究会、日本青年団協議会、日本社会党婦人部、救世軍、全国友の会、日本婦人平和協会、日本基督教協議会、太田婦人会、渋谷婦人会、大学婦人協会、婦人人権擁護同盟、市川市婦人団体協議会、家庭向上会、全国日本仏教婦人連盟、社会教育協会、婦人民主クラブ、子供を守る会、全日本婦人団体連合会、全国農協婦人団体連絡協議会、婦人有権者同盟、総評婦人協議会、国鉄労働組合婦人部、日本教職員組合婦人部、全国日本国立医療労働組合婦人部、全国電気通信労働組合婦人部

- <sup>3</sup> 売春問題対策協議会設置要綱

一 売春問題対策協議会(以下「協議会」という。)を内閣に設け、その庶務は、法務省において処理する。

二 協議会は、法令に基く機関ではなく、閣議了解に基く事実上の協議機関とする。

三 協議会は、売春行為等の防止及びその取締並びに売春婦の更生保護等売春に関する諸般の問題を検討し、これに関する立法その他総合的根本対策を協議する。

四 協議会は、売春問題に関し、内閣総理大臣その他関係行政各機関に対し、意見を述べることができる。

五 協議会の委員は、十五名以内(有識者八名以内、関係行政機関の職員七名以内)とし、内閣総理大臣において委嘱する。

六 協議会に会長及び副会長各一名を置き、委員の互選によってこれを定める。

七 協議会に幹事若干名をおく(売春対策審議会 1968 : 392)。

- <sup>4</sup> 伊藤(1953 : 277-288)による集娼廃止善後策 32 か条は次のようなものである。

善後措置五大原則

- 
- 第一 淫行の売買は凡てこれを禁止する
- 第二 妓楼を禁止する
- 第三 売春の指定地区を認めない
- 第四 売春の媒介勧誘周旋その他便宜を供する者及搾取する者を厳罰に付する
- 第五 婦女に売春をさせる目的で行う一切の契約及び金銭貸借を禁ずる
- 売春取締六則
- 第六 常習売春犯を司法保護処分に付す
- 第七 公衆衛生上の定期的健診制度は廃止する
- 第八 司法処分監視婦人の居住について
- 第九 監視処分婦人の屋内における監督
- 第十 監視処分婦人の屋外における監督
- 第十一 累犯者を感化院に収容すること
- 性病予防三則
- 第十二 人口三万以上の都市には一個以上の国立または公立無料診療所を設ける。  
そして進んで強制診療制を採ること
- 第十三 性病予防法取締を強化し、特に患者の接客禁止を強化すること
- 第十四 性病に関する知識の普及に努め、性病予防運動を行うこと
- 売春防護九則
- 第十五 児童福祉法に親権者所罰規定を設けること
- 第十六 防貧救護に関する政策の実行
- 第十七 民生委員、社会福祉制度を完備し、予防相談に実を挙ぐること
- 第十八 「家出娘」保護施設を完備すること
- 第十九 都道府県に一個以上の婦人寮を設けること
- 第二十 風紀警察に婦人警察官を用ゆること
- 第二十一 純潔寄宿舍を設けること
- 第二十二 女子の職業紹介事業を盛んならしむること
- 第二十三 授産所の活発なる運用
- 第二十四 義務教育の普及を徹底せしむること
- 第二十五 女子の短期職業教育を奨励すべし
- 第二十六 小中高等学校に性教育を行う

- 
- 第二十七 純潔教化運動を盛んならしめる
- 第二十八 禁酒運動を奨励すること
- 第二十九 レクリエーションを奨励すること
- 第三十 健全な芸術に親しみ、高尚な趣味を養う
- 第三十一 晩婚の弊風を矯むること
- 転落の防止金庫の設定
- 第三十二 純潔金庫を作ること

<sup>5</sup> 売春問題連絡協議会の設置について

昭和 30 年 10 月 28 日 閣議決定

売春問題に関し、緊急に法律案を立案する必要があるので、左記の要領により、売春問題連絡協議会（以下「協議会」という。）を設置する。

記

一 協議会は、内閣に設け、閣議決定に基く事実上の機関とする。

二 協議会の構成員は、左のとおりとする。

内閣官房副長官のうちから内閣官房長官が指名する者 1 人

法制局次長

内閣総理大臣官房審議室統轄参事官

法務省刑事局長

法務省矯正局長

法務省保護局長

法務省人権擁護局長

大蔵省主計局長

文部省社会教育局長

厚生省公衆衛生局長

厚生省社会局長

厚生省児童局長

労働省婦人少年局長

警察庁刑事部長

最高裁判所事務総局刑事局長

---

最高裁判所事務総局家庭局長

警視庁防犯部長

三 協議会の議長は、構成員たる内閣官房副長官とする。

議長は、会議を招集し、議事を統轄する。

四 協議会の庶務は、議長の定めるところにより、内閣総理大臣官房及び法務省においてつかさどる。

備考 昭三一．三．二〇廃止（売春対策審議会 1968：402）

- <sup>6</sup> 1958 年 4 月 1 日に開設。現在も婦人保護施設として存続している。経営母体である「ベテスダ奉仕女母の家」は 1836 年ドイツのフリートナー牧師によってはじめられた。女性の献身者を中心とした社会救済団体である。（東京都民生局 1973）
- <sup>7</sup> 1965 年に婦人保護長期収容施設として設立される。社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家が経営している。
- <sup>8</sup> 藤原道子（1900-1983）は昭和期の政治家である。戦後、社会党に入り、衆議院議員選挙に 2 回当選、参議院議員選挙に 4 回当選した。婦人議員の立場から、社会保障に取り組み、売春防止法制定に尽力した。

## むすびに代えて

本研究では、久布白が生涯において取り組んだ中心的課題を廃娼と捉え、その周辺の取り組みにも視野を広げ、分析を行った。

売春問題は法治国では法によらねばどうにもならない。そのためには女性の参政権が必要だ。そして法の上で女性が人権を保護されねばならぬ。次ぎに結婚は男女の問題だ。家のため国のためだけではない男子と女子の問題だ。それは生理を基礎とし、家、国、世界につながる。そのために性教育の必要、また純潔教育の必要、進んで家族計画の必要までと前進して来た（久布白 1970）。

このように久布白が生涯をかけて取り組んだ、廃娼運動、婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止は、すべてつながっている。以下、第 1 章から第 10 章で取り上げたことについてまとめていきたい。

久布白は 1906（明治 39）年にアメリカの地で売春に従事する日本人女性たちに出会い、彼女たちに対して「恥ずかしい」という思いを抱いた。その思いが廃娼運動を始める原点となるが、その後、当時の日本国内に存在していた公娼制度がなくならない限り、売春女性たちだけを責めることはできないということに気が付き、そのような制度を必要とする社会や男性が問題であると考えた。それらは久布白が矯風会に入る以前の論考にも反映されており、このようにして公娼制度を廃止する必要性に目覚めていったのである。

久布白は 1916 年に矯風会総幹事に就任し、廃娼運動に取り組み始める。彼女の廃娼運動は初めから人々の教育を重視したものであり、廃娼のための啓発と資金集めのための五銭袋運動を実施する。彼女の廃娼論を貫く男女貞操思想は、その当時、一般の女性が守るべきものであった「貞操」を男性にも当てはめ、男女の平等化を図ろうとした思想であった。また、廃娼を女性の人権の視点から捉え、一部の女性だけが売買され、奴隷のような扱いを受けるような公娼制度は許すことができないと考えており、公娼制度は人身売買であるということ、女性の二分化に対する問題意識が存在した。しかしながら、このような視点を持ちながらも、公娼は国辱であるという価値観も有しており、このことは彼女が廃娼に突き進む原点であった。また、売春女性たちを「醜業婦」、「賤業婦」と呼ぶことは、当時、社会の底辺ともいうべき弱い位置に置



かれていた彼女たちの支援という観点に立ったものではなかった。久布白は女性の人権の確立のために廃娼を唱えながらも、同時に「国辱」観や「醜業婦」観から解放されなかったのも事実である。

久布白は廃娼運動に取り組む中で、飛田遊廓許可取消運動の失敗や三澤千代野事件を経験し、政治的な力や法律的な裏付けがなければ、公娼制度を廃止し、女性の人権を守ることは出来ないということに気が付いた。婦人参政権運動に久布白が関わった理由は、廃娼や婦人保護を実現する力を得るためであった。婦人参政権運動が本格化する前に関東大震災が発生し、久布白は震災救援活動に取り組んだ。この活動については従来、廃娼運動や婦人参政権運動の発展の契機という側面が強調されてきたが、福祉的な視点から分析を試みた。数々の女性団体をまとめ、東京連合婦人会設立のきっかけを作ったのは久布白であった。震災という非常時の中で宗教や思想の違う女性たちが連帯し、女性の視点を生かして働く姿が見えてきた。女性の視点を生かした防災や復興は現代においても必要なものである。ただし、現代では同時にジェンダーや多様性の視点からも考えていかなければならない。

震災救援活動が一段落を告げた後、久布白は婦人参政権運動において宗教や思想の異なる女性たちの共同運動のきっかけを作ることで大きな貢献をした。結果的には、婦人参政権獲得は戦後まで実現しなかったが、この運動の積み重ねを通して、久布白は従来活動を共にしなかった矯風会外の婦人運動家らと出会い、刺激を受けている。第3章で言及したが、「社会機構の革新は我々の責任なりというところまで行かねばならない」(久布白ほか 1934:26)と久布白に言わしめたのは、キリスト者だけではない、宗教も思想も異なる様々な女性たちとの関わりが影響している。また、久布白は会の信用を第一に考え、活動に関わるメンバーたちを擁護する役割も果たしていた。婦人参政権運動を共にした婦人運動家たちは久布白について、「円満で清潔な人柄で、わたしは大変敬愛していた」(奥 1998:47)、「統率者としての先生は、黙々として、しかも温かく、足らざる者、病める者、傷つける者に接しられ、是また私の肝に銘じています」(山高 1972:16)、「その頃(筆者注：婦選獲得同盟が設立された頃のこと)私共は黄色い声を張り上げて赤い気焰をはく連中だとか、酒もたばこものむなどと随分悪口をいわれていたのに、矯風会のあなたが、共同の目的のために敢えて私共と手を組まれたご勇気に敬意を表したものでした」(市川 1972:19)というように評価している。

久布白は1910年代後半から婦人労働や女工問題に言及していた。久布白自身、母・

妻・職業を持つ女性という3つの役割を果たしていたため、職業を持つ女性に関する論考では、家庭を持つ女性が社会で働く困難さについても言及し、男性に比べて多くの役割を期待されることは女性にとって負担であり、問題であると考えていた。妻であり母であり、職業を持つ女性の負担を軽減するために、男性も家庭内で夫と父という役割を果たすべきであると考えており、その上で女性が社会に進出していく必要性を主張していたのである。

久布白は1928年にエルサレム会議（世界宣教会議）に参加し、労働問題について学ぶ機会を持ったことを契機に、労働・経済問題と性の問題の関係について理解を深めていく。また、公娼制度下における売春問題の根底には、「道徳問題」だけではなく、「経済問題」が存在するということを認識し、男性側の性の要求と女性側の経済的必要という双方の弱点と弱点が結びついて、売春が増えていくのだと分析した。実際にこの視点を生かして、東北地方の婦女身売り防止運動を実施し、女性たちの社会的支援にもつながった。

久布白は、性教育は人々の意識改革の手段であり、廃娼実現以前にも以後にも必要なものであると考えた。久布白は早期からの性教育、男子の性教育、生涯教育としての性教育の必要性などを主張していた。それらの主張は現代の性教育の課題でもある。また、性を肯定的に捉える視点を有していた。「純潔」は当時の矯風会の目標の一つであり、久布白もそれを重要視していたが、禁欲という狭い意味ではなく、神の前に男性と女性は平等であり、人間として互いに守らなければならないものという捉え方であった。久布白の「純潔」概念を分析していくとき、矢嶋楫子が未婚の母であった（妻や子ある人の子どもを産んでいた）という事実との関係は欠かすことの出来ないものである。それまで「純潔」を当然のことであると考えていた久布白は戸惑い、その事実を発表できずにいたが、矢嶋楫子の死後に発表せざるを得ない状況となる。久布白は、人間は弱きがゆえに性の誘惑は誰もが陥る可能性のあるものだ、それをみんなで正しくやっていくのが矯風会であると考えた。結婚前の男女を積極的に解放して、健全な交際を勧める「黎明会」など、ユニークな取り組みも行なっていた。戦前の久布白の性教育論は科学的な性教育と純潔教育という二本柱であったが、戦後は科学的な性教育、純潔教育、家族計画の三本柱となる。戦前から性をコントロールする方法を求めている久布白は戦後、遅ればせながら、家族計画（産児調節）を取り入れる。家族計画（産児調節）を、性にコントロールされるのではなく、自ら性をコントロールする

ことができる方法であると捉えるに至っている。しかしながら、久布白の導入した家族計画（産児調節）は既に論じつくされたものであった。

さて、久布白（1955a:2）は戦後の論考で「純潔」について次のような独自の表現を用いて説明している。従来の「純潔」は「封建純潔」で家の娘・妻・母として守るべきものであったが、現在の「純潔」は「民主純潔」で一人の人間として守るべきものであると考えていた。「純潔」という言葉の使用そのものの是非は別として、久布白の主張する「純潔」は「民主純潔」なるものであり、「純潔」に新しい意味を吹き込もうと試みていたのであろう。「貞操」や「純潔」を重視していた久布白であったが、高橋（1998:3）は「多分、文字としてはどこにも残っておらず、私が久布白先生のことばをきいたのだが、先生は『ことばはアップトゥデイトなものを使え、昔は貞操だったが今は人権だね』といわれた。…（中略）また、『純潔教育なんておかしいよ。英語ではセックスエジケーションだ』といわれたことも思い出した」と述べている。これはおそらく戦後に発せられた言葉であろう。かつて久布白は「貞操」を「男女貞操」とすることで男女の人権が守られると考えていたが、久布白には時代に合わせて変化していく姿勢があったのである。

久布白は戦後、婦人参政権を獲得した後、廃娼やその後の施設等の整備のために、選挙に出て、政界に入ろうと考えた。戦前に婦人参政権を求めた理由も、戦後代議士になろうとした理由も「婦人の性的解放」、「公娼制度の撤廃、集団売春の禁止、即ち婦人の人格と人権の確立」（久布白 1955b:82）であったと久布白は述べている。結果的には政界に入ることは叶わなかったが、選挙活動のため、1945年から50年にかけて矯風会の活動から離れていた間、政治に対する知識を深めた。それは1950年以降の個人誌『婦人と日本』の論考に反映されていく。

独立後の日本では、混血児20万人と騒がれ、「混血児問題」が社会問題となる。久布白は混血児の人数など実態を把握することに努めた。その中で孤児である「混血児」、片親が養育している「混血児」、両親によって養育されている「混血児」がいるということ把握し、問題の焦点は片親が養育している「混血児」だと考え、父親の認知と扶助を得る援助を行った。久布白は子どもの保護だけではなく、母親の権利擁護やエンパワメントという視点も有していた。具体的な解決策には言及していないものの、「混血児問題」について考える中で戦争と性の問題、戦時の日本兵の性暴力、南方に残した日本兵の子どもたちについて言及し、反省の意を表している。戦争と性の問題

は根深く、未だに解決することができていない問題である。このような問題提起を引き継ぎ、現在の矯風会はそれらの解決のための要請行動や学習会などを実施している。

公娼制度廃止後、久布白は売春防止法制定に取り組んだ。しかしながら、売春を肯定する社会を批判し、売春女性の人権という視点を提示して運動に取り組んでいたものの、「醜業婦」観は内在しており、当事者である売春女性の声を積極的に聴き、彼女たちと共に戦うことはなかった。たとえ売春女性たちが業者に操られていたとしても、『接客女性』や『婦人新風』などの売春女性の組合の機関誌は、彼女たちについて知ることのできる貴重な文献である。久布白からはこれらの組合の活動や機関誌から、売春女性のニーズや実情を十分に把握しようとする姿勢は読み取ることができなかった。社会福祉の歴史研究において「肝心なのは、実践する人物とともに、それを利用する人びと、当事者のあり様（ニーズを含め）であり、これらを常に考えながらみていくことが必要であろう」（室田 2006:5）という指摘があるように、当事者の視点は見過ごしてはならぬものである。但し、各地へ赴いた時に娼妓たちの状況視察に出かけてはいたようである。1950 年前後に、久布白は矯風会員の案内を受け、福岡の小倉の公娼街を視察したが、「娼妓の人たちが道路に水をまくふりをして、ひしゃくで私たちめがけて水をかけました。先生はずぶ濡れになりながら、ニコニコされ、両側の店の前の彼女たちに優しくコンニチハ！コンニチハ！と頭を下げていらっしゃいました。彼女たちの行動は、おそらく『自分たち生活権を奪われる』という理由による店主の命令であったと思われます」（浜生 2003:23）というエピソードも残っている。久布白らが獲得した売春防止法を根拠とする婦人保護の枠組によって、救われた女性と救われなかった女性の両方が存在していたことも事実である。

久布白の活動は廃娼運動からスタートし、廃娼実現のための婦人参政権運動、性教育・純潔教育・家族計画、売春防止などを通して、性の問題を解決しようと試みていた。宮本（2012:100）は、「人の性を売り買いする行為は人類数千年にわたって続いてきている壮大な社会的装置に支えられて今日に至っている」と述べている。宮本の提示した、『『壮大な社会的装置』である買売春制度を支えている 4 つの社会層』をもとに、久布白が考えていた解決策を示したい。宮本（2012:100）によると、買売春制度を支えている第 1 の層は「買売春制度を社会全体で支えている国民の存在である。この国民層は買売春制度に関して無関心ないし必要悪として容認することで下支えしている」、第 2 の層は「買売春制度を必要としている、需要側の顧客の存在である。こ

の顧客は“男の性欲”に関して社会的に陶冶される機会を一度も持つことなく今日に至っている」、第3の層は「性売買業者の存在である」、第4の層は「自分の性を商品として直接顧客や業者に買われる存在、またはより過酷に奴隷化される存在である。それは、主として女性である」ということである。宮本は現行の売春防止法の法対象者は第3の存在と第4の存在のうちの女性であり、第1と第2の存在への視点が欠落していると指摘している。売春・買春問題の根本的解決のためには、第1から第4の全ての層にアプローチする必要がある。久布白は国家が売春・買春を公認すること、人身売買や性的搾取を行う業者を否定し、第1の層には啓発が必要だと考えていた。戦前に娼婦運動に取り組んでいた時には五銭袋運動を、戦後の売春防止法制定に向けては、記録映画「売春」の作成などを通じて啓発を試みた。第2の層には教育によって買春によらない性生活のあり方を示すこと、第3の層には処罰を、第4の層には保護と更生という対策を中心に考えていた。久布白（1971:226）は「奴隷の解放には独立の資を与えなければ意味をなさない」と考え、「社会事業もそのあとのことを考えて処理しなければならない」と述べていた。そのような考えを持ち、売春防止法の実施後は国民(第1の層と読み替えることもできよう)が第3の層や第4の層を受け入れ、その転廃業を応援していくことが必要だと考えていた。

さて、現在、過去のように貧困による売春はなくなり、売春を「好きでやっている」女性たちが大半なのであろうか。確かに、貧困のため、家族の生活を支えるために売春を行う女性は少なくなっているかもしれない。しかしながら、経済的問題、家族関係の問題など、様々な困難を抱える女性たちが売春に従事していることは否めない現実がある。売春問題には女性の抱える困難が濃縮されている。近年、大阪の飛田新地に関する本が出版され、様々な事情から売春に従事する女性たちの姿が刻まれている。井上（2011:263）は飛田で働く女性を取材した結果、「話半分に聞くにしても、『好きでこの仕事をやっている』は、あり得ない。男に騙され、捨てられ、お金のために飛田に来た。親きょうだいの貧困のために売られてきた公娼時代と、変わらないではないか。かろうじての違いは、少しは他の世界で仕事をしてから飛田に来ていることだろうか。（中略）…親の十分な保護を受けて育っていない。これまでの生活史の中で、経済的な苦勞をしない時がなかった。見本にすべき暮らしぶりを知らないまま易きに流れ、今に至っているだけだ」と述べている。また、「多くの『女の子』『おばちゃん』は、他の職業を選択することができないために、飛田で働いている。他の職

業を選べないのは、連鎖する貧困に抗えないからだ。抗うためのベースとなる家庭教育、学校教育、社会教育が欠落した中に、育たざるを得なかった。多くは十代で親になる。親になると、わが子を、かつての自分と類似した状況下におくことになる」(井上 2011:298)と述べたように、貧困やそれに伴う教育の欠落の世代間連鎖という課題についても指摘されている。これらの記述から、久布白の時代に問われていたことが未だに解決を見ていないということが窺えはしないだろうか。

売春・買春問題は性差別の社会構造と大きく関わるものである。久布白ら矯風会が様々な運動を行なったのは、女性の基本的人権の確立のためというよりは、国辱的風俗(海外における日本女性の売春)の取締りのためであり、女性の問題の根本的解決にはなり得なかったというように批判されてきた。確かに、久布白が廃娼運動に進む最初のきっかけは売春女性に対して抱いた「恥ずかしい」という思いであった。しかし、第3章でみてきたように、久布白は、売春女性という階級を生み出した原因が、道徳思想の欠陥や家族制度だけでなく、貧困にあるということにも気がついており、「結局は貧の問題の解決、万人の生活の安定が問題の解決の真相ではないか」(久布白 1929:15)と述べていた。ここからは、久布白が階級社会構造の欠陥という視点を持っていなかったわけではないことがわかる。久布白は廃娼運動を続ける中で男女不平等な社会、貧困問題への認識を深め、その社会構造を変化させ、男性という性だけでなく女性という性を認め、その人権も保障される社会を目指すために婦人参政権運動、性教育・純潔教育、売春防止に取り組んだという側面を捉えることも出来る。

さて、再び序章の冒頭の久布白の言葉を挙げておく。「性の問題は永遠の問題である。男と女、夫婦の諸問題が真の解決をみるのは、いつのことか」(久布白 1973:312)。久布白が生涯をかけて取り組んだ課題はここに集約されている。久布白(1952:6)はまた「性の問題は人類始まって以来の未解決の問題だ。多分盗みが人の世から絶えぬ如く、性の問題も人の世の在らん限り継続する問題であろう」とも述べている。売春防止法制定後、久布白(1960:7)は「九千万を紳士淑女に」を合言葉とし、「健全なる家庭、健全なる学校、健全なる社会は新鮮な大気を国の隅々まで吹き通さねばならない、純潔なる生活の幸福をまざまざと示さねばならない、健全なる交際、健全なる精神、健全なる社会の樹立にすべてが精進しなければならない」(久布白 1957:4)と考え、生涯をかけて男女ともに人間として「純潔」を守ることのできる健全な社会の実現を目指し続けていく。「性の問題は永遠の問題」、「人の世のあらん限り継続する問題」

と考えながらも久布白は決して諦めることがなかった。久布白は法律運動、実際運動、教育運動に取り組んだが、彼女自身も「いちばん大きいのが全体の教育運動です」（久布白 1961:29）と述べている。「法は道を示す。しかしこれに歩むには光が必要で、教育は光である」（久布白 1967:19）と述べており、法律の獲得に力を入れたが、それだけでは不十分で、法律によって示された「道」を照らす「光」は教育であると考えていた。久布白が晩年まで力を入れて取り組んでいたのは教育による人々の意識改革であった。久布白は様々な取り組みを積み重ね、晩年に「ひとは性の奴隷となることなく、主人となって生きてほしい」（高橋 2001:115）と述べた。「（性の）主人となって生きてほしい」という主張は、男性も女性も1人の人間として自らの性を大切に生きてほしい、豊かな性を生きてほしいという思いを込めたものである。性を人権と捉え、人間としての性のあり方を示した言葉だと捉えることができるのではないか。

さて、最後に久布白落実研究の今後の課題について一言触れておきたい。本研究においては、久布白の廃娼運動とその周辺の取り組みを中心として分析を行ったため、久布白の国際的な活動や平和運動、禁酒運動との関わりの分析が不十分であったことは否めない。久布白は廃娼運動家という枠組に収まりきれない様々な活動を行っており、今後はそれらの活動にも光を当て、分析していくことが課題である。

### （文献）

カール・G・ハートマン著 林基之監修 久布白落実訳（1970）『受胎安全期とはなにか』日本キリスト教婦人矯風会出版部。

浜生宮（2003）「小倉での公娼廃止運動の記録」『婦人新報』1230,23.

市川房枝（1972）「おわかれの言葉」『婦人新報 久布白落実追悼号』,19.

井上理津子（2011）『さいごの色街 飛田』筑摩書房。

久布白落実（1929）「特別講座 労働問題物語」『婦人新報』378,14-19.

久布白落実ほか（1934）「座談会 基督者婦人と社会運動」『婦人新報』432,20-29.

久布白落実（1952）「行政協定後の矯風会の有り方」『婦人新報』620,4-7.

久布白落実（1955a）「日本の味」『婦人と日本』42,2.

久布白落実（1955b）「東西婦選運動の今昔」『政界往来』21(2),78-83.

久布白落実（1957）「十一月を迎う」『婦人新報』686,3-5.

久布白落実（1960）「宇宙時代に処する矯風会」『婦人新報』714,6-8.

久布白落実 (1961)「わが信仰の生涯 売春禁止法を通すまで」『月刊キリスト』  
13(3),22-29.

久布白落実 (1967)「売春防止法の出来るまで (二十二)」『婦人新報』797,18-19.

久布白落実 (1971)『日々の食物』久布白記念出版会.

久布白落実(1973)『廃娼ひとすじ』中央公論社.

宮本節子 (2012)「第4章 売春防止法再考—女性の人権を確立するために」杉本貴代  
栄編著『フェミニズムと社会福祉政策』ミネルヴァ書房,pp.90-108.

室田保夫編著 (2006)『人物で読む近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房.

奥むめお (1998)『野火あかあかと』ドメス出版.

高橋喜久江 (1998)「人権を主張した矯風会 活動史の視点から」『婦人新報』1170,2-3.

高橋喜久江 (2001)『シリーズ福祉に生きる 39 久布白落実』大空社.

山高しげり (1972)「弔辞 矯風会葬儀より」『婦人新報 久布白落実追悼号』,15-16.



(資料1)

久布白落実の略年譜

西暦	和暦	年齢	事項	関連事項
1882	(明治15)	0	12月16日に熊本県鹿本郡米之嶽村郷原で、大久保真次郎、音羽のもとに誕生	
1885	(明治18)	2	母と共に草葉町教会で受洗(幼児受洗)。尾道に移る。	
1886	(明治19)	3	父、尾道で伝道所を開く。新島襄の援助を受ける。妹・起実誕生	東京婦人矯風会創立
1887	(明治20)	4	大久保一家、京都に移る。	
1889	(明治22)	6	大久保一家、埼玉県に移り、父は大宮秩父に伝道所を開く。	大日本帝国憲法発布
1892	(明治25)	9	妹・起実永眠	
1893	(明治26)	10	弟・真太郎誕生。一家で群馬県藤岡教会に移る。	群馬県が廃娼を実行
1895	(明治28)	12	高崎教会に移る。前橋共愛女学校予科に編入学	日本救世軍創立
1896	(明治29)	13	女子学院に入学。弟・真太郎永眠	
1900	(明治33)	17	ピリピ4.4に感銘を受け、生涯献身生活を送ることを決意	治安警察法 未成年者喫煙防止法 娼妓取締規則
1902	(明治35)	19	大久保夫妻、ハワイに渡り、伝道	
1903	(明治36)	20	女子学院高等科全科卒業。両親を追い、ハワイに移り、伝道を助ける。	
1904	(明治37)	21	両親とアメリカ(オークランド)に渡る。太平洋神学校に入学	日露戦争
1906	(明治39)	23	サンフランシスコ大震災後、日本人売春宿調査に立ち会う。大叔母矢嶋樺子の第7回矯風会世界大会出席(於:ボストン)に同行し、性教育に目覚める。	
1910	(明治43)	27	1月に久布白直勝と結婚し、シアトルに移る。長男・明誕生	韓国併合
1912	(大正元)	29	次男・正誕生	
1913	(大正2)	30	久布白一家は落実の父母とともに日本へ帰国 直勝は大阪教会から招聘される	
1914	(大正3)	31	三男・三郎誕生。高松に移る。5月に落実の父がアメリカで永眠	第一次世界大戦
1915	(大正4)	32	次男・正永眠 矯風会機関誌『婦人新報』に「立て戦闘は我等にあり」を投稿	
1916	(大正5)	33	久布白一家上京。落実は矯風会総幹事に就任。廃娼のための五銭袋運動を開始。飛田遊廓許可取消運動に関わる。 直勝の母、永眠	
1917	(大正6)	34	落実は在米の母・音羽に帰国を依頼 男女学生に公娼廃止の懸賞論文を募集	
1918	(大正7)	35	直勝、東京市民教会を設立	シベリア出兵、米騒動、母性保護論争
1920	(大正9)	37	長女・民子誕生 直勝『基督教の新建設』、落実『父』出版 直勝永眠。東京市民教会新会堂落成 万国婦人参政権協会に加盟、日本代表として登録する。	国際連盟発足 内務省社会局設置
1921	(大正10)	38	4月に矯風会副会頭に就任 矢嶋樺子の満州・朝鮮行きに同行、支部をつくる。 矯風会に日本婦人参政権協会設立、代表となる。	
1922	(大正11)	39	第11回矯風会世界大会(於:フィラデルフィア)に出席。その後、婦人参政権問題の研究視察旅行でアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スイスを巡る。	
1923	(大正12)	40	長女・民子永眠 関東大震災により、矯風会本部全焼。矢嶋会頭らと大久保の婦人ホームへ避難。翌日から救援活動に取り組む。 震災で焼失した遊廓の復興再建の反対運動を行う。 東京連合婦人会の設立	ジェーン・アダムズ来日

(資料1)

久布白落実の略年譜

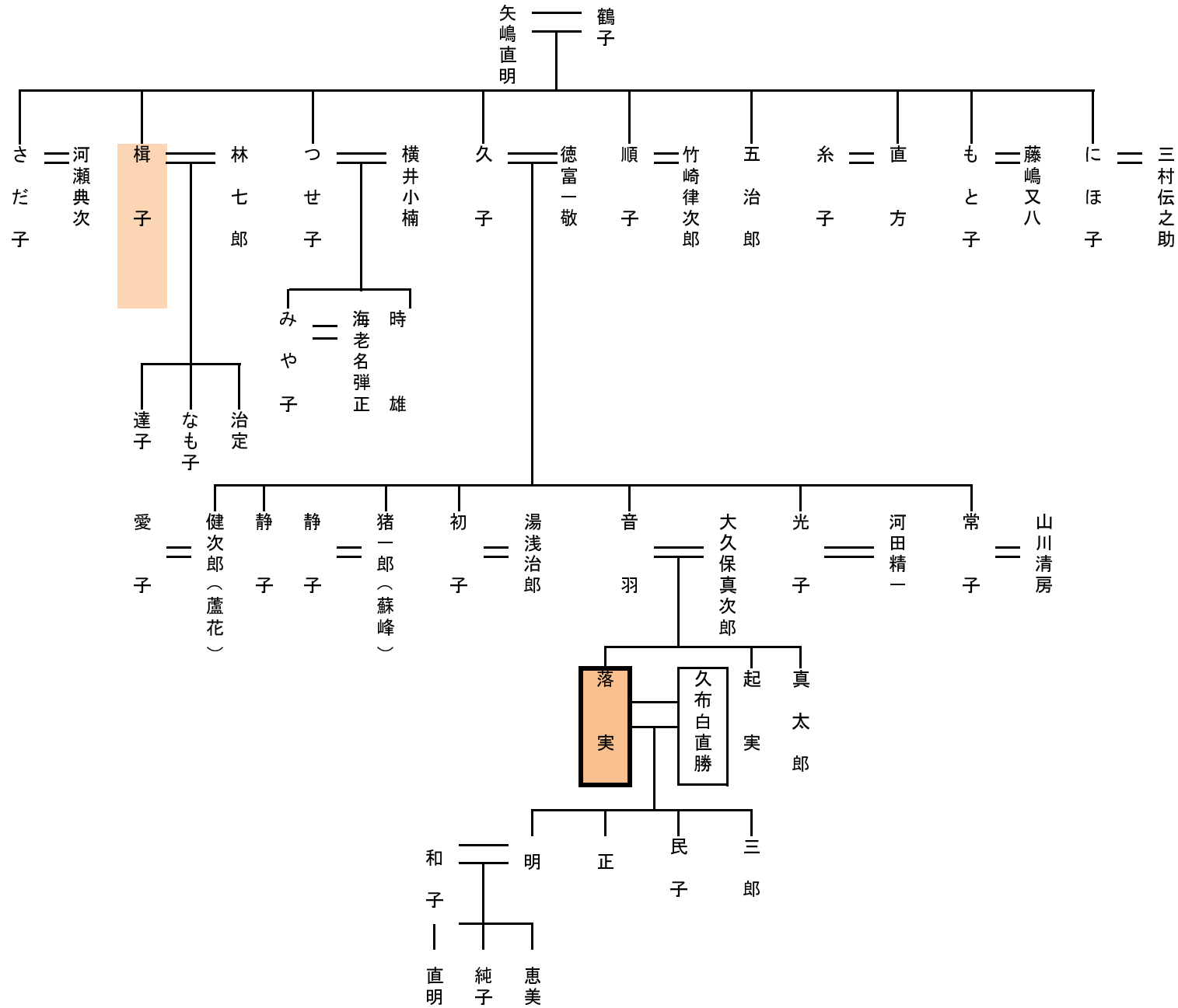
西暦	和暦	年齢	事項	関連事項
1924	(大正13)	41	12月、婦人参政権獲得期成同盟会設立、総務理事に就任	
1926	(大正14)	43	矯風会廓清会合同の廃娼連盟結成、財務部長に就任	
1928	(昭和3)	45	第2回世界宣教会議(エルサレム会議)に日本代表として出席 帰途、廃娼問題の研究視察旅行(欧州諸国・ソ連を巡る) 『女は歩く』を出版 全国廃娼連盟の第1回募金6万円集まる。	
1929	(昭和4)	46	『婦人新報』に「労働問題物語」(全5回)を連載	救護法、世界恐慌
1930	(昭和5)	47	婦選獲得同盟の総務理事を辞任	
1931	(昭和6)	48	国際連盟から婦人児童売買実情調査団を迎え、調査に協力 『新日本の建設と婦人』出版 矯風会廃酒部部長に就任 満州と中国を訪問 東京婦人ホーム理事長に就任	満州事変
1932	(昭和7)	49	仏教界の廃娼決議を取り付けるための6年越しの運動が成功 『貴方は誰れ』(林歌子伝)を出版	満州国建国
1934	(昭和9)	51	国民純潔同盟を組織、理事を務める。 東北地方の凶作のため、婦女身売り防止運動に取り組む。	
1935	(昭和10)	52	内務省・拓務省・文部省の囑託として、渡米。廃娼後の対策研究のため社会衛生協会等を訪問 『矢嶋楯子伝』出版	
1936	(昭和11)	53	『婦人新報』に「純潔日本の建設」(全12回)を連載 『父と良人』を出版、『湯浅初子』を発行	
1937	(昭和12)	54	『婦人新報』に「我が国に於ける性教育」(全6回)、「国民の種々層と性問題」(全6回)を連載 朝鮮、満州、華北を慰問	日中戦争 母子保護法 軍事扶助法
1938	(昭和13)	55	第3回世界宣教会議(マドラス会議)に出席 学生狩事件から学生風教問題懇話会をつくる。	厚生省設置 社会事業法、国家総動員法
1939	(昭和14)	56	北京愛隣館開館、祝典に出席	
1942	(昭和17)	59	矯風会、日本基督教団第三項所属団体に統合される。	
1944	(昭和19)	61	『婦人新報』休刊	
1945	(昭和20)	62	戦災のため、矯風会本部・施設、東京都民教会焼失 母が熊本で死去 終戦後、8月25日に市川房枝らと戦後対策婦人委員会設立	
1946	(昭和21)	63	矯風会を退き、第1回衆議院議員選挙に立候補、落選	1月、GHQ、公娼制度廃止に関する覚書を発表 旧生活保護法、日本国憲法
1947	(昭和22)	64	参議院議員選挙に立候補、落選。母と学生の会の理事長になる。 文部省純潔教育委員会の委員を務める。	労働基準法 改正刑法(姦通罪廃止) 改正民法、児童福祉法
1949	(昭和24)	66	『純潔教育とは何か』を出版	風俗営業等取締法 優生保護法、性病予防法
1950	(昭和25)	67	参議院議員選挙に立候補、落選。矯風会に復帰 個人誌『婦人と日本』発刊	生活保護法(旧法廃止。母子加算制度)
1951	(昭和26)	68	勅令第9号法制化のため、公娼制度復活反対協議会を組織し、委員長を務める。	社会福祉事業法 サンフランシスコ平和条約、日米安全保障条約調印
1952	(昭和27)	69	協議会を純潔問題中央委員会に改称し、混血児問題に取り組む。	日本、独立を回復(4月)
1953	(昭和28)	70	慈愛寮が社会福祉法人慈愛会を設立、独立の施設となり、理事長に就任 売春禁止法制定促進委員会を結成し、委員長となる。 矯風会創立70周年記念募金を始める。	売春処罰法審議未了
1954	(昭和29)	71	矯風会副会頭に就任 売春問題対策協議会委員を務める。 社会福祉法人興望館幹事になる。	

(資料1)

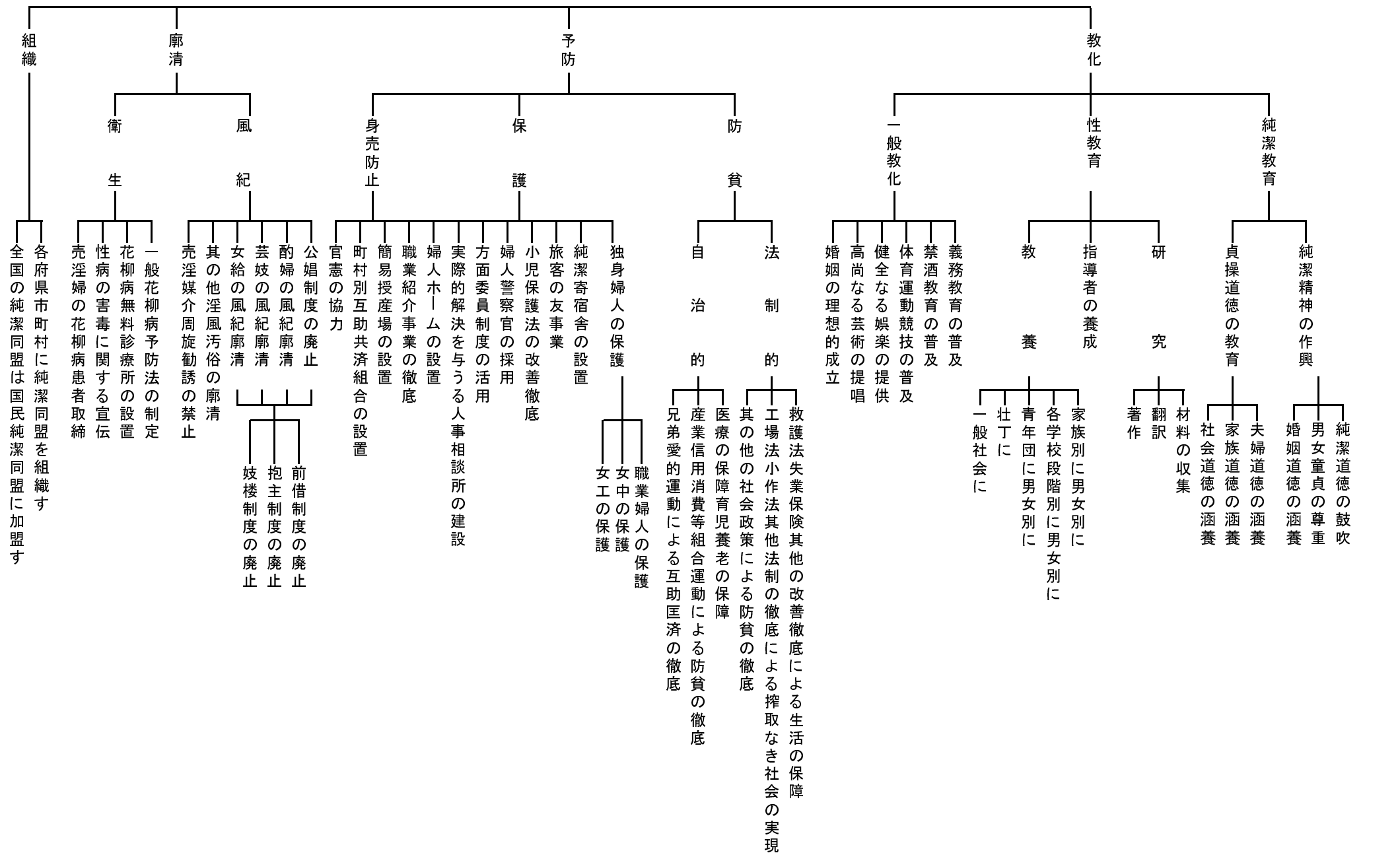
久布白落実の略年譜

西暦	和暦	年齢	事項	関連事項
1955	(昭和30)	72	売春禁止法制定のための国民募金を行う。 記録映画「売春」を制作	受胎調節普及全国協議会開催 (厚生省主催)
1956	(昭和31)	73	売春防止法が成立。売春禁止法制定促進委員会を発展解消し、 売春対策国民協議会を結成。会長となる。 第20回矯風会世界大会(於:ブレーメン)に出席、各国の更生 施設、性病対策を視察し、『五十年の歩みと五十日の旅』を 報告書として出版	
1957	(昭和32)	74	訪中日本婦人代表団団長として中国を訪問、売春対策を視察 第3回母親大会で議長を務める。 婦人相談所・婦人保護施設の設置運動で各県を訪問 売春対策の予算獲得運動を行う。	
1958	(昭和33)	75	売春防止法が施行される。もぐり売春絶滅運動に取り組む。 第1回純潔教育指導者講習会を東京九段会館に開く。	
1959	(昭和34)	76	矯風会本部会館落成、世界矯風会の顧問となる。	
1961	(昭和36)	78	中国婦人代表団を迎える。	
1962	(昭和37)	79	矯風会会頭に就任する	
1964	(昭和39)	81	スウェーデンの性教育の教科書を翻訳出版	母子福祉法、東京オリンピック開催
1965	(昭和40)	82	婦人保護長期収容施設実現のために尽力、コロニー「かにた 婦人の村」落成	母子保健法
1966	(昭和41)	83	日本基督教団正教師試験に合格、按手礼を受ける。	
1968	(昭和43)	85	第24回矯風会世界大会を日本で開催し、主催者として活躍	
1970	(昭和45)	87	ハートマン著『受胎安全期とは何か』の翻訳を出版	
1971	(昭和46)	88	矯風会会頭を辞し、名誉会頭に就任 第25回矯風会世界大会(於:シカゴ)に出席、帰途、ブラジル訪問 『日々の食物』を出版	
1972	(昭和47)	89	10月23日、心不全のため、永眠	日中共同声明

### 矢嶋家・久布白家 家系図



純潔日本建設運動体系



**(資料4)**

**久布白落実著作・論文目録**

**4-1 著作目録**

- 久布白落実 (1920) 『父』 東京市民教会出版部.
- 久布白落実 (1924) 『公娼廃止より婦人参政権まで』 日本婦人参政権協会.
- 久布白落実 (1927) 「矯風問題」. 長谷川良信編『社会政策大系』9,大東出版社.
- 久布白落実 (1928) 『女は歩く』 市民協会出版部.
- 久布白落実 (1931) 『新日本の建設と婦人』 教文館.
- 久布白落実 (1932) 『貴女は誰れ?』 牧口五明書店.
- 久布白落実 (1933) 「基督者としての私の社会観」 基督教女子青年会同盟編  
『基督者としての私の社会観』 教文館出版部,pp.23-35.
- 久布白落実編 (1935) 『矢嶋楫子伝』 警醒社書店.
- 久布白落実 (1935) 『南北米百五十日の旅』 日本基督教婦人矯風会.
- 久布白落実 (1936) 『婦人参政権の沿革及び現状』 日本基督教参政権協会.
- 久布白落実 (1936) 『父と良人』 東京市民教会出版部.
- 久布白落実 (1937) 『湯浅初子』 東京市民教会出版部.
- 久布白落実 (1949) 『純潔教育シリーズ2 純潔教育はなぜ必要か』 社会教育連合会.
- 久布白落実 (1956) 『欧米より帰りて (売春状態実地報告)』.
- 久布白落実 (1956) 『五十年の歩みと五十日の旅』 日本基督教婦人矯風会本部.
- Carl G.Hartman (1962) Science and the safe period –A compendium of human reproduction-. The Williams & Wilkins Company. (=1970 林基之監修、  
久布白落実訳『「受胎安全期」とは何か ヒトの発生をめぐって』 日本基督教婦人  
矯風会出版部.)
- 久布白落実 (1971) 『日々の食物』 久布白記念出版会.
- 久布白落実 (1973) 『娼妓ひとすじ』 中央公論社.
- 久布白落実 (1973) 「我が国の公娼制度と婦人矯風会」. 東京都民生局『東京都の婦人  
保護』 東京都民生局,pp.173-179.

#### 4-2 『婦人新報』掲載論文目録

- 久布白落実 (1912)「子どもは救ふ価値ありや」『婦人新報』 179,12-13.
- 久布白落実 (1913)「単純なる思想」『婦人新報』 191, 5-8.
- 久布白落実 (1914)「萬国婦人矯風会大会につきて」『婦人新報』 199,13-14.
- 久布白落実 (1914)「鬼の如き新誘拐者 (ユニオンシグナル訳)」『婦人新報』 200,25.
- 久布白落実 (1914)「スチイブンス夫人を憶う」『婦人新報』 205,301-31.
- 久布白落実 (1915)「道德上の常備兵」『婦人新報』 213,4-7.
- 久布白落実 (1915)「矯風漫筆」『婦人新報』 216,3-6.
- 久布白落実 (1915)「矯風漫録—与謝野晶子女史に対う」『婦人新報』 219,5-7.
- 久布白落実 (1916)「立て戦闘は将来に有り」『婦人新報』 223,7-9.
- 久布白落実 (1916)「就任の辞」『婦人新報』 225,4-5.
- 久布白落実 (1916)「希望に輝く五年度へ」『婦人新報』 225,6-9.
- 久布白落実 (1916)「先づ根本に培え」『婦人新報』 226,3-5.
- 久布白落実 (1916)「全国の教会に訴う」『婦人新報』 227,5-8.
- 久布白落実 (1916)「寄つて以て立つ処を与えよ」『婦人新報』 228,5-8.
- 久布白落実 (1916)「秋来らんとする前に 本年度第一期の運動」『婦人新報』 229,5-8.
- 久布白落実 (1916)「全国の教化せらるるまで」『婦人新報』 230,4-7.
- 久布白落実 (1916)「貞操の觀念と国家の将来」『婦人新報』 231,5-8.
- 久布白落実 (1916)「公娼廃止と飛田問題」『婦人新報』 232,5-8.
- 久布白落実 (1916)「矯風会は何を以て国家に貢献するや」『婦人新報』 233,5-9.
- 久布白落実 (1916)「教育運動の主旨」『婦人新報』 234,5-8.
- 久布白落実 (1917)「根本思想の改造」『婦人新報』 235,4-7.
- 久布白落実 (1917)「世界の一員」『婦人新報』 236,6-9.
- 久布白落実 (1917)「貞操問題に就て小学校教師に訴う」『婦人新報』 237,4-7.
- 久布白落実 (1917)「回顧と希望」『婦人新報』 238,4-7.
- 久布白落実 (1917)「大阪飛田洗滌運動」『婦人新報』 239,4-7.
- 久布白落実 (1917)「市を家となせ国を家となせ」『婦人新報』 240,4-7.
- 久布白落実 (1917)「九州中国巡回記」『婦人新報』 240,10-13.
- 久布白落実 (1917)「矯風会の内的歴史」『婦人新報』 241,1-10.
- 久布白落実 (1917)「母心の養成」『婦人新報』 242,3-6

久布白落実 (1917)「米国禁酒国とならんとす」『婦人新報』 242,18-19.  
 久布白落実 (1917)「世界に於ける禁酒の大勢」『婦人新報』 243,3-6.  
 久布白落実 (1917)「嗚呼飛田遊廓」『婦人新報』 244,2-6.  
 久布白落実 (1917)「本年度の会勢一般」『婦人新報』 245,4-8.  
 久布白落実 (1918)「三度大会を迎へんとして」『婦人新報』 247,5-8.  
 久布白落実 (1918)「世界の進運と国民的教育」『婦人新報』 248,5-8.  
 久布白落実 (1918)「苦勞」『婦人新報』 249,5-8.  
 久布白落実 (1918)「問題は少なるか」『婦人新報』 250,3-6.  
 久布白落実 (1918)「国民道德の根底を耕せ」『婦人新報』 251,1-4.  
 久布白落実 (1918)「夏来りぬ」『婦人新報』 252,1-4.  
 久布白落実 (1918)「第二十六回大会」『婦人新報』 253,6-8.  
 久布白落実 (1918)「生きんが為に醒めよ」『婦人新報』 254,1-4.  
 久布白落実 (1918)「勝利の確信」『婦人新報』 255,1-4.  
 久布白落実 (1918)「公娼全廃教育運動の三ヵ年」『婦人新報』 256,3-6.  
 久布白落実 (1919)「偉大なる時代の進運」『婦人新報』 259,3-6.  
 久布白落実 (1919)「歌ひて進め」『婦人新報』 260,6-9.  
 久布白落実 (1919)「五錢袋の一ヵ年」『婦人新報』 260,30-31.  
 久布白落実 (1919)「石叫ぶべし」『婦人新報』 261,1-4.  
 久布白落実 (1919)「第二十七回大会」『婦人新報』 262,4-8.  
 久布白落実 (1919)「婦人の見たる人種差別撤廃案」『婦人新報』 263,3-6.  
 久布白落実 (1919)「多事なる八月」『婦人新報』 265,3-6.  
 久布白落実 (1919)「基督教婦人矯風会の過去将来」『婦人新報』 266,3-6.  
 久布白落実 (1919)「島原天草の視察」『婦人新報』 266,11-13.  
 久布白落実 (1919)「婦人と人権」『婦人新報』 267,3-6.  
 久布白落実 (1919)「婦人の権利と公娼制度」『婦人新報』 268,1-4.  
 久布白落実 (1919)「基督教婦人矯風会と五十年の閱歴」『婦人新報』 269,1-4.  
 久布白落実 (1919)「慈愛館特別運動につきて」『婦人新報』 269,12-13.  
 久布白落実 (1920)「民族を担ふて世界に」『婦人新報』 270,3-6.  
 久布白落実 (1920)「矯風会の二大眼目」『婦人新報』 271,1-4.  
 久布白落実 (1920)「動爛の中心に立ちて」『婦人新報』 279,3-6.



久布白落実 (1920)「万国日曜学校大会と清物」『婦人新報』 279,16-17.  
久布白落実 (1920)「信の勝利」『婦人新報』 280,5-8.  
久布白落実 (1921)「基督教婦人矯風会の本領」『婦人新報』 281,2-5.  
久布白落実 (1921)「大正十年の大会を迎へんとして」『婦人新報』 282,4-7.  
久布白落実 (1921)「禁酒教科書について」『婦人新報』 282,13.  
久布白落実 (1921)「世界と共に」『婦人新報』 283,5-8.  
久布白落実 (1921)「第二十九回大会」『婦人新報』 284,4-7.  
久布白落実 (1921)「旅先から」『婦人新報』 284,44.  
久布白落実 (1921)「満鮮四十日の旅」『婦人新報』 285,8-13.  
久布白落実 (1921)「婦人参政権とは何ぞや」『婦人新報』 286,4-6.  
久布白落実 (1921)「八月」『婦人新報』 287,2-5.  
久布白落実 (1921)「機来れり全国の処女よ起て」『婦人新報』 288,1-4.  
久布白落実 (1921)「愛国心の三階段」『婦人新報』 289,3-6.  
久布白落実 (1921)「万国平和のために使者を送る」『婦人新報』 289,1-2.  
久布白落実 (1921)「生活の内に現るる神の像」『婦人新報』 290,4-5.  
久布白落実 (1921)「ゼーンアダムスとハルハウス」『婦人新報』 290,17-19.  
久布白落実 (1921)「社会改善の歓喜」『婦人新報』 291,2-5.  
久布白落実 (1921)「第四十五議會を迎えんとして」『婦人新報』 291,10-11.  
久布白落実 (1922)「日本婦人参政権協会」『婦人新報』 292,2-8.  
久布白落実 (1922)「性に対する思想の変遷」『婦人新報』 292,16-20.  
久布白落実 (1922)「大正十一年の大会を迎えんとして」『婦人新報』 293,2-5.  
久布白落実 (1922)「本部から」『婦人新報』 293,33.  
久布白落実 (1922)「デモクラシーの運用」『婦人新報』 294,1-5.  
久布白落実 (1922)「議会のぞき」『婦人新報』 294,11.  
久布白落実 (1922)「海外だより」『婦人新報』 294,22.  
久布白落実 (1922)「第三十会大会」『婦人新報』 295,2-5.  
久布白落実 (1922)「第四十五議會に於ける法律請願運動」『婦人新報』 295,18-20.  
久布白落実 (1922)「全国のキリスト教化」『婦人新報』 296,2-5.  
久布白落実 (1922)「東京市民の一員として」『婦人新報』 296,6.  
久布白落実 (1922)「海外だより」『婦人新報』 296,13-15.

久布白落実 (1922) 「江原先生を弔し、小橋女史を悼む」『婦人新報』 296,16-17.

久布白落実 (1922) 「何故に渡米するか」『婦人新報』 297,2-5.

久布白落実 (1922) 「休みと働」『婦人新報』 298,3-6.

久布白落実 (1922) 「公娼全廃教育運動の後を省みて」『婦人新報』 299,4-8.

久布白落実 (1922) 「拾年ぶりに故国を離れて (第一信)」『婦人新報』 301,18-23.

久布白落実 (1922) 「拾年ぶりに故国を離れて (第二信)」『婦人新報』 302,18-23.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第三信)」『婦人新報』 304,22-27.

久布白落実 (1923) 「唯今帰りました」『婦人新報』 306,2-8.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第四信)」『婦人新報』 306,23-30.

久布白落実 (1923) 「第三十一回大会」『婦人新報』 307,2-6.

久布白落実 (1923) 「青木庄蔵氏を送る」『婦人新報』 307,7.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第五信)」『婦人新報』 307,20-25.

久布白落実 (1923) 「我等の称うる婦人参政権」『婦人新報』 308,2-5.

久布白落実 (1923) 「大正十二年度の五銭袋に際して」『婦人新報』 308,20-21.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第六信)」『婦人新報』 308,24-30.

久布白落実 (1923) 「入学試験撤廃と婦人参政権」『婦人新報』 309,2-5.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第七信)」『婦人新報』 309,23-26.

久布白落実 (1923) 「第九回万国婦人参政権協会」『婦人新報』 309,6-7.

久布白落実 (1923) 「喜び迎えんとする平和の母ジェーンアダムス女史の印象」  
『婦人新報』 309,15.

久布白落実 (1923) 「第三回全国常置員会」『婦人新報』 310,2-5.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第八信)」『婦人新報』 310,29-33.

久布白落実 (1923) 「我等は如何なる帝都を建設すべきか」『婦人新報』 311,4-7.

久布白落実 (1923) 「帝都復興と公娼問題の解決」『婦人新報』 312,2-5.

久布白落実 (1923) 「拾年ぶりに故国を離れて (第九信)」『婦人新報』 312,35-38.

久布白落実 (1924) 「市民としての婦人」『婦人新報』 313,4-7.

久布白落実 (1924) 「去年の今頃 (一)」『婦人新報』 313,27-31.

久布白落実 (1924) 「復興の第一春を迎へんとして復興第一の春」『婦人新報』  
313,25-26.

久布白落実 (1924) 「公娼廃止は廓清の第一歩」『婦人新報』 314,3-6.

久布白落実 (1924)「リビングストーン女史を憶う」『婦人新報』 314,27.  
 久布白落実 (1924)「去年の今頃 (二)」『婦人新報』 314,28-31.  
 久布白落実 (1924)「将来の日本と禁酒」『婦人新報』 315,4-6.  
 久布白落実 (1924)「去年の今頃 (三)」『婦人新報』 315,20-25.  
 久布白落実 (1924)「廃娼の後に私娼をどうする？」『婦人新報』 316,2-5.  
 久布白落実 (1924)「国際連盟と公娼問題」『婦人新報』 316,13-14.  
 久布白落実 (1924)「一千万児童の禁酒教育に就て」『婦人新報』 316,9.  
 久布白落実 (1924)「第三十三回大会」『婦人新報』 317,2-5.  
 久布白落実 (1924)「今年の五銭袋」『婦人新報』 317,29-30.  
 久布白落実 (1924)「日米問題に就て」『婦人新報』 317,30.  
 久布白落実 (1924)「日米問題の根本的解決」『婦人新報』 318,4-11.  
 久布白落実 (1924)「総選挙に際して」『婦人新報』 318,23-24.  
 久布白落実 (1924)「詩なき人生」『婦人新報』 319,4-7.  
 久布白落実 (1924)「新内閣に望む」『婦人新報』 319,8-9.  
 久布白落実 (1924)「時評一米機と米艦の歓迎について」『婦人新報』 319,26-27.  
 久布白落実 (1924)「日本婦人の国際的覚醒」『婦人新報』 320,3-6.  
 久布白落実 (1924)「一ヵ年の回顧」『婦人新報』 321,2-5.  
 久布白落実 (1924)「北海道をめぐりて」『婦人新報』 321,6-12.  
 久布白落実 (1924)「共存共栄の歓び」『婦人新報』 322,2-3.  
 久布白落実 (1924)「北海道より東北を巡りて」『婦人新報』 322,13-21.  
 久布白落実 (1924)「公民となるまで」『婦人新報』 323,2-5.  
 久布白落実(1924)「日本基督教連盟第二回総会 日本組合教会総会」『婦人新報』  
 323,11-14.  
 久布白落実 (1925)「日米問題は解決せしか」『婦人新報』 324 ,4-7.  
 久布白落実 (1925)「日本婦人参政権協会の一ヵ年」『婦人新報』 324,8-9.  
 久布白落実 (1925)「故安藤太郎氏を悼む」『婦人新報』 324,17.  
 久布白落実 (1925)「広告と道徳」『婦人新報』 325,5-8.  
 久布白落実 (1925)「社会正義」『婦人新報』 325,20-22.  
 久布白落実 (1925)「創立第四十年の大会を迎へんとして」『婦人新報』 326,7-10.  
 久布白落実 (1925)「時事」『婦人新報』 326,21.

久布白落実 (1925) 「資料 なぜ英国は公娼廃止をしたか」『婦人新報』 326,35-36.  
 久布白落実 (1925) 「十年一昔」『婦人新報』 327,6-9.  
 久布白落実 (1925) 「公娼制度制限に関する提出者其他の演説 (議事録より)」  
     『婦人新報』 327,10-15.  
 久布白落実 (1925) 「第三十四回大会」『婦人新報』 328,8-11.  
 久布白落実 (1925) 「五銭袋の改名」『婦人新報』 328,48.  
 久布白落実 (1925) 「矢島先生逝く」『婦人新報』 329,6-8.  
 久布白落実 (1925) 「全国的政治教育の必要」『婦人新報』 329,9-12.  
 久布白落実 (1925) 「第八回全国社会事業大会 見記」『婦人新報』 329,13-15.  
 久布白落実 (1925) 「第十二回廓清会大会」『婦人新報』 329,16.  
 久布白落実 (1925) 「時事 自ら進んで特殊国となるか」『婦人新報』 329,18.  
 久布白落実 (1925) 「世相の不安とその対策」『婦人新報』 330,4-7.  
 久布白落実 (1925) 「福島県下二日の旅」『婦人新報』 330,8-9.  
 久布白落実 (1925) 「ロバートソンを読む」『婦人新報』 330,10-15.  
 久布白落実 (1925) 「恩師、愛師矢島楫先生」『婦人新報』 331,40-42.  
 久布白落実 (1925) 「謹而逝き給いし矢島楫子先生の霊に申す」『婦人新報』 331,43-44.  
 久布白落実 (1925) 「婦女禁売問題と婦人矯風会」『婦人新報』 332,4-7.  
 久布白落実 (1925) 「再び満州朝鮮を訪う」『婦人新報』 332,24-25.  
 久布白落実 (1925) 「我等の萬国基督教婦人矯風会」『婦人新報』 333,4-7.  
 久布白落実 (1925) 「露西亜に於ける婦人」『婦人新報』 333,8-10.  
 久布白落実 (1925) 「クリスマス」『婦人新報』 334,6-9.  
 久布白落実 (1925) 「婦人参政権運動を顧みて」『婦人新報』 334,10-11.  
 久布白落実 (1925) 「クリスマスの憶出一つ」『婦人新報』 334,21.  
 久布白落実 (1925) 「北陸部会訪問記」『婦人新報』 334,29-31.  
 久布白落実 (1926) 「希望」『婦人新報』 335,4-7.  
 久布白落実 (1926) 「四国巡り」『婦人新報』 335,28-31.  
 久布白落実 (1926) 「第三十五回大会を迎えんとして」『婦人新報』 336,4-7.  
 久布白落実 (1926) 「最近迎へた二人のまろうどー参政権の闘士ウエンザー女子来るー  
     モット博士と二日間」『婦人新報』 336,17-20.  
 久布白落実 (1926) 「謹而貴衆両院の諸彦に訴う」『婦人新報』 337,6-9.

久布白落実 (1926) 「第三十五回大会」『婦人新報』 附録,2-3.  
 久布白落実 (1926) 「第五十一議會を省みて」『婦人新報』 338,3-6.  
 久布白落実 (1926) 「形勢働く」『婦人新報』 339,3-8.  
 久布白落実 (1926) 「矯風会講座 公娼廃止後の欧米各国の状況 (英国の部)」『婦人新報』 339,9-13.  
 久布白落実 (1926) 「全国警察部長会議に対する特別運動日誌」『婦人新報』 339,33.  
 久布白落実 (1926) 「永遠の進軍」『婦人新報』 340,4-7.  
 久布白落実 (1926) 「矯風会講座 公娼制度廃止の欧米の状況 (英国の部) 続」『婦人新報』 340,16-18.  
 久布白落実 (1926) 「廃娼特別運動後報」『婦人新報』 340,28.  
 久布白落実 (1926) 「夏を迎う」『婦人新報』 341,2-5.  
 久布白落実 (1926) 「矯風会講座 公娼廃止後の欧米の状況 (英国の部) 三」『婦人新報』 341,6-12.  
 久布白落実 (1926) 「廃娼特別運動後報」『婦人新報』 341,24.  
 久布白落実 (1926) 「時の兆」『婦人新報』 342,2-6.  
 久布白落実 (1926) 「巡査日誌 (萬国婦人巡査協会提供)」『婦人新報』 342,30-31.  
 久布白落実 (1926) 「世界に於ける婦人参政権の動き」『婦人新報』 343,4-7.  
 久布白落実 (1926) 「廃娼特別運動後報」『婦人新報』 343,30.  
 久布白落実 (1926) 「四十年の戦」『婦人新報』 344,2-5.  
 久布白落実 (1926) 「基督教連盟第四回総会」『婦人新報』 344,32.  
 久布白落実 (1926) 「国家も亦母の祈りを要す」『婦人新報』 345,4-7.  
 久布白落実 (1926) 「矯風会講座 米国と私娼」『婦人新報』 345,8-12.  
 久布白落実 (1927) 「あゝ新年よ」『婦人新報』 346,2-5.  
 久布白落実 (1927) 「廃娼特別運動続報」『婦人新報』 346,22-23.  
 久布白落実 (1927) 「矯風会講座 欧州諸国に於ける私娼」『婦人新報』 346,6-9.  
 久布白落実 (1927) 「大正を送りて昭和を迎う」『婦人新報』 347,4-7.  
 久布白落実 (1927) 「第五十二議會に対する法律運動」『婦人新報』 347,23.  
 久布白落実 (1927) 「第三十六回大会に際して」『婦人新報』 348,4-7.  
 久布白落実 (1927) 「婦女児童禁売年齢保留撤廃に就て」『婦人新報』 348,13-14.  
 久布白落実 (1927) 「廓清特別運動募金纂報」『婦人新報』 348,25-27.

久布白落実 (1927)「婦人新報」『婦人新報』 349,4-7.  
久布白落実 (1927)「政治読本」『婦人新報』 349,24.  
久布白落実 (1927)「第三十六回大会」『婦人新報』 350,4-5.  
久布白落実 (1927)「公娼全廃教育運動」『婦人新報』 350,22-23.  
久布白落実 (1927)「北海道巡り」『婦人新報』 350,26-28.  
久布白落実 (1927)「娼妓の社会は実現し得るか」『婦人新報』 351,2-5.  
久布白落実 (1927)「祈」『婦人新報』 352,2-4.  
久布白落実 (1927)「矢島先生の命日に内相詣」『婦人新報』 352,23.  
久布白落実 (1927)「台湾旅行」『婦人新報』 352,29-31.  
久布白落実 (1927)「八月」『婦人新報』 353,2-3.  
久布白落実 (1927)「男子貞操義務」『婦人新報』 354,2-4.  
久布白落実 (1927)「此の夏は」『婦人新報』 354,29-31.  
久布白落実 (1927)「秋来る」『婦人新報』 355,2-5.  
久布白落実 (1927)「会員募集」『婦人新報』 355,6.  
久布白落実 (1927)「シンガポール問題」『婦人新報』 355,20-21.  
久布白落実 (1927)「平和の世界は果して来るか」『婦人新報』 356,2-6.  
久布白落実 (1927)「シンガポールのこと」『婦人新報』 356,32-33.  
久布白落実 (1927)「巻きもどす一ヶ年の会」『婦人新報』 357,2-5.  
久布白落実 (1927)「第五十四議会に対する運動」『婦人新報』 357,20-21.  
久布白落実 (1928)「昭和三年を迎う」『婦人新報』 358,2-5.  
久布白落実 (1928)「国民半数による総選挙」『婦人新報』 359,2-5.  
久布白落実 (1928)「国会解散」『婦人新報』 359,25-26.  
久布白落実 (1928)「バトラー夫人を憶う」『婦人新報』 361,27-30.  
久布白落実 (1928)「国際良心の涵養」『婦人新報』 363,6-9.  
久布白落実 (1928)「新緑滴る我が日の本」『婦人新報』 364,4-7.  
久布白落実 (1928)「矯風会講座 娼妓後の欧州」『婦人新報』 364,8-13.  
久布白落実 (1928)「隣邦中華民国」『婦人新報』 365,2-5.  
久布白落実 (1928)「汎太平洋婦人会議」『婦人新報』 365,16-17.  
久布白落実 (1928)「北欧諸国の禁酒状態」『婦人新報』 366,12-17.  
久布白落実 (1928)「純潔」『婦人新報』 367,2-5.

久布白落実 (1928)「昨今の私」『婦人新報』 368,26-27.  
 久布白落実 (1928)「昭和維新」『婦人新報』 369,4-7.  
 久布白落実 (1928)「京都の特別運動」『婦人新報』 369,32-33.  
 久布白落実 (1929)「五十年来廃娼の歩み」『婦人新報』 370,4-5.  
 久布白落実 (1929)「婦人と公民権」『婦人新報』 371,4-5.  
 久布白落実 (1929)「公民となったなら」『婦人新報』 371,7-9.  
 久布白落実 (1929)「第三十八回大会来る」『婦人新報』 372,4-5.  
 久布白落実 (1929)「第五十六議会運動の跡を顧みて (社説)」『婦人新報』 373,6-7.  
 久布白落実 (1929)「廃娼案の上程」『婦人新報』 373,19.  
 久布白落実 (1929)「ビラ配り百面相」『婦人新報』 373,26-27.  
 久布白落実 (1929)「天地は歌う (社説)」『婦人新報』 374,4-5.  
 久布白落実 (1929)「行楽の春」『婦人新報』 374,36-37.  
 久布白落実 (1929)「売淫公認制度撤廃運動 (社説)」『婦人新報』 375,4-5.  
 久布白落実 (1929)「英国の第二次労働内閣 (社説)」『婦人新報』 376,6-7.  
 久布白落実 (1929)「涼しき心 (社説)」『婦人新報』 377,4-5.  
 久布白落実 (1929)「国家的廃酒日の成立 (社説)」『婦人新報』 378,6-7.  
 久布白落実 (1929)「労働問題物語」『婦人新報』 378,14-19.  
 久布白落実 (1929)「樺太」『婦人新報』 378,38-40.  
 久布白落実 (1929)「廃娼の完成期を前にして 矢島島田両先生を憶う」『婦人新報』  
 379,4-5.  
 久布白落実 (1929)「労働問題物語 (二)」『婦人新報』 379,13-16.  
 久布白落実 (1929)「我会十年の歴史 (一)」『婦人新報』 379,22-24.  
 久布白落実 (1929)「労働問題物語 (三)」『婦人新報』 380,14-17.  
 久布白落実 (1929)「昭和四年を送る」『婦人新報』 381,4-5.  
 久布白落実 (1929)「労働問題物語 (四)」『婦人新報』 381,12-14.  
 久布白落実 (1929)「ガントレット・林両副会頭を送る」『婦人新報』 381,16.  
 久布白落実 (1929)「我会の歴史 (二)」『婦人新報』 381,18-20.  
 久布白落実 (1930)「世界を一家として (社説)」『婦人新報』 382,4-5.  
 久布白落実 (1930)「スタンレー・ジョーンズと印度」『婦人新報』 382,16-18.  
 久布白落実 (1930)「総選挙と婦人 (社説)」『婦人新報』 383,6-7.

久布白落実 (1930)「婦選史上を飾る人々」『婦人新報』383,18-20.  
 久布白落実 (1930)「労働問題物語 (五)」『婦人新報』383,26-30.  
 久布白落実 (1930)「民法刑法改正法律案」『婦人新報』383,37.  
 久布白落実 (1930)「第三十九回大会 (社説)」『婦人新報』384,6-7.  
 久布白落実 (1930)「東洋労働物語 (一) 支那」『婦人新報』384,24-27.  
 久布白落実 (1930)「僚友結婚について」『婦人新報』384,34-37.  
 久布白落実 (1930)「帝都の復興と婦人 (社説)」『婦人新報』385,6-7.  
 久布白落実 (1930)「東洋労働物語 (二) 印度」『婦人新報』385,22-25.  
 久布白落実 (1930)「平和使節帰る (社説)」『婦人新報』386,4-5.  
 久布白落実 (1930)「結婚と道徳 パートランドラッセル新著」『婦人新報』386,38-40.  
 久布白落実 (1930)「矢島先生を憶う (社説)」『婦人新報』387,6-7.  
 久布白落実 (1930)「米國禁酒法の撤回問題」『婦人新報』387,8-9.  
 久布白落実 (1930)「東洋労働物語」『婦人新報』387,20-23.  
 久布白落実 (1930)「婦人参政権運動に関して (社説)」『婦人新報』388,6-7.  
 久布白落実 (1930)「完全公民権か制限公民権か (社説)」『婦人新報』389,4-5.  
 久布白落実 (1930)「不景氣打破と運命の開展 (社説)」『婦人新報』390,4-5.  
 久布白落実 (1930)「公民たる暁には」『婦人新報』390,32-34.  
 久布白落実 (1930)「満鮮三々々の旅」『婦人新報』390,50-51.  
 久布白落実 (1930)「全国町村の婦人は公民権を要せざるか (社説)」『婦人新報』391,4-5.  
 久布白落実 (1930)「日本娼婦運動物語 (一)」『婦人新報』391,6-13.  
 久布白落実 (1930)「東京市 (市町村制)」『婦人新報』391,23-27.  
 久布白落実 (1930)「十一月十一日 (社説)」『婦人新報』392,6-7.  
 久布白落実 (1930)「日本娼婦運動物語 (二)」『婦人新報』392,22-29.  
 久布白落実 (1930)「樺太本斗町 (市町村制)」『婦人新報』392,33-35.  
 久布白落実 (1931)「一九三一年 (社説)」『婦人新報』394,8-9.  
 久布白落実 (1931)「日本娼婦運動物語 (三)」『婦人新報』394,22-28.  
 久布白落実 (1931)「刮目すべき婦人界の動き」『婦人新報』395,4-5.  
 久布白落実 (1931)「日本娼婦運動物語 (四)」『婦人新報』395,7-14.  
 久布白落実 (1931)「大会を迎えんとして (社説)」『婦人新報』396,4-5.  
 久布白落実 (1931)「日本娼婦運動物語 (五)」『婦人新報』396,7-13.



久布白落実 (1931)「廃娼完成の暁には (社説)」『婦人新報』 397,6-7.  
久布白落実 (1931)「日本廃娼運動物語 (六)」『婦人新報』 397,14-19.  
久布白落実 (1931)「廃娼施設とその背景」『婦人新報』 397,24-27.  
久布白落実 (1931)「第二次若槻内閣に望む (社説)」『婦人新報』 398,4-5.  
久布白落実 (1931)「廃娼運動物語 (七)」『婦人新報』 398,20-26.  
久布白落実 (1931)「会の発展と充実 (社説)」『婦人新報』 399,6-7.  
久布白落実 (1931)「婦人参政権と其思想的背景 (スチュアート・ミルの婦人の服従を  
読みて)」『婦人新報』 399,30-32.  
久布白落実 (1931)「涙と汗」『婦人新報』 400,6-7.  
久布白落実 (1931)「左甚五郎の作」『婦人新報』 400,18-21.  
久布白落実 (1931)「婦人参政権と其思想的背景 (二)」『婦人新報』 400,38-39.  
久布白落実 (1931)「萬国会頭ゴルドン女史」『婦人新報』 401,6-7.  
久布白落実 (1931)「半年ぶりに募金運動」『婦人新報』 401,48.  
久布白落実 (1931)「九月一日 (社説)」『婦人新報』 402,4-5.  
久布白落実 (1931)「婦人参政権と其理論的根底 (三)」『婦人新報』 402,26-29.  
久布白落実 (1931)「大阪握飯運動後報」『婦人新報』 402,46.  
久布白落実 (1931)「東京部会五百人の同志に訴う」『婦人新報』 403,4-5.  
久布白落実 (1931)「國際連盟と日本 (社説)」『婦人新報』 404,4-5.  
久布白落実 (1931)「隣邦中華民国」『婦人新報』 404,8-11.  
久布白落実 (1931)「一九三一年を送る」『婦人新報』 405,4-5.  
久布白落実 (1931)「時局に対する矯風会の態度」『婦人新報』 405,6-9.  
久布白落実 (1932)「満蒙問題に関する新光明」『婦人新報』 406,8-11.  
久布白落実 (1932)「總選挙と婦人」『婦人新報』 407,6-7.  
久布白落実 (1932)「上海・南京訪問と日支の将来」『婦人新報』 407,9-13.  
久布白落実 (1932)「満蒙上海二人旅」『婦人新報』 407,42-48.  
久布白落実 (1932)「第四十一回大会来る」『婦人新報』 408,6-7.  
久布白落実 (1932)「婦人矯風会と其存在価値」『婦人新報』 409,6-7.  
久布白落実 (1932)「第六十二議会」『婦人新報』 410,6-7.  
久布白落実 (1932)「五月と六月」『婦人新報』 411,6-7.  
久布白落実 (1932)「廃娼が出来たらどうなる？」『婦人新報』 411,9-12.

久布白落実 (1932) 「指導精神の提供」『婦人新報』 412,6-7.  
久布白落実 (1932) 「新生命線は何處」『婦人新報』 412,35-37.  
久布白落実 (1932) 「米国の禁酒はどうなる」『婦人新報』 413,6-7.  
久布白落実 (1932) 「新生命線は何處 (南米の巷)」『婦人新報』 413,46-47.  
久布白落実 (1932) 「又々九月一日を迎う」『婦人新報』 414,6-7.  
久布白落実 (1932) 「廢娼になる道行き」『婦人新報』 415,8-11.  
久布白落実 (1932) 「非常時に処するの道 (社説)」『婦人新報』 416,6-7.  
久布白落実 (1932) 「佛教界の處女地を往く」『婦人新報』 416,41-43.  
久布白落実 (1932) 「クリスマス」『婦人新報』 417,6-7.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 418,6-7.  
久布白落実 (1933) 「自由論壇 廢娼と經濟問題」『婦人新報』 418,32-35.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 419,6-7.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 420,6-7.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 421,6-7.  
久布白落実 (1933) 「宣教百年の調査報告を読みて」『婦人新報』 421,44-47.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 422,6-7.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 423,6-7.  
久布白落実 (1933) 「講座 廢娼したあとの行政 (一)」『婦人新報』 423,10-13.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 424,4-5.  
久布白落実 (1933) 「公娼を廢止したあとの行政 (二)」『婦人新報』 424,6-10.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 425,4-5.  
久布白落実 (1933) 「公娼制度撤廢と遊廓業者」『婦人新報』 425,22-23.  
久布白落実 (1933) 「北欧の禁酒問題」『婦人新報』 426,16-19.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 427,4-5.  
久布白落実 (1933) 「純潔問題の種々相」『婦人新報』 427,6-14.  
久布白落実 (1933) 「廢娼今日の運動」『婦人新報』 427,30-31.  
久布白落実 (1933) 「平和は果して来るか」『婦人新報』 428,4-5.  
久布白落実 (1933) 「社説」『婦人新報』 429,4-5.  
久布白落実 (1934) 「1934 年 (社説)」『婦人新報』 430,4-5.  
久布白落実 (1934) 「二月 (社説)」『婦人新報』 431,4-5.

久布白落実 (1934)「矯風会講座 廢娼の出来た後」『婦人新報』 431,6-10.

久布白・伊藤秀ほか(1934)「伊藤秀吉・久布白落実二氏に轉換期の廢娼諸問題に就いて聴く会」『婦人新報』 431,20-29.

久布白落実 (1934)「第四十三回大会 (社説)」『婦人新報』 432,4-5.

久布白落実 (1934)「風俗部の将来」『婦人新報』 432,8-11.

久布白落実 (1934)「矢島先生生誕百年記念」『婦人新報』 433,4-7.

久布白落実 (1934)「矢島楫子先生の全貌」『婦人新報』 433,8-13.

久布白落実 (1934)「廢娼連盟と今後の動き」『婦人新報』 433,14-17.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 434,4-5.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 435,4-5.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 436,4-5.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 437,4-5.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 438,4-5.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 439,4-5.

久布白落実 (1934)「全国的大暴風水害」『婦人新報』 439,18-19.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 440,4-5.

久布白落実 (1934)「社説」『婦人新報』 441,4-5.

久布白落実 (1934)「東北六県の訪問」『婦人新報』 441,6-14.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 442,4-5.

久布白落実 (1935)「純潔問題」『婦人新報』 442,12-15.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 443,4-5.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 444,4-5.

久布白落実 (1935)「一月の北海道へ」『婦人新報』 444,42-45.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 445,4-5.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 446,4-5.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 447,4-5.

久布白落実 (1935)「筆者の言葉」『婦人新報』 447,17.

久布白落実 (1935)「米国便り」『婦人新報』 450,18-19.

久布白落実 (1935)「帰朝御挨拶」『婦人新報』 452,6-7.

久布白落実 (1935)「社説」『婦人新報』 453,4-5.

久布白落実 (1935)「南北米百五十日の旅」『婦人新報』 453,6-15.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 454,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (一) 1935 年度研究発表」『婦人新報』 454,6-11.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 455,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (二)」『婦人新報』 455,6-12.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 456,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (三)」『婦人新報』 456,8-11.  
久布白落実 (1936)「二月七日の陳情」『婦人新報』 456,14-15.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 457,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (四)」『婦人新報』 457,6-10.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 458,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (五)」『婦人新報』 458,20-27.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 459,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (六)」『婦人新報』 459,8-12  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 460,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (七)」『婦人新報』 460,6-9.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 461,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (八)」『婦人新報』 461,6-11.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 462,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (九)」『婦人新報』 462,6-10.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 463,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (十)」『婦人新報』 463,6-11.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 464,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (十一)」『婦人新報』 464,6-10.  
久布白落実 (1936)「社説」『婦人新報』 465,4-5.  
久布白落実 (1936)「純潔日本の建設 (十二)」『婦人新報』 465,6-11.  
久布白落実 (1937)「巻頭言 一九三七年」『婦人新報』 466,3.  
久布白落実 (1937)「修養 何故に基督教か」『婦人新報』 466,4-5.  
久布白落実 (1937)「我が国に於ける性教育 (一)」『婦人新報』 466,14-19.  
久布白落実 (1937)「隠れたる同労者」『婦人新報』 466,37.

久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 467,3.  
久布白落実 (1937)「修養 我等の聖書」『婦人新報』 467,4-5.  
久布白落実 (1937)「我が国に於ける性教育 (二)」『婦人新報』 467,19-24.  
久布白落実 (1937)「世界の忙しい奥様」『婦人新報』 467,40.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 468,3.  
久布白落実 (1937)「修養 讃美」『婦人新報』 468,4-5.  
久布白落実 (1937)「我が国に於ける性教育 (三)」『婦人新報』 468,8-14.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 469,3.  
久布白落実 (1937)「修養 活ける神」『婦人新報』 469,4-5.  
久布白落実 (1937)「我が国に於ける性教育 (四)」『婦人新報』 469,6-12.  
久布白落実 (1937)「母子保護法案通過の貴衆両院を視る」『婦人新報』 469,13.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 470,3.  
久布白落実 (1937)「修養 社会正義の擁護者たる神」『婦人新報』 470,4-5.  
久布白落実 (1937)「我が国に於ける性教育 (五)」『婦人新報』 470,22-25.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 471,3.  
久布白落実 (1937)「修養 統御め給ふ神」『婦人新報』 471,4-5.  
久布白落実 (1937)「我が国に於ける性教育 (六)」『婦人新報』 471,8-12.  
久布白落実 (1937)「全国の同志へ 廃酒部について」『婦人新報』 471,22.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 472,3.  
久布白落実 (1937)「修養 神の国の建設」『婦人新報』 472,4-5.  
久布白落実 (1937)「国民の種々層と性問題 (一)」『婦人新報』 472,6-10.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 473,3.  
久布白落実 (1937)「修養 神の国建設の礎石」『婦人新報』 473,4-5.  
久布白落実 (1937)「国民の種々層と性問題 (二)」『婦人新報』 473,6-10.  
久布白落実 (1937)「青年部の皆様へ」『婦人新報』 473,37.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 474,3.  
久布白落実 (1937)「修養 祈」『婦人新報』 474,4-5.  
久布白落実 (1937)「国民の種々層と性問題 (三)」『婦人新報』 474,20-25.  
久布白落実 (1937)「巻頭言」『婦人新報』 475,3.  
久布白落実 (1937)「修養」『婦人新報』 475,4-5.

久布白落実 (1937)「国民の種々層と性問題 (四)」『婦人新報』 475,6-10.

久布白落実 (1937)「巻頭言 満州国の再認識」『婦人新報』 476,1.

久布白落実 (1937)「修養 我等未だ救はれず」『婦人新報』 476,4-5.

久布白落実 (1937)「国民の種々層と性問題 (五)」『婦人新報』 476,6-11.

久布白落実 (1937)「北支北満を廻りて」『婦人新報』 476,20-24.

久布白落実 (1937)「巻頭言 国民外交の黎明」『婦人新報』 477,3.

久布白落実 (1937)「修養 神に帰れキリストに帰れ」『婦人新報』 477,4-5.

久布白落実 (1937)「国民の種々層と性問題 (六)」『婦人新報』 477,6-11.

久布白落実 (1938)「巻頭言 一九三八年」『婦人新報』 478,2-3.

久布白落実 (1938)「新しきものの魅力」『婦人新報』 478,4-5.

久布白落実 (1938)「廃娼案の勝利」『婦人新報』 478,12-13.

久布白落実 (1938)「巻頭言」『婦人新報』 479,2-3.

久布白落実 (1938)「聖書に於けるデリカシー」『婦人新報』 479,4-5.

久布白落実 (1938)「廃酒運動と今後我等の進む可き途」『婦人新報』 479,12-15.

久布白落実 (1938)「現代と信仰」『婦人新報』 480,4-5.

久布白落実 (1938)「来らんとする五十年に於ける純潔運動体系」『婦人新報』 480,13.

久布白落実 (1938)「是丈けは」『婦人新報』 481,4-5.

久布白落実 (1938)「小崎弘道老先生を悼む」『婦人新報』 481,20.

久布白落実 (1938)「来らんとする五十年に於ける純潔運動体系」『婦人新報』 481,28.

久布白落実 (1938)「巻頭言」『婦人新報』 482,2-3.

久布白落実 (1938)「二里の宗教」『婦人新報』 482,4-5.

久布白落実 (1938)「来らんとする五十年に於ける純潔運動体系」『婦人新報』 482,27.

久布白落実 (1938)「巻頭言」『婦人新報』 483,2-3.

久布白落実 (1938)「人生の三階梯」 483,4-5.

久布白落実 (1938)「来らんとする五十年に於ける平和運動体系」『婦人新報』 483,17.

久布白落実 (1938)「巻頭言」『婦人新報』 484,2-3.

久布白落実 (1938)「青年と冒険」『婦人新報』 484,4-5.

久布白落実 (1938)「巻頭言」『婦人新報』 485,2-3.

久布白落実 (1938)「読書と人生」『婦人新報』 485,4-5.

久布白落実 (1938)「学生と母の懇談会」『婦人新報』 485,22-23.

久布白落実 (1938) 「国民的体勢調正の秋」『婦人新報』 486,2-3.  
久布白落実 (1938) 「智者善人と教育」『婦人新報』 486,4-5.  
久布白落実 (1938) 「拡大されし家持」『婦人新報』 487,2-3.  
久布白落実 (1938) 「智恵あるものを責めよ」『婦人新報』 487,4-5.  
久布白落実 (1938) 「純潔日本建設の一方面」『婦人新報』 487,10-13.  
久布白落実 (1938) 「時局欄 北支医療セツルメントの其後」『婦人新報』 487,14.  
久布白落実 (1938) 「知識階級の動員」『婦人新報』 488,2-3.  
久布白落実 (1938) 「救ひの喜び」『婦人新報』 488,4-5.  
久布白落実 (1938) 「千年も一日の如く」『婦人新報』 489,4-5.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 491,4-5.  
久布白落実 (1939) 「印度ゆき (一)」『婦人新報』 491,10-12.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 492,4-5.  
久布白落実 (1939) 「印度ゆき (二)」『婦人新報』 492,18-21.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 493,4-5.  
久布白落実 (1939) 「印度ゆき (三)」『婦人新報』 493,6-9.  
久布白落実 (1939) 「我会の恩人」『婦人新報』 493,18.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 494,4-5.  
久布白落実 (1939) 「オールズ夫人を悼む」『婦人新報』 494,19.  
久布白落実 (1939) 「花柳病予防法改正案批判」『婦人新報』 494,20-23.  
久布白落実 (1939) 「印度ゆき (四)」『婦人新報』 494,26-29.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 495,4-5.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 496,4-5.  
久布白落実 (1939) 「東亜巡り三週間半」『婦人新報』 496,16-18.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 497,4-5.  
久布白落実 (1939) 「純潔日本の建設 (一)」『婦人新報』 497,26-29.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 498,4-5.  
久布白落実 (1939) 「純潔日本の建設 (二) 身売防止の徹底」『婦人新報』 498,11-15.  
久布白落実 (1939) 「純潔」『婦人新報』 499,3.  
久布白落実 (1939) 「社説」『婦人新報』 499,4-5.  
久布白落実 (1939) 「純潔日本の建設 (三) 身売防止は出来る」『婦人新報』 499,12-16.

久布白落実・千本木道子ほか (1939)「『移民問題』座談会」『婦人新報』499,20-29.

久布白落実 (1939)「婦人新報五百号に際して」『婦人新報』500,8-11.

久布白落実 (1939)「『編纂の思い出を語る』座談会」『婦人新報』500,32-37.

久布白落実 (1939)「クリスマス」『婦人新報』501,3.

久布白落実 (1939)「社説」『婦人新報』501,4-5.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』502,4-5.

久布白落実 (1940)「皇紀二千六百年と矯風会」『婦人新報』502,14-16.

久布白落実 (1940)「和田邦子女史を悼む」『婦人新報』502,21.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』503,4-5.

久布白落実 (1940)「皇紀二千六百年の大会を迎ふ」『婦人新報』503,6-8.

久布白落実 (1940)「米寿の矢島先生と会員」『婦人新報』503,9.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』504,4-5.

久布白落実 (1940)「第七十五議会と禁酒法」『婦人新報』504,14-17.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』505,4-5.

久布白落実 (1940)「矛盾」『婦人新報』505,12-13.

久布白落実 (1940)「会員の増加に関して」『婦人新報』505,20-21.

久布白落実 (1940)「山室先生を憶ふ」『婦人新報』505,24.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』506,4-5.

久布白落実 (1940)「会員募集と新支部」『婦人新報』506,17.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』507,4-5.

久布白落実 (1940)「国民禁酒同盟大会」『婦人新報』507,10-13.

久布白落実 (1940)「小室篤次牧師の長逝」『婦人新報』507,36.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』508,4-5.

久布白落実 (1940)「林歌子女史喜寿記念会に関して」『婦人新報』508,6-9.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』509,4-5.

久布白落実 (1940)「性教育文庫について」『婦人新報』509,6-9.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』510,4-5.

久布白落実 (1940)「酒なし日運動と興亜の事業」『婦人新報』510,6-9.

久布白落実 (1940)「社説」『婦人新報』511,4-5.

久布白落実 (1940)「新体制と婦人矯風会」『婦人新報』511,6-9.



久布白落実 (1940) 「社説」『婦人新報』 512,4-5.

久布白落実 (1940) 「新体制化の純潔運動」『婦人新報』 512,16-19.

久布白落実 (1940) 「新体制化の純潔運動」『婦人新報』 513,14-17.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 514,4-5.

久布白落実 (1941) 「林会頭の喜寿を祝ふ」『婦人新報』 514,6.

久布白落実 (1941) 「性病予防法の改正」『婦人新報』 514,18-19.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 515,4-5.

久布白落実 (1941) 「新体制化の純潔運動」『婦人新報』 515,12-15.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 516,4-5.

久布白落実 (1941) 「新体制化の純潔運動」『婦人新報』 516,22-25.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 517,4-5.

久布白落実 (1941) 「新体制化の純潔運動」『婦人新報』 517,18-21.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 518,4-5.

久布白落実 (1941) 「国民厚生運動と食糧増産」『婦人新報』 518,18-20.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 519,4-5.

久布白落実 (1941) 「教会合同の成立と婦人矯風会」『婦人新報』 519,18-21.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 520,4-5.

久布白落実 (1941) 「純潔日本の建設」『婦人新報』 520,10-13.

久布白落実 (1941) 「矯風」『婦人新報』 521,4-5.

久布白落実 (1941) 「北より北へ」『婦人新報』 521,20-23.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 522,4-5.

久布白落実 (1941) 「時事雑感」『婦人新報』 522,24-27.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 523,4-5.

久布白落実 (1941) 「性病撲滅に関する矯風会の一進展」『婦人新報』 523,20-22.

久布白落実 (1941) 「社説」『婦人新報』 524,2-3.

久布白落実 (1941) 「純潔日本建設のプログラムと黎明会」『婦人新報』 524,18-19.

久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 526,4-5.

久布白落実 (1942) 「我等の職域奉公」『婦人新報』 527,7-9.

久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 528,2-3.

久布白落実 (1942) 「消極より積極へ」『婦人新報』 528,10-12.

久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 529,2-3.  
久布白落実 (1942) 「新年度に於ける我等の進むべき道」『婦人新報』 529,8-10.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 530,2-3.  
久布白落実 (1942) 「矯風会の事業」『婦人新報』 530,10-12.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 531,2-3.  
久布白落実 (1942) 「我等の先達」『婦人新報』 531,4-6.  
久布白落実 (1942) 「二つの要鮎」『婦人新報』 531,8-9.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 532,2-3.  
久布白落実 (1942) 「人口国策と矯風会」『婦人新報』 532,10-12.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 533,2-3.  
久布白落実 (1942) 「我が会の心」『婦人新報』 533,8-9.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 534,2-3.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 535,2-3.  
久布白落実 (1942) 「秋の働き」『婦人新報』 535,11-13.  
久布白落実 (1942) 「社説」『婦人新報』 536,2-3.  
久布白落実 (1942) 「純潔日本建設途上における性病問題」『婦人新報』 536,4-7.  
久布白落実 (1942) 「現下我等の行く可き道」『婦人新報』 537,6-8.  
久布白落実 (1943) 「社説」『婦人新報』 538,2.  
久布白落実 (1943) 「新年度の事業」『婦人新報』 538,3-5.  
久布白落実 (1943) 「会を支へる三つの柱」『婦人新報』 538,10.  
久布白落実 (1943) 「社説」『婦人新報』 539,1.  
久布白落実 (1943) 「九州に於ける第一回興亜女子指導者講習会」『婦人新報』 539,9-11.  
久布白落実 (1943) 「社説」『婦人新報』 540,1.  
久布白落実 (1943) 「大会を終へて」『婦人新報』 540,5-7.  
久布白落実 (1943) 「社説」『婦人新報』 541,2.  
久布白落実 (1943) 「産業戦士を護れ」『婦人新報』 541,5-7.  
久布白落実 (1943) 「社説」『婦人新報』 542,2.  
久布白落実 (1943) 「決戦下国防に於ける我等の領域」『婦人新報』 542,3-4.  
久布白落実 (1943) 「六月の矯風会」『婦人新報』 543,2-3.  
久布白落実 (1943) 「矯風会幹部練成会記録」『婦人新報』 544,2-3.

久布白落実 (1943)「鍊成会にのぞみて」『婦人新報』 544,5.  
久布白落実 (1943)「決戦態勢下の矯風会」『婦人新報』 545,2-3.  
久布白落実 (1943)「社説」『婦人新報』 546,2-3.  
久布白落実 (1943)「秋の活動」『婦人新報』 547,2-3.  
久布白落実 (1943)「社説」『婦人新報』 548,2-3.  
久布白落実 (1943)「年末にあたりて」『婦人新報』 549,2-3.  
久布白落実 (1944)「社説」『婦人新報』 550,2-3.  
久布白落実 (1944)「社説」『婦人新報』 551,2-3.  
久布白落実 (1944)「必勝祈願酒断ち講の旗揚げ」『婦人新報』 551,2-3.  
久布白落実 (1944)「決戦下の矯風会」『婦人新報』 552,1-2.  
久布白落実 (1944)「三月」『婦人新報』 552,3-4.  
久布白落実 (1944)「お知らせ」『婦人新報』 553,1.  
久布白落実 (1944)「半世紀を越ゆる婦人新報」『婦人新報』 553,2.  
久布白落実 (1945)「婦人新報の再刊に当たりて」『婦人新報』 554,2-4.  
久布白落実 (1946)「私のこと」『婦人新報』 555,4.  
久布白落実 (1946)「廃娼完成の歓喜と純潔日本への邁進」『婦人新報』 556,1.  
久布白落実 (1946)「林会頭を憶ふ」『婦人新報』 557,4-5.  
久布白落実 (1946)「このごろの出来こと」『婦人新報』 559,4.  
久布白落実 (1946)「我国の新憲法」『婦人新報』 560,1-5.  
久布白落実 (1946)「民法刑法の改正について」『婦人新報』 562,1-4.  
久布白落実 (1946)「新憲法と地方選挙について」『婦人新報』 564,2.  
久布白落実 (1947)「1947 年度に於ける矯風会の進路」『婦人新報』 565,5.  
久布白落実 (1947)「廃娼後の施設と矯風会」『婦人新報』 566,6.  
久布白落実 (1947)「全国支部の皆様へ」『婦人新報』 570,8.  
久布白落実 (1947)「姦通罪問題と婦人矯風会」『婦人新報』 571,4.  
久布白落実 (1947)「講和会議を前にして」『婦人新報』 572,6.  
久布白落実 (1947)「全国講演行脚 (第一回)」『婦人新報』 573,4.  
久布白落実 (1947)「第六十二回創立記念日」『婦人新報』 574,6.  
久布白落実 (1948)「1948 年を迎う」『婦人新報』 575,2.  
久布白落実 (1948)「林先生を憶う」『婦人新報』 577,1.

久布白落実 (1948)「国の隅々に」『婦人新報』 579,2.

久布白落実 (1948)「ある日の先生」『婦人新報』 579,4-5.

久布白落実 (1948)「三つの忘れもの」『婦人新報』 580,1.

久布白落実 (1948)「家庭を護る二つの鍵—第二国会を通過した性病予防法」『婦人新報』 581,2-6.

久布白落実 (1948)「官郷夫人と甲州を巡りて」『婦人新報』 583,2.

久布白落実 (1948)「第六十三回創立記念日を迎えて」『婦人新報』 585,6-7.

久布白落実 (1949)「総選挙のあとを顧みて」『婦人新報』 588,2-7.

久布白落実 (1950)「千九百五十年に寄せて—私の仕事と抱負」『婦人新報』 597,6-9.

久布白落実 (1950)「純潔問題と矯風会」『婦人新報』 602,4.

久布白落実 (1950)「全国同志の皆様へ」『婦人新報』 606,2-3.

久布白落実 (1950)「湯の町問題と婦人矯風会」『婦人新報』 606,9-10.

久布白落実 (1950)「矯風会の今後進むべき道」『婦人新報』 607,2-4.

久布白落実 (1950)「島津とし子さんを憶う」『婦人新報』 607,10.

久布白落実 (1951)「1951 年度の矯風会」『婦人新報』 608,3.

久布白落実 (1951)「平和と講和と我等の道」『婦人新報』 609,10.

久布白落実 (1951)「変化の世界に不変の法則」『婦人新報』 610,4.

久布白落実 (1951)「千本木道子氏を憶う」『婦人新報』 611,11.

久布白落実 (1951)「評議員会の成果」『婦人新報』 612,8.

久布白落実 (1951)「終まで耐え忍ぶもの」『婦人新報』 613,4.

久布白落実 (1951)「会勢拡張特別委員会」『婦人新報』 614,6.

久布白落実 (1951)「秋に備えて」『婦人新報』 615,8.

久布白落実 (1951)「九十歳でも何のその」『婦人新報』 615,10.

久布白落実 (1951)「勅令第九号法制化運動について」『婦人新報』 616,7-8.

久布白落実 (1951)「1951 年を送らんとして」『婦人新報』 617,3-4.

久布白落実 (1951)「日本基督教婦人矯風会創立六十六周年を迎えて」『婦人新報』 617,5-6.

久布白落実 (1952)「平和問題と矯風会」『婦人新報』 618,3.

久布白落実 (1952)「勅令九号の其後」『婦人新報』 618,14.

久布白落実 (1952)「街に拾う」『婦人新報』 618,16.

久布白落実 (1952) 「除夜の鐘」『婦人新報』 618,18.

久布白落実 (1952) 「米国百年の排酒と我国の現状」『婦人新報』 619,4.

久布白落実 (1952) 「五錢袋と条約改正」『婦人新報』 619,14.

久布白落実 (1952) 「行政協定後の矯風会の有り方」『婦人新報』 620,4-7.

久布白落実 (1952) 「昭和二十七年度の評議員会を終りて」『婦人新報』 621,3.

久布白落実 (1952) 「組織と運動」『婦人新報』 621,13.

久布白落実 (1952) 「勅令第九号法制化運動」『婦人新報』 622,2.

久布白落実 (1952) 「我等の指導者」『婦人新報』 622,3.

久布白落実 (1952) 「日本に母はないか」『婦人新報』 623,4.

久布白落実 (1952) 「米国の禁酒運動もりかへす」『婦人新報』 623,9.

久布白落実 (1952) 「楽しき老後」『婦人新報』 623,13.

久布白落実 (1952) 「行政協定後に残る諸問題」『婦人新報』 624,3.

久布白落実 (1952) 「夏期大学」『婦人新報』 624,12.

久布白落実 (1952) 「北陸の重鎮山田寿雄氏」『婦人新報』 624,16.

久布白落実 (1952) 「純潔問題中央委員会沢田美喜女史渡米」『婦人新報』 625,3-5.

久布白落実 (1952) 「総選挙と矯風会」『婦人新報』 626,3.

久布白落実 (1952) 「六六歳を迎える日本基督教婦人矯風会」『婦人新報』 627,6.

久布白落実 (1952) 「時田田鶴子女史を憶ふ」『婦人新報』 627,23.

久布白落実 (1953) 「混血児問題の新局面」『婦人新報』 628,9.

久布白落実 (1953) 「矯風会の昨今」『婦人新報』 629,5.

久布白落実 (1953) 「売春なき日本の実現」『婦人新報』 630,5.

久布白落実 (1953) 「混血児問題と新しき二の面」『婦人新報』 630,11.

久布白落実 (1953) 「第五十三回大会を迎へんとして」『婦人新報』 631,4.

久布白落実 (1953) 「大会の憶ひ出」『婦人新報』 631,9.

久布白落実 (1953) 「矯風会第五十三回大会の成果」『婦人新報』 632,6.

久布白落実 (1953) 「創立七十周年を目指して」『婦人新報』 633,3.

久布白落実 (1953) 「無言の奉仕」『婦人新報』 633,11.

久布白落実 (1953) 「混血児問題への救いの手開く」『婦人新報』 634,3.

久布白落実 (1953) 「宣教百年記念運動と矯風会」『婦人新報』 635,3.

久布白落実 (1953) 「夏と矯風会」『婦人新報』 635,20.

久布白落実 (1953)「ディックの旅行 (一)」『婦人新報』 635,23.  
久布白落実 (1953)「新しき秋を迎えて」『婦人新報』 636,3.  
久布白落実 (1953)「ディックの旅行 (二)」『婦人新報』 636,17.  
久布白落実 (1953)「基地に対する二つの方策」『婦人新報』 637,3.  
久布白落実 (1953)「母の家便り」『婦人新報』 637,11.  
久布白落実 (1953)「ディックの旅行 (三)」『婦人新報』 637,22.  
久布白落実 (1953)「巻頭言」『婦人新報』 638,2.  
久布白落実 (1953)「一人の力」『婦人新報』 638,3.  
久布白落実 (1953)「ディックの旅行 (四)」『婦人新報』 638,14.  
久布白落実 (1953)「街に拾う 兄チャンチャクイヤ」『婦人新報』 638,20.  
久布白落実 (1953)「創立第六十七回の記念日に題す」『婦人新報』 639,3.  
久布白落実 (1953)「ディックの旅行 (五)」『婦人新報』 639,13.  
久布白落実 (1954)「一九五四年を迎う」『婦人新報』 640,3.  
久布白落実 (1954)「新らしき陣容と揺ぎなき進展」『婦人新報』 641,3.  
久布白落実 (1954)「街に拾う」『婦人新報』 641,19.  
久布白落実 (1954)「売春禁止法と婦人矯風会」『婦人新報』 642,4.  
久布白落実 (1954)「ディックの旅行 (七)」『婦人新報』 642,21.  
久布白落実 (1954)「来らんとする評議員会を迎えんとして」『婦人新報』 643,3.  
久布白落実 (1954)「ディックの旅行 (八)」『婦人新報』 643,20.  
久布白落実 (1954)「七十周年記念運動の進展」『婦人新報』 643,26.  
久布白落実 (1954)「昭和二十九年度評議員会の成果」『婦人新報』 644,3.  
久布白落実 (1954)「ディックの旅行 (九)」『婦人新報』 644,24.  
久布白落実 (1954)「七十周年記念募金と売春禁止法」『婦人新報』 645,3.  
久布白落実 (1954)「ディックの旅行 (十)」『婦人新報』 645,21.  
久布白落実 (1954)「米国と日本の矯風会」『婦人新報』 646,3.  
久布白落実 (1954)「売春禁止法はどんなつて居るか」『婦人新報』 646,11.  
久布白落実 (1954)「街に拾う」『婦人新報』 646,25.  
久布白落実 (1954)「四季の恵み」『婦人新報』 647,4.  
久布白落実 (1954)「巻頭言」『婦人新報』 648,2.  
久布白落実 (1954)「御世田は色付きて刈入れ時となれり」『婦人新報』 648,3.

久布白落実 (1954)「秋の講習会を迎えんとして」『婦人新報』 649,3.  
久布白落実 (1954)「中興の人前会頭岸登氏の一週年を迎えて」『婦人新報』 650,5.  
久布白落実 (1954)「昭和二十九年を送る」『婦人新報』 651,5.  
久布白落実 (1955)「一九五五年を迎う」『婦人新報』 652,5.  
久布白落実 (1955)「婦人矯風会と参政権」『婦人新報』 652,15.  
久布白落実 (1955)「来らんとする総選挙」『婦人新報』 653,3.  
久布白落実 (1955)「我等の一人 (一)」『婦人新報』 653,4.  
久布白落実 (1955)「来たらんとする評議員会を前にして」『婦人新報』 654,3.  
久布白落実 (1955)「思わぬ出来事二つ」『婦人新報』 654,14.  
久布白落実 (1955)「我等の一人 (二)」『婦人新報』 654,19.  
久布白落実 (1955)「この春の東京」『婦人新報』 655,3-4.  
久布白落実 (1955)「我等の一人 (三)」『婦人新報』 655,14.  
久布白落実 (1955)「春の哀感」『婦人新報』 655,22.  
久布白落実 (1955)「巻頭言」『婦人新報』 656,2.  
久布白落実 (1955)「矯風会はどうして起つたか」『婦人新報』 656,3-6.  
久布白落実 (1955)「我等の一人 (四)」『婦人新報』 656,27-28.  
久布白落実 (1955)「昭和三十年の評議員会を終りて」『婦人新報』 657,3-5.  
久布白落実 (1955)「矯風会の起源 (二)」『婦人新報』 657,5-7.  
久布白落実 (1955)「我等の一人 (五)」『婦人新報』 657,18.  
久布白落実 (1955)「売春禁止法はどうなる」『婦人新報』 658,3-4.  
久布白落実 (1955)「我等は敗れたか」『婦人新報』 659,3-4.  
久布白落実 (1955)「秋に憶う」『婦人新報』 660,3-4.  
久布白落実 (1955)「矯風会七十周年を迎える」『婦人新報』 660,8-9.  
久布白落実 (1955)「三疊御殿の花日記」『婦人新報』 660,9.  
久布白落実 (1955)「第二回全国講習会」『婦人新報』 661,4-5.  
久布白落実 (1955)「今度の旅行」『婦人新報』 661,10-13.  
久布白落実 (1955)「矯風会と家族計画」『婦人新報』 662,6-8.  
久布白落実 (1955)「街の男」『婦人新報』 662,17-19.  
久布白落実 (1955)「我等の一人 (六)」『婦人新報』 662,23-24.  
久布白落実 (1955)「決意をもつて前進」『婦人新報』 663,5-7.

久布白落実 (1955)「我等の一人 (七)」『婦人新報』 663,8.

久布白落実 (1956)「一九五六年を迎う」『婦人新報』 664,4-5.

久布白落実 (1956)「憶 浅田みか子女史」『婦人新報』 664,11-13.

久布白落実 (1956)「第二十回矯風会万国大会」『婦人新報』 665,4-5.

久布白落実 (1956)「我等の一人 (八) 和田満子女史」『婦人新報』 665,17-19.

久布白落実 (1956)「街に拾う」『婦人新報』 665,27.

久布白落実 (1956)「二十年の働きと今度の旅」『婦人新報』 666,3-5.

久布白落実 (1956)「街に拾う」『婦人新報』 666,27.

久布白落実 (1956)「土さめる」『婦人新報』 666,30.

久布白落実 (1956)「第五十四回大会を迎う」『婦人新報』 667,6-8.

久布白落実 (1956)「第五十四回大会を終えて」『婦人新報』 668,3-4.

久布白落実 (1956)「売春防止法の通過に当たりて」『婦人新報』 669,7-10.

久布白落実 (1956)「万国キリスト教婦人矯風会(第二十回)大会」『婦人新報』 672,3-6.

久布白落実 (1956)「旅の滴」『婦人新報』 672,26-28.

久布白落実 (1956)「旅の滴」『婦人新報』 673,4-6.

久布白落実 (1956)「万国大会及び研究報告」『婦人新報』 674,3-12.

久布白落実 (1956)「創立七十周年記念日を前にして」『婦人新報』 674,15-16.

久布白落実 (1956)「矯風会は七十年をどうして過ごしたか」『婦人新報』 675,11-14.

久布白落実 (1957)「一九五七年を迎う」『婦人新報』 676,3-5.

久布白落実 (1957)「今年の仕事」『婦人新報』 677,3-5.

久布白落実 (1957)「七十周年記念事業」『婦人新報』 678,3-5.

久布白落実 (1957)「世界矯風会の母」『婦人新報』 679,5-7.

久布白落実 (1957)「四月の矯風会」『婦人新報』 679,19.

久布白落実 (1957)「中共へ音も立てずまた出かける」『婦人新報』 680,6-7.

久布白落実 (1957)「昭和三十二年度の評議員会を終つて」『婦人新報』 681,3-4.

久布白落実 (1957)「中国における売春問題」『婦人新報』 682,3-6.

久布白落実 (1957)「売春問題はどうか片付けるか」『婦人新報』 683,3-5.

久布白落実 (1957)「売春防止法実現への大道」『婦人新報』 684,3-4.

久布白落実 (1957)「七十周年記念募金と臨時評議員会」『婦人新報』 685,3-5.

久布白落実 (1957)「十一月を迎う」『婦人新報』 686,3-5.



久布白落実 (1957)「徳富蘇峰と矯風会」『婦人新報』 687,6-8.  
久布白落実 (1958)「一九五八年を迎う」『婦人新報』 688,3-5.  
久布白落実 (1958)「二月のころ」『婦人新報』 689,4-7.  
久布白落実 (1958)「歴史を作る我れ等の生活」『婦人新報』 690,6-9.  
久布白落実 (1958)「古田とみ子女子を憶う」『婦人新報』 690,22-24.  
久布白落実 (1958)「一九五八年度評議員会を迎えて」『婦人新報』 691,4-6.  
久布白落実 (1958)「評議員会を終りて」『婦人新報』 692,3-4.  
久布白落実 (1958)「売春防止法実施記念感謝会」『婦人新報』 692,35.  
久布白落実 (1958)「六月の東京」『婦人新報』 693,4-6.  
久布白落実 (1958)「七十周年記念事業の完成」『婦人新報』 694,3-5.  
久布白落実 (1958)「わが国の排酒運動と婦人矯風会」『婦人新報』 695,4-6.  
久布白落実 (1958)「世界大会ブームの日本」『婦人新報』 696,4-5.  
久布白落実 (1958)「人間到る処青山在り」『婦人新報』 697,7-8.  
久布白落実 (1958)「収穫の秋」『婦人新報』 698,4-6.  
久布白落実 (1958)「一九五八年のクリスマスを迎えんとして」『婦人新報』 699,3-4.  
久布白落実 (1959)「1959 年を迎う」『婦人新報』 700,3-4  
久布白落実 (1959)「国を守る人権」『婦人新報』 701,3-4.  
久布白落実 (1959)「七十周年記念会館定礎式に当りて」『婦人新報』 702,3-4.  
久布白落実 (1959)「1959 年第 50 回大会を迎えんとして」『婦人新報』 703,4-5.  
久布白落実 (1959)「第五十五回大会を終りて」『婦人新報』 704,4-5.  
久布白落実 (1959)「青葉香る六月に」『婦人新報』 705,4-5.  
久布白落実 (1959)「新年度第一期終る」『婦人新報』 706,4-5.  
久布白落実 (1959)「今年の八月」『婦人新報』 707,4-6.  
久布白落実 (1959)「嬉しい悲鳴」『婦人新報』 708,3-4.  
久布白落実 (1959)「これからの矯風会」『婦人新報』 709,4-5.  
久布白落実 (1959)「九千万を紳士淑女へ」『婦人新報』 710,4-5.  
久布白落実 (1960)「巻頭言」『婦人新報』 711,2.  
久布白落実 (1960)「1960 年を迎う」『婦人新報』 711,3-4.  
久布白落実 (1960)「倦むことなき努力」『婦人新報』 712,3-5.  
久布白落実 (1960)「陽光の春を迎えて」『婦人新報』 713,3-4.

久布白落実 (1960) 「宇宙時代に処する矯風会」『婦人新報』 714,6-8.

久布白落実 (1960) 「1960 年の評議員会を終わりにて」『婦人新報』 715,4-5.

久布白落実 (1960) 「地に満つる声」『婦人新報』『婦人新報』 717,3-4.

久布白落実 (1960) 「評議員会後の矯風会」『婦人新報』 718,4-5.

久布白落実 (1960) 「稔りの秋を迎う」『婦人新報』 719,3.

久布白落実 (1960) 「新館に入って一ヶ年」『婦人新報』 720,4.

久布白落実 (1960) 「矯風会員は身をもって民主政治を樹立せよ」『婦人新報』 721,4-5.

久布白落実 (1960) 「総選挙を終わって新内閣に望む」『婦人新報』 722,4-5.

久布白落実 (1961) 「1961 年を迎える」『婦人新報』 723,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(1)」『婦人新報』 723,20-21.

久布白落実 (1961) 「一億同胞紳士淑女に」『婦人新報』『婦人新報』 724,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(2)」『婦人新報』 724,14-15.

久布白落実 (1961) 「1961 年評議員会を迎えんとして」『婦人新報』 725,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(3)」『婦人新報』 725,30-31.

久布白落実 (1961) 「中国の友を迎える」『婦人新報』 726,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(4)」『婦人新報』 726,24-25.

久布白落実 (1961) 「感慨深き評議員会を終って」『婦人新報』 727,6-7.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(5)」『婦人新報』 727,14-15.

久布白落実 (1961) 「キリスト教婦人矯風会と政治運動」『婦人新報』 728,6-7.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(6)」『婦人新報』 728,16-17.

久布白落実 (1961) 「キリスト教婦人矯風会と政治運動」『婦人新報』 729,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(7)」『婦人新報』 729,20-21.

久布白落実 (1961) 「会として忘れられぬ人々」『婦人新報』 730,6-7.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(8)」『婦人新報』 730,20-21.

久布白落実 (1961) 「稔りの秋を迎えて」『婦人新報』 731,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(9)」『婦人新報』 731,18-19.

久布白落実 (1961) 「明年は全国大会の年」『婦人新報』 732,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(10)」『婦人新報』 732,20-21.

久布白落実 (1961) 「中秋を迎える婦人矯風会」『婦人新報』 733,4-5.

久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(11)」『婦人新報』 733,18-19.

久布白落実 (1961) 「窓を開け」『婦人新報』 734,4-5.  
 久布白落実 (1961) 「矯風会の歴史と人物(12)」『婦人新報』 734,20-21.  
 久布白落実 (1962) 「田は色づきて刈り入れ時となれり」『婦人新報』 735,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(13)」『婦人新報』 735,20-21.  
 久布白落実 (1962) 「己が身を...捧げよ、神の喜び給う活きた聖なる供物として」  
     『婦人新報』 736,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(14)」『婦人新報』 736,22-23.  
 久布白落実 (1962) 「世界大会夢物語」『婦人新報』 737,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(15)」『婦人新報』 737,18-19.  
 久布白落実 (1962) 「国連における日本の地位」『婦人 7 新報』 738,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(16)」『婦人新報』 738,10-11.  
 久布白落実 (1962) 「三つの大会を前にして」『婦人新報』 739,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(17)」『婦人新報』 739,22-23.  
 久布白落実 (1962) 「若葉青葉の期を迎えて」『婦人新報』 740,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(18)」『婦人新報』 740,24-25.  
 久布白落実 (1962) 「何時の時代にも変わらぬもの」『婦人新報』 741,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(19)」『婦人新報』 741,24-25.  
 久布白落実 (1962) 「(竹上先生) 弔辞」『婦人新報』 742,7.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(20)」『婦人新報』 742,24-25.  
 久布白落実 (1962) 「早くも第一期を終わる」『婦人新報』 743,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(21)」『婦人新報』 743,20-21.  
 久布白落実 (1962) 「嬉しい事の数々」『婦人新報』 744,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(22)」『婦人新報』 744,18-19.  
 久布白落実 (1962) 「我等の世界大会」『婦人新報』 745,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「法を守って十年」『婦人新報』 746,4-5.  
 久布白落実 (1962) 「矯風会の歴史と人物(23)」『婦人新報』 746,12-13.  
 久布白落実 (1963) 「1963 年を迎えて」『婦人新報』 747,4-5.  
 久布白落実 (1963) 「百年に亘る世界矯風会(1)」『婦人新報』 747,20-21.  
 久布白落実 (1963) 「来たらんとする地方選挙」『婦人新報』 748,4-5.  
 久布白落実 (1963) 「百年に亘る世界矯風会(2)」『婦人新報』 748,20-21.

久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(3)」『婦人新報』 749,14-15.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(4)」『婦人新報』 750,10-11.  
久布白落実 (1963)「奇遇」『婦人新報』 750,24.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(5)」『婦人新報』 751,24-25.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(6)」『婦人新報』 752,10-11.  
久布白落実 (1963)「六月に憶う」『婦人新報』 752,4-5.  
久布白落実 (1963)「こんな事もあった」『婦人新報』 752,27.  
久布白落実 (1963)「運・鈍・根の大打進」『婦人新報』 753,4-5.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(7)」『婦人新報』 753,10-11.  
久布白落実 (1963)「旅に拾う」『婦人新報』 753,28.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(8)」『婦人新報』 754,14-15.  
久布白落実 (1963)「第二年目の第二期を迎う」『婦人新報』 755,4.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(9)」『婦人新報』 755,16-17.  
久布白落実 (1963)「ダーリー・ダウンス夫妻を送る」『婦人新報』 756,25.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(10)」『婦人新報』 756,26-27.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(11)」『婦人新報』 757,10-11.  
久布白落実 (1963)「百年に亘る世界矯風会(12)」『婦人新報』 758,18-19.  
久布白落実 (1963)「全国社会福祉大会出席記」『婦人新報』 758,24-25.  
久布白落実 (1964)「母を与えよ」『婦人新報』 759,4.  
久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(13)」『婦人新報』 759,20-21.  
久布白落実 (1964)「今月のことば」『婦人新報』 760,3.  
久布白落実 (1964)「矯風会の新しい国境」『婦人新報』 760,4-5.  
久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(14)」『婦人新報』 760,12-13.  
久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(15)」『婦人新報』 761,10-11.  
久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(16)」『婦人新報』 762,14-15.  
久布白落実 (1964)「在米の友 大久保清次氏」『婦人新報』 762,19.  
久布白落実 (1964)「1964 年の評議員会」『婦人新報』 763,4-5.  
久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(17)」『婦人新報』 763,18-19.  
久布白落実 (1964)「評議員会おわる」『婦人新報』 764,4-5.  
久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(18)」『婦人新報』 764,20.

久布白落実 (1964)「叙勲うらばなし」『婦人新報』 764,27.

久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(19)」『婦人新報』 765,10-11.

久布白落実 (1964)「街に拾う」『婦人新報』 765,16-17.

久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(20)」『婦人新報』 766,10-11.

久布白落実 (1964)「オリンピックを前にして」『婦人新報』 767,4-5.

久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(21)」『婦人新報』 767,12-13.

久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(22)」『婦人新報』 768,12-13.

久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(23)」『婦人新報』 769,12-13.

久布白落実 (1964)「伊藤先生御夫妻のこと」『婦人新報』 769,15.

久布白落実 (1964)「百年に亘る世界矯風会(24)」『婦人新報』 770,12-13.

久布白落実 (1964)「八十年の旅路の果てに」『婦人新報』 770,20-21.

久布白落実 (1964)「街に拾う」『婦人新報』 770,32.

久布白落実 (1965)「1965 年を迎う」『婦人新報』 771,4-5.

久布白落実 (1965)「百年に亘る世界矯風会(25)」『婦人新報』 771,14-15.

久布白落実 (1965)「百年に亘る世界矯風会(26)」『婦人新報』 772,10-11.

久布白落実 (1965)「我等の希望青年部」『婦人新報』 772,20.

久布白落実 (1965)「今月のことば」『婦人新報』 773,1.

久布白落実 (1965)「売春対策国民協議会」『婦人新報』 773,28.

久布白落実 (1965)「私たちは神の同労者」『婦人新報』 774,4-5.

久布白落実 (1965)「今月のことば」『婦人新報』 775,3.

久布白落実 (1965)「一億挙って世界奉仕へ」『婦人新報』 775,4-5.

久布白落実 (1965)「全国大会を終りて」『婦人新報』 776,4-5.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(1)」『婦人新報』 776,12-13.

久布白落実・桑野千代・野宮初枝(1965)「三大目標について」『婦人新報』 777,16-18.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(2)」『婦人新報』 777,28.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(3)」『婦人新報』 778,10-11.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(4)」『婦人新報』 779,12-13.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(5)」『婦人新報』 780,12-13.

久布白落実 (1965)「特別顕彰」『婦人新報』 781,4-5.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(6)」『婦人新報』 781,14-15.

久布白落実 (1965)「売春防止法の出来るまで(7)」『婦人新報』782,18-19.  
 久布白落実 (1966)「夢を語る」『婦人新報』783,4-5.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(8)」『婦人新報』783,12-13.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(9)」『婦人新報』784,12-13.  
 久布白落実 (1966)「伊藤秀吉氏を悼む」『婦人新報』784,22.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法制定十周年に思う」『婦人新報』785,4-5.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(10)」『婦人新報』785,16-17.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(11)」『婦人新報』786,12-13.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(12)」『婦人新報』787,10-11.  
 久布白落実 (1966)「矯風会は何故にキリスト教協議会に参加するか」『婦人新報』  
 787,14-15.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(13)」『婦人新報』788,14-15.  
 久布白落実 (1966)「小泉信三氏と矯風会」『婦人新報』788,22.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(14)」『婦人新報』789,16-17.  
 久布白落実 (1966)「時を知るもの」『婦人新報』790,4-5.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(15)」『婦人新報』790,14-18.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(16)」『婦人新報』791,12-13.  
 久布白落実 (1966)「親を思う」『婦人新報』792,4-5.  
 久布白落実 (1966)「青年と性生活」『婦人新報』792,10-12.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(17)」『婦人新報』792,18-19.  
 久布白落実 (1966)「芸妓の存在」『婦人新報』792,22.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(18)」『婦人新報』793,16-17.  
 久布白落実 (1966)「矯風会百年を目指して」『婦人新報』794,4-5.  
 久布白落実 (1966)「売春防止法のできるまで(19)」『婦人新報』794,40-41.  
 久布白落実 (1967)「1967 年を迎う」『婦人新報』795,4-5.  
 久布白落実 (1967)「売春防止法のできるまで(20)」『婦人新報』795,12-13.  
 久布白落実 (1967)「売春防止法のできるまで(21)」『婦人新報』796,12-13.  
 久布白落実 (1967)「五百万円はこうしてできる 荻野先生のこと」『婦人新報』796,23.  
 久布白落実 (1967)「売春防止法のできるまで(22)」『婦人新報』797,18-19.  
 久布白落実 (1967)「評議員会を前にして」『婦人新報』798,4-5.

久布白落実 (1967) 「自伝 (一)」『婦人新報』 798,10-11.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (二)」『婦人新報』 799,12-13.  
久布白落実 (1967) 「クララ・フィッシャー氏を悼む」『婦人新報』 799,14.  
久布白落実 (1967) 「婦人新報 800 号に題す」『婦人新報』 800,4-5.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (三)」『婦人新報』 800,20-21.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (四)」『婦人新報』 801,26-29.  
久布白落実 (1967) 「八月」『婦人新報』 802,4-5.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (五)」『婦人新報』 802,18-19.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (六)」『婦人新報』 803,12-15.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (七)」『婦人新報』 804,18-21.  
久布白落実 (1967) 「八百号を超えた婦人新報」『婦人新報』 804,23.  
久布白落実 (1967) 「矯風会に入る」『婦人新報』 805,7-8.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (八)」『婦人新報』 805,40-41.  
久布白落実 (1967) 「自伝 (九)」『婦人新報』 806,24-27.  
久布白落実 (1968) 「1968 年を迎う」『婦人新報』 807,4-5.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十)」『婦人新報』 807,14-17.  
久布白落実 (1968) 「N C C の機構改革に思う」『婦人新報』 808,4-6.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十一)」『婦人新報』 808,12-15.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十二)」『婦人新報』 809,14-17.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十三)」『婦人新報』 810,20-23.  
久布白落実 (1968) 「五月」『婦人新報』 811,4-5.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十四)」『婦人新報』 811,10-13.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十五)」『婦人新報』 812,14-17.  
久布白落実 (1968) 「世界大会開会式における歓迎の辞」『婦人新報』 813,6.  
久布白落実 (1968) 「世界大会を終えて」『婦人新報』 813,50-51.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十六)」『婦人新報』 814,36-39.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十七)」『婦人新報』 815,22-25.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十八)」『婦人新報』 816,12-15.  
久布白落実 (1968) 「自伝 (十九)」『婦人新報』 817,22-25.  
久布白落実 (1968) 「性という事」『婦人新報』 818,11-12.

久布白落実 (1968)「自伝 (二十)」『婦人新報』 818,22-25.  
 久布白落実 (1969)「正月」『婦人新報』 819,4-5.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十一)」『婦人新報』 819,14-17.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十二)」『婦人新報』 820,18-21.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十三)」『婦人新報』 821,22-25.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十四)」『婦人新報』 823,22-25.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十五)」『婦人新報』 824,30-33.  
 久布白落実 (1969)「人生は何と素晴らしいものだろう」『婦人新報』 825,4-5.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十六)」『婦人新報』 825,16-19.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十七)」『婦人新報』 826,16-19.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十八)」『婦人新報』 827,22-25.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (二十九)」『婦人新報』 828,20-23.  
 久布白落実 (1969)「自伝 (三十)」『婦人新報』 829,22-24.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(1)」『婦人新報』 832,16-17.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(2)」『婦人新報』 833,14-15.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(3)」『婦人新報』 834,24-25.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(4)」『婦人新報』 835,16-17.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(5)」『婦人新報』 836,12-13.  
 久布白落実 (1970)「ちょっと一言」『婦人新報』 836,22-23.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(6)」『婦人新報』 837,18-19.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(7)」『婦人新報』 839,14-15.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(8)」『婦人新報』 840,16-18.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(9)」『婦人新報』 841,24-25.  
 久布白落実 (1970)「誰が矯風会を守り立てたか(10)」『婦人新報』 842,24-25.  
 久布白落実 (1971)「純潔部一年の活動展望」『婦人新報』 843,6-7.  
 久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(11)」『婦人新報』 843,18-19.  
 久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(12)」『婦人新報』 844,18-19.  
 久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(13)」『婦人新報』 845,22-23.  
 久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(14)」『婦人新報』 846,36-37.  
 久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(15)」『婦人新報』 847,22-23.



久布白落実 (1971)「感謝のことば」『婦人新報』 848,4-5.

久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(16)」『婦人新報』 848,14-15.

久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(17)」『婦人新報』 849,24-25.

久布白落実 (1971)「赤線復活ばなし」『婦人新報』 850,4-5.

久布白落実 (1971)「誰が矯風会を守り立てたか(18)」『婦人新報』 850,4-5.

久布白落実 (1971)「今月のことば」『婦人新報』 852,3.

久布白落実 (1972)「今月のことば」『婦人新報』 855,3.

久布白落実 (1972)「誰が矯風会を守り立てたか(19)」『婦人新報』 855,24-25.

久布白落実 (1972)「誰が矯風会を守り立てたか(終)」『婦人新報』 857,24-25.

久布白落実 (1972)「中国の解放は本物だ」『婦人新報』 859,4.

久布白落実 (1972)「未成年禁酒法 50 周年」『婦人新報』 862,26-27.

#### 4-3 その他矯風会発行物掲載論文目録

##### 『東京婦人ホーム』掲載論文

久布白落実（1936）「矯風会救済事業の沿革」『東京婦人ホーム』 1,1.

久布白落実（1936）「昭和十一年の婦人ホーム」『東京婦人ホーム』 3,1-2.

##### 『日本基督教婦人参政権協会会報』掲載論文

久布白落実（1934）「1934 年の主張」『日本基督教婦人参政権協会会報』 4,1.

久布白落実（1936）「1936 年の参政権」『日本基督教婦人参政権協会会報』 6,1.

#### 4-4 個人誌『婦人と日本』掲載論文目録

- 久布白落実（1950）「三度敗れて尚」『婦人と日本』 1,1.
- 久布白落実（1950）「婦人と法律（1）」『婦人と日本』 1,2.
- 久布白落実（1950）「時局雑感」『婦人と日本』 1,2.
- 久布白落実（1950）「関根夫人を憶ふ」『婦人と日本』 1,4.
- 久布白落実（1950）「世界の婦人の望む処」『婦人と日本』 2,1.
- 久布白落実（1950）「婦人民主政治講座（1）」『婦人と日本』 2,2-3.
- 久布白落実（1950）「時局雑感」『婦人と日本』 2,3-4.
- 久布白落実（1950）「社会時評」『婦人と日本』 2,5-6.
- 久布白落実（1950）「婦人と法律（2）離婚に就いて」『婦人と日本』 2,5.
- 久布白落実（1950）「海外渡航問題に就て」『婦人と日本』 2,6.
- 久布白落実（1950）「私の日記」『婦人と日本』 2,8.
- 久布白落実（1950）「講和に際して望む処」『婦人と日本』 3,1.
- 久布白落実（1950）「婦人民主政治講座（2）」『婦人と日本』 3,2.
- 久布白落実（1950）「時局雑感」『婦人と日本』 3,3.
- 久布白落実（1950）「社会時評 東京都と歓楽街の問題」『婦人と日本』 3,4.
- 久布白落実（1950）「婦人と法律（3）家に就いて」『婦人と日本』 3,5.
- 久布白落実（1950）「追放解除と二人の友」『婦人と日本』 3,6.
- 久布白落実（1950）「私の日記」『婦人と日本』 3,8.
- 久布白落実（1951）「祖国日本のゆく可き道」『婦人と日本』 4,1.
- 久布白落実（1951）「婦人民主政治講座（3）」『婦人と日本』 4,2.
- 久布白落実（1951）「時局雑感」『婦人と日本』 4,3.
- 久布白落実（1951）「社会時評 修身教育に就いて」『婦人と日本』 4,4.
- 久布白落実（1951）「婦人と法律（4）財産権に就いて」『婦人と日本』 4,5.
- 久布白落実（1951）「人権擁護と身売問題」『婦人と日本』 4,6.
- 久布白落実（1951）「三人の客人」『婦人と日本』 4,7.
- 久布白落実（1951）「私の日記」『婦人と日本』 4,8.
- 久布白落実（1951）「日本はどうすれば立ち上るか」『婦人と日本』 5,1.
- 久布白落実（1951）「婦人民主政治講座（4）」『婦人と日本』 5,2-3.
- 久布白落実（1951）「時局雑感」『婦人と日本』 5,3.

久布白落実 (1951) 「社会時評 マッカーサー元帥を送る」『婦人と日本』 5,4.  
久布白落実 (1951) 「婦人と法律 (5) 『氏』 の帰属に就いて」『婦人と日本』 5,5.  
久布白落実 (1951) 「小話 心の温まる話」『婦人と日本』 5,5.  
久布白落実 (1951) 「ソ連の実情と第三次世界大戦に就いて」『婦人と日本』 5,6.  
久布白落実 (1951) 「八十歳で前進する」『婦人と日本』 5,7.  
久布白落実 (1951) 「私の日記」『婦人と日本』 5,8.  
久布白落実 (1951) 「社説 独立国家の試験台」『婦人と日本』 6,2.  
久布白落実 (1951) 「婦人民主政治講座 (5)」『婦人と日本』 6,3.  
久布白落実 (1951) 「社会時評 チャタレイ裁判に随伴して」『婦人と日本』 6,7.  
久布白落実 (1951) 「婦人と法律 (6) 親権に就いて」『婦人と日本』 6,8.  
久布白落実 (1951) 「随筆 やっぱり善い事はよい」『婦人と日本』 6,10.  
久布白落実 (1951) 「私の日記」『婦人と日本』 6,12.  
久布白落実 (1951) 「この講和をどう生かすか」『婦人と日本』 7,2.  
久布白落実 (1951) 「婦人民主政治講座 (6)」『婦人と日本』 7,3.  
久布白落実 (1951) 「私の日記」『婦人と日本』 7,12.  
久布白落実 (1951) 「国民をして起つ可き処を知らしめよ」『婦人と日本』 8,2.  
久布白落実 (1951) 「婦人民主政治講座 (7)」『婦人と日本』 8,3.  
久布白落実 (1951) 「近頃読んだ本 英国の政治、武蔵野夫人」『婦人と日本』 8,6-7.  
久布白落実 (1951) 「婦人と法律 (8) 相続に就て」『婦人と日本』 8,8.  
久布白落実 (1951) 「私の日記から」『婦人と日本』 8,12.  
久布白落実 (1952) 「新日本の青年に寄す」『婦人と日本』 9,2.  
久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (8)」『婦人と日本』 9,3.  
久布白落実 (1952) 「婦人と法律 (9) 結婚に就て」『婦人と日本』 9,7.  
久布白落実 (1952) 「随筆 映画『明日では遅すぎる』」『婦人と日本』 9,8.  
久布白落実 (1952) 「近頃読んだもの 二十五時、ニッポン日記」『婦人と日本』 9,9-10.  
久布白落実 (1952) 「私の日記から」『婦人と日本』 9,12.  
久布白落実 (1952) 「国家防衛と民主主義」『婦人と日本』 10,2.  
久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (9)」『婦人と日本』 10,3.  
久布白落実 (1952) 「英国の政治家 (1) グラッドストーン」『婦人と日本』 10,6-8.  
久布白落実 (1952) 「編集後記」『婦人と日本』 10,12.

久布白落実 (1952) 「社説 独立の春に」『婦人と日本』 11,2.

久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (10) 政治における理想と良心」『婦人と日本』 11,3.

久布白落実 (1952) 「英国の政治家 (2) 内側から見たグラッドストーン」『婦人と日本』 11,8-10.

久布白落実 (1952) 「私の日記から」『婦人と日本』 11,12.

久布白落実 (1952) 「社説 国権の回復と我等の前途」『婦人と日本』 12,2.

久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (11)」『婦人と日本』 12,3.

久布白落実 (1952) 「英国の政治家三 最初の労働党首相マクドナルド」『婦人と日本』 12,4-7.

久布白落実 (1952) 「私の日記」『婦人と日本』 12,11.

久布白落実 (1952) 「現代世相と社会不安」『婦人と日本』 13,2.

久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (12)」『婦人と日本』 13,2.

久布白落実 (1952) 「インドの政治家ガンジー」『婦人と日本』 13,4-7.

久布白落実 (1952) 「私の日記・編集後記」『婦人と日本』 13,12.

久布白落実 (1952) 「社説 オリンピックに寄す」『婦人と日本』 14,2-3.

久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (13) 市民の自由に就いて」『婦人と日本』 14,3.

久布白落実 (1952) 「英国と云う国はどんな国？」『婦人と日本』 14,4-6.

久布白落実 (1952) 「私の日記」『婦人と日本』 14,12.

久布白落実 (1952) 「独立後第一の総選挙」『婦人と日本』 15,2.

久布白落実 (1952) 「インドと英国」『婦人と日本』 15,3-6.

久布白落実 (1952) 「映画 原爆の子を見る」『婦人と日本』 15,10.

久布白落実 (1952) 「社説 国家と政党」『婦人と日本』 16,2.

久布白落実 (1952) 「婦人民主政治講座 (14)」『婦人と日本』 16,3-4.

久布白落実 (1952) 「英国の政治家ピット父子」『婦人と日本』 16,5-7.

久布白落実 (1952) 「随筆 嬉しい話三つ」『婦人と日本』 16,13.

久布白落実 (1952) 「私の日記」『婦人と日本』 16,14.

久布白落実 (1952) 「社説 暗を破って光を」『婦人と日本』 17,2.

久布白落実 (1952) 「印度と英国 (2)」『婦人と日本』 17,3-8.

久布白落実 (1952) 「近頃見た映画二つ」『婦人と日本』 17,17.

久布白落実 (1952) 「私の日記」『婦人と日本』 17,18.

久布白落実 (1953) 「社説 国是の鮮明」『婦人と日本』 18,2.

久布白落実 (1953) 「英国の政治家 (6) ウインストンチャーシル」『婦人と日本』 18,3-6.

久布白落実 (1953) 「混血児問題の基本線」『婦人と日本』 18,12-14.

久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 18,16.

久布白落実 (1953) 「社説 世界平和と婦人」『婦人と日本』 19,2.

久布白落実 (1953) 「売春禁止法に至るまで」『婦人と日本』 19,3-6,11.

久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 19,12.

久布白落実 (1953) 「総選挙を通じて」『婦人と日本』 20,2.

久布白落実 (1953) 「女よ強かれ」『婦人と日本』 20,4-7.

久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 20,18.

久布白落実 (1953) 「社説 日米百年の国交」『婦人と日本』 21,2.

久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 21,3.

久布白落実 (1953) 「米国五十年の外交と其反省」『婦人と日本』 21,4-8.

久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 21,16.

久布白落実 (1953) 「水害に学ぶ」『婦人と日本』 22,2.

久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 22,3.

久布白落実 (1953) 「エリザベス一世よりエリザベス二世へ」『婦人と日本』 22,4-7.

久布白落実 (1953) 「身を持って民主主義を教えた米国人」『婦人と日本』 22,14-15.

久布白落実 (1953) 「母と学生」『婦人と日本』 22,16.

久布白落実 (1953) 「国際交友の花」『婦人と日本』 22,17.

久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 22,20.

久布白落実 (1953) 「社説 石の上にも三年」『婦人と日本』 23,2.

久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 23,3.

久布白落実 (1953) 「米国の建国と婦人 婦人参政の歴史」『婦人と日本』 23,4-8.

久布白落実 (1953) 「随筆 アマゾン五日の旅」『婦人と日本』 23,17.

久布白落実 (1953) 「私の日記—編集後記」『婦人と日本』 23,18.

久布白落実 (1953) 「秋に憶ふ」『婦人と日本』 24,2.

久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 24,3.

久布白落実 (1953) 「百年に亘る米国の婦選運動」『婦人と日本』 24,4-7.

久布白落実 (1953) 「基地と風紀」『婦人と日本』 24,15-16.  
久布白落実 (1953) 「随筆 食物としての聖書めし (一)」『婦人と日本』 24,18.  
久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 24,20.  
久布白落実 (1953) 「社説 一人と世界」『婦人と日本』 25,2.  
久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 25,3.  
久布白落実 (1953) 「フィリピン大統領と日本の母」『婦人と日本』 25,11.  
久布白落実 (1953) 「食物としての聖書 (二)」『婦人と日本』 25,15-16.  
久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 25,18.  
久布白落実 (1953) 「社説 母性と世界」『婦人と日本』 26,2.  
久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 26,3.  
久布白落実 (1953) 「英国の婦人参政権運動」『婦人と日本』 26,4-6.  
久布白落実 (1953) 「晩秋の一日」『婦人と日本』 26,17-18.  
久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 26,22.  
久布白落実 (1953) 「社説 年の瀬に立ちて」『婦人と日本』 27,2.  
久布白落実 (1953) 「月間展望」『婦人と日本』 27,3.  
久布白落実 (1953) 「英米婦選史」『婦人と日本』 27,4-7.  
久布白落実 (1953) 「街に拾う」『婦人と日本』 27,14.  
久布白落実 (1953) 「私の日記」『婦人と日本』 27,22.  
久布白落実 (1954) 「社説 二つの世界」『婦人と日本』 28,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 28,3.  
久布白落実 (1954) 「普選の歴史 世界各地における普選運動」『婦人と日本』 28,7-11.  
久布白落実 (1954) 「食物としての聖書 (三)」『婦人と日本』 28,23-24.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 28,28  
久布白落実 (1954) 「社説 人の花」『婦人と日本』 29,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 29,3.  
久布白落実 (1954) 「売春問題と世界の大勢」『婦人と日本』 29,4-6.  
久布白落実 (1954) 「書評『私の百姓生活』」『婦人と日本』 29,17.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 29,24.  
久布白落実 (1954) 「社説 置き忘れた宝物」『婦人と日本』 30,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 30,3.

久布白落実 (1954) 「二十世紀に於ける婦人の進展」『婦人と日本』 30,4-6.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 30,26.  
久布白落実 (1954) 「社説 婦人と憲法」『婦人と日本』 31,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 31,3.  
久布白落実 (1954) 「国家と家族」『婦人と日本』 31,4-7.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 31,26.  
久布白落実 (1954) 「民主政治と婦人」『婦人と日本』 32,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 32,3.  
久布白落実 (1954) 「国家と家族 (二)」『婦人と日本』 32,4-6.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 32,24.  
久布白落実 (1954) 「終戦丸九年を迎えて」『婦人と日本』 33,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 33,3.  
久布白落実 (1954) 「国家と家族 (三)」『婦人と日本』 33,4-6.  
久布白落実 (1954) 「街に拾う」『婦人と日本』 33,22.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 33,28.  
久布白落実 (1954) 「世界平和と再軍備問題」『婦人と日本』 34,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 34,3.  
久布白落実 (1954) 「国家と家族 (四)」『婦人と日本』 34,4-7.  
久布白落実 (1954) 「英国の客人」『婦人と日本』 34,14-15.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 34,26.  
久布白落実 (1954) 「社説 座り直して考える」『婦人と日本』 35,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 35,3.  
久布白落実 (1954) 「国家と家族 (五)」『婦人と日本』 35,9-12.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 35,30.  
久布白落実 (1954) 「社説 世界平和は夢か」『婦人と日本』 36,2.  
久布白落実 (1954) 「月間展望」『婦人と日本』 36,3.  
久布白落実 (1954) 「国家と家族」『婦人と日本』 36,9-12.  
久布白落実 (1954) 「食物としての聖書 (四)」『婦人と日本』 36,15-18.  
久布白落実 (1954) 「私の日記」『婦人と日本』 36,24.  
久布白落実 (1954) 「社説 世界的紳士道の涵養」『婦人と日本』 37,2.



久布白落実（1954）「月間展望」『婦人と日本』 37,3.  
 久布白落実（1954）「世界の社会保障制度」『婦人と日本』 37,8-10.  
 久布白落実（1954）「食物としての聖書（五）」『婦人と日本』 37,14-16.  
 久布白落実（1954）「街に拾う」『婦人と日本』 37,16.  
 久布白落実（1954）「私の日記」『婦人と日本』 37,22.  
 久布白落実（1955）「社説 ジョン・アール・モット博士を憶う」『婦人と日本』 38,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 38,3.  
 久布白落実（1955）「我国の社会保障制度」 38,8-10.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（六）」『婦人と日本』 38,16-17.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 38,26.  
 久布白落実（1955）「社説 アジアの目覚め」『婦人と日本』 39,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 39,3.  
 久布白落実（1955）「我国の社会保障制度（三）」『婦人と日本』 39,8-11.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（七）」『婦人と日本』 39,16-19.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 39,26.  
 久布白落実（1955）「社説 世界平和の楔としての日本」『婦人と日本』 40,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 40,3.  
 久布白落実（1955）「我国の社会保障制度（四）」『婦人と日本』 40,8-10.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（八）」『婦人と日本』 40,17-19.  
 久布白落実（1955）「随筆 恩讐を越えて」『婦人と日本』 40,23.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 40,24.  
 久布白落実（1955）「社説 母親大会」『婦人と日本』 41,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 41,3.  
 久布白落実（1955）「社会保障制度（五）」『婦人と日本』 41,4-7.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（九）」『婦人と日本』 41,11-12.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 41,22.  
 久布白落実（1955）「社説 日本の味」『婦人と日本』 42,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 42,3.  
 久布白落実（1955）「家族手当と国家支給（一）エリエナ・ラスボーン女史著より」  
 『婦人と日本』 42,4-6.

久布白落実（1955）「食物としての聖書（十）」『婦人と日本』 42,11-13.  
 久布白落実（1955）「随筆 一等級と三等級」『婦人と日本』 42,18.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 42,26.  
 久布白落実（1955）「社説 あれから十年」『婦人と日本』 43,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 43,3.  
 久布白落実（1955）「家族手当と国家支給（二）」『婦人と日本』 43,4-7.  
 久布白落実（1955）「世界宗教会議」『婦人と日本』 43,7-8.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（十一）」『婦人と日本』 43,14-17.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 43,23.  
 久布白落実（1955）「社説 稔の秋」『婦人と日本』 44,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 44,3.  
 久布白落実（1955）「家族手当と国家支給（三）」『婦人と日本』 44,4-6.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（十二）」『婦人と日本』 44,13-17.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 44,22.  
 久布白落実（1955）「社説 回顧と前進」『婦人と日本』 45,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 45,3.  
 久布白落実（1955）「家族手当と国家支給（四）」『婦人と日本』 45,4-7.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（十三）」『婦人と日本』 45,12-15.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 45,24.  
 久布白落実（1955）「社説 国の子供を守れ、青年を尊べ、老人をいたはれ」  
     『婦人と日本』 46,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 46,3.  
 久布白落実（1955）「婦選十年と私」『婦人と日本』 46,4-7.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（十四）」『婦人と日本』 46,12-14.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 46,24.  
 久布白落実（1955）「社説 終戦後第十一年」『婦人と日本』 47,2.  
 久布白落実（1955）「月間展望」『婦人と日本』 47,3.  
 久布白落実（1955）「戦後十年国家の家持はどうであったか」『婦人と日本』 47,4-6.  
 久布白落実（1955）「食物としての聖書（十五）」『婦人と日本』 47,11-13.  
 久布白落実（1955）「私の日記」『婦人と日本』 47,20.

久布白落実 (1956) 「社説 時代の動き」『婦人と日本』 48,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 48,3.  
久布白落実 (1956) 「戦後十年国家の家持はどうであったか (二)」『婦人と日本』 48,4-5.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (十六)」『婦人と日本』 48,10-12.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 48,20.  
久布白落実 (1956) 「社説 婦人の見た憲法」『婦人と日本』 49,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 49,3.  
久布白落実 (1956) 「戦後国家の家持はどうであったか (三)」『婦人と日本』 49,4-5.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (十七)」『婦人と日本』 49,6-8.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 49,22.  
久布白落実 (1956) 「社説 婦人と日本 第 50 号を迎えて」『婦人と日本』 50,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 50,3.  
久布白落実 (1956) 「戦後十年の家持ちはどうであったか (四)」『婦人と日本』 50,4-5.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 50,23.  
久布白落実 (1956) 「社説 出発に際して」『婦人と日本』 51,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 51,3.  
久布白落実 (1956) 「旅だより—その一—」『婦人と日本』 51,4-5.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 51,20.  
久布白落実 (1956) 「社説 旅を終わりにて」『婦人と日本』 52,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 52,3.  
久布白落実 (1956) 「世界を巡って五十年」『婦人と日本』 52,8-9.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (二十)」『婦人と日本』 52,13-15.  
久布白落実 (1956) 「アメリカの果物」『婦人と日本』 52,19.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 52,22.  
久布白落実 (1956) 「社説 感謝のいろいろ」『婦人と日本』 53,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 53,3.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (二十一)」『婦人と日本』 53,4-7.  
久布白落実 (1956) 「旅で拾った事ども」『婦人と日本』 53,8-11.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 53,24.  
久布白落実 (1956) 「社説 十一月」『婦人と日本』 54,2.

久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 54,3.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (二十二)」『婦人と日本』 54,9-11.  
久布白落実 (1956) 「社説 1956 年を送る」『婦人と日本』 55,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 55,3.  
久布白落実 (1956) 「戦後十年国家の家持はどうであったか (五)」『婦人と日本』 55,4-5.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (二十三)」『婦人と日本』 55,6-8.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 55,14.  
久布白落実 (1956) 「社説 石橋内閣に望む」『婦人と日本』 56,2.  
久布白落実 (1956) 「月間展望」『婦人と日本』 56,3.  
久布白落実 (1956) 「食物としての聖書 (二十四)」『婦人と日本』 56,13-14.  
久布白落実 (1956) 「人間ドック入り」『婦人と日本』 56,15-18.  
久布白落実 (1956) 「私の日記」『婦人と日本』 56,22.  
久布白落実 (1957) 「社説 二月の東京」『婦人と日本』 57,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 57,3.  
久布白落実 (1957) 「戦後十年の家持はどうであったか (六)」『婦人と日本』 57,4-5.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (二十五)」『婦人と日本』 57,6-7.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 57,14.  
久布白落実 (1957) 「社説 陽春の東京」『婦人と日本』 58,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 58,3.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (二十六)」『婦人と日本』 58,4-6.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 58,16.  
久布白落実 (1957) 「社説 我父の家には住所多し」『婦人と日本』 59,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 59,3.  
久布白落実 (1957) 「中共順礼 六十の耳と六十の瞳」『婦人と日本』 59,4-9.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (二十七)」『婦人と日本』 59,10-12.  
久布白落実 (1957) 「中共みやげ話し 北京のパーティ」『婦人と日本』 59,17.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 59,18.  
久布白落実 (1957) 「社説 売春問題と国民の覚悟」『婦人と日本』 60,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 60,3.  
久布白落実 (1957) 「中共みやげ話 (二)」『婦人と日本』 60,4-6.

久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (二十八)」『婦人と日本』 60,7-9.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 60,20.  
久布白落実 (1957) 「社説 夏のさまざま」『婦人と日本』 61,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 61,3.  
久布白落実 (1957) 「中共みやげ話 (三)」『婦人と日本』 61,4-5.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (二十九)」『婦人と日本』 61,6-7.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 61,14.  
久布白落実 (1957) 「社説 売春法の巻き返し運動」『婦人と日本』 62,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 62,3.  
久布白落実 (1957) 「中共みやげ話 (四)」『婦人と日本』 62,4-5.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (三十)」『婦人と日本』 62,6-8  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 62,18.  
久布白落実 (1957) 「九千万同胞の態度」『婦人と日本』 63,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 63,3.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (三十一)」『婦人と日本』 63,7-10.  
久布白落実 (1957) 「町に拾う S 氏の『話』」『婦人と日本』 63,14.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 63,20.  
久布白落実 (1957) 「1957 年を送る」『婦人と日本』 64,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 64,3.  
久布白落実 (1957) 「徳富蘇峰 猪一郎叔父さん」『婦人と日本』 64,4-7.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (三十二)」『婦人と日本』 64,8-10.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 64,22.  
久布白落実 (1957) 「社説 1958 年はどんな年か」『婦人と日本』 65,2.  
久布白落実 (1957) 「月間展望」『婦人と日本』 65,3.  
久布白落実 (1957) 「食物としての聖書 (三十三)」『婦人と日本』 65,4-6.  
久布白落実 (1957) 「未だ身につかぬ国の財布」『婦人と日本』 65,15.  
久布白落実 (1957) 「私の日記」『婦人と日本』 65,16.  
久布白落実 (1958) 「社説 売春防止法完全実施」『婦人と日本』 66,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 66,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (一)」『婦人と日本』 66,4-5.

久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (三十四)」『婦人と日本』 66,6-8.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 66,16.  
久布白落実 (1958) 「社説 中国訪日代表団を迎ふ」『婦人と日本』 67,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 67,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (二)」『婦人と日本』 67,7-9.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (三十五)」『婦人と日本』 67,10-11.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 67,18.  
久布白落実 (1958) 「社説 せめてこれだけでも思ったが」『婦人と日本』 68,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 68,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (三)」『婦人と日本』 68,4-6.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (三十六)」『婦人と日本』 68,7-9.  
久布白落実 (1958) 「私のこと」『婦人と日本』 68,18.  
久布白落実 (1958) 「社説 売春防止法のその後」『婦人と日本』 69,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 69, 3  
久布白落実 (1958) 「母 (四)」『婦人と日本』 69,4-5.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (三十七)」『婦人と日本』 69,6-8.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 69,22  
久布白落実 (1958) 「社説 婦人と日本第七十号」『婦人と日本』 70,2-5.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 70,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (五)」『婦人と日本』 70,4-6.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (三十八)」『婦人と日本』 70,7-9.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 70,19.  
久布白落実 (1958) 「社説 勤評と道徳」『婦人と日本』 71,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 71,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (六)」 71,6-8.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (三十九)」 71,9-11.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 71,20.  
久布白落実 (1958) 「社説 実りの秋」 72,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 72,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (七)」『婦人と日本』 72,4-6.

久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (四十)」『婦人と日本』 72,7-10.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 72,20.  
久布白落実 (1958) 「皇室における新しいいぶき」『婦人と日本』 73,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 73,3.  
久布白落実 (1958) 「母 (八)」『婦人と日本』 73,4-6.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (四十一)」『婦人と日本』 73,7-8.  
久布白落実 (1958) 「映画シュバイツアーの試写を見る」『婦人と日本』 73,19.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 73,20.  
久布白落実 (1958) 「1959 年を迎う」『婦人と日本』 74,2.  
久布白落実 (1958) 「月間展望」『婦人と日本』 74,3.  
久布白落実 (1958) 「食物としての聖書 (四十二)」『婦人と日本』 74,4-5.  
久布白落実 (1958) 「母 (九)」『婦人と日本』 74,6-8.  
久布白落実 (1958) 「私の日記」『婦人と日本』 74,20.  
久布白落実 (1959) 「春を待ちつつ」『婦人と日本』 76,2.  
久布白落実 (1959) 「月間展望」『婦人と日本』 76,3.  
久布白落実 (1959) 「食物としての聖書 (四十三)」『婦人と日本』 76,4-6.  
久布白落実 (1959) 「母 (十)」『婦人と日本』 76,7-8.  
久布白落実 (1959) 「私の日記」『婦人と日本』 76,18.  
久布白落実 (1959) 「皇室の重なる慶事」『婦人と日本』 77,2.  
久布白落実 (1959) 「月間展望」『婦人と日本』 77,3.  
久布白落実 (1959) 「国の妻国の母」『婦人と日本』 77,4.  
久布白落実 (1959) 「母 (十一)」『婦人と日本』 77,5-7.  
久布白落実 (1959) 「食物としての聖書 (四十四)」『婦人と日本』 77,8-10.  
久布白落実 (1959) 「私の日記」『婦人と日本』 77,24.  
久布白落実 (1959) 「春から夏へ」『婦人と日本』 79,2.  
久布白落実 (1959) 「月間展望」『婦人と日本』 79,3.  
久布白落実 (1959) 「食物としての聖書 (四十五)」『婦人と日本』 79,4-5.  
久布白落実 (1959) 「母 (十二)」『婦人と日本』 79,6-9.  
久布白落実 (1959) 「私の日記」『婦人と日本』 79,20.  
久布白落実 (1959) 「この十年の歩み」『婦人と日本』 80,2.

久布白落実 (1959) 「月間展望」『婦人と日本』 80,3.  
久布白落実 (1959) 「母 (十三)」『婦人と日本』 80,9-11.  
久布白落実 (1959) 「食物としての聖書 (四十六)」『婦人と日本』 80,12-14.  
久布白落実 (1959) 「悲願と念願」『婦人と日本』 81,2.  
久布白落実 (1959) 「世界展望」『婦人と日本』 81,3-4.  
久布白落実 (1959) 「母 (十四)」『婦人と日本』 81,9-11.  
久布白落実 (1959) 「食物としての聖書 (四十七)」『婦人と日本』 81,12-13.  
久布白落実 (1959) 「私の日記」『婦人と日本』 81,20.  
久布白落実 (1960) 「1960 年と云う年は」『婦人と日本』 82,2.  
久布白落実 (1960) 「世界展望」『婦人と日本』 82,3.  
久布白落実 (1960) 「母 (十五)」『婦人と日本』 82,8-9.  
久布白落実 (1960) 「食物としての聖書 (四十八)」『婦人と日本』 82,10-11.  
久布白落実 (1960) 「私の日記」『婦人と日本』 82,20.  
久布白落実 (1960) 「雪どけと開けゆく視野」『婦人と日本』 83,2.  
久布白落実 (1960) 「世界展望」『婦人と日本』 83,3.  
久布白落実 (1960) 「母 (十六)」『婦人と日本』 83,8-9.  
久布白落実 (1960) 「食物としての聖書 (四十九)」『婦人と日本』 83,10-13.  
久布白落実 (1960) 「私の日記」『婦人と日本』 83,24.  
久布白落実 (1960) 「活きる事は嬉しい」『婦人と日本』 85,2.  
久布白落実 (1960) 「世界展望」『婦人と日本』 85,3.  
久布白落実 (1960) 「母 (十七)」『婦人と日本』 85,7-9.  
久布白落実 (1960) 「食物としての聖書 (五十一)」『婦人と日本』 85,10-11.  
久布白落実 (1960) 「婦人と日本の十年」『婦人と日本』 85,23.  
久布白落実 (1960) 「私の日記」『婦人と日本』 85,24.  
久布白落実 (1961) 「1961 年丑年と云うこと」『婦人と日本』 86,2-4.  
久布白落実 (1961) 「世界展望」『婦人と日本』 86,3.  
久布白落実 (1961) 「母 (十八)」『婦人と日本』 86,4-6.  
久布白落実 (1961) 「食物としての聖書 (五十二)」『婦人と日本』 86,7-9.  
久布白落実 (1961) 「中国の客人 許広平女史一行を迎える」『婦人と日本』 86,23.  
久布白落実 (1961) 「私の日記」『婦人と日本』 86,24.



- 久布白落実（1961）「且つ感謝して」『婦人と日本』 87,2-3.
- 久布白落実（1961）「世界展望」『婦人と日本』 87,4-6.
- 久布白落実（1961）「食物としての聖書（五十三）」『婦人と日本』 87,7-10.
- 久布白落実（1961）「私の日記」『婦人と日本』 87,25.
- 久布白落実（1962）「米寿を迎えた婦人と日本」『婦人と日本』 88,2-3.
- 久布白落実（1962）「世界展望」『婦人と日本』 88,4-5.
- 久布白落実（1962）「食物としての聖書（五十四）」『婦人と日本』 88,10-12.
- 久布白落実（1962）「私の日記」『婦人と日本』 88,23.
- 久布白落実（1965）「去年から今年へ」『婦人と日本』 90,2.
- 久布白落実（1965）「世界展望」『婦人と日本』 90,3
- 久布白落実（1965）「私の日記」『婦人と日本』 90,22.

#### 4-5 『売春対策』掲載論文目録

- 久布白落実 (1957)「発刊の辞」『売春対策国民協議会機関紙 会報』1,1.
- 久布白落実 (1957)「本協議会関係 訪中婦人代表帰国報告」『売春対策国民協議会機関紙 会報』2,2.
- 久布白落実 (1958)「売春対策の今後」『売春対策』11,2.
- 久布白落実 (1958)「婦人補導院に関して」『売春対策』19,4.
- 久布白落実 (1959)「三問題と取組もう」『売春対策』22,2.
- 久布白落実 (1959)「売春防止法全面実施 一周年に当りて」『売春対策』24,1.
- 久布白落実 (1959)「売春防止法の根堅め運動」『売春対策』25,1.
- 久布白落実 (1959)「売春防止法根堅め運動 福島・宮城のもつ問題 青少年の性犯罪・芸者問題など」『売春対策』30,3.
- 久布白落実 (1960)「売春防止法の根堅め運動の第二年」『売春対策』34,1.
- 久布白落実 (1960)「オリンピックに際し東京都議会に望む」『売春対策』41,2.
- 久布白落実 (1960)「宮城タマヨ女史を悼む」『売春対策』44,3.
- 久布白落実 (1960)「田辺繁子女史の近著」『売春対策』44,4.
- 久布白落実 (1961)「1961 年を迎える 売春防止法成立第五年」『売春対策』45,1.
- 久布白落実 (1961)「売春防止法制定五周年を迎えて」『売春対策』49,1.
- 久布白落実 (1961)「売春防止法を眺めて」『売春対策』54,1.
- 久布白落実 (1962)「売春防止法はゆきすぎではない—小泉純也氏に問う」『売春対策』62,1.
- 久布白落実 (1962)「売春防止法はこれでよいか」『売春対策』64,1.
- 久布白落実 (1963)「地方選挙後の売春問題」『売春対策』68,2.
- 久布白落実 (1963)「売春対策国民協議会の今後の事業」『売春対策』70,1.
- 久布白落実 (1963)「売春の根絶やしにさらに一步をすすめよう」『売春対策』71,1.
- 久布白落実 (1963)「性教育純潔教育に関して(一)」『売春対策』71,2.
- 久布白落実 (1964)「性教育純潔教育に関して(二)」『売春対策』72,2.

#### 4-6 婦人雑誌掲載論文目録

##### 『婦女新聞』掲載論文

- 久布白落実 (1918) 「<時の婦人>久布白落実夫人」『婦女新聞』 996,7.
- 久布白落実 (1918) 「<報告>米婦人の宗教的運動」『婦女新聞』 997,5.
- 久布白落実・林歌子 (1923) 「<感想・随筆>母国の姉妹に」『婦女新聞』 1182,10.
- 久布白落実 (1923) 「<論説：評論>参政権要求の立脚点」『婦女新聞』 1193,3.
- 久布白落実 (1924) 「<論説：評論>日米問題(時事)」『婦女新聞』 1257,4.
- 久布白落実 (1925) 「<婦人会の闘将>久布白落実女史」『婦女新聞』 1290,8.
- 久布白落実 (1925) 「<論説：評論>義務としての参政運動」『婦女新聞』 1301,6.
- 久布白落実 (1925) 「<感想・随筆>『洪柿』の内容」『婦女新聞』 1308,11.
- 久布白落実 (1925) 「<新聞記事と私共>妓楼に放火自殺を図る(貧苦に売られたる女)」『婦女新聞』 1329,7.
- 久布白落実 (1926) 「<女より男へ男より女への公開状>」『婦女新聞』 1341,4.
- 久布白落実 (1927) 「<時事問答>地租委譲問題」『婦女新聞』 1414,3.
- 久布白落実 (1928) 「<報告>エルサレムまで(上)」『婦女新聞』 1465,7.
- 久布白落実 (1928) 「<報告>エルサレムまで(下)」『婦女新聞』 1466,14.
- 久布白落実 (1929) 「<論説：評論>市政浄化の叫び」『婦女新聞』 1500,7.
- 久布白落実 (1929) 「<感想・随筆>平和の実現のために世界の母よ起て」『婦女新聞』 1535,13.
- 久布白落実 (1930) 「<感想・随筆>矯風運動の今昔」『婦女新聞』 1561,6.
- 久布白落実 (1932) 「<論説：評論>邦人婦人団と支那婦人の反感」『婦女新聞』 1649,7.
- 久布白落実 (1932) 「<論説：評論>米国禁酒法の動揺について」『婦女新聞』 1694,4.
- 久布白落実 (1933) 「<感想・随筆 わが半生を語る>宗教の中に過した半生(上)」  
『婦女新聞』 1711,7.
- 久布白落実 (1933) 「<感想・随筆 わが半生を語る>宗教の中に過した半生(下)」  
『婦女新聞』 1713,7.
- 久布白落実 (1933) 「<評論>小学校の先生に(\*「帝国教育」より)」『婦女新聞』 1729,18.
- 久布白落実 (1934) 「<報告>婦人問題総ざらひの全日本婦選大会」『婦女新聞』 1759,2.
- 久布白落実 (1935) 「<論説：聞きたい話・話させたい人>凶作東北をめぐりて娘地獄を救う」『婦女新聞』 1810-6

久布白落実 (1935)「＜論説：評論＞矢島先生と私」『婦女新聞』1822-84

久布白落実 (1935)「＜論説：聞きたい話・話させたい人＞絶娼時代に達した米国の純潔運動」『婦女新聞』1847,5.

久布白落実 (1935)「＜論説：聞きたい話・話させたい人＞絶娼時代に達した米国の純潔運動」『婦女新聞』1848,7.

久布白落実 (1936)「＜感想・随筆＞婦人団体業績検討会に列席しての感想」『婦女新聞』1864,11.

久布白落実 (1936)「＜感想・随筆＞内閣の今後と国民の力」『婦女新聞』1866,5

久布白落実 (1936)「＜感想・随筆：マスコット＞誕生日の鞆」『婦女新聞』1893,6

久布白落実 (1937)「＜報道：女性関係記事＞壮観！四十一団体婦人活動ノ一大展望  
第二回婦人団体業績検討会」『婦女新聞』1917,2. ※一部

久布白落実 (1938)「＜感想・随筆＞林富貴子女史の「影壁」を読む」『婦女新聞』1971,9.

久布白落実 (1938)「＜報告＞戦捷の蔭の強敵、性病に備へよ！」『婦女新聞』1973,2.

久布白落実 (1939)「＜報告＞キリスト教世界大会に列席して」『婦女新聞』2017,4

久布白落実 (1939)「＜報道：女性関係記事＞前矯風会頭小崎女史逝く 徹底した快活さ」『婦女新聞』2032,6

久布白落実 (1939)「＜論説：評論＞純潔運動の当面の問題」『婦女新聞』2058,7.

久布白落実 (1939)「＜報告＞経済戦はこれで！婦人大会に名案続出」『婦女新聞』2062,2. ※一部

久布白落実 (1940)「＜感想・随筆＞開拓者の歩んだ道」『婦女新聞』2083,104.※一部

久布白落実 (1940)「＜報告＞本社主催第五回婦人団体業績発表会記録」『婦女新聞』2084,2. ※一部

久布白落実 (1940)「＜論説：一人一題＞時局と女性」『婦女新聞』2099,3.

久布白落実 (1940)「＜感想・随筆＞興亜の礎石」『婦女新聞』2112,3.

久布白落実 (1941)「＜論説：一人一題＞母心の成長」『婦女新聞』2124,3.

久布白落実 (1941)「＜論説：一人一題＞このごろの問題」『婦女新聞』2136,5.

久布白落実 (1941)「＜論説：一人一題＞時局雑感」『婦女新聞』2148,5.

久布白落実 (1941)「＜論説：一人一題＞秋の実」『婦女新聞』2158,3.

久布白落実ほか (1942)「＜感想・随筆＞婦女新聞に寄せる言葉（廃刊に際して）」『婦女新聞』2175,8. ※一部

### 『婦選獲得同盟会報』『婦選』掲載論文

- 久布白落実 (1925) 「本会の創立より大会まで」『婦選獲得同盟会報』 1,2.
- 久布白落実 (1925) 「中央委員会報告」『婦選獲得同盟会報』 2,2.
- 久布白落実 (1926) 「中央委員会報告」『婦選獲得同盟会報』 3,2.
- 久布白落実 (1927) 「婦選の発刊に際して」『婦選』 1(1),1.
- 久布白落実 (1927) 「婦女禁売年齢保留撤廃」『婦選』 1(3),4
- 久布白落実 (1927) 「第四次の総会を終りて」『婦選』 1(5),12.
- 久布白落実 (1927) 「男子貞操義務」『婦選』 1(6),4-5
- 久布白落実 (1927) 「普選による府県会議選挙を見て(主張)」『婦選』 1(9),1.
- 久布白落実 (1927) 「中央委員会報告」「政治教育委員会報告」『婦選獲得同盟会報』 4,2.
- 久布白落実 (1928) 「東京市の市長に就て」『婦選』 2(1),4-5.
- 久布白落実 (1928) 「総選挙来る」『婦選』 2(2),2.
- 久布白落実 (1928) 「婦選獲得同盟の世界的進出」『婦選』 2(5),4.
- 久布白落実 (1928) 「政友会と婦選(主張)」『婦選』 2(6),1.
- 久布白落実 (1928) 「婦選獲得同盟五年目の夏」『婦選』 2(7),6-7.
- 久布白落実 (1928) 「望月内相に呈す」『婦選』 2(8),7.
- 久布白落実 (1929) 「廃娼建議案の通過(戦線だより)」『婦選』 ,3(1),8.
- 久布白落実 (1929) 「新市議には誰を？」『婦選』 3(2),6-9. ※一部
- 久布白落実 (1929) 「市政と婦選」『婦選』 3(2),13.
- 久布白落実 (1929) 「第五十六議会に於ける廃娼案と二十五歳禁酒案」『婦選』 3(5),4-5.
- 久布白落実 (1929) 「公開状(一)浜口首相に呈す」『婦選』 3(11),6-9.
- 久布白落実 (1929) 「第六年年次総会を迎ふるに際して」『婦選獲得同盟会報』 6,1.
- 久布白落実 (1929) 「昭和四年を送らんとして」『婦選獲得同盟会報』 8,1.
- 久布白落実 (1930) 「婦選座談会—地方代表を迎えて」『婦選』 4(1),21-30. ※一部
- 久布白落実 (1930) 「総選挙に婦人は何をなすべきか」『婦選』 4(2),14-17. ※一部
- 久布白落実 (1930) 「全日本婦選大会を成功せしめよ」『婦選』 4(4),7.
- 久布白落実 (1930) 「婦選獲得同盟の役員を退くに際して」『婦選』 4(6),9.
- 久布白落実 (1930) 「全日本婦選大会を成功せしめよ」『婦選獲得同盟会報』 12,1.
- 久布白落実 (1930) 「第七年を歩みだすに当つて」『婦選獲得同盟会報』 13,1.
- 久布白落実 (1930) 「婦選獲得同盟の役員を退くに際して」『婦選獲得同盟会報』 15,1.

- 久布白落実 (1931)「娼婦問題座談会」『婦選』 5(6),9-18. ※一部
- 久布白落実 (1931)「中等女教員への要望」『婦選』 5(8),18-22. ※一部
- 久布白落実 (1933)「児童虐待防止法の実施を歓ぶ (一筆評論)」『婦選』 7(10),6.
- 久布白落実 (1939)「印度議會より歸りて (談)」『婦選』 13(3),6.
- 久布白落実 (1939)「時事小感 (二) はがき回答」『婦選』 13(11),14-17. ※一部
- 久布白落実 (1939)「婦選の思ひ出を語る(\*座談会)」『婦選』 13(12),7-12. ※一部
- 久布白落実 (1940)「新支那の建設と日本婦人」『婦選』 14(4),5-7. ※一部

### 『婦人展望』掲載論文

- 久布白落実(1966)「売春防止法制定十周年に當りて」『婦人展望』 141,1.

### 『職業婦人』『婦人と労働』『婦人運動』掲載論文

- 久布白落実 (1923)「職業婦人としての私の不平、不満、抱負、喜び、希望！」『職業婦人』 1(1),26-33. ※一部
- 久布白落実 (1923)「婦人が結婚後も引続いて職業に就いていることは幸福か？不幸か？」『職業婦人』 1(2),36-43. ※一部
- 久布白落実 (1925)「婦人の公民権とは何か」『婦人と労働』 3(2),34-38.
- 久布白落実 (1929)「私の一日」『婦人運動』 7(1),16-26. ※一部
- 久布白落実 (1929)「万国排酒大会に於て発言時間を横取りす」(\*『女は歩く』より)『婦人運動』 7(1),37-38.
- 久布白落実 (1929)「娼婦運動の一ヵ年(基督教婦人矯風会)」『婦人運動』 7(10),28-29.
- 久布白落実 (1936)「事実報告 純潔問題研究」『婦人運動』 14 (1),28-31.
- 久布白落実 (1940)「奥氏を祝して「婦人運動」へ」『婦人運動』 18(1),7.

### 『婦人公論』掲載論文

- 久布白落実 (1918)「本誌前号所蔵 日本婦人の面汚しを読んで」『婦人公論』 3(3),44-58.
- 久布白落実 (1918)「われ等の行くべき途」『婦人公論』 3(5),26-30.
- 久布白落実ほか (1920)「若し婦人が政治に参加することが出来たら吾等婦人は先ず第一に何を要求するか」『婦人公論』 5(2),32-39.

久布白落実 (1923)「有島氏の死に打たれて民族の将来を憶う」『婦人公論』8(8),40-44.  
久布白落実 (1924)「新内閣に望む」『婦人公論』9(7),62-63.  
久布白落実 (1928)「最初の普選に際して 婦人の立場から」『婦人公論』13(3),8-9.  
久布白落実 (1929)「私の歩んで来た道 純潔日本のために」『婦人公論』24(7),68-88.  
久布白落実 (1934)「女流社会改良家ゼーンアダムスの人と偉業 (近代女性評論)」  
『婦人公論』19(11),297-305.

### 『婦人倶楽部』掲載論文

久布白落実 (1922)「伸びんとする現代婦人の悩み 伸びんとする婦人を圧迫する悪弊  
の数々」『婦人倶楽部』3(7),104-106.  
久布白落実 (1922)「恋愛の自由と私生児の運命」『婦人倶楽部』3(8),39-41.  
久布白落実(1928)「現代十二婦人処世談 正しき憤り」『婦人倶楽部』8(1),16-17.  
久布白落実 (1928)「流れ行く世の姿 (時評) 禁酒二十五歳案の否決」『婦人倶楽部』  
8(5),3.  
久布白落実 (1948)「光と闇と (私の人生行路)」『婦人倶楽部』29(3),14-17.

### 『婦人世界』掲載論文

久布白落実 (1924)「矢嶋先生の霊の生活」『婦人世界』19(4),117-119.  
久布白落実 (1924)「日本で誰が最初婦人参政権を称えたか」『婦人世界』19(5),65-67.  
久布白落実 (1926)「無理やりの夕食」『婦人世界』21(1),123.  
久布白落実 (1927)「長い夏休みを娘にどう送らせませうか 家事の実務と旅行とを」  
『婦人世界』22(8),82-83.

#### 4-7 その他雑誌等掲載論文目録

##### 『廓清』掲載論文

- 久布白落実 (1921) 「婦人参政権とはなんぞや」『廓清』 11(8),22-23.
- 久布白落実 (1921) 「機来れり、全国の処女よ起て」『廓清』 11(10),14-16.
- 久布白落実 (1923) 「婦人参政権の根本問題」『廓清』 13(4),26-28.
- 久布白落実 (1924) 「廓清と婦人の責任」『廓清』 14(5),20-22.
- 久布白落実 (1925) 「廓清会と我等の主張」『廓清』 15(6),35-37. ※一部
- 久布白落実 (1926) 「娼妓取締規則改正建議案所感」『廓清』 16(3),24-27. ※一部
- 久布白落実 (1927) 「芸妓屋新設と与論」『廓清』 17( 6),23-27. ※一部
- 久布白落実 (1928) 「新嘉坡売笑婦送還実相」『廓清』 18(4),26.
- 久布白落実 (1928) 「欧州娼妓視察談」『廓清』 18(7),11-18.
- 久布白落実 (1940) 「娼妓問題所感」『廓清』 30(11),13-16. ※一部

##### 『ときのこえ』掲載論文

- 久布白落実 (1929) 「一、余が実験したる酒の害、二、余が実際に見たる酒の害、三、何故二十五歳禁酒法に賛成するか」『ときのこえ』 789,3. ※一部
- 久布白落実 (1929) 「娼妓問題座談会」『ときのこえ』 19(4),18-36. ※一部
- 久布白落実 (1929) 「娼妓決議の回顧と感謝」『ときのこえ』 19(7),19-24. ※一部
- 久布白落実 (1934) 「現下の日本に何故禁酒が必要か」『ときのこえ』 909,5. ※一部
- 久布白落実 (1937) 「禁酒問題誌上座談会」『ときのこえ』 981,4. ※一部
- 久布白落実 (1938) 「農村の禁酒と女性」『ときのこえ』 1005,10.
- 久布白落実 (1941) 「青年と禁酒問題」『ときのこえ』 1077,3. ※一部

##### 『基督教世界』掲載論文

- 久布白落実 (1916) 「父 (一)」『基督教世界』 1683,8-9.
- 久布白落実 (1916) 「父 (二)」『基督教世界』 1684,8-9.
- 久布白落実 (1916) 「父 (三)」『基督教世界』 1685,11-12.
- 久布白落実 (1916) 「父 (四)」『基督教世界』 1686,8-9.
- 久布白落実 (1916) 「父 (五)」『基督教世界』 1687,9-10.
- 久布白落実 (1916) 「父 (六)」『基督教世界』 1688,9.



久布白落実 (1916)「父 (七)」『基督教世界』 1689,10-11.  
久布白落実 (1916)「父 (九)」『基督教世界』 1691,7.  
久布白落実 (1916)「父 (十)」『基督教世界』 1693,9-10.  
久布白落実 (1916)「父 (十一)」『基督教世界』 1698,8-9.  
久布白落実 (1916)「父 (十二)」『基督教世界』 1699,10-11.  
久布白落実 (1916)「父 (十三)」『基督教世界』 1706,8-9.  
久布白落実 (1916)「父 (十四)」『基督教世界』 1709,9-10.  
久布白落実 (1916)「父 (十五)」『基督教世界』 1710,8.  
久布白落実 (1916)「父 (十六)」『基督教世界』 1715,10.  
久布白落実 (1916)「父 (十七)」『基督教世界』 1719,10.  
久布白落実 (1916)「父 (十八)」『基督教世界』 1728,9-10.  
久布白落実 (1916)「父 (十九)」『基督教世界』 1730,8-9.  
久布白落実 (1917)「父 (二十)」『基督教世界』 1737,8-9.  
久布白落実 (1917)「父 (二十一)」『基督教世界』 1741,9.  
久布白落実 (1917)「父 (二十二)」『基督教世界』 1746,10.

### 『神の国新聞』掲載論文

久布白落実(1930)「潔きいける捧物」『神の国新聞』 606,1.  
久布白落実(1933)「霊肉の苗床」『神の国新聞』 779,2.  
久布白落実(1941)「保健憲法たる二大法律」『神の国新聞』 1034,4.

### 『人道』掲載論文

久布白落実 (1938)「小崎名誉牧師の追憶」『人道』 59,3.

### 『開拓者 (日本基督教青年会同盟)』掲載論文

久布白落実 (1956)「売春問題は、一たいどうしたらよいのだろう」『開拓者』51(2),37-45.

### 『月刊キリスト』掲載論文

久布白落実 (1960)「無限と永遠を喜ぶ心」『月刊キリスト』 12(12),5.

久布白落実 (1961)「<わが信仰の生涯>売春禁止法を通すまで」『月刊キリスト』  
13(3),22-29.

久布白落実(1965)「ある年のクリスマス」『月刊キリスト』 17(12),18.

### 『帝国教育』掲載論文

久布白落実 (1933)「全国小学校の先生に願う」『帝国教育』 630,20.

### 『社会事業』掲載論文

久布白落実 (1926)「現代婦人の要求」『社会事業』 10(2),45-48.

### 『優生運動』掲載論文

久布白落実 (1927)「私は性をかう思っております」『優生運動』 2(6),43-44.

### 『政界往来』掲載論文

久布白落実 (1952)「国際孤児のゆくて」『政界往来』 18(8),15-16.

久布白落実 (1953)「随筆 選挙と民主政治」『政界往来』 19(2),11-14.

久布白落実 (1953)「世相漫筆 生活」『政界往来』 19(4),106-109.

久布白落実 (1954)「母心の拡大」『政界往来』 20(3),166-168.

久布白落実 (1955)「東西婦選運動の今昔」『政界往来』 21(2),78-83.

久布白落実 (1955)「八十年も通らぬ法案 その名は売春等処罰法」『政界往来』  
21(9),126-131.

久布白落実 (1956)「拾いものの婦人参政権」『政界往来』 22(9),87-91.

久布白落実 (1957)「女づれの新中国拝見記」『政界往来』 23(9),140-144.

久布白落実 (1958)「東京に来た国連」『政界往来』 24(2),136-139.

久布白落実 (1958)「随筆 靴磨き」『政界往来』 24(2),3-5.

久布白落実 (1963)「随筆 停年退職吹き飛ばし運動」『政界往来』 29(1),13-16.

久布白落実 (1964)「随筆 叙勲」『政界往来』 30(9),12-19.

### 『警察時報』掲載論文

久布白落実 (1953)「売春等処罰法について」『警察時報』8(4),24-26.

久布白落実 (1958)「売春防止法はどのような一国民の立場よりその行方を見守る—」

『警察時報』13(4),38-41.

### 『刑政』掲載論文

久布白落実 (1958)「アジアに於ける売春問題」『刑政』69(2),42-45.

### 『更生保護』掲載論文

久布白落実 (1957)「猛進」『更生保護』8(5),5-6.

### 『国民（社会教育協会）』掲載論文

久布白落実 (1953)「お互いの純潔のために愛の『母の家』は生れ出た」『国民』629,8-11.

### 『やまと新聞』掲載記事

久布白落実 (1904)「日本人婦人ホーム（一）」『やまと新聞』1357,3.

久布白落実 (1904)「日本人婦人ホーム（二）」『やまと新聞』1358,3.

久布白落実 (1904)「日本人婦人ホーム（三）」『やまと新聞』1359,3.

### 『東京朝日新聞』掲載記事

久布白落実 (1922)「市会議員の選挙に際して（上）」『東京朝日新聞』12928（6月2日朝刊）,6.

久布白落実 (1922)「市会議員の選挙に際して（中）」『東京朝日新聞』12929（6月3日朝刊）,6.

久布白落実 (1922)「市会議員の選挙に際して（下）」『東京朝日新聞』12930（6月4日朝刊）,6.

久布白落実 (1928)「女の理想社会 信の世界」『東京朝日新聞』14968（1月15日朝刊）,5.

久布白落実 (1940)「慰問袋のはじめ 地久節には祝賀の祈祷 矢島楫子の一生」『東京朝日新聞』19322（1月18日朝刊）,5.